

蓬萊山輝夜お嬢様がコ ナンの世界入りした話

よつん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

蓬萊山輝夜は好奇心旺盛な少女である（見た目）。ほんのちよつとした好奇心を働かせたところ、何やらちよつとした問題が起こって歪んだ空間に吸い込まれてしまった。吸い込まれたその先は、「幻想郷の外の世界」——にしては、いささか孕む空気が「歪」な世界。訪れた世界の「謎」を、自分が解くべき「難題」と捉えた彼女は、見た目と中身がそぐわれない子どもに出逢い、彼こそが「難題」を解く鍵となることを直感する。

※東方未プレイ。プレイ動画視聴、ウイキ程度の知識で書いてるのでガチ勢の方、不快になられたら申し訳ありません。

目次

難題：進みながら繰り返される永遠

1

新難題：月のイルメナイト

20

粗題：宝へと至る暗号

51

喧題：燃える紅、消えた黒

67

付題：闇を解かず劇薬

78

人宝：ザ・ベストスパイス

97

複題：穢れを纏う隠者

116

幼題：凍れる灼熱の鎖

132

虚題：神鳴る前の澱み

150

騙題：輝き流れ落つもの

170

新難題：ミス터리ウム

199

露題：ほころびに宿るまぼろし

225

山題：ひとかすみ

250

結界：光と闇の網目

270

永夜返し―世明け―

293

謎題：永遠と須臾の狭間

309

波符「赤眼催眠」前編(番外)

321

波符「赤眼催眠」後編(番外)

346

難題：進みながら繰り返される永遠

蓬莱山輝夜は、好奇心の旺盛な少女である。いや、純粹な少女と断言するには語弊があるが、見た目は可憐な少女であるので、そう表現させていただく。

そんな輝夜は、あるとき思い付いて、自らの住居である永遠亭を出て、ふらりと散歩に出掛けた。従者や飼ひ兎たちには驚かれたが、「月を見に」と短く伝えれば、深く追及されることはなかった。

正直に言ってもよかったのだが、月を見に行きたいというのも嘘ではない。幻想郷の賢者殿の能力を観察する、その道すがら、この見事な満月を見上げて散歩と洒落こんでいた。

輝夜がふと、八雲紫という妖怪の能力を観察したいと思ったのは、本当に思い付きである。見事な満月を自宅である永遠亭で見上げながら、紫が自らの能力で月へと行ったことを思い出していた。そうしてむくむくと、「あの便利そうな能力を一度じっくりと観察してみたい」という気持ち芽生えたのだ。自分の能力を使えば、さしたる苦勞もないだろう。

神出鬼没なあの妖怪がどこに現れるのかは分からなかったが、輝夜の勘では、今夜会

えるような気がしていた。だから当てもなく、ふらりと迷いの竹林を抜けて歩き続ける。

本当に美しい、満月の夜だった。その輝きは、文明の光の届かない幻想郷の夜道を照らす。月で暮らしていたときは地球を美しいと思いい、地球で暮らしている今は月を美しいと思う。そんなとりとめもないことを考えたのち、輝夜はふつと笑った。

——やっぱり、会えると思っていたのよね。

内心でそんなことを思いながら、能力を使って、自分だけの世界である須臾の時間へと潜り込む。そうすることで、輝夜は誰にも気が付かれないまま世界を観測できる、そのはずだった。

「えっ……っ？」

誰にも気が付かれない、一瞬の時間である須臾の世界で、じつくりと「スキマ」と呼ばれる時空の裂け目から今まさに姿を現そうとしていた紫および、その能力を観察しようとしたそのとき。

世界が不自然に固まった気がした。

そしてそのまま、紫が開いていた「スキマ」が歪み、当の紫はぴくりと動きもしないで、輝夜だけが、誰にも気が付かれることなく、時空のはざまに吸い込まれようとしていた。

「永琳……！」

従者の名前を呟きながら、自らの能力である「永遠」の力で世界を固定しようと試みるも、どういうわけか上手く力が働かない。

好奇心旺盛な少女は、焦りを打ち消すような不敵な笑みを浮かべ、その身を「流れ」にゆだねることとした。

「ふふ、私を連れ出そうとするなんて……難題の一つでも解いてもらわなくちゃ、ねえ」
輝夜だけの世界の中で、歪な空間に吸い込まれた彼女はそうつぶやく。それから、従者である八意永琳が己を「その先」から連れ出せるように、彼女にもまた平等に「難題」を残し、この幻想郷から消え去ったのだった。

*

初めは単純に「外の世界」だと思っていたこの場所が、そう簡単なことでもないらしい、と彼女が気が付いたのは、この世界に来て三日目のことだった。外の世界は何かと面倒だ。それは、幻想郷に辿り着くまで外の世界で生きていた彼女には身に染みて分かっていた。たとえ時代が違えど、そうそう変わることはないだろう。

そう思って、彼女はこの三日間、自分の能力を駆使して、自分がどんな状況にあるの

か、じっくりと現状を把握することにした。

まず分かり切っていたのは、ここは幻想郷ではないこと。輝夜が「出現」したのは山奥で、周りに人はいなかったけれど、ちよつと「姿を隠して」空を飛んでみたら、なるほど、富士の山が見えた。つまり、月の住民に何かしらの能力で連れ去られたわけではなさそうだと推測する。もしも月の住民が自分を連れ戻そうとしているなら、能力の行使者が近くにいるはずであるし、そもそも博麗大結界の張られている幻想郷にいる輝夜を無理やり連れ去ることができるほどの実力者であれば、こんな回りくどいことをしないで、直接月に送ることくらいわけがないはず。

というわけで、当初彼女は何らかの事故で、幻想郷の外の世界にはじき出されてしまったのだと思った。ちよつと人里に潜り込んでみれば、当然ながら幻想郷よりもはるかに科学が発達していることが分かったし、地理も、まあ多少自分が記憶していた国名とは違っていたが、日本で間違いない。

けれど、決定的な違いがそこにはあった。

幻想郷がどこにもないのだ。

八雲紫により張られた博麗大結界に隠される、幻想の郷。自分であれば、その場所は分かるし、分からなくても「感じられる」。そのはずなのに、どんなに日本中を飛び回っても、どこにもない。

そこで、輝夜は一つの仮説を立てた。例えば、日本に幻想郷ができなかった世界線。例えば、外の世界の住民により、科学によって全ての幻想が排除された世界線。例えば、そのどちらでもない、「似て非なる全く別の世界」。

輝夜は滅多に焦る性格ではないけれど、幻想郷がないと分かったときにはさすがに焦った。

紫のものであつて紫のものではないかもしれない「スキマ」に呑み込まれる直前に残していった、永遠亭の者たちへの「難題」が解かれなくてもいい。無論、いつも「難題」を与える側である自分も、この「難題」を解いてやるのはやぶさかではない。それ自体は良い暇つぶしになるであろうし、寿命という概念のない彼女にとっては、どれだけ時間が掛かったとしても、最終的に自らの帰る家である永遠亭へと戻ることができるならば、問題はない。

しかし、彼女の能力は八雲紫のように時空を渡ることには長けていない。できるのは永遠と須臾を操る程度のこと。もちろん、蓬莱山輝夜は蓬莱人である前に月人であり、かなり大雑把にまとめてしまえば「妖怪」である。彼女の持つ強大な力を以って、力技で空間を捻じ曲げることもできないではない。

焦ったのも一瞬だけ。それが「難題」であればあるほど、彼女にとっては退屈凌ぎになる。

従者が自分の「難題」を解くのが先か。自分が、誰とも知れない者から与えられた「難題」を解くのが先か。

「ふふ、たまには永琳に勝ってみるのもいいかもしれないわ」

なにせ、あの従者は全力を出すことがない。その強大な力を、微笑みの裏にしまい込んだまま、余裕を崩すことがない。

「そうと決まれば、まずはこの世界のことを知らなくっちゃね。なんだか……随分歪な『永遠』も感じることだし、まずはその『謎』を解くことにしようかしら」

輝夜はかつて「外の世界」であらゆる者を魅了した絶世の美貌を綻ばせ、ふわりと空を飛んだ。

*

輝夜は早くも飽き飽きしていた。目立たないように思っ、能力を使いながらこの世界のことを調べていたのだが、そろそろ能力を使わずとも、自由に歩きたい。

と、なると生活基盤を整えねばならない。それには先立つものが必要であるが、まあ、その点も問題ないだろう。お金は彼女の能力でどうとでもなる。あるいはもつと他の何かしらのことであつても、輝夜にとってはどうとでもなる問題がほとんどであつたの

だが。ともかく、人と関わらない生活というのは退屈なのだ。自宅にいれば植物を愛でたり兎たちで遊んだりすることもできようが、コンクリートの建物が立ち並ぶこの場所ではそれも叶わない。

「でも……せつかくなら、楽しみたいわよね」

顎に手を当てて、うんうんと今後の方針を考える。数百年間、永遠亭に引きこもつていた輝夜は娯楽に飢えていた。どこぞの人間と妖怪が永遠亭に侵入して、弾幕ごっこで自分を打ち負かしてからは引きこもる必要はなかったことが分かり、徐々に永遠亭の住民以外との関りも持つようになったが、せつかく外の世界にいるのだ。それならば、そのときしか楽しめないことを味わいたいというもの。なにせ輝夜のモットーは「明日より今を楽しく」である。どうにも、輝夜の集めた情報によると、輝夜ぐらいの見た目をした女の子は「女子高生」または「女子大生」であることが多いらしい。それらがどんなものかは知らないが、こっそりと須臾の世界から眺める、若い女の子たちは、みな一様に楽しそうだった。

きつと「女子高生」も「女子大生」も楽しいものに違いない。

そう思いながら、輝夜はこっそり調達した「この世界風」の服を身にまといてみた。

「ふふ、中々似合っているはずだわ」

誰にも気が付かれない須臾の世界から眺めるのはもうおしまいだ。今度は輝夜も、

せつかく訪れたこの世界で過ごしてみよう。

とはいえ、急に人がうじゃうじゃいる場所を歩くのは気が引けた。輝夜は手始めに、道は整備されているけれど、人の気配はあまりいないところを選んで姿を現してみる。

「すっごーいー！」

「まるで、西洋のお城ですねえ！」

子どもの声が聞こえたので、輝夜は「本当ね」と彼らの背後から共感を示しつつ声を掛けた。輝夜は日本庭園然とした永遠亭を気に入っているが、だからといって西洋風の建物を認めていないわけではない。

「だ、誰?！」

赤茶色の髪をした女の子が、振り向きざまにそう叫んだ。あまりに気配がなかった輝夜の、突然の出現に驚いた——というよりは、その気配のなさに、怯えているようであった。

「わー！ すっげー美人！」

「きれーい！ お姉さん、もしかして、ここのお姫様?！」

大柄の少年が頬を染めて声を上げると、同じく頬を上気させた黒髪の女の子が、にこにこ輝夜に向かってそんな問いを投げ掛ける。

「いいえ。私はこの家の者ではないわ。山の中を歩いていたら、ここまでたどり着いた

の

「つてことは、お姉さん、この近所の人なの？」

「近所でもないわね」

その美貌に見惚れていた眼鏡の少年が、輝夜の発言にハツとしたような顔をして、眼鏡の奥の目をいささか険しい色に変えた。

「じゃあ、車をどこかに停めてお散歩してたの？」

「私は車を運転しないわ」

「それなら、君はどうやってここへ来たのじゃ？ 徒歩で都心から来るには、かなりキツい距離だと思っくんじゃが……」

少年たちの引率をしているらしい、ふくよかな初老の男性が首を傾げている。輝夜はさして気にした様子もなく、にっこりとほほ笑んだ。

「私は蓬萊山輝夜。月から来たのよ。あなたたちは？」

彼女の言葉に、明らかに警戒した様子だった眼鏡の少年は白けたような顔になり、「かぐや姫だけに、月からってか……」とため息を吐いていた。一方、怯えた様子の子の赤茶色の髪の毛の少女は、未だに初老の男性の後ろに隠れたままである。

「輝夜さんっていうのね！ 本物のかぐや姫みたい！ 私、吉田歩美！ よろしくね、輝夜お姉さん」

「僕は円谷光彦といいます！」

「オレは小嶋元太！ ほら、お前らもちやんと自己紹介しろよ！」

大柄な少年——小嶋元太に背中を叩かれた眼鏡の少年が「いってえ！」と恨みがましい視線を元太に送った。そしてそれから、渋々とした様子で「あー、ボクは江戸川コナン」と簡潔に名前を告げる。

「わしは阿笠博士という。発明家をしておって、みんなには博士と呼ばれておるよ」

「こつちの隠れてる子が、灰原さん！ 灰原哀って名前なのよ！」

歩美に自らの名前を明かされてしまった灰原は、怯えながらもぎりりと輝夜を睨んだ。

「そんなに睨まなくても、とって食ったりしないわよ。ところで、あなたたちはこのお城を見に来たの？」

「いやあ、本当はキャンプをする予定だったんじやが……」

「博士がテント忘れちまってよお」

子どもたちに責めるような視線を向けられる博士が、ぼりぼりと頬をかく。輝夜には何のことか分からなかったが、「キャンプ」に「テント」はなくてはならない物らしいということとは推測できた。

「そ、そんなことよりも、本当に立派なお城じゃのう。少し見学させてもらえないか、聞

いてみないかね?」

「あら、楽しそうね。それなら、私も混ぜてもらえるかしら?」

「もちろんですよ! 輝夜さんは、本当はどこから来たんですか?」

にこやかに受け入れる少年たちに、輝夜は「あら、言っただじゃない。月から来たって」のらりくらりと返事をする。まあ、厳密に言えば出身が月であるだけで、直前にいたのは幻想郷だが、たとえここが「別の世界」だとして、あまりにあの場所のことをべらべら話してしまうのは憚られた。何より、妖怪の賢者殿にあとからねちねち言われそう
だ。

「なんだよ、ケチ。それくらい教えてくれたっていいじゃねえか」

ぶつぶつ言う元太に、「とつても田舎から出てきたのよ。ちよつとした家出みたいなものね」と輝夜はあつけらかんとした様子で言った。

「い、家出!! だめよ、輝夜お姉さん! 家族が心配してるんじゃない?」

「そうだよ。それに、家出でこんなところまで来たの? もしかして……誰かに追われてるとか?」

純粹に心配した様子で叫んだ歩美とは違い、話題に乗っかってきたコナンの視線は鋭い。子どもらしからぬ、けれど輝夜にとつてはまだまだ可愛らしい警戒を、彼女はゆるりと首を振って受け流した。

「散歩をしてくると家の者に言つて、戻るに戻れなくなつてしまつただけよ。ちゃんと見つけられるようにしてあるから、大丈夫。もちろん、私からの『難題』が解けたらの話だけだ」

「へー！ 暗号でも残してきたんですか？ 僕たち、少年探偵団なんです！ どんな暗号にしたんですか？」

「どんな……説明が難しいわね。ところで、少年探偵団つて、何をやるの？」

「それはですね——」

灰原とコナンを除く少年探偵団と和やかに話をする輝夜だったが、城の庭師だという男と話をしていた博士に「見せてもらえるそうじゃよ」と声を掛けられる。彼女は子どものように「はーい」とうれしそうに返事をしながら、彼の後についていった。

「それにしても、蓬萊山さんはお美しいですなあ。何か、芸能関係の仕事でも？」

城に招き入れられながらこの城の者だという間宮満という男が、尋ねてきた。前を歩いて先導する庭師の男も、ちらちらと輝夜の方を見ている。久しいとはいえ、人の視線には慣れている輝夜はさして気にすることもなく、どちらかというところ「芸能関係」という言葉の意味を測りかねて首を傾げた。

「？ いいえ。私は仕事をしていないわ」

「そうですか。なら、学生さんですか？」

「学生」。それならば分かるぞ、と輝夜は多少得意になつて、「いいえ」と自信をもつて答えた。

「『学生』は楽しそうだけど、今までは家の者に『危険だから』とあまり外に出してもらえなかつたの。だから私は学生でもないわ」

「おやおや。この城に住む私よりも、あなたの方がよっぽど良いところのお嬢さんのようですね」

「もしかして、社長令嬢とかですか!?!」

満の言葉に乗つた庭師に、輝夜はのんびりと「いいえ」と首を振つた。

「私の家は葉を売っているのよ。ついでに、医者もやっているわね」

「なるほど、そうでしたか」

納得したように頷く大人たちとは裏腹に、やはりコナンと灰原の二人は輝夜を警戒した様子で眺めている。子兎が捕食されまいと逃げ出す機会を窺っているような様子に、輝夜は思わず二人をいじめたくなつたが、何が理由でこうも警戒されているのか分からない以上は、下手につつくのはやめておこうと自制する。

人間は異質なものを恐れる。月人であること以上に、蓬莱人であることは彼らにとつて恐怖の対象となるだろう。昔地上で人間と一緒に暮らしたときには、このような視線は向けられなかつた。好意的なもの以外は、嫉妬を主とするような負の感情であり、間

違っても輝夜は恐れられることはなかったのだ。まあ、時には「帝を誑かそうとする物の怪だ」と、まるきり間違っただけではいるけれどあながち間違いでないようなことを言うて恐れた者もいたが。

楽しく過ごすのであれば、輝夜が「異質」であることは隠しておいた方が都合が良いだろう。幻想郷で暮らす中で力の抑え方が下手になったのかもしれない、と輝夜はより「人間に擬態する」ために意識して力を自身の内に留め、外に漏れないように調整する。それでも二人の子どもたちは、輝夜を睨みつけたままだった。

さて、いつまでも警戒している子どもたちに意識を割いてはこの場を楽しめないう。輝夜は二人の子どもたちを思考から削除し、博士が頼まれた暗号について耳を傾けていた。少年探偵団を名乗るだけあって、灰原以外の子どもたちは目をきらきらと輝かせて、ああでもないこうでもないで自分の考えを口に出している。輝夜も意見を求められたが、あいにく「ちえす」には明るくないどころか、それが何なのかも分からないので、考えようもない。

「私、こういうのは自分で考えるより誰かの出した答えを聞く方が好きなの」

そう言っただけで、聞き役に徹することにする。庭を眺めながらゆっくりゆっくりと歩き、ようやく城の中に入ると真正面に大きな肖像画が飾られていた。どうにも、肖像画の説明をしていたようだが、輝夜はあまり興味がなかった。真面目には聞いていなかった

た。それから、この城に住んでいる大奥様と呼ばれる、車椅子に乗った老婆も話に加わってきた。

「ふうん」

輝夜は老婆を横目に見て、子どもたちに向けるのとは別の笑みを浮かべる。

「ねえ、輝夜さん。大奥様がどうかしたの？」

コナンに声を掛けられて、「あら、気が付かない？」と問い返すと、老婆はそそくさと「娘はどこじゃ？」と以前火事で亡くなってしまったらしい娘を探して奥へと下がって行った。

「気付かないって……何に？」

「ふふ、それなら教えないでおきましょう。まあ、これくらい『難題』でもなんでもないわ。すぐに解けるわよ、きつと」

人差し指を口に当てて、片目を瞑ってやると、コナンはぼつと頬を染めた後、ムツとした顔をした。そういう顔をすれば、少なくとも「見た目」には合わせられるのに、と輝夜は思った。

——面白い人間たちだわ。

輝夜のように蓬萊の葉を飲んだわけではないだろう。ある人間が「呪い」と呼ぶその力は感じられない。けれど、明らかに見た目と中身の年齢が噛み合っていないのだ。

輝夜の能力は、「時間を操る能力」と形容されることがある。あるいは「別の歴史を生きる能力」だとも。ゆえに、輝夜は「時の流れ」に敏感だ。それが人間の中を流れる「時」であつても。そして付け加えるならば、あの少年と少女は「歴史が浅い」。無邪気にああだこうだと暗号について頭を悩ませる「純粋な」子どもと比べると、「江戸川コナン」と「灰原哀」の歴史は驚くほど浅い。しかし、それとは別の歴史を感じるのも事実。深読みしようとしてないで、なんとなく感じられる部分だけでも分かつてしまうことを整理すれば、彼らは人間でありながら普通の人間ではないようだ。

さらに。

——「異変」を起こしたのは彼らかしら？

この世界にうつすらと、けれど確かに蔓延する「永遠」の気配。けれどそれは、輝夜がこの世界に来る前の「スキマ」と同じように、ひどく歪なものである。

「なるほど、私の解くべき『難題』はこれなのね」

ぼそり、と呟く。

歪な「永遠」。永遠を操る輝夜だからこそ分かる、この世界が侵されている異常事態。あるいはこの世界にとつてそれが普通なののだとしても、「永遠」であり「永遠」でないこの世界の、なんとおぞましいことか！

かつて偽りの永遠を解除した「永夜返し」のように、単純な話ではない。あれは幻想

郷の終わらない夜を止めただけ。けれどこの世界の歪な「永遠」は複雑だ。まるで世界を創世した神が施したからくりのよう。力技で解除するには骨が折れそうだし、どうせなら「神」の望み通り「謎」を解いた方がおもしろそうだ。

そしてその謎を解く鍵は、間違いない「普通の人間ではない」少年と少女なのだろうと、輝夜の直感が告げている。

「ねえ、輝夜お姉さんも一緒に探検しようよ！」

歩美の誘いを受けるのも悪くはないが、暗号を解く気のない自分がいても同じようには楽しめないだろう、と輝夜は断ることにした。

「そうねえ。だけど私、『ちえす』のことをよく知らないわ。間宮さん、もし忙しくないようだったら、私に『ちえす』を教えてくださいませんか？ みんなは探検に行きたいよ。うだし、博士は子どもたちを見なくちゃいけないだろうし」

「ええ、私でよければ、喜んで。今用意しますから、そちらに掛けてお待ちください」
残念そうな探偵団と、幾分ほっとした様子の子の灰原。輝夜は子どもたちの様子を見ながら、座り心地の良い椅子に腰かけた。

「いやはや、お強い！ ルールが分かった途端、手も足も出なくなっていました」
「うふふ、あなたの教え方がよかったからですわ」

そんなこんなで時間を潰しながら、輝夜はこの城のことや暗号のことについて何気なく聞いていく。あの子どもたちのようにわくわくとした気持ちで謎解きをしたいわけではなかったが、明らかな「異質」があることを理解していた彼女は、自らが危険な目に遭うこと……は、まあないだろうが、「難題」であり「異変」の鍵である少年少女が危険にさらされ、喪われてしまつてはいけないので、彼らの安全確保のためにも、あの「異質」が彼らにとつての「悪意」に成りえるものであるのか知る必要があつたのだ。

しばらくして、夕飯に呼ばれたため席に着いた輝夜だったが、後から来た子どもたちの「コナン君がいなくなつちやつた」という言葉を耳にする。それによつて、この城にある「異質」に「悪意」が存在するようだと判断した。あの少年がただの無鉄砲で迷子になつたのかどうかまでは、彼の人となりを知らないためなんとも言いが、輝夜は己の直感を信用するタイプだ。であるならば、今回の件は彼が無鉄砲であるより、何かしらの悪意により、その姿を隠されたと思つておくべきだろう。

「(いちそうさま)

輝夜は食事を終えると、コナンを捜すという他の者たちとは別に、一人で彼の行方を追うことにした。なにせ、その方が「理屈抜きで」彼を探せるので。

「みんなで捜そう！」という提案を断つた輝夜に、ある者は失望、ある者は落胆、ある

者は鋭い視線を向けていたが、本人はさして気にした様子もない。

「ふうん。隠し扉ってやつかしら」

輝夜はとある場所で不自然な空気の流れを感じた。この家にはそういった不自然な空気の流れを感じる場所がいくつかあるが、どうすればそれらが開くのかは分からない。

「まあ、緊急事態なんだし、かまわないでしょう」

彼女は見た目にそぐわぬ怪力で、扉を無理やり外した。

新難題：月のイルメナイト

一人、また一人。この城を訪れた人物が消えていく。はじめはコナン。次は突如現れた蓬萊山輝夜という絶世の美少女。その次は博士。それから元太、光彦。残ったのは歩美と灰原だけ。少女たちは息を切らしながら、通路を走り回っていた。

追いかけてくるのは、老婆のふりをした「誰か」。逃げ切るために扉を開け、地下通路から城の床へと辿り着いた。はしごを上る灰原に歩美が手を差し伸べたところで――「誰か」が灰原の足をつかんだ。

ぺらぺらと話をする「誰か」に対し、少女たちはその顔に怯えを浮かべる。「誰か」が鉄の棒を振り上げたそのとき、何かが当たって、「誰か」の手から棒が弾かれ、大きな音を立てて床へと落ちた。

「うふふ、悪趣味もいいところね」

にこり、美しく微笑む輝夜。その隣で欄干に座り、光る靴を見せつけるように膝を立てたコナン。傍にはいなくなっただけの元太や光彦もいた。

「き、貴様らッ……！ なぜ……！！」

喜色を浮かべる少女たちとは裏腹に、老婆の外見からは想像もできない、力強い怒号

が響く。

「輝夜さんと光彦のおかげさ」

得意げに言ったコナンに、輝夜は胸を張る。

「あなた、迂闊だったわね。気絶させた人たちを同じ場所に運んだこと。それに、『あなたに何もされていけないのになくなった』私を放置したこと」

「博士が殴られて気絶させられたのをこっそり見ていたらしい輝夜さんは、あんたの後をつけてオレたちの隠し場所を見つけたのさ」

「ま、まさかあの隠し扉が壊されていたのは……いや、そんな馬鹿な！ あの扉がそんなに簡単に壊れるとは思えん！」

「誰かさんが使いすぎて、立てつけが悪くなってたんじゃないかしら？ とにかく、そういうわけで気絶していた彼らを起こした私は、その後あなたが通路に閉じ込めた二人と合流して、城に戻ったというわけよ」

それから、ひよっこりとタイミングを見計らって現れた博士が「誰か」の正体を明かす。というのも、彼らが少女たちと合流するのが遅くなってしまったのは、コナンの推理をもとに、裏を取るためだった。

正体がバレてしまった犯人が逃げようとするところを、コナンが挑発的に笑う。彼女が老婆に扮してまで長年追いつけていたこの城の謎が解けた、と言って。

その話を聞いて、女は駆け出した。車椅子生活をしていながら、裏では筋力が衰えないように隠し通路を歩き回って生活していたのだろう。

駆け上がったその先、見つけた「宝」を目にして——彼女はなりすましていただけの「本物の」老婆になってしまったかのように、すっかり老いてしまった。城の主にとつての何よりの「宝」は、醜く歪んだ女が望んだものではなかったようだ。

朝陽輝く早朝、何かと騒ぎを聞きつけて起きてきた城の者たちに、博士と輝夜で事の顛末を説明する。それから「謎を解いてほしいと気軽に頼んだことが、危険な事件につながってしまったて申し訳ない」という謝罪と、子どもや博士の治療費を含めた心付けを受け取る。

犯人を警察に引き渡すのは間宮家の者に任せ、朝食を御馳走になった一行は、博士の車に乗っていた。

「なあ、輝夜さんはどうしてオレが隠し通路にいるって分かったんだ？ それに、犯人の正体にも気が付いていたみたいだし」

コナンは車の窓を開けて、出発前にどうしても、と輝夜に話し掛けていた。

「あら、犯人の正体については簡単なことよ。まず、手足ね。あれは老婆の手ではないわ。たしかに年は取っていたけれど、老婆と言うには若い手だったし、足を使っていな

い生活であるはずなのに、ちらつと見えた足は特別細いとも感じなかった。それに、顔を変えているだけあって違和感があったのよね。まあ、あなたを見つけたのは勘に従っただけよ。私、そういうのけっこう当たるの」

「……それならなぜ、犯人についての違和感を誰にも伝えなかったの？ 危険があるかもしれないと、あなたは分かっていたんじゃない？」

ぎろり、と車の助手席から灰原が睨む。

「あまり危険とは縁のない生活を送ってきたから、危険に対しての勘は鈍いのよね、私。それに、もし犯人のことについてあなたたちに教えてしまったら、『もしかしたら何事もなく終わったかもしれない一日』を自ら放棄することになる。そう思わないかしら？」

「だからと言って、リスクを誰にも伝えないのは不誠実だし、結果として私たちは危険な目に遭った。違うかしら？」

「まあ、多少の怪我はあったとはいえ、みんな無事だったんだし、犯人も捕まったし、終わりよければ全てよしってことにしましょうよ。それに、私は自分で謎を解くよりも、人が謎を解く姿が好きなのよ。それが自分の与えたものであれ、他者から与えられたものであれ」

「灰原からの視線は和らぐことはない。輝夜は気にせずこりと笑って、ひらりと手を振った。」

「また会いましょう、近いうちに。きっと遊びに行くわ」

「うん！ バイバイ、輝夜お姉さん！」

「ボクたち米花町に住んでるから、近くに來たら遊びに來てください！」

「またな、輝夜の姉ちゃん！ 約束だぞ！」

子どもたちの元気な声に、輝夜は頷いた。

「ええ、もちろん」

「それより、輝夜さんはこれからどうするんじや？ まさか家出を続けるわけにもいく

まい。お節介かもしれないが、乗っていくかね？ 家まで送り届けよう」

運転席から、博士が心配そうな顔をして輝夜の顔を覗き込む。彼女は美しい笑みのま

ま、「けっこうよ」とやわらかな口調で伝えた。

「家の者は私の与えた『難題』を解かないと迎えに來れないわ。そして私自身も、与えら

れた『難題』を解かないことには歸れないの。そういうものなのよ」

子どもたちはなぞなぞのような輝夜の言葉にきよとんとしたり、答えを出そうと難し

い顔をしたりしたが、博士はその言葉をさらりと流し、彼の心配の種を再び問うことに

した。

「それなら、宿泊先は決まっているのかね？ 親類や友人への連絡は？」

「御心配、どうもありがとう。でも、不要よ」

「博士、いいじゃない。本人がいいって言うてるんだから」

未だ輝夜を見る視線の鋭さを軟化させることのない灰原が、ぴしやりと言う。元太が「冷てーの、灰原のやつ」と口を尖らせたが、非難された灰原自身と、「冷たくされた」張本人はどこ吹く風だ。

「もし、無事かどうかの確認が取りたいと言ってくれるなら、手紙を送るわ」

「あなたに住所なんて教えるわけ……」

「あ、それなら毛利探偵事務所にお願い！ ボク、小五郎のおじさんのところに住んでるから！ 今、探偵事務所の住所書いてあげるね！」

輝夜の言葉に灰原が何かを答えようとした瞬間、コナンがそれを大きな声で遮った。

「ええ、ありがとう」

彼らの乗った黄色い車を見送って、輝夜は「麓まで送っていきましようか」と申し出る間宮家の者たちにやんわりと断りを告げ、黄色い車の去って行った方へと歩いていった。

それからその夜、輝夜は姿を消して、彼らの住む町へ向かった。米花町はどうにも賑やかなどころだ。それに、月の民が嫌う「穢れ」が満ち満ちている。

「ええと……外の世界では何が必要だったかしら？」

目立たぬように、須臾の世界できよきよとあたりを見回しながら、彼女は「役所」と書かれた建物に忍び込んだ。きつと役所ならば、この世界の住民がどのように暮らしているか、基本的な情報は手に入ることだろう。

一日役所に入り浸り、様々な手続きをする人々をこっそり観察しながら、夜中に盗み見た書類とその意味、役所に来る人々の話から、一般的に必要な手続きやら書類やらについて一応の知識を蓄えたのち、輝夜はようやく役所から出た。面倒な手続きを全て己の力で「受理してあることにして」、今の輝夜はふらふらと夜の街を歩いている。夜だというのにまあ、ずいぶんと明るいことだと内心ため息をつく。賑やかというよりは騒がしい街の中は、幻想郷の夜とは全くの別物だった。まあ、あちらはあちらで、夜になれば妖怪が活気づくので賑やかではあるけれど。

ともかく、この騒がしい街では、大半の人々が輝夜に見とれ、放っておいてくれないのだ。特に、酔っぱらって気が大きくなった者たちなんかは、あの手この手で気を引き、口説こうとしてくる。

「き、君！ 芸能人になりたくない!？」

うんざりしながら、やっぱり須臾の力を使ってこっそり歩こうかしら、と輝夜が思い始めていたときだった。随分と地味な印象の男が、必死な形相で輝夜に話し掛けてきたのだ。

「私、働きたくないわ」

「芸能人」というのが職業であるということは学習済みの輝夜である。どんな仕事かは分からないが、仕事は生活を成り立たせるものでもあり、縛るものでもある。謎を解くのに足枷になるようなものはいらないと、彼女は胸を張ってそう答えた。

「い、嫌な仕事は断れるようにするから!」

「芸能人って、具体的になにをするの?」

「君くらい美人なら、モデルとか……話すのが好きなら、タレントとか、演技できるなら女優とか、歌が得意なら歌手とか……とにかく、なんでも! 君ほどきれいな子、見たことがない! 詳しい話だけでも、事務所で聞いてくれないか!」

輝夜は「ふうん」と、値踏みをするように男を見た。黒髪で、スーツ姿の、冴えない凡庸な男だ。

「私を手に入れたいというなら、あなたに『難題』を与えましょう」

白く細い指を、うっとりするほど美しい仕草で空へと向けた彼女は、視線は男からそらさず、妖しく微笑む。

『月のイルメナイト』を手に入れ、私に届けること。そうね……もし手に入れたら、『毛利探偵事務所』に送るか、あなた自身が持ち込むこと。それができたら、そのお話、考えてあげるわ。それでかまわないかしら?」

こくこくと頷いた男は、時間が惜しいとばかりに脱兎のごとく駆け出した。くすくす笑った輝夜は、あの眼鏡の少年からもらったメモ書きを見つめる。そして悠然と、「そこ」へ向かうために歩き出したのだった。

*

江戸川コナンが学校から戻ると、毛利探偵事務所に来客があるようだ、とドアを開けたときの話し声から察することができた。どうにも女性のようで、探偵事務所の主である毛利小五郎の声が、明らかに普段の依頼のときとは違い、気合が入っている。

「ただいま……って、輝夜さん？ どうしたの？」

面白い依頼だったらしいな、とコナンが住宅スペースではなく探偵事務所の方へと歩いていくと、つい先日見たばかりで、一度目にすれば忘れることの方が難しいほどの絶世の美貌を持った少女が、事務所の粗末なソファに腰かけていた。

「あら、コナン君。こんにちは」

にこり。相も変わらず完璧な笑みを浮かべる輝夜に、コナンは思わずどきりとしてしまう。ちなみに、彼の幼馴染であり、小五郎の娘である毛利蘭は、本日は部活のため、まだ帰宅していない。それが幸か不幸かはわからないが、彼女にデレデレしきっている小

五郎にとつては、幸運なことに間違いないようだった。

「なんだア、小僧。輝夜さんと知り合いなのか？」

訝し気に少年を見やる小五郎に対し、輝夜が「コナン君がこちらを紹介してくれたのよ」と返事をする。「たまにはお前も役に立つじゃねえか！」と喜色満面に変わった事務所の主に対して、少女はくすくすと笑った。年上に対して敬語を使う様子のない輝夜だが、彼女の持つ独特の雰囲気や、その唯一無二の美貌から、そういつたことを相手に全く気にさせない。まあ、実際のところ輝夜の方がはるかに年上であるが。

「輝夜さん、どうしたの？ 何か困り事でもあった？」

「困り事というほどでもないんだけど、先日芸能人にならないかって誘いを受けたの。そのとき、条件を付けたのよ」

「条件？」

「ええ。『月のイルメナイトを手に入れたらいいわよ』って。そこで、送り先にこちらの事務所を勝手に指定させてもらったのよ。その説明をしに、今日はお邪魔したってわけ」

「万が一本物のスカウトマンじゃなかったり、スカウトはスカウトでも、危ない系統のものだったりしたら大変だからな！ 輝夜さんはその場で返事をせず、ついて行きもせず、機転を利かせたってわけだ。万が一本物のスカウトマンでも、乗り気でなければ迷

惑なだけだしな！」

うんうんと頷く小五郎は、「まあ、しかし、輝夜さんのポスターがあつたら私は飾りますけどね……」と恰好をつけながら言っていたが、輝夜もコナンも聞き流していた。

「用事は本当にそれだけなのよ。ごめんさいね、手紙を書く前にお邪魔して」

「ううん！ それより輝夜さんは、どうやってここまで来たの？ 車？ 電車？ それと、結局どこに泊まったの？ みんな心配してたよ！」

子どもの無邪気さを装って質問を重ねたコナンに、輝夜は「歩いたり、親切な人の車に乗せてもらったりしたわ」とにこやかに答えた。むろん、その「親切な人の車」には無断で乗っていたが、相手は気が付いていないし、そんなことはわざわざ説明する必要もない。

「泊まったのは、漫画喫茶というところよ。便利なのね、一日中やっついて。しかも飽きないわ」

輝夜が謎の自信を以って、胸を張りながらそう答えると、反対にコナンの顔は心配そうになった。

「え……大丈夫だった？ 変な人に付きまとわれたとか、そういうの」

「ええ。私、これでも気付かれないようにするの、得意なの」

やはり輝夜は自信满满である。気付かれないようにするというか、他人には認知でき

なくなるといふか、口で言うほど軽い現象ではないけれど、その軽い雰囲気にもまた軽い雰囲気で笑った。

「いやあ、しかし、それだけお美しければどこにいても目立つでしょう」
「ちよつとしたコツがあるのよ」

口元に指を寄せた輝夜のあまりの美しさに、男二人は息を呑んだ。

「さて、それじゃあ私は行くわ。もし私の名前を出すような来客があつたら、よろしく頼むわね」

「あつ、ちよつと待つてよ！　もしお客さんが来たとして、どうやって輝夜姉ちゃんに連絡を取ればいいの？」

ソファから立ち上がった輝夜を呼び止めたコナン。それに対し、彼女はきよんとした表情を向けて、すんとソファに座り直した。

「考えていなかったわ」

「輝夜姉ちゃん、これからどうするの？　漫画喫茶に泊まったってことは、まだちゃんと住む場所とか決まってるやないんだよね？　ケータイは？　持つてないの？」

「そうね……いろいろ手続きは済ませたと思つたけど、やっぱり漏れがあるわね」

そもそも、輝夜は手続きを済ませただけで住居や金銭のことは後回しにした。彼女お得意の「気付かれないようにする」特技のおかげで、重要度が低いのだ。お金の問題に

ついても、どこかの普通の魔女のように「死ぬまで返さない」ということをしたりしなかったりすればいい。輝夜は死ぬことがないので、結局は彼女が返さないと思えば相手に返ることはないのだが。

しかし、少年の言う通り、この世界に生きるための「当たり前」を輝夜は知らない。それに、そろそろ落ち着ける場所が欲しいと思っていたところだ。この世界は夜でもいろいろな店が開いているので、こっそり忍び込んで、多くの人々を観察しながら夜を明かすのも悪くはなかったが、そればかりでは疲れてしまう。永遠亭のように、とまではいなくても、静かな場所があればいいなと思っていた。

「そうだ、コナン君。今から時間ある？」

「え？ あ、あるけど……」

「毛利さん、この子ちよつと借りるわね。まあ、遅くならないうちに帰るから、心配はしないでちょうだい」

流れるような作業でコナンの背中からランドセルを下ろさせた輝夜は、そのまま困惑している少年の手をつないで探偵事務所を後にする。背後から小五郎が何かを叫ぶ声が聞こえてきたが、内容的にコナンを心配するようなものではなく、羨むようなものであったため、無視しても大丈夫だろう。

「か、輝夜さん？ どこ行くの？」

「それを教えてほしいのよ。ほら、私って、家の者から外に出ないようにずつと言われてきたから、いわゆる『世間知らず』だと思ふのよね。どうにか住む家を探したいんだけど、どうすればいいのかも分からないし、そもそもみんなの常識とするところも分からない。その点、君なら子どもだけど色々知っていいそうだと思うって」

「で、でも、家って借りるのに審査とかあるらしいし、保証人が必要な場合がほとんどって聞いたことがあるよ！　そういう人がいないと借りられないんじゃないかなあ？

それに、お金はあるの？　輝夜さんっていくつなの？　未成年は親の許可なしにいろいろな契約とか、できないと思うよ？」

コナンの手を握ったまま、輝夜は空いている方の手を己の口元に当てた。

「未成年ではないから、契約とかは大丈夫よ。でも、審査とかは面倒ね。私、運転免許証もパスポートも持っていないから写真付きの身分証ってないし」

輝夜がそういったことに対して多少の知識があるのは市役所で人々を観察した賜物であるが、そうとは知らないコナンにとって、彼女は「相当世間知らずな箱入り娘」と映ったようだ。実際は彼からしたら宇宙人のようなものだが、どちらにせよ信じられないものを見るような目で、輝夜の顔を斜め下からまじまじと見つめる。

(……いや、そりゃあ、家の人が過保護になるくらい美人ではあるけどよ)

コナンの目には、年のころだつて本来の彼の年齢とそう変わらないように見える。未

成年ではないと言われて、少しばかり驚いたくらいだ。浮世離れしたその雰囲気と、あまりに整いすぎた芸術品のごとき容貌は、彼女を何も知らない無垢な乙女にも、それこそ月の都から来たお伽噺の姫様のようにも見せている。そのどちらも、彼より年上で、多少は酸いも甘いも経験しているであろう妙齡の女性像とはかけ離れていた。

「コナン君、家を貸してる知り合いとかいないかしら？ あと、ケータイはどうやって買うの？ それからそれから……」

言い募る輝夜のことを、彼の友人の灰原はかなり警戒していた。現れたシチュエーションが怪しすぎるし、素性を隠そうとする彼女の言動にさらに不信任を募らせていたのだ。

（オレは輝夜さんはちよつと変わってるだけで、怪しいやつじゃないと思うけどな）

彼が追っている「組織」の人間であつたら、灰原もそうだと言うはず。自分と同じように幼い姿になってしまった彼女は、そういう嗅覚には優れていると自分で言っていたし、何より輝夜は以前見た時も、今も、黒づくめの姿ではない。

ピンク色のブラウスにブラウンのロングスカート、革のブーツを履いた彼女は、血生臭い裏の組織の住民とは思えず、どう見ても「良いとこのお嬢様」であつた。

「とりあえず、父さんの知り合いに不動産やってる人がいるから、今から行つても大丈夫か連絡とつてみるよ」

「あら、あなたお父さんがいて、しかも連絡を取り合える仲なのね。毛利探偵事務所に引き取られていると聞いていたから、てつきり御両親は亡くなられているのかと思つていたわ」

「あつ！ ボクのお父さん忙しいから、あんまり日本にいたくつて……でもボク、日本で暮らしたいから……ハハハ……」

常識知らずなくせに、頭の回転は悪くないらしく、輝夜はコナンがうっかり漏らした言葉をしっかりと拾つていた。本人は深く追及する気もないのか、「それなら、私と大して変わらないじゃない」と自分の家出を棚に上げてコナンの「わがまま」による事情を、にやにやと笑っている。

「あ、父さん？ ボク、コナンだけど。えつとね、知り合いのお姉ちゃんが家を借りたんだつて。父さんの知り合いに不動産会社の人がいたよね？ その人に今から連絡取りたいんだけど、連絡先教えてくれるかなあ？」

『ブフツ……あ、ああ、分かった。電話番号を教えよう』

電話口から明らかに噴出した音が聞こえたが、輝夜は聞こえなかったことにしてあげた。輝夜とて、彼の事情は知らずとも、彼が見た目通りの存在ではないことは理解している。そして、今の反応から、おそらく彼が「父」と呼ぶ協力者——あるいは、本当に彼の父親である人物は、彼の身に起きた「何か」を知っていると推測できた。別に彼の

正体を掴みたいと目論んで連れ出したわけではないが、これはこれで良い収穫になったと輝夜は暫定親子の会話を耳をそばだてていた。

『じゃあ、しばらく戻らないが、元気でな』

電話が切れ、コナンは輝夜に向き直り、「今から電話してみるね！」と子どもの笑顔を張り付けて言った。輝夜もにこりと頷き返し、こうして奇妙な二人は家を探しに、不動産社のあるビルまで歩いて行つたのだった。

「いやあ、話は聞きましたよ！ ボウヤから着信があつたすぐ後に、ゆ……ごほんつ、メールが入りましたね！ まさかこんなきれいなお嬢さんの家を探させてもらえるなんて、光栄だなあ」

にこにこと上機嫌な男は、名札に「部長 北川」と書かれており、輝夜には部長という役職がどれほど偉いのかは分からなかったが、肩書があるということは、まあそこそこの地位なのだろうと推測した。北川はコナンに「優作さんから話は聞いてるよ。いやあ、君、新一君の親戚なんだって？ 似てるなあ」だとか「優作さんには自分の名前は出すなど言われててね。有名人は大変だね、全く。僕も気を付けるから、君も気を付けて」だとか、そういったことを話していた。小さな音量で、輝夜から二人はそこそこの距離を取られていたので、常人だったら聞こえないだろうが、輝夜はそもそも地球人ではない。ばつちり聞こえていた。

「さあ、お待たせいたしました。こちらにお掛けください。君、飲み物を」

輝夜の個人情報配慮してなのか、コナンが父親と言った「優作さん」への計らいなのか、他の客は仕切りの付いたカウンター席や簡易的なパーテーションの置かれたテーブル席で案内を受けているが、彼女が通されたのは個室だった。一緒についてきた女性社員にメニュー表と水を手渡され、カタカナ表記のメニューの内容がほとんど想像できなかった輝夜は、無難に温かい緑茶を頼んだ。コナンは「ボク、オレンジジュース！」と元氣いっぱい頼んでいたが。

「さて、申し遅れましたな。私は北川と申します。あなたは……」

「私は蓬萊山輝夜。米花町には来たばかりで、勝手がよく分かっていないの」

「ボクは江戸川コナン！ 輝夜姉ちゃんに家探しを頼まれたんだ」

簡単な自己紹介を済ませると、北川は「では蓬萊山さん」と、何枚かの紙を差し出した。

「簡単で結構ですので、こちらに希望を御記入ください」

「……ごめんなさいね、私、家からあまり出たことがなくて。バス・トイレ別ってわざわざ書かれているってことはそうでない物件もあるってこと？ お風呂とお手洗いは普通別よね？」

手渡されたボールペンを手に、輝夜はざっと目を通した中で、意味の分からない単語

や単語の意味は分かるが、どうしてそこに書かれているのかは分からない項目などの質問をしていった。北川の顔は明らかに引き攣っていたが、誰も彼を責められないだろう。そこまでの箱入り娘ならば、大抵両親が付き添ってくるし、そもそもそういった女性は一入暮らしを望まれない傾向にある。そのため、こうした基本事項を一から説明することはあまりないのだ。

「お待たせいたしました。温かい緑茶と、オレンジジュースです。こちらもよろしければ……」

飲み物と共にお茶請けが出される。高級そうな最中で、オレンジジュースを頼んでしまったコナンは「オレも輝夜さんと同じものにすればよかった」と内心後悔していた。

「分かったわ、どうもありがとう」

「いえ、とんでもない。また何か分からないことがありましたら、気軽にお尋ねください」

北川にとって幸いだったのは、輝夜は常識知らずではあったが、頭の回転が速いことであつた。説明をすればすぐに理解するし、なんなら説明の途中で概要を理解することができる。北川としても、彼女を頼んだ工藤優作という男は恩人であり、輝夜のことを世間知らずの面倒な客であるからと、適当な物件を押し付けるわけにもいかなかった。女性向け物件であることはもちろん、きちんとした管理会社の経営するところではなけれ

ばならないので、選択肢も絞られる。

「ねえ、輝夜さん。この条件だと都内じや家賃すつごく高くなっちゃうと思うよ?」

輝夜の記入している用紙を覗き込みながら、コナンが声を掛ける。彼も賃貸を借りて一人暮らしをしたことがあるわけではないが、探偵である以上、専門知識だけでなく世間の常識も広く仕入れる必要があるため、こういったことには詳しくかった。

「そうなの? 困ったわね、家賃の相場も知らないし、そもそも普通の人がどんな生活を送っているのかわからないもの」

湯気の立った熱そうなお茶を涼しい顔で飲んでいた輝夜は、湯呑から口を離して、小首を傾げる。

「やっぱり、間取りとか設備とかも大事だけど、周りの環境も大事じゃない? ほら、よく言うのは病院とかスーパークが近い方がいいって」

「病院は必要ないから、他に近くにあると便利な施設を知りたいわ」

「一人暮らしだったら病院は近い方がいいと思いますけどね。病気はもちろん、このご時世どこで事件に巻き込まれるかも分からないんです。馴染みの病院があった方が安心できると思いますよ」

北川が「困ったお嬢さん」に助言をすると、彼女はおかしそうにくすくす笑った。まるでそのアドバイスが、てんで見当外れだとも言うように。

「それはどうも、教えてくださって、ありがとう。でも、やっぱり必要ないわ。まあ、あったらあったで困らないけれど、どのみち診療の必要があるときは、家の者にしか診せませんもの」

「あ、お医者様の家系なんですか？」

「輝夜姉ちゃんのお家の人はお医者さんと薬剤師さんなんだって」

「ええ。まあ、お医者さんで薬剤師と、その他薬剤師って感じかしらね」

輝夜がのほほんと答えると、北川は先ほどよりは幾分うれしそうな顔で「それだったら、こちらの物件はいかがですか？」と資料を提示した。輝夜の隣ではコナンが変な顔をして「高え！」と慄いていたが、あいにく輝夜にこちらの物価は分からない。北川としては、輝夜に記入してもらった用紙を参考に「医者の娘なら支払い能力くらいあるだろう」と見込んでの提案だったのだが、隣にいたコナンが慌てて却下していた。小さな探偵は輝夜が家出をしたと思っており、その状況から、実家からの支援は望めないだろうと推測していたからだ。

結局、どんな物件を提案してもコナンが難癖を付け、話はまとまらない。時間ばかりが浪費される中、小さく手を上げたのは輝夜だった。

「熱心に探していただいて、ありがとう。こちらの資料、持ち帰って検討しますわ。資料を見ていたって分からないことも多いし、すぐに決められることではなさそうだってこ

と、よくわかったもの。もしよろしければ、また後日、実際に建物を見ながら決めていきたいのだけれど……ご都合はいかががかしら？」

「そうしてもらえると、こちらも助かります」

北川は、疲れと苛立ちが隠し切れない笑みを浮かべて、輝夜とコナンをエレベーターまで送って行った。彼がいちいち難癖をつける少年を邪険にしなかったのはひとえに「工藤優作」その名前が脳裏をちらついていたからに他ならない。

「あーあ。結局、決まんなかったな。輝夜さんの家」

「それはあなたが次々に却下していったからだと思うんだけど」

「本当は、今輝夜さんが手に抱えてる資料だつて、どれも高すぎるんだよ。たしかに輝夜さんは女性で、一人暮らしだから、セキュリティ面は気にした方がいいと思うけど……」「うふふ。まあ、私はそういうのは気にしないけどね」

「なあに言つてんだよ、今まで『危険だから』つてずっと家にこもりつきりだつたつて、自分で言つてたんじゃねえか」

呆れ顔の小学生に、輝夜はくすくすと笑った。輝夜が危険に晒されることはない。例えば、神だとかそういう超常的な存在が出てきたら話は別だが。ただの人間に、輝夜を危険に晒せるはずもない。しかも、彼らは空を飛ばないので弾幕ごっこすらできない。輝夜と勝負する、その土俵にすら立てない相手が、輝夜をどうこうできるはずもな

いのだ。誘拐しようとしたところで、輝夜は相手に気付かれずに逃げる事ができるし、ただの人間には彼女を拘束することもできない。武器を使って襲われたって、怪我はすれど全て治る。そもそも、怪我を負ってやろうとも思わないので、能力を使わずともその身体能力でねじ伏せることができるのだ。

蓬莱山輝夜という少女は、だからこそ、そんな無用な心配をしてうんうんと悩む少年を微笑ましく思った。無用であることを知らなくても、彼のように知り合ったばかりの人間の住居選びを手伝い、本気で悩んでくれる人物は稀有だろう。

「なあ、輝夜さん。自分のことなんだから、もつとちゃんと考えて……」

パツ、とコナンが顔を上げたときだった。ふいに輝夜がコナンの手を引く。

「さつきから尾けられてるみたい。コナン君、お友達じゃないわよね？」

こっそり呟かれた言葉にハツとしたコナンが、相手に気付かれないうようにさりげない仕草で周囲を見渡すと、確かに怪しい男が数名、輝夜とコナンの後を尾けていた。

「輝夜さん、人通りの多いところを歩いて……この時間なら、駅周辺は混み合うと思う。駅の方へ向かって相手をまこう」

「ふふ、必要ないわ」

輝夜はにっこりとほほ笑んだ。怪しい男たちにつけられているというのに、余裕の笑みである。

「私はいつも、私を望む者たちに『難題』を与えてきたのよ。そしてそれを解き明かし、あるいは乗り越え、私を満足させた者は一人もいなかった」

「ま、お遊びで打ち破った者は何人かいるけどね」と、コナンには理解しがたいことを呟いた輝夜は彼の手を引いて、どんどん暗い道へと向かっていく。

「お、おい……！」

慌てるコナンにもかまわず、輝夜は自信満々に歩を進め、ついに袋小路まで来てしまった。黄昏時とあつて周囲は暗く、さらに冷たい風がひゅおつと不気味な音を立て、輝夜の艶やかな黒髪を揺らす。

「お嬢さん、坊や、迷子かい？」

現れたのは大柄な一人の男。

「お馬鹿さん。大通りでは声も掛けられない小心者のあなたたちに、何の用なのか聞くために、わざわざこんなところまで来てあげたんじゃない」

既に輝夜とコナンの手は離されていた。コナンは警戒した表情のまま、近くに空き缶が数個転がっているのを発見し、いざというときのためにそれらをさりげなく足元に寄せる。

「ふん、強気なお嬢さんだな。今までわがまま放題だったんだろう」

「ぱちん」と男が指を鳴らすと、背後から五人の男たちが現れた。全員黒服を纏ってお

り、その姿にコナンは息を呑む。

「へへ……悪いことは言わねえ、大人しくしてるんだな。なアに、命まではとらねえ。ちよつとイイコトして、それをビデオに撮られるっただけさ。聞こえてたぜ？ お嬢さん、帰る家がないんだろ？ 俺たちの相手をしてくれりや、お代はいらねえ」

卑下た笑みを浮かべる男に、コナンはキック力増強シューズのつまみに手を掛ける。人数が多いのでキツいかもしれないが、やれることはやるしかない、と腹をくくった。

『月のイルメナイト』

しかし、隣に立つ輝夜は相変わらず余裕を崩さず、微笑みさえ浮かべたまま、そう呟いた。

「私を手に入れたいなら、それを取ってきて、私に差し出さない。そしたら、話くらいは聞いてあげるわ」

彼女の言葉を、その場しのぎの難癖だと思ったのか、背後に控えていた男の一人が「何ワケわかんねえこと言ってるんだ、オラア！」と声を荒げる。しかし、それ以上言葉を続けるのを先頭にいた男が制した。

「フツフツフ、お嬢さん、ナメてもらっちゃあ困る。こう見えて、オジサンたちは悪い大人でね。お嬢さんが抵抗するなら、力づくでも攫えばいいだけだ。隣の小さな坊主が、お嬢様を救えるナイトには見えないが……さあ、大人しくこつちへ来い！」

「行かなければどうなるの?」

のんびりと言葉を返す輝夜に、後ろのガヤが「薬漬けじやオラア!」「さんざん楽しんであとはバラすぞ!」などと、聞くに堪えない暴言を吐いている。

「では、私からも、もう一度言うわね。『月のイルメナイト』。これを取ってきなさい」

一歩前に出た輝夜は、コナンを庇うように立つ。しかし、コナンにとつてはうれしくない態勢だった。なにせ、これでは輝夜が壁となつて男たちに空き缶をぶつけることができない。じりりと彼は己の立ち位置をずらそうとした。

「どう? 私の『難題』、受けるかしら?」

「お嬢さん、いい加減にしておうか。一応知らせといてやるけどなあ、こちらら泥参会のモンだ! 名前くらい聞いたことあるだろ? さあ、大人しくついてこい!」

先頭の男が腕を懐に入れ、そこから拳銃を取り出す。その銃口は輝夜へと向けられており、先頭の男の行動を皮切りに、背後にいた男たちも同じように拳銃を取り出した。

「輝夜さんっ、どいて!」

「では、乗り越えなさい。この『難題』を」

静かな声だった。それはまるで、夜空に浮かぶ銀色の月のような静謐さ。札のような何かを、いつの間にか手にしていた彼女のその笑み。それはまるで、黄金の望月のような欠けたることのない狂おしい美。その声を、横顔を、間近で見聞きしたコナンは、時

が止まったと本気で錯覚した。

『新難題：月のイルメナイト』——大丈夫、痛くても死なないわ」

その瞬間のことを、コナンはよく覚えていない。どういうわけか、その瞬間だけが記憶から切り取られてしまったような。それとも本当に彼が見逃してしまっただけで、一瞬で何かが起こったのか。普段の彼であれば、探偵という性質上、そんな失態を犯すはずがないのに——それでも、コナンは何があつたのか、見逃した。

気が付いたら男たちは倒れていて、輝夜は変わらず美しく微笑んでいて。それから「大丈夫？」とコナンに声を掛け、呆然とする少年の手を引いて、袋小路を抜けた。

「か、輝夜さん？ 今何が……」

「うふふ。さあ、何かしら。びつくりしちゃうわね」

「輝夜さんって……何者？」

彼女の手を振り払い、視線を鋭くした少年に視線を合わせるように輝夜はしゃがみこんだ。

「私のことが知りたいなら、自分で解き明かしてごらんなさいな。私、誰かに問いの答えを教えてあげるほど優しくはないの。それが私自身に関することなら、なおさら」

その言葉に怯んだコナンが次の言葉を紡がないでいると、輝夜は立ち上がり、月を見上げた。そして意味深な視線をコナンに送り、「それに」と口を開く。

「それを言うなら、私も同じことを言わせてもらおうね。コナン君って、何者？」
「……オレは江戸川コナン。探偵さ」

コナンは小さな手を輝夜に差し出した。

「輝夜さんがあの男たちに何をしたかは聞かない。だけど、だからこそ……オレはあんなの謎を暴いてやるぜ」

「ふふ。楽しみにしているわね。その前に家の者が迎えに来ないといけれど」

少女と少年は互いに秘密を抱えたまま、固い握手を交わした。それから、少年が思い出したように警察に電話し、男たちは無事お縄についた。風の噂によると、男たちは名乗った通り泥参会という暴力団の組員であり、ふと聞こえた輝夜とコナンの会話から、「家出をしている絶世の美少女」だと思っただけで、誘拐して言葉にするのも憚られるようなことをした後、処分するつもりだったようだ。妙なのは、男たち自身も、少女に銃口を向けたことまでは覚えているが、その直後にもすごい衝撃が体に襲い掛かり、意識を失ってしまったため、何があったのか全く覚えていないとのことだった。

輝夜もコナンも「怖い人たちに尾けられていて、急に襲われたと思っただけで倒れた」としか証言しなかったため、警察は不可解そうにしていた。当の組員たちもはつきりした証言をしないため、うやむやのままとなってしまった。

「ただいま」

二人が事情聴取を終え、毛利探偵事務所に戻ってきたころにはもう、すっかり夜になっていた。少年の声を聞いて、バタバタと慌ただしい足音と共に、可愛らしい少女が眉を寄せて心配と怒りを滲ませた顔で現れた。

「コナン君、遅かったじゃない。心配したのよ?」

「ごめんなさいね。私が連れまわしたものだから」

「えつ……えつと、あなたが……その、父の言つてた、蓬莱山輝夜さん?」

輝夜の美貌に頬を染めながら見惚れる少女は、わたわたしながら「あつ、私、申し遅れました。毛利蘭です!」と名乗った。愛らしい少女の様子に、輝夜とコナンはどちらからともなく、顔を見合わせてくすりと笑う。

「蘭姉ちゃん。輝夜姉ちゃん、今日泊まるよこないんだって。ホテルを探そうにも、実はちよつと誘拐されそうになって、今から探すのは怖いみたい。探偵事務所に泊まってもらつてもいいかなあ?」

「ええ!? それは大変ですね! ぜひ、何も無いところですが泊まって行つてください!」

「突然厄介になつてしまつて、悪いわね。泊めていただけならありがたいわ。お世話になるのはこちらなのに、あまり気を遣われると心苦しいから、どうぞおかまいなく」

「ええ!? か、輝夜ちゃんが泊まる……!? オッホン、輝夜さん、どうぞ我が家のようにくつろいでください。この毛利小五郎が、あなたの安らげる居場所となりましょう」
示し合わせたかのように誰も小五郎の言動をなかつたことにして雑談を始めた。

一夜が明け、コナンと蘭がそれぞれの学校へ出かけてから。毛利探偵事務所に慌ただしく駆け込んできた男がいた。

「すみませんっ、こちらに……つて、ああ！ ちょうどよかつた！ 君に言われた物を持ってきたところなんだ！」

探偵事務所の主が何かを言う前に、男はまくしたてて、ソファに座っていた輝夜の側で跪いた。

『月のイルメナイト』！ たまたま、僕の知り合いに宇宙の研究をしている友人がいてね。頼み込んだらくれたんだよ！ ……まあ、もちろん交換条件ではあつたけど……」

ぼそりと呟かれた後半にはつつこまないことにして、輝夜は差し出された鉱物をまじまじと観察する。

「本物だわ」

ぼつりとつぶやき、ふわりと微笑む。

「聞きましょう、あなたの話。私は蓬萊山輝夜。まずは、あなたの名前を教えてくださいだ

い」

美しすぎるその笑みに、探偵事務所にいた男たち二人はしばしの間、まばたきを忘れ、呼吸さえも忘れていたという。

粗題：宝へと至る暗号

輝夜は忙しい日々を送っていた。今ではマネージャーとなった元スカウトマンは大手芸能プロダクションの社員で、彼に社長と面会させられると、とんとん拍子で契約が決まり、即戦力としてモデルの仕事を受けていたのだ。その間、彼女はホテルで暮らしていた。会社から持たされた携帯電話で唯一の登録相手であるコナンと雑談をしたり、相変わらず家探しを手伝ってもらったりしながらも、充実した日々を送っていた。

ちなみに、社長は輝夜の容姿を目にしてどこにも渡したくないと思つたようで、彼女のわがままとも言えるゆるい労働条件を次々と呑んでいった。例えば、話を聞いて気分が乗らない仕事はしたくない、インタビューやテレビの仕事など、あれこれ自分のことを話さなくてはならないようなことも嫌、あらゆるプライベート、個人情報秘匿したい等々だ。「蓬莱山輝夜」としてあれこれ調べられても困るため（まあ、調べられたところで彼女は戸籍などの書類を気付かれないように完璧に作り上げていたが）、「カグヤ」と本名を片仮名にした芸名を使っていた。

人はミスティアスなものに惹かれる。それがこの世に比類ない美しい女性ならば、なおさらだ。そういうわけで、彗星のように現れた謎の美少女モデル「カグヤ」はまたた

く間に雑誌を賑わせ、世間を賑わせ、あつという間に有名人となった。年齢不詳、本名不明、その素性、経歴の全てが謎に包まれた、現代の「かぐや姫」として、特に断る理由のない仕事は片っ端から受けていった。その結果、あまりに静止画だけであることや、あらゆる情報が伏せられていることから、一部では「バーチャルの存在なのでは？」という疑いすら浮上している始末だった。

「しつれーだよな！ 輝夜の姉ちゃんはこのにいんのに！」

ぷりぷりと狭い車内で怒っているのは小嶋元太だった。出発前に見たワイドショーで、輝夜のことをバーチャルの存在と断言していたのを聞いてしまったためだ。

「別にどちらでも構わないわよ。バーチャルってことにしといた方が面倒事も少ないかもしれないし」

助手席で微笑む輝夜は、自身の載ったフアツション誌を見ながらそう返した。フアツション誌では、数ページにわたって「究極のモテ女子『カグヤ』姫になりたい！ 時代を超える愛され清楚な姫メイク特集」という長いタイトルの特集が組まれている。

「でも、輝夜さんは大丈夫なんですか？ 家出中なら、見つかってしまうのでは……」

心配そうにつぶやく光彦に、輝夜は雑誌を閉じて振り返った。後部座席に座るのは、元太、光彦、歩美、コナンの四人。今日は灰原はいないようだった。

「前も言ったかもしれないけど、家の者は私の与えた『難題』を解けないことには、迎え

に出来ないわ。たとえば私の居場所を突き止めたとしてもね」

「もしかして、謎解き勝負してるの?」

「うふふ。まあ、そんなところよ。ところで、博士が開発したおもちゃの新製品って、なんだったかしら?」

話題を逸らした輝夜は、博士に水を向ける。というのも、本日こうして輝夜が仕事を休んで彼らと外出しているのは、博士がおもちゃの新製品の開発に協力して契約金を手に入れたため、少年探偵団相手に宝探しゲームをするので、一緒に来ないかとコナンに誘われたからだった。それだけならば誘われる理由にはならないかもしれないが、輝夜は未だに忙しい合間を縫って家探しをしている。時々北川のところにも顔を出す(彼は輝夜のことを上京してきたばかりの箱入り娘で、つい最近夢を叶えて芸能界デビューしたと思込んでいる)、なんだかんだで契約しようとしていたマンションで殺人事件が起きたり、強盗騒ぎがあったりと落ち着かず、話が流れてしまっていた。

そこでコナンは、今回行くのは博士の伯父夫婦が住んでいた別荘で、マンションなどではないが間取りや雰囲気などが家探しの参考になるかもしれない、ということまで声が掛かったのだ。

「じゃあ、私は家の中を自由に見ていることにするわね。もしかしたら、家の周りにいるかも」

「えー！ 輝夜お姉さんも一緒に宝探ししようよお！」

「まあ……気が向いたら」

実は、輝夜はコナンに誘われた時点で博士からネタばらしをされており、宝の中身がおもちゃであることも、宝探しゲームが彼らのためであることも知らされてしまっている。そのため、出題者の意向を尊重しようと、ゲームには参加しないつもりだった。

ああでもない、こうでもない話し合う子どもたちを置いて、輝夜は家の中、周りをつらふらと興味の赴くままに歩く。古くはあるが、確かに立派な別荘だった。時折視線を感じたため、この別荘に何者かがいることは分かっていたが、好奇心の旺盛な野次馬ということもあるかもしれない。ともかく、輝夜は基本的に寛容で大らかな性格なのだ。好きに探索をすることをやめなかった。

ふらりと子どもたちの方へと戻ってみると、ちょうどタイミングが良かったのか、歩美が「見て、輝夜お姉さん！」と手招きし、「ボクたち、宝を見つけたんですよ！」と興奮気味の光彦が声を上げる。「さっそく見てみようぜ！」と元太が箱にかかった布をほぎ取った、そのとき。

「そんな……ひどい……」

箱の中にあつたのは、ナイフでずたずたにされたおもちゃだった。

「悪趣味ね」

輝夜の吐き捨てるような言い方に、コナンは思わず彼女の表情を窺い見る。いつも笑みを絶やさず、余裕を崩さない輝夜の表情が苦々しく歪んでいたのだ。

「誰かの笑顔を望んで用意した物を、こんな風にしてしまうなんて」

たくさんのおもちやを買った博士は、宝を見つけて喜ぶ探偵団の姿を想像していたはずだ。ただおもちやを買い与えるだけでなく、そこに「謎」というセンテンスを含ませたことに、輝夜は好感と共感を抱いていた。何かを手に入れるのなら、苦労の末こそがよい。なぜなら、そこにはただ「手に入れた」という事実だけではなく「誰と」あるいは「どのよう」に「手に入れたか」「手に入れた」事実には思い出を重ねることができからだ。

暗い雰囲気の中、コナンが「もしかしたら、この別荘には、本物のお宝があるのかも」と発言したことで、子どもたちはその明るさを取り戻し、再び屋敷の中で宝探しを始めた。聞くところによると、別荘にある物の中に、暗号の刻まれた物があるらしく、それを解読すれば宝を発見できるはずだ、とのことだった。

「記号を言葉に置き換えて当てはめてみたら？」

「ああ、そうしたいんだが……法則が見えそうで見えねえんだ。ちよつと紙に書きだしてみるか」

「右側三つの記号が同じなら、そこには共通の言葉が入るのよね？」

探偵団そっちのけで話を始めた輝夜とコナンだったが、やがて一つの答えに辿り着く。「そうか!」と彼が声を上げたところで、「二人だけで盛り上がるなよな!」「ボクたちにも教えてくださいよお」「仲間外れにしないで!」と探偵団の面々から非難の声が上がった。困ったように笑うコナンが解説をすると、すぐに理解したらしい少年たちは、暗号に従ってバタバタと動き回った。

暗号の指示通りに動く、別荘から奇妙な音が聞こえる。音のした方角へと真っ先に駆け出したコナンの後に、その他の面々もついていった。

暗い隠し部屋に辿り着き、部屋に光を取り入れるため、博士が窓を開ける。すると、子どもたちがその隠し部屋で白骨死体を見つけてしまった。その人物は誰なのか、なぜこの場所に隠れる必要があったのか、コナンが推理を話していると、コツリと音がする。銃口を向けてきたその人物は、この部屋を探していたようだった。そして謎を解いた彼らの後を付けてきたのだろう。白骨死体となった男性が作っていたという偽札をどうしても手に入れたいように、コナンがキック力増強シューズのつまみに手を掛けようとする、唐突に発砲してきた。

「動くな! 妙な真似をしたら殺すぞ!」

脅しをかける男に、輝夜は怯えのひとつも見せず涼しい顔で「あなた、こんなもののためにおもちやをずたずたにしたの?」と問いかけた。

「ああ……偽札の原版がようやく見つかると思つたのに、あの肩透かしだ。恨むんなら、妙な事考えて素直にプレゼントしなかつたやつを恨むんだな！」

「ナンセンスだわ」

輝夜は「動くな」と言われたことを聞いていなかったのか、否、聞いていても従う意思がなかつたのか、肩をすくめて両手の平を天井に向けた。

「相手にただ与えるだけなんて……そんなものは、ナンセンスが過ぎるのよ。そしてそれを理解しないあなたは、どうやら美学の欠片もないようね」

「減らず口を叩きやがる女だ。次口を開いたらぶつ殺すぞー」

「あら、そんなことできるのかしら？ ……そもそも、あなたの大事なその『おもちゃ』、どうやら壊れてるみたい。誰かにずたずたにされたおもちゃのように、『いつの間にか』暴力にさらされてしまったのかしら」

脅されているのに、輝夜は何も怖くなくとも言うようにくすくす笑いながら言葉を続けるので、男は引き金を引いた。——そのはずだった。

「そんな!?!、い、一体何が!?!」

銃口はあらぬ方向にねじ曲がっていた。しかし、先ほどコナンが動いたときには、正常に発砲できたはずだ。それがこの一瞬で、まるで尋常ならざる怪力の持ち主が、憤怒を以って力任せにひん曲げたかのように、あるいは固まり切っていない粘土細工に力を

加えた時のように、歪な形に姿を変えていた。

「怒ってるんじゃないかなあ、あのおじいさんも。ねえ、オクダトモアキさん？」

ニヤリと笑ったコナンがそう告げると、男はあからさまにうろたえながら「なぜオレの名前を!？」と叫ぶ。

「簡単さ。あのおじいさんに教えてもらったからね」

「は……ハハ、ガキが、脅かそうだったって……」

『……オクダトモアキ……』

ふいに、誰のものでもない低い声が部屋の中に響く。声はゆっくり、地を這うように、何度も何度も男の名を呼ぶ。やがて男は恐慌状態に陥ったように部屋から逃げようとして、足を滑らせ階下に転げ落ちた。

「……一応、目覚めたときに暴れないよう、縛っておきましょうか」

輝夜は博士にロープを持ってきてもらい、男をぐるぐると縛り上げた。それから博士が警察に通報し、事情を説明して男の身柄を引き渡すことで、二時間がつぶれてしまった。

「あなたたちといると、なんだか事件に巻き込まれるわね」

帰りの車内、疲れた様子で眠ったりあくびをしたりする子どもたちを見ながら、輝夜がそうつぶやく。博士は乾いた笑い声をあげたが、コナンはムツとした顔で「それを言

うなら、輝夜さんといると怪奇現象に巻き込まれるよな」を返した。彼は男が所持していた拳銃をまじまじと観察したが、どう見ても力任せに捻じ曲げられたような変形の仕方をしていった。しかし、それをできる者はそもそも滅多にいないだろうし、少なくともあの場にはいないはずだ。つまり、「怪奇現象」と表現せざるを得ない。探偵としては、この事件で唯一納得のいかないところだ。警察も不思議がついていたが、子どもたちがあまりに「タタリだよ！」と騒ぐので、深追いせずに犯人を連行していた。

「それって、どつちがマシなのかしらね」

涼しい顔で車窓から見える景色を眺めている輝夜がそう問うと、「……どつちも口クなもんじゃねえよなあ……」とコナンはうなだれそうになった。

「そういえば、どうだった？」

それからすぐに、コナンは話題を変えるべく再び顔を上げた。

「どうって、何が？」

「何がって、家だよ。博士の伯父さんの別荘、参考になった？」

「おお、わしとしてもそれは感想を聞きたいのう」

「そうね。いい家だったと思うけど……とりあえず、自分が住む家に隠し通路も隠し部屋もいらなないと思っただわ」

今度こそコナンは（ついでに博士も）がっかりとうなだれたのだった。

*おまけ

コナンが事件に巻き込まれたり自ら首を突っ込んだりしている間に、輝夜から「家が決まった」との連絡があつた。灰原以外の少年探偵団を引き連れて彼女の新居にお邪魔することになり、彼らが小五郎に鬱陶しそうに見られる中、探偵事務所で輝夜を待つていると、約束の時間ぴつたりと彼女は扉を開けた。

「あら、みんな揃つてるじゃない。毛利さん、こんにちは。待ち合わせ場所に使つてしまつて、悪いわね」

「いやいや、輝夜さんがいらつしやるなら大歓迎です。今日は輝夜さんのお宅に子どもらがお邪魔すると聞きましたが、よろしければアタシも……」

「申し訳ないけど、大人は呼ばないことにしたの。下手な誤解を与えないようにつて、事務所からの忠告もあつてね」

「あ……：：：：：：：：：：：：：：それは残念」

心底残念そうに肩を落とす小五郎を見て、輝夜はくすりと笑つた。

「あなたは見てて飽きないわね。まあ、また何かの機会があつたら子どもたちも一緒に食事でもどうかしら？ これからも、こうやって探偵事務所に遊びに来させてもらうこ

とがあるかもしれないし」

「おお！ それはいいですね！ ぜひお願いします!!」

力強く拳を突き上げて、喜びを全身で表現した小五郎に、輝夜は再びくすくす笑いながら「さ、行きましょ」と子どもたちへ外に出るように促した。

「輝夜お姉さんのお家、楽しみ！」

「きつと広くてきれいなところなんでしょうねえ」

「なあなあ、引つ越し祝いにうな重喰おうぜ！」

「あら、いいわよ。それなら夕食は鰻にしましょうか。親御さんに夕飯はいらぬことを伝えておいてちょうだい。帰るときに外で食べましょう」

子どもたちがはしゃぐ中、輝夜は探偵事務所の前に停めさせておいた車に乗り込む。そのままマネージャーに美味しい鰻屋を探しておいてほしいと頼んだ。人を使うことに慣れ切っている様子は、芸能人というよりは、やっぱり「お嬢様」という感じが強いなどコナンは感じた。

着いたのは、大きなマンションだった。家賃の支払いにほとんど問題のなくなった輝夜はどこでもいいと思っていたのだが、低層階は家宅侵入されやすいからダメ、もちろんオートロック付きのところではなくてはダメ、駐車場は登録車以外しか入れない場所ではなくてはダメ、など事務所の社長が厳しいジャッジを下して今回の家に決まったのであ

る。

「ちよつと出入りが面倒な家なのよね。本当はその辺の小ぢんまりしたアパートの一階で、好きなときに出掛けて好きなときに家でのんびりしたかったのに」

(これほど小ぢんまりしたアパートが似合わない人もなかなかいいねーよなあ)

輝夜の眩きに、コナンが内心呆れる。世間知らずなお金持ちのお嬢様で現在は大人気モデル。その美貌は日本だけではなく、早くも海外から熱視線を注がれるほどである。そんな輝夜が小ぢんまりしたアパートに住んでいるところはおろか、出入りしているところすらも、想像しただけで違和感しかなかった。

輝夜が面倒だと言うだけあって、駐車場に停めるのにも住人に配られている駐車券がなければならぬ。引越越し業者や宅配業者などの業者が停められるスペースには、マンションの管理会社と契約を結んでいる業者以外は、一度常駐している管理人に「いつ、どこで、誰に依頼されたのか」を明確にしてから仮の駐車券を受け取らなければならぬのだ。

また、それ以外の送迎についてはマンションの敷地内にロータリーがあり、こちらも一度管理人に「誰を迎えに来たのか」ということを伝え、管理人からそのような約束があるかを連絡して、確認を取らねば駐車できないことになっている。ちなみにこちら

のロータリーには、タクシーもよく停まっている。住民の来客用スペースもあるが、そこを利用するにも一度管理人を通す必要があり、それを嫌う者は管理会社から余分に駐車場と駐車券を買い取り、合鍵のように渡しているのだという。

輝夜は自分で車を所有していないため、各部屋に割り当てられた駐車場はマネージャー専用にしてあるが、引越したばかりにも拘らず、輝夜は既に「面倒だな」と頻繁に感じていた。

「ひろーいー」

「にしても、何もねえじゃんか。輝夜の姉ちゃん、こんなん生活できんのかよ」

マネージャーとは駐車場で別れ、エレベーターを使用して案内された輝夜の部屋に目を輝かせる歩美と、きよろきよろと部屋の中を見まわしながらその広さに反して物がほとんど置いていないことに驚きを示す元太。

「引越したばかりだし、なんだかんだ買い物に行くと目立つっちゃうから、とりあえずは最低限のものだけで過ごしているのよ。洋服なんかは、仕事で使った衣裳が気に入れば買い取れるし、困ってないわ」

「さすが芸能人ですねえ……」

光彦の感心と呆れの混じったような眩きに、輝夜は「面倒よね」と首をふるふる横に振った。

「そういえば、仕事の移動中、マネージャーにウノというカードゲームを教えてもらったの。あなたたち、やり方は知っている？」

「ウノってあのウノですよね？」

「輝夜お姉さん、もしかして今まで一回もやったことがなかったの？」

「うすうす感じてたけど……まさか、友達いなかったのか？」

子どもたちが明らかに憐憫の目を向けてきたことに、輝夜は少々動揺した。

「ま、まあ……たしかに今まで家の者以外と関わることはあまりなかったけど……あ！

一人いたわ！ 友達とは思っていないけど、たまに『遊ぶ』人はいたわよ！」

とはいえ、その「遊び」は殺し合いであるが。そうと知らない子どもたちは次々と輝夜の手を取る。歩美など、目に涙を浮かべてすらいた。

「ひとり……輝夜お姉さん。歩美たち、お姉さんの友達だからね？」

「そうですよ、これからは寂しくくないですよ」

「なんかあつたら、友達のオレたちに相談しろよな！」

子どもたちからの憐れみと同情の視線にいたたまれなくなり、輝夜はコナンの方を見た。彼は何を考えているのか、子どもたちよりさらに深い同情と、「自分たちは味方だから」といううれしくない優しい視線を向けていた。

子どもたちと白熱したカードゲームの時間を過ごし、時折休憩してお茶やお菓子を出して談笑していた。

「そういえば、輝夜お姉さんってどこの学校に通ってたの？ お家の人心配性だったなら、やっぱり女子校かなって思ったんだけど」

小学校の話に興味深く輝夜が聞いていたとき、ふいに歩美からそんな質問をされた。

「……？ 私、学校には通ったことがないわ」

輝夜の爆弾発言に、少年探偵団たちは目を丸くする。

「えっと、じゃあ小学校とか中学校にも通ったことがないってこと？」

「ええ。必要なことは家庭教師に教えてもらっていたし、『特殊な体質』だから、そういうところには通えないと思うの」

「特殊な体質？」

矢継ぎ早に質問を重ねるコナンに、聞いてはいけないうことを聞いてしまったかのようにハラハラした顔でそれを眺めている探偵団の子どもたち。輝夜にはそれがなんだか面白おかしく、かわいらしく映った。

「まあ、そうね。『怪我ができない』のよ、私」

それだけではなく、見た目が変わらないので同じところに通い、さらには卒業などできないだろう。人は異質を恐れる。長く一緒にいればいるほど、輝夜の異質は際立って

しまう。学校というものに興味はあつたが、輝夜がこの世界でさえ、楽しそうに笑い合う少女たちと同じ立場を選ばなかつたのは、単に手続きや生活が拘束されるのが面倒だからというだけでなく、いつになるか分からない「帰り」のそのときまでは通えないだろうなどと分かつていたからだった。

「それって今もだよね？ そのわりに、輝夜さんつて危険なことにも首を突っ込むタイプに見えるけど……」

「あら、言うじゃない」

その後、コナンは輝夜に罫に掛けられ続け、ウノでは一勝もすることができなかつた。その様子を見て、輝夜は楽しそうに笑っていた。

喧題：燃える紅、消えた黒

その日は見ず知らずの人の追悼をせねばならないというので、輝夜の機嫌はあまりよろしくなかった。なんでも、あまりに「カグヤ」がバーチャルだと言われているせいで、輝夜の所属事務所の社長が、ライバル会社の社長から嫌味を言われたそうだ。長年犬猿の仲の相手に対し、売り言葉に買い言葉で、「そんなに言うなら今度君も招待されている『酒巻監督を偲ぶ会』に『カグヤ』を連れて行く」と言ってしまったらしい。

断ろうと思った輝夜だったが、明確な「仕事」ではない分、勝手がやりやすいと判断した。要は輝夜が実在していることさえ相手方に伝わればいいわけで、愛想よくお喋りする必要などはなく、挨拶をしたら理由をつけて帰ればいいと考え、渋々了承したというわけだ。

マネージャーと社長と一緒に受付を済ませた輝夜は、早々にライバル会社の社長へと挨拶を済ませ、なんとか会話を続けようとする彼をのらりくらりとかわしてマネージャーを連れて部屋の隅に避難した。

「帰りたいわ。もう用事は済んだんだし、いいでしょう」

「いや……社長の顔を立てると思って、会が終わるまではいてください。酒巻監督は有

名な映画監督でしたから、今後の仕事に役に立つようなこともあるかもしれませんが」
「むう……」

輝夜は他の人に比べると、マナージャーにはちよつとだけ弱い。というのも、彼が初めて彼女の「難題」を乗り越えた者だからだ。過去には難題を解いた者と「結婚する」なんて条件だったこともあるが、彼の場合は「仕事の契約をした」だけ。しかも最初は「受ける」とも言っておらず「考える」とだけ返事をしたにもかかわらず、彼は輝夜の難題に見事応えてみせた。後から考えて、さすがの輝夜もあまりに釣り合っていないなど思っただのだ。そして何よりも、彼はそれに対して不満を漏らしたことがない。それもあって、「自分が認めた人間」であるマナージャーの言うことは、他人に比べればちよつとだけ聞いてしまう輝夜であった。

「退屈だわ。社長がはりきっちゃって、開始の時間さえまだ来ていないし。ねえ、しりとりしましょ。負けた方が相手の言うことを聞くのよ」

「それ、僕にとつてはいつものことなんですけど……」

「あら、それならお得意ね。『酒巻監督を偲ぶ会』の『い』からよ。『いいから早く帰りたい』」

「いや、そういう感じなんですか?」

「会話の方が難易度が上がって面白いでしょう?」

「うわあ、輝夜さんが普通のしりとりを提案するはずがなかった」

「たいした言い草ね、そうでもないけど、二人ならこっちの方が面白いわ」

「分かっちゃいたけど、輝夜さん、『わ』と『よ』ばかり語尾につけないでくださいよ」
「余計なこと言わなきゃいいのに。それならお言葉に甘えて、そうさせてもらうわ」

そんなこんなでしりとりに興じていた輝夜だが、ふと会場の扉が開いたのに目を向ける。何気なく見つめたその先に、見知った子どもたちがいたのを発見して、彼女は「あの子たち……」と呟いた。

「僕の勝ちですねー」

ここにこ笑ったマネージャーに、輝夜は弁明しようとして口を開いたが、自分から「会話で」と条件を半ば無理やりつけたのに、それは格好悪い。彼女は開いた口を再び閉じ、がくりとうなだれた。

「こんなに早く終わらせるつもりはなかったのに……文句を言ってやらなくちゃ気が済まないわ。あなた、ちよつとそこで待ってなさい」

つかつかと子どもたちに歩み寄った輝夜は、「ちよつと、あなたたち。なんでこんなところにいるのよ」と若干八つ当たり気味に声を掛ける。見知った子どもたちというのは、コナンと、灰原の二人である。彼らはびくりと肩を揺らし、輝夜へと恐る恐るといった様子で振り返った。灰原はコナンの背に隠れ、コナンはコナンで、「輝夜さんこそ、ど

うしてここに？」と困惑したように尋ねた。

「社長に連れてこられたのよ。ライバル会社の社長に挑発されて、私を連れてくるって言っちゃったらしくて。それで？ あなたたちはどうしたの？ 『偲ぶ会』に来る服装とは思えないけど？」

「詳しくは言えないんだけど……もしかしたら、ここで殺人が起こるかもしれないんだ。輝夜さん、あやしい人物がいないか、探すの手伝ってよ！」

小声でこそこそ話してきたコナンに、輝夜はふうんと口元に手を当てる。それから周りをざっと見回した。

「手伝ってあげてもいいわよ。でも、タダではいかないわね。なんとと言っても、あなたたちのせいで負けちゃったことだし」

「負けちゃった？」

「ええ、マネージャーとしりとり勝負をしたのよ。そうね……今度、キャンプへ行きましょうよ。前は博士がテントを忘れてできなかつたのでしょうか？ 次にやるときは、私も誘ってちょうだい」

実はあれから、こっそりキャンプとテントが如何なるものであるかを調べた輝夜だったが、わざわざ不便な生活をしたがる人間の心情というものに興味を持ち、やってみたかと思っていた。しかし、一人でやるとなると、面倒なことも全てやらなくてはならな

い。ならば周りを巻き込めば、楽しんで雰囲気だけ味わえるのでは、と思いついたのである。友達が小学生しかない彼女だが、その小学生たちとは、そもそもキャンプをしようとしていたのに博士がテントを忘れたことがきっかけで出会ったのだ。一緒に行くにはこれほど適した人材もそういるまい。なにより友達だし。

「……まあ、それくらいならいいけどよ。頼んだぜ、輝夜さん。何かあつたら電話くれ！」

そう言つて、こそこそと動く子どもたちの背中を見送りながら、輝夜はくすりと笑つた。彼女には、既に心当たりがあつたのだ。輝夜には「物騒な雰囲気」の人物は、巧妙に隠していてもよく分かる。月の民が嫌う穢れが、他の人間よりも濃いからだ。

「さて、何人かいるけど……どれかしらね？」

輝夜が協力的なものには、もちろん他にも理由があつた。灰原の怯え方である。輝夜と初めて会つたときよりもさらに、今回は確信を抱いた恐怖に見えた。例えば、輝夜に対して抱くものが漠然とした恐怖であるなら、今回の「何か」については、それがどんなものかよく分かっているがゆえの恐怖であるように思えたのである。

そして、この場にはそんな彼女だけでなく、彼女と何かしらの「秘密」を共有しているであろうコナンも一緒にいる。輝夜にとつて、この件は自分に課せられた（と信じて疑わない）「難題」を解く鍵となるのでは、と考えていた。

「輝夜さん、そろそろ始まりますよ。飲み物のおかわり、どうしますか？」

「ありがとう。でも、いらないわ」

マネージャーに声を掛けられ、ほどなくして辺りが暗くなる。正面のスライドと、司会席を照らす灯りや非常灯以外、フロア全体の照明が落とされていて視界は悪くなったが、それも普通の人間ならば、の話である。

輝夜にとつてはまったく不便のない状況だ。そんな中、ひとつ好奇心を刺激されるものがあつた。床が光っているのだ。おそらく、蛍光塗料か何かが塗られているのだろう。これならば、輝夜以外の夜目が利かない人間たちにも、「何か」の目印として使える。迷うことなくその場まで移動した彼女に、声を掛けてくる男がいた。

「お嬢さん、君もまさかこの場所を指定されたのかい？」

質問の意図は分かりかねたが、大半の人間が注目するスクリーン画面に全く興味を示した様子のないその男に、輝夜は悠然と微笑みながら「そういうあなたは？」と質問を返した。

「こんなお嬢さんが関係者には思えないが……」

いよいよ、輝夜には分かりかねる発言だ。推測できるのは、この場所を誰かに指定されたこの男は、そこへ現れる人物が誰かまでは知らされていなかったということくらいか。なぜ指定され、この場所で何が行われようとしていたのか輝夜には見当もつかない

が、コナンの言っていた殺人に関係があるような気がして、輝夜は「あら、じゃあどんな人ならいいの？」と会話を進めようとした。

そのときであった。パスツという音が聞こえ、何かと何かがぶつかって壊れた音がしたのだ。むろん、それが自身の真上にあるシャンデリアであることに気付かぬ輝夜ではない。彼女はその細身に見合わない力で男性の腕を引き、迫りくるシャンデリアの被害に遭わない場所へと避難した。

当然、非常事態に会場の明かりはすぐについた。落ちてきたシャンデリアの下敷きになった者はいなかったが、輝夜に腕を引かれた男性は顔色を悪くして、「わ、悪いが、気分が優れない。別室に案内してもらえないか」と、近くにいたホテルの従業員に声を掛けている。それは極めて自然な言葉だ。誰だつて、自分が被害者になり掛けたと思えば、動揺や恐怖で、人のいないところで落ち着きたいと思うだろう。

「呑口議員ですね？ 我々は警察です。別室で休みながら、状況を伺いたいのですが……。そちらのお嬢さんも」

帽子を被った、警察を名乗る恰幅の良い男性が手帳を見せながら二人に話し掛けてきた。その言葉に、被害者になりかけた男性はむしろホッとしたような顔をする。

「かまわないわよ。ただ……シャンデリアが落ちてくる前に、変な音がしたの。パスツという感じの、なんだか乾いた音。おかしいと思つて、周囲を見たら、シャンデリアが

落ちてきた。ねえ、警察の人は、このことを事故だと思おうのかしら？ それとも事件？

もし、少しでも『この場にいた誰か』が怪しいと思うなら……誰も外に出さない方が、いいんじゃないかしら？」

くすり。輝夜が笑みを浮かべると、数人が顔色を変えた。それは警戒であつたり、明らかな怒気であつたり、いろいろだ。輝夜のこの言葉に、殺人予告がされていたらしい？ 口議員のみ、別室で警察からの聞き取り調査に応じるといふ形になり、輝夜を含めたその他の人間はホテルの宴会場に拘束されたままとつた。

当然、近くにいた輝夜もどうしてあの場にいたのか、怪我はないかなどいろいろ聞かれる羽目となる。しかもそのせいで輝夜が「カグヤ」だと気付いた人々がざわつきだしてしまった。

彼女としては社長のこともコナンのことも「気軽に引き受けるんじゃないか」と若干後悔し始めていたが、「まあ、なるようにしかならないか」と開き直すこととする。そんな輝夜の目に、この大騒ぎの中、人混みをぬって会場を出たコナンと灰原が映つた。扉の外にはさつそくどこからか何かを聞きつけたらしいマスコミが押しかけている。

やれやれ、と息を吐いたところで、それまでうろたえたように振舞っていた人物の一人がパソコンを取り出し、画面を見て明らかにニヤリと顔を歪めたのが目に入ってきた。輝夜は気付かれないように、その画面をのぞき込む。

そこには、灰原哀という少女を、そのまま十歳程度成長させたような女性の写真が表示されていた。輝夜は、すぐに「あの子の正体はこの姿か」ということを理解する。それから、面倒そうなのに狙われているらしいな、とも。誰にも感知できない世界で、しかし止まっているわけではない時間の中、輝夜はコナンから来た着信を取った。

「もしもし?」

『輝夜さん? 今から言う人を目暮警部に伝えて、その人たちだけ会場に残すように言つて! 今回の容疑者なんだ』

「それはいいけど……あなたたち、先に帰った方がいいわよ」

『え?』

「あなたのお友達の十年後みたいな見た目をした女の子の写真を見てニヤニヤ笑っている人がいるから。その変質者に狙われるかもしれないわ。顔がよく似ているもの」

『ちなみに、それって誰?』

輝夜はその人物の名前を知らなかったが、身体的特徴を伝えると、コナンにはその人物が誰なのかが分かったらしい。ともかく、輝夜は容疑者の人数を絞るところか犯人が分かってしまったらしいコナンから聞いた話を、そのまま「目暮警部」という帽子を被った警察の人に伝えた。

とりあえず会場にいる人々を帰しつつ、? 口議員の近くにいた人物からは状況を話し

てもらいたい、という名目で別室に案内する形となったのだが、むろんそれは格好だけの話である。別室に案内したのは事を大きくしすぎないことと、はつきりした結果が出ていないのにマスコミに誤った情報を与えないためである。警察が事前に輝夜から聞かされていた犯人の身体検査をした結果、拳銃が出てきたことや、あとからコナンに渡された打ち砕かれたシャンデリアの鎖と、硝煙反応の出た紫色のハンカチから犯人の指紋が検出されたことなど、証拠も揃った。

そんな形で、事態はあつという間に収束した。

そして数日後、犯人が死んだという報道が出た。社会的地位のある人物だったため、全てを失ったことに耐えられなくなったのだろう、と報じられていたが、輝夜にはそう思えなかつた。

（あの目、私に絶対に復讐してやるって感じだったもの）

別室に案内されるとき、輝夜もちろん事情聴取のために警察に連れられて部屋を出た。その時に、犯人から感じた視線は、彼女のよく知っているものだった。ああいう目をした者は、そう簡単に自殺などしない。

輝夜は「ただでさえ世間知らずなんだから、少しは世の中のことを受信しろ」と事務所に言われて購入したテレビの画面を見ながら、くすりと笑う。

「あなたの場合は、自殺したくてもできなかつたんだったわね。……ねえ、妹紅？」

届くはずもない眩きが、殺風景な部屋の中に響き渡る。明日はコナンと灰原でも連れて、赤と白の花でも買いに行こうか、と輝夜は目を細めた。

付題：闇を解かず劇薬

受け取るのはいいけれど、打つのは中々慣れないメールを使ってコナンに「三人で花を買いに行かないか」と誘ったものの、どうにも灰原が風邪をこじらせてしまったらしい。どうせなら、と事務所に飾る花を頼まれたコナンと二人で買い物をし、美しい白と紅、そしてそれを彩る緑の花束を手に、輝夜はご満悦な表情だった。

「これで輝夜さんの部屋も少しは華やかになるね」

「そうね。うれしいわ」

「輝夜さんって、植物の世話とかできるの？ 一応、水を替えるタイミングとかはお店の人に聞いてたけど……」

「あら、それくらい大丈夫よ。まあ、でも、この花は枯れる前に燃やしてしまおうかしら」
にこにここと歩くだけで道行く人に断りもなく写真を撮られたり、それすらも忘れて魅入られたりしている輝夜の穏やかではない発言に、コナンは困惑した視線を向けた。

「あの……輝夜さん、たしかに捨てるなら燃えるゴミとか生ゴミ扱いだろうけど……いや、ていうか、燃やすって捨てるってことでいいんだよね？ もしそうでないなら、自宅でやるのは絶対にやめなよ。輝夜さんのマンションには火災報知器が付いてるし、花

ひとつで大騒ぎになっちゃうし、何より危険だし」

華やかで色とりどりの花束を抱えるようにして持つコナンが、矢継ぎ早にそう言う。彼女は己の手の中にある、紅白の——華やかではあるもののどこか寂しさを感じさせる花束を見やった。それは、凜としてどこか孤独に見える白、明るさよりはほの暗さを感じさせる深い紅。そしてそれらを取り囲む、落ち着いた色の緑。アクセントになっている若い葉が、妙に眩しい。花屋に指示して輝夜が作らせた花束だ。コナンが手にしている物の方が、使われている花の種類も色も多いから、賑やかに見えるだけと言われれば、それまでなのだが。

「——もちろん、冗談よ。ちょっと刺激を求めたくなっただけ」

「刺激はいいけど、輝夜さんは怪我できないんだろ。危険なことをする前に周りに相談してくれよな。あのマネージャーでも、オレでもいいから」

「優しいのね」

くすくすと笑いながら、ただ日常の営みとして道を歩いていただけの通行人を無自覚のまま呼吸困難に至らしめる絶世の美少女は、空いている手でコナンの頭をくしやりと撫でた。

「その心配性が高じて、以前私の部屋に来た時、妙な物を仕掛けてたのかしら。テレビで特集していた『盗聴器』みたいだなと思ってよく見ようとしたら、力加減を間違えて、

うっかり壊してしまったのだけど」

ビクリ、と頭に手を置かれたままのコナンが体を震わせる。それから視線を泳がせ、頬に人差し指を当てながら、ひきつった顔を無理やり笑顔に変えた。

「えーとお、ボク、子どもだからよく分かんない」

「ふふ。聞かれて困ることも別にないからいいけれど。楽しくなかったでしょう?」

つん、とからかうように少年の側頭部をつついた輝夜は、本当に気にしていない様子で穏やかに言う。その態度が逆に罪悪感を煽るもので、少年の胸はズキズキと痛んだ。この人気モデルに対して警戒心を抱く友人のために情報を集めてやろうとしただけなのだが、結果として輝夜のこととは何も分からなかった。リビングに仕掛けた盗聴器は、生活音と輝夜がテレビに突っ込む声、それからおそらくマネージャーと仕事の話でもしているであろう声くらいしか拾わなかったのだ。本当に友達の一人も招いたこともないようで、幼馴染、サッカー友達、両親の知り合い、現在では少年探偵団など、常に周囲が賑わっているタイプのコナンにとっては衝撃的だった。

誰もを虜にする美貌を持ちながら、少年探偵団以外に友達がいらない――。

輝夜の孤独を突き付けられているようでつらい気持ちになり、盗聴器を仕掛けて少し経ったのち、「まあ、今日はいいか……」とチエックも疎かになった。いつの間にか壊れてしまった盗聴器について「まさかバレたのか?」と考えるより前に、「虚しい結果だつ

たな」という思いだけが心を支配した程である。

そのため、深く考えずに、何かにぶつかって自然と壊れてしまったんだろうと思うことにしていた。あの盗聴器は博士お手製で、即時受信とGPS、録音機能はあるものの、他の発明品に比べてシンプルな構造かつ耐久性もそこまで追求していない。コナン自身は彼女にさほど警戒心を抱いていなかったため、友人のためというのが半分、興味本位が半分で始めたため、何かの拍子で壊れてしまっても別にいいや、くらいの気持ちで仕掛けたのである。

「……スミマセンデシタ。いつから気付いていたの？」

「あなたが仕掛けた時から気付いていたわよ。何かよく分からなかったし、そのままにしておいたんだけど、何気なく見ていた番組で防犯特集をやっていたから、ピンときたの」

弟のいたずらを優しく咎める姉のような視線を向けてくる輝夜に、コナンは頬を赤くしながらも、ちよつと悔しくてそつぽを向いた。

「あのさ。仕掛けたオレが言うのはおかしいけど、輝夜さんはもうちよつと危機意識持った方がいいと思うよ。これからはあやしい機器があつたら放置しちゃダメだからな」

「ご忠告どうもありがとう。私には用途が分からない物が多いし、そのときは相談させ

てもらおうかしら」

「ああ、任せてくれよ。これでも探偵だし、その他のことも困ったことがあつたら解決するぜ」

「それは頼もしいわね。そういえば、花を飾る花瓶を買うのを忘れていたわ。一旦探偵事務所にお花を預けて、そのまま買物に付き合ってくれる？」

コナンは「しかたがないな」という顔をして、探偵事務所に戻つたら小五郎に怨念じみた嫉妬を浴びせられるらうなと思ひながら「もちろん。友達だから」と返事をした。

*

灰原の体調が回復したので、少し話がしたいとコナンに呼び出された輝夜は、毛利探偵事務所へ向かった。「人に聞かれないから」と案内されて、初めて阿笠邸に足を踏み入れた輝夜は、以前よりも警戒を和らげた様子の子に出迎えられた。博士は下でちよつとした発明品の修理をしているらしく、キリがいついたらすぐに行くとのことである。

「……………」の前は、どうもありがとう」

「気まずそうに感謝を述べる少女に対して、輝夜は「大したことはしてないわ」と謙遜ではなく、心からそう言った。なにせ、彼女がしたのは「避けられるシャンデリアを避けて」、「たまたま目撃した怪しい人物のことをコナンに教え」、「そこから導きだされた？」口議員暗殺未遂の犯人を警察に告げた」、ただそれだけなのだ。

「これからあなたにも危険が及ぶかもしれないから、私たちの事情を知っておいてもらいたいと思って。あれから変わりはない？」

幾分か暗い顔になった灰原に、輝夜はふるふると首を振った。

「特に。まあ、あれからバーチャルの存在じゃなかったってことで、世間に騒がれているみたいね。モデル以外の仕事のオフアアが殺到してらしくて、断らなくちゃいけない事務所の方は大変そうだけど、私には関係のないことだわ」

一人でさばききれる量ではないらしく、マネージャーだけでなく、上の者もてんこ舞いのようだ。もはや、輝夜がえり好みをしなくても断らないことにはどうにもならない量のオフアアが来ているらしい。とはいえ、仕事をさばくのは輝夜の仕事ではない。ゆえに、時間はたくさんあるため、こうして気軽に出歩いている。

「あとは、命の恩人だとかなんとか言っつて、あの？口っつていう人が鬱陶しいわね。犯人の人が亡くなったから、収賄を認めたあとはずつと黙秘を続けてるらしいんだけど、『あなた私の幸運の女神だ』っつていう内容の手紙が、毎日事務所にファンレターとして届く

のよ。さすがにやんなっちゃうわ。読みもしてないけど、無駄な仕事を増やされたファンレター分別係の人たちが気の毒なのよ」

「あら、人気者は大変なのね。それじゃ、……あなたが命を狙われるようなことは、今のところないわけね？」

剣呑な質問に、「ええ。シェリーちゃん」と輝夜はにっこり微笑みながら返した。灰原は表情を険しくしたまま、「……話は長くなるわ。どうぞ、座って」とソファへ座るよう促し、自分は「コーヒーを淹れてくるわ」と奥の方へ消えてしまった。

「輝夜さんは、ピスコ——あの犯人のことだけど——そのパソコンの画面を見たんだよな？」

「ええ。ちらつとね。あの人も迂闊よね。あんな大勢いる場所で、機密情報だと思われるものを開いていたんだから」

「そこには何が書かれてたんだ？ それに、オレと電話してたとき、周りに誰かいなかったか？ 会話を聞かれていた可能性は……」

「それはないわ」

コナンが思わず鼻白むほどぼつさりと言い切った輝夜は、正面に座った少年を見つめた。

「前にも言ったでしょう？ 私、気付かれないようにするのは、得意なの。ちよつとしたコ

ツがあつてね。あなたとの会話は聞かれていない。自信をもって言えるわ。それと、その前の質問については、あの子を大きくしたような女の子の写真と、その個人情報掲載していたけれど、それ以外のことは特になかったはずよ」

「じゃあ、さつき灰原を『シェリー』って言ったのは……」

「その画面の顔写真の下に書いてあつたの。アルファベットで、sherryってね。あのとときのあの子の怯えようと、二人から感じた切迫した雰囲気。それでピンと来たのよね、『もしかしたら灰原哀という子どもは、画面に映るシェリーという人物と同じ人間かもしれない』って。否定しなかつたことは、当たり前だつたんじゃないかと思つてゐるわ。そしてついでに」

コナンは息を呑む。普段は大らかで優しい霧囲気の彼女だが、その美貌は真剣味を帯びると、呼吸を忘れるほど凄絶だ。その場の全てを支配されたような感覚の中、コナンには自らの心音だけがやけに大きく聞こえた。

「コナン君。あなたも『江戸川コナン』ではない、誰かだつたんじゃないかしら？」
「……」

コナンは息を呑み、そんな自分にも、そうさせた輝夜にも衝撃を受けた。嘘をつくことも、誤魔化すことも許さないという空気。絶対的な支配者が持つ霧囲気が、世間知らずでのらりくらりと適当なことばかり言うお嬢様である蓬萊山輝夜から発せられてい

るのだ。

（本当に、輝夜さんなのか……!?!）

頭では理解している。こんな絶世の美女、そこかしこに簡単にいていいものではない。けれど、常日頃の輝夜と、目の前の少女はかけ離れすぎていて、脳の処理が追いつかないのだ。

「待たせたのう。輝夜君、いらつしやい」

「あら、博士。お邪魔しているわ」

その雰囲気はしかし、発明品の修理をしていた博士がやってきたことによつて霧散した。

「コナン君と灰原さんから聞いているかもしれないけれど、次のキャンプは私も参加するから、日にちが分かったら教えてね。仕事を入れないようにしなくちゃいけないもの」

「ああ、聞いておるよ。輝夜君も来るなら、レンタカーを借りようかのう」

「それなら、私もお金を出すわ。これでも稼いでいるのよ」

「今や日本一の人気者じゃからのう。わしもついこの前、輝夜君のポスターが付録になつていて盆栽雑誌を買つてしまったわい」

「あー。それ、ニュースになつてたよな」

あまりにのんびりとした会話に拍子抜けしたコナンは、二人の会話に口を挟んだ。それから、自分がニュースで見たことをつらつらを述べていく。

「輝夜さんって仕事めちやくちや選んでるって早くも有名なくせに、なぜか盆栽雑誌で盆栽の名人から盆栽を楽しむ極意みたいなのを聞くんという特集には出たんだよな」

「二人暮らしをする前の趣味は盆栽だったって、マネージャーに言ったら、そういう仕事を取ってきたの。楽しかったわ」

「ハハ……盆栽雑誌なのに輝夜さんの写真集みたいになっちゃって、しかも付録にはポスターまでついちゃったから、普段から購読してる人が買えなくて、輝夜さんファンが買い占めちゃったっていうのもニュースになってたぜ」

コナンはテレビで流れてきた「メインの盆栽だって品評会に出るような傑作であるはずなのに、顔面が完全に盆栽に勝ってしまった」「むしろ、盆栽との相乗効果でカグヤがより美しく見える」「盆栽と映るカグヤ様マジかぐや姫」等々の言葉を思い出して、乾いた笑いを浮かべた。ニュースで放映された街の声やネットの声では、人気モデルが盆栽雑誌に出ることへの賛否や、あらゆることが謎の「カグヤ」の趣味が盆栽であることが発覚したことへの反応など様々な声が聞かれ、「カグヤ」がきっかけで盆栽を始めたという若者も少なくないそうだと。誇張ではなく、「カグヤ」は今日日本で最も注目されている人物の一人だろう。

その「ミステリアスな人気モデル」と「お友達」であるコナンとしては、探偵事務所にさつそくポスターを飾る小五郎の姿を見て、なんとも言えない気持ちになった。そして今、裏事情を知ってさらに何とも言えない気持ちになった。盆栽と言つても、その値段はピンからキリまでだ。しかし、コナンはこのお嬢様なら数百万単位の物を所有していてもおかしくない、となんとなく思つていた。金銭感覚が全然育つていないことは家探しの件でよく知つている。家事その他の一切を家の者にやらせていたというから、どうせ育てるのは家の者にやらせて、自分は愛でるだけだったんだろう、と邪推が止まらない。

コーヒーを淹れて戻つてきた灰原が、和気あいあいと話す博士と輝夜、二人を若干の呆れを孕んだ視線で見つめるコナンを見てから、「今から真剣な話をしようと思つていたんだけど、いいかしら？」とため息を吐いた。ロールケーキも一緒に出されたが、博士の分だけやたらと小さい。「哀君……」と悲しそうな目で見つめてくる博士を無視して、灰原は輝夜に向かって頭を下げた。

「まずは、輝夜さん。私、あなたのことを疑つていたわ。ごめんさい」
輝夜はきよんとした顔で、首を傾げる。

「顔を上げてちょうだい」

そう言われて、あらゆることが絵になる彼女を、灰原は緊張した面持ちのまま見つめ

た。輝夜は、灰原の淹れたコーヒーの香りを楽しんだ後、「謝るようなことではないわ」とまるで気にしていないように言った。それから一口味を確かめるように飲んで、カップをソーサーに置く。

「あなた、コーヒーを淹れるのが上手ね。うちのマネージャー、全然上手くないのに、インスタントは嫌だつて言つて淹れたがるのよ。まあ、飲んであげるんだけど」

膝の上で、しとやかに手を重ねた。ただ、それだけの仕草。女性が写真を撮るときにするような上品な仕草を、いとも自然に行つた彼女は、寛容に微笑んだ。

「私、山の中で、突然あなたたちに声を掛けたのよね。しかも、あのときは住所不定無職だったわ。警戒心のなかつた人たちの方が危ういと思うから、あなたの反応は正常だと思ふけれど」

警戒心のなかつた側である博士を見てくすくす笑つた彼女は、歌うように滑らかに「それで、あなたは何を疑つていたの?」と言葉を続けた。

「それは……その……」

言い淀み、膝の上で拳をぎゅつと握つた灰原の肩に、博士がポンと優しく手を置く。安心させるように微笑んだ保護者を見て、少女は大きく息を吐いた。

「あなたのこと——組織の一員なんじゃないかって。あなたは『黒』を身にまといはなかつたけど、表向きの姿なら、ありえることだし……。でも私、あなたから組織のに

おいは感じなくって、分からなくって……」

俯いた少女を見て、輝夜は肩をすくめた。

「悪いけど、私にはあなたの言っていることが全然分からないわ。それで、私に危害が及ぶかもしれないって言ったのは、どうして？」

「——輝夜さんが、やつらの計画を潰しちまったからだ。まあ、それはオレが頼んだからなんだけど……」

静観していたコナンが、バツが悪そうな顔をしながらも、確信を持った様子で言う。輝夜は膝にのせていた両手の指を組んで、くすりと笑った。それは、先ほど博士を見て笑ったのとは違う、どこか妖艶な笑みだ。絡み合う彼女の細い指すら、どこかなまめかしい。

「あの？口っていう人、暗殺される予定だったんですものね。それを計画していた人たち、彼を殺させなかったばかりか、表向き犯人まで暴いてしまったことになっている私を恨むのは、想像に難くないわ。つまり、殺人を計画してたのが、その『組織』で、あなたたちはそれと敵対している。あなたたちの『お手伝い』をしたことで、うっかり目立ってしまった私が、その『組織』とやたらに害される危険があると、あなたたちはそういう危惧をしているということではないのね？」

「輝夜さんって、頭の回転速いよな」

「そう？　これだけ情報があれば、誰でも辿り着く答えだと思っわよ。次の質問をさせてもらうけど、私に知っていてほしいあなたたちの事情って何かしら」

指を組むのをやめて、輝夜はロールケーキに舌鼓を打っていた。それから、まるで盆栽の話の続きでもしているような気安さで、さらりと質問を口にする。コナンと灰原が顔を見合わせ、どちらからともなく頷いた。

「まずは、組織のことについて話をさせてほしいんだ。相手のことを知らないと、輝夜さん自身、警戒のしようがないだろ？」

「ええ、聞っわ」

「あなたが目を付けられてしまった組織は、いわゆる反社会的組織で、主に重要人物の暗殺、違法薬やプログラムソフトの金銭取引、銃火器の売買、——それから、薬の開発なんかを行っているわ。構成員の恰好は黒ずくめであることが特徴よ」

輝夜の返事を受けて、灰原が覚悟を決めたように口を開く。少女が見つめた先、長い睫毛の奥にある深い赤茶の瞳からは、蓬萊山輝夜という人物の思考を全く読み取れない。芸術品のようにそこに在り、無垢な赤子のように微笑み、悠久の時を生きる賢者のように、静かに灰原の言葉を待っている。

「私は、もともとは組織に所属していたの。事情があつて組織を裏切つて——今はお尋ね者つてわけ。組織から逃れるために自分の開発した薬を飲んで、あなたが目にした

『シエリー』から今日の前にいる『灰原哀』になって、組織の目を掻い潜って過ごしているのよ。……それも、いつまでもつか分からないけれど」

輝夜はさして驚いていないどころか、むしろうれしそうに目を細めた。「あなたも薬を作るのね」と、彼女の話聞いて、まず出てきた感想に、少年少女は顔を見合わせた。なるほど、実家が医者と薬剤師をやっているらしいから、親近感を抱いたのかもしれない。二人はどんな顔をしていいのか分からず、危機感がまるでなさそうに見える輝夜へと再び視線を戻した。

「じゃあ、あなたたちの体は、その薬の効果で小さくなっているということ？」

そして、何でもないことのように、本来だったら突拍子もないはずのことを聞いてくる。コナンは思わず、輝夜が漫画喫茶に泊まっていたことを聞いたときと同様、心配そうな表情になった。

「輝夜さん。子どもの妄想とか、遊びだとか、そういう風には思わねーのか？」

「もしそうだとしたら、？ 口議員の殺人未遂、『シエリー』という人物が彼女とそっくりだったこと、彼女を見て画像を確認した犯人のこと、そしてその犯人がほどなくして亡くなったこと、それらの諸々が、全て無関係だったか、別の何かしらのつながりがあるってことになるわよね。だったら、あなたたちの言葉をそのまま受け取った方が早くないかしら？ どちらにせよ、批判も質問も、後からだってできるわ」

コナンはため息を吐いた。それから、全然減っていなかったロールケーキにフォークを突き刺す。危機感がなさそうで、得た情報を整理する力は高い。心配をすれば不要とばかりに、いまいち根拠の不明な自信たっぷりな笑みを返される。「世間知らずのお嬢様」であること以外、蓬萊山輝夜という人物を中々とらえられないコナンであったが、細かいことにとらわれず、話を進めようとする姿勢はありがたいと感じていた。

「敵わねーなあ、輝夜さんには。そうだよ。その通り、オレは組織の取引を目撃して、灰原の開発した薬を飲まされて体が縮じまった。まあ、組織には『体が縮む薬』じゃなくて『毒薬』って感じで認識されてるっぼくて、今のところオレも灰原も組織の目を掻い潜ってるっぼいけど」

羨ましそうな博士の視線を無視しながら、コナンはやわらかな生地のロールケーキをどんどん口に運んでいく。もはや緊張を孕んだ空気はどこへやら、組織の話をしているはずなのに、もし音声をミュートにして誰かがその光景を見たとしても、雑談をしていると疑わない雰囲気が出来上がっていた。

「じゃあ、あなたたちの目的は組織から逃げること？ それとも戦うこと？」

「決まってるア」

輝夜の質問に、コナンは口をとがらせた。

「戦うんだ。やつらを油断させるために、ただの小学生のふりをして情報を集めて、やつ

らを壊滅させてやるんだ。それで、ぜってー元の姿に戻ってやる！」

フオークを置いて拳を握りながら決意を固めるコナンに対し、輝夜は「戻りたいの？」と不思議そうに首を傾げる。

「つたりめーだ！ 輝夜さんは縮んだことがないから分かんねーかもしれねーけど、小學生つてすっげー不便なんだぜ！ それに、本当なら年下のやつらと一緒に勉強してるふりしたり、遊んだり……今でこそ慣れたけど、最初は情けねーつたらなかつたぜ」

「私の目には、あなたはいつも、とても楽しそうに見えるけれど」

輝夜のその言葉は、特別嫌味でもなく、嘲ったようなものでもなく、いつもの穏やかな彼女から、自然と出てきたものであるうと思わされた。しかし、縮んだ当初のことを思い出してヒートアップしかけていたコナンは、頭に冷や水を浴びせられたような感覚になり、鼻白む。

「それは——まあ、案外悪くねーなって思うときもあるけど……でも、オレは戻りたいんだ。それで……アイツに……」

「アイツ？」

「毛利探偵事務所にいる、可愛らしい幼馴染のことよ」

まるでその質問を想定していたように素早く解説を入れてくれた灰原のおかげで「あの子ね」と輝夜の疑問は即座に解決した。しかし、その親切な解説に対して、解説され

た方は顔を真つ赤にしている。

「バツ……灰原！ てめー何言つてんだ！」

「なんであなたの言つた代名詞の補足をしただけで怒られなくちゃならないのかしら。言つて照れるようなことは、最初から胸にしまつておくことね」

至極正論である。そう言われてしまえば、コナンに反論する余地も気力もない。

「ともかく、コナン君は好きな人がいるから——えーと、蘭ちゃん、よね。その子のために戻りたい、ということでもいいかしら」

「……………オレたちは組織を潰す。そんで、元の体に戻る。この二つをやらなくちゃならないんだ。危険なことに巻き込んだあとでこんなこと言うの卑怯かもしれねーけど、輝夜さんにも、協力してもらいたいんだ」

輝夜は顎に手を当て、少し目を伏せた。長い睫毛が、彼女の白い頬に影を落とす。

「組織について何かできることがあるかは分からないけれど……」
体を元に戻すことは、簡単かもしれないわ。

浮かんだ言葉を、輝夜は口に出す前に呑み込んだ。それはいわゆる、「たられば」の話だし、「難題」が「難題」ではなくなってしまう。先に歪な永遠についての「難題」さえ解いてしまえば、幻想郷に戻る事ができれば、輝夜はあらゆる「薬」を勞せず手に入れることができるだろう。

「大いに結構よ。『私』が受けるから、きつと難題になるのだわ」

脳裏に浮かんだのは、もうずっとずっと、誰よりも永く一緒にいる大切な「家族」。その表現したら、彼女は否定するかもしれないけれど、あまりに一緒にいすぎて、他のどの表現もしつくりこないような気がする。そんな彼女がこの場にいれば、全てはあまりに簡単だったことだろう。なにせ彼女は天才だから。

「——輝夜さんの言う『難題』って、何？」

少年の問いを聞いて、輝夜は笑った。

「そうね——」

人宝：ザ・ベストスパイス

キャンプ当日、輝夜はうれしそうに「飯盒で作ったカレーは格別だつて聞いたから、私、とつても楽しみにしていたのよ」と少年探偵団に話し掛けていた。

「楽しみですねえ！ 自分で作ったカレーは、やっぱり一味も二味も違いますよ！」

「ご飯のおこげが美味しいのよねえ」

「何杯おかわりしたつて足りなく感じるぞ！」

先輩風を吹かせながら口々にカレーの魅力を語る子どもたちに、にこにこ相槌を打つ輝夜。話を聞きながらも、車のそばに置いてある荷物をひよいひよいとトランク及び後部座席に積んでいくその様子に、光彦が目丸くして感心したように呟いた。

「輝夜さんつて、見た目によらず力持ちなんですね」

「子どものあなたたちはともかく、これくらい大人なら普通に持てると思うわよ」

輝夜は大人の余裕を漂わせながら、手早く積み置いた荷物を一瞥して、すぐに光彦に向けて微笑んだ。ぽつと顔を赤らめた少年は、「そ、そうなんです」ともじもじしてしまつた。その様子を見ていた元太や歩美にからかわれ、慌てて弁明している姿が可愛らしい。

「おお、手伝おうと思つてたんじゃが、もう終わつているとは。すまんのう」
「輝夜さんが全部やつてくれたのよ。もう、博士つたら支度が遅いんだから」
「吉田さんの言う通りよ。昨日楽しみにすぎて、朝寝坊するなんて……まったく、どつちが子どもなのかしら」

呆れた様子の女子二人に、博士は困つたように笑いながら頭をかいた。

「ま、まあ……出発するとするかの。座席は決めてあるかね？」

「おう！ さつきくじ引きで決めといたぜ。トイレ休憩のときに席替えするんだ。えーと、最初は光彦が助手席だな！」

レンタルしたファミリーカーに乗り込みながら、阿笠邸を出発する。基本的には小学生たちが輝夜に可愛らしい質問をして、輝夜がそれに答える、という形で会話が進んだ。なんでも、国語の宿題で、「身近な人に質問しよう！」というものが出たらしい。

「みんなお父さんとかお母さんに質問するって言つてたけど、歩美たち、少年探偵団だから、家族以外の人にしようってみんなで決めたの！ 先生は同じ質問じゃなければ、同じ人に質問してもいいって言つてたし！」

ちなみに、質問は簡単なものばかりで、「好きな色は何ですか」など、輝夜に質問したくて仕方がない芸能関係者および輝夜のファンからすれば、「もつと突つ込んだ質問して！」と怒られかねない内容ばかりである。

「好きな動物はなんですか？」

「うさぎよ。うちで飼っていたから、よく遊んでいたわ」

「輝夜お姉さん、うさぎ飼ってたんだ！ 名前はなんて言うの？」

「たくさんいたけど……そうね、特にお気に入りには、イナバと呼んでいたわ」

「呼んでいたってことは、あだ名なの？ もっと長い名前なの？」

「ええ。鈴仙・優曇華院・イナバよ」

ペットの名前を教えた瞬間、小学生たちから口々に「変な名前」「かわいそう」「センスねーな」と非難を浴びた輝夜だったが、変な名前になったのは自分のせいではないと思っているの、特に弁明はなかった。

わあわあど宿題そっちのけで雑談になってきた小学生の会話に耳を傾ける輝夜は、普段誰よりも質問を重ねてくる少年が大人しいことに気が付いた。

「コナン君は、もう誰かに宿題付き合ってもらったの？」

「あ……オレと灰原は、宿題出された時点でもう博士に質問してあったんだよ」

「ええ。そのせいで抜け駆けだって騒がれて、『博士よりもすごい人に質問しよう』ってことで、あなたに白羽の矢が立ったってわけ。宿題の提出は週明けだったから」

なるほど、と頷いた輝夜は、再び子どもたちの会話に耳を傾けることにした。少年探偵団の中心的存在であるはずのコナンは、やはり思い悩んだような顔で、あまり会話に

は加わっていなかった。

*

キャンプ場に到着し、博士の指示でテントを組み立てる。完成したテントを見て、博士は満足そうにうんうんと頷き、「わしと哀君はかまどを作るから、君らはその辺で薪を拾ってきてくれ」と次の指示を出した。子どもたちと一緒に「はい」と良い子の返事をした輝夜は、心配性のコナンに言われて、アウトドア用の丈夫な生地でできたパーカーを羽織る。

「何か悩みでもあるの？」

手分けして薪を探すことになり、子どもたちの姿が遠くなつてから、輝夜はコナンに質問した。

「悩みってほどでも……」

「だけど、浮かない顔をしているわ。もしかして、本当はキャンプが嫌だった？ カレー嫌い？」

ふるふると頭を振ったコナンは、言いくそくに片目をつぶってガシガシと頭をかくと、「実は……」と浮かない顔の理由を説明し始めた。

「つまり、蘭ちゃんに、コナン君の正体——ええと、何だったかしら。何とか君なんじゃないかってバレているんじゃないかって思っているのね。不安なら本人に聞けばいいじゃない。心配事のせいでキャンプを心から楽しめないなんて、もったいないわ」

薪を集めながら、聞いてきたわりには興味がなさそうに話をまとめている輝夜に、コナンはしらーつとした視線を向ける。

「輝夜さんは、怪我ができない体質のくせにキャンプを心から楽しめているようで何よりだよ」

その発言に、輝夜は珍しく眉をひそめた。

「コナン君。どんな体質であれ、キャンプだけでなく、その他いろんなことを楽しんではいけない理由にはならないわ」

「それは——そうだけど。オレの悩みより、キャンプのことばつか言うから……」

コナンの拗ねたような物言いを無視して、輝夜は「これくらいでいいかしら」と集めた薪を誇らしげにコナンへと見せつける。

「……十分なんじゃねーか？　もう戻ろうぜ」

輝夜の方を見ないようにして、コナンは大きな声で少年探偵団たちを呼んだ。元太と歩美は近場にいたらしく、すぐに駆け寄ってきたが、光彦がいない。

「光彦ー？」

「光彦くーんー！」

みんなで声を上げると、光彦から「みんなー！」という返事があつた。声が弾んでいて、怪我や事故ではなさそうだと各々ほっとしたように顔を見合わせて、声のした方へと向かった。

光彦は鍾乳洞を見つけたらしく、その入り口にある、暗号めいた言葉が彫られた石碑を指差して「中にお宝があるかもしれないませんよ！」と興奮気味だ。

「でも、『入るなキケン！』って書いてあるよ」

立て看板を見つけた歩美に、コナンも同意する。

「輝夜さんに怪我させらんねーだろ。何かあつたとして、お前ら責任取れんのか？」

「私は大丈夫だけど……」

そう言った輝夜は、意味深に鍾乳洞の内部を見やる。

（たしかに、『キケン』かもしれないわね）

自分にとってではなく、彼らにとつて。心の声は聞こえずとも、何かしらの雰囲気を感じ取つたらしいコナンが、むっとしたように「じゃあ、行こうぜ」と前言を翻した。

「どうせ輝夜さん自身が大丈夫つて言うなら、止める理由はねーよ。オレも暗号は気になつてたところだし。輝夜さんは、『楽しいキャンプ』の『刺激的な思い出』が欲しいんだろ？」

コナン自身も、心の中では自分が無茶苦茶なことを言っていると理解していた。自分らしくない、とも。それでも、なんの苦勞もなく過ごしてきたに違いない。「世間知らずのお嬢様」が、自分の悩みに共感を示すどころか、関心さえさほど向けていないような態度と、ついでに言えば高校生探偵・工藤新一に関して興味すら抱かず名前だつて覚えていないことに、とても——自分でもガキだなと思うくらい、とても腹が立っていたのだ。

二人の間に流れる微妙な空気を感じ取ったらしい子どもたちは、気まずそうに顔を合わせた。

「おい……コナンのやつ、なんで怒ってるんだよ」

「知りませんよお……コナン君つてば、案外子どもっぽいとこありますからねえ」

「ここは私たちが二人を仲直りさせてあげるしかないよ。頑張ろ、二人とも！」

ここそこそと話合う子どもたちの声が全て聞こえてしまっている輝夜は、その眩しいほどに純粋な姿に、少しだけ気を引き締めた。というのも、コナンが一人ですんずん進んで行つてしまっているこの鍾乳洞には、穢れが満ちている。月の民が嫌う穢れとは、単純な「死」ではない。「生きて死ぬこと」なのである。別の言い方をすれば、「永遠のはく奪」、「闘争の歴史」。

つまり、「生きた結果として生命を奪われること」と「闘争の結果他者の生命を奪うこ

と」の両方——端的に言えば、戦争や殺人が起きている場所、起きて間もない場所は穢れが濃くなるのである。この場合、最中か事後かはどちらでもいいとして、殺人が絡んだ「キケン」な場所であることは間違いないだろう。

輝夜は穢れを嫌わない。自身も、月から迎えに来た使者を皆殺しにした過去があるし、それ以前に「蓬莱の薬」を服用した罪人でもある。もちろん、罪人と呼ばれようが何だろうが、好奇心から永遠の命を手にしたことを後悔していない。

輝夜は穢れを嫌わない。穢れに染まった彼女は、しかし「永遠」である。そして人間でない彼女は、大抵のことを対処できる能力を有している。

けれど、子どもたちは違う。暴力にさらされれば、病魔に冒されれば、体に合わない物を摂取すれば——簡単な理由で生命を奪われてしまう。彼らは輝夜の「友達」で、キャンプに誘ったのは輝夜で、だから、あまりに脆弱な彼らのことを守ってやらねばならなかった。

「コナン、一人で先行くなよ！」

「来るな！ 元太！ みんな!!」

コナンの鋭い声が飛んできて、輝夜は即座に須臾の世界に潜り込み、地面を蹴った。死体を運んでいる三人組の男たち。子どもたちに気が付いたらしく、視線はコナンと元太をとらえていた。

「あら、ちようどいいわね」

輝夜は微笑み、鍾乳洞もまた、永遠ではないことに気が付いた。それは小さな綻び。本来なら、長い時を掛けて、徐々にはく奪される永遠。

「えい」

いくつかの場所を、ほんのちよつぴり強く殴打した輝夜は、すぐにコナンを抱え、元太を背負った。それから、須臾の世界からするりと抜ける。いつの間にか抱られていた二人は驚いていたが、質問をしている場合ではない。何せ、殺人犯が追いかけてきているのだ。元太とコナンの二人を抱えているにも関わらず、彼女は光彦と歩美の二人まで、軽い動作で抱えた。背中に元太、右腕にコナン、左腕に歩美と光彦の二人である。全く荷物になっていないというような俊足を發揮して出入口まで戻ってきた彼女は、子どもたちを下ろして、にこりと笑った。

「は、早く博士のところに戻らなくっちゃ……!」

「そうだ、輝夜さん! まだ油断はできねえ」

「大丈夫よ」

輝夜は特別大きな声で言ったわけではなかったが、その言葉はしつかりと少年探偵団に聞こえた。不安がる子どもたちを慰めるような、優しさゆえの「大丈夫」ではないことは、子どもたちにもなんとなく伝わった。

「? ……なんででしょうか、この音」

「ここは『キケン』な鍾乳洞よ? 長居しなくてよかったわね」

直後、大きな音が彼らの鼓膜を揺らした。それから地面が大きく揺れ、少年探偵団の目の前で、鍾乳洞が落盤したのである。

「大変だわ。早く救急車と警察を呼ばなくっちゃ。あなたたち、怪我はない?」

子どもたちは絶句していたが、落盤事故に巻き込まれた男たちの中には重傷を負った者もいたが、幸いなことに全員一命は取り留めたと、後程連絡があつた。どうにも男たちは銀行強盗犯だったようだ。一人は顔を見られてしまったため、足手まといと判断されて殺されてしまったらしく、その死体を処分しようとしているところを、コナンと元太に目撃されてしまったというわけだ。

ただ、輝夜としては不幸なことが起きてしまった。強盗犯のあれこれや落盤事故があつたせいで、警察に事情を説明したり、周囲の地盤への影響などを調べる必要が出たりして、キャンプが中止になってしまったのだ。

「……私の飯盒カレーが」

「まあ、キャンプにはまた行けばよからう。みんなに怪我がなくて、本当によかったわい」

帰りの車の中で、助手席に座る輝夜が珍しくうじうじしていると、ちょうど真後ろの

席に座っていたコナンが、彼女の肩をたたいた。

「キャンプは今度リベンジするにしても、カレーくらいならすぐできるさ。明日の昼、景色の良いところで飯盒カレーのパーティーしようぜ！」

「おおつ、コナンもたまにはいいこと言うじゃんか！」

「さんせーい！」

「それなら、博士の家に戻ったら、景色の良いところをみんなで調べましょう！」

「そうね。ついでに、次のキャンプの日程も決めておく？」

子どもたちの言葉を聞いて、輝夜がうれしそうにはにかむ。

「マネージャーに連絡しなくっちゃ。どうせなら、パーティーに呼ぼうかしら？」

落盤させなければキャンプを続行できたかもしれない、という思いがあつた輝夜は「回りにくいことしないで、全員殴っておけばよかった」と後悔していたのだが、結果としてカレーパーティーとキャンプという二つの楽しみができたため、「まあ結果良ければ全て良しよね」と開き直すこととした。

翌日、マネージャーだけでなく、蘭や小五郎、蘭の友人である鈴木園子という女子高生も呼んで、飯盒カレーのパーティーが行われた。場所は、鈴木家の所有する観光グループが管理する複合施設で、都心から日帰りで行き来することができ、小高いところ

にあるため、空気も美味しく周囲にアスレチックやゴルフ場、テニスコート、バーベキュー場、キャンプ場、温泉、屋内プールなど様々な楽しみ方ができる。会員制かつ完全予約制の高級施設であるが、園子の友人ならば、ということでも突然かつ大人数でも利用が可能となったのだ。

「それにしても、あんたらがああ『カグヤ』と知り合いだったとはねえ」

しげしげと、輝夜と少年探偵団を順繰りに見つめる園子の発言に、歩美が両こぶしを顎の下で握って、ぶんぶんと頭を振った。人によつてはファイティングポーズかピーカブースタイルとなるその恰好も、彼女がやると小動物めいていて可愛らしい。

「知り合いじゃないもん！ 友達だもん！ ね、輝夜お姉さん！」

「ええ、そうね。友達よ」

「はあー……顔面がここまで美しいと、心まで美しいってか……」

呆然と、吐息のように呟いた園子に、輝夜はくすくすと笑う。

「面白いことを言うのね。そういえば、お礼をまだ言っていないかったわ。この場所、あなたのおかげで使えるんですってね。飯盒カレー、とても楽しみにしていたから、うれしいわ。どうもありがとう」

「……やばい、蘭。私、女だけど動悸が止まらない」

「安心して、園子。私だって初めて会ったときはそうだったもの。今はちよつとだけ慣

れたけど」

「写真だって本当に人間か疑うくらいきれいだけど、動いてる方が断然魅力的だし、もう声まで完璧じゃない。なんなの？ 同じ人類とは思えないわ」

胸を押さえながら蘭に寄り掛かる園子を見て、輝夜がさらに笑っていると、マネージャーがこつそり耳打ちをしてきた。

「輝夜さん。前にしりとりで僕が勝ったときのこと、覚えてますか？」

「ええ、もちろんよ。なかなか『お願い』を言つてこないんだもの。あなたの方こそ忘れたのかと思つていたわ。それがどうしたの？」

「今、確信しました。やつぱり写真だけなんてもつたいたない。輝夜さんは動いて喋つている姿がより魅力的なんです。芸術品のように美しいのに『生きている』！ 僕はその姿を発信したいんです！」

「あなたの情熱には驚かされるわ」

拳を握りしめたマネージャーは、「だから、まずはCM出てください」ときびきびとした動作で深く腰を折った。

「えっ！ 輝夜さん、CM出るの!? 何のCM!？」

聞こえてきた単語だけを拾った園子が、興奮したように詰め寄ってくる。そして「近づきすぎたわ」と言いながら、再び胸を押さええて俯いた。忙しない少女だなあ、と輝夜

は挙動不審とも言える園子の言動を珍獣でも見るような目で見ていた。

『まずは』って言葉がちよつと気になるけど、いいわよ。そういう約束だものね。なんのCM? 歌って踊るとかは嫌よ」

「明日いいの見繕っておきます」

「それなら、ぜひ鈴木財閥も検討しておいてください! 所有してる会社いっぱいあるんで、選り取り見取りですよ! なんなら輝夜さんのために商品の企画をしたいくらいだわ!! 参考までに、輝夜さんってどんな物に興味があるの!?!」

突然の質問と園子のハイテンションにたじろぎながら、輝夜は唇に指を当てながら「んー」と悩む。至近距離でその姿を目の当たりにした園子は、ついに胸を押さえたまま蹲ってしまった。

「そうねえ。珍しい物、美しい物は好きよ。気になる展示があれば、こっさり美術館や博物館に行くこともあるわ。四季折々の景色とか、自然を愛でるのもいいわね。それから、化粧をされるのも嫌いじゃないわ。慣れ親しんだ自分の顔にも新たな発見があつて面白いと思うようになったの」

言葉を区切り、輝夜がコナンと灰原をちらりと見る。それからマネージャーを見て、再び質問者の園子に視線を戻した。

「あとは——『難題』と、それを解こう、乗り越えようとする人たちの姿かしら」

輝夜の雰囲気が変わる。それは見た者を狂わせる妖しい月のような、挑発的な眼差し、声色、表情。静寂の支配する、誰もが眠った夜半の中で、見てはいけない秘密を覗き見てしまったときのような感覚を与えるものだった。

「ふふ。でも、企画をしてくれるなら楽しそうだわ。ねえ、あなたもそう思うでしょう？」

夜半が、昼前のバーベキュー場に戻る。快晴の空の下、さわやかに吹き抜ける風のように、輝夜は全てを一夜の夢だったと思わせるほがらかな笑みを浮かべた。同意を求められたマネージャーは、目を擦って、再び輝夜を見る。

「あら、目に何か入った？」

「い、いえ……。僕も、輝夜さんが楽しんでできる仕事なら、それで」

目の錯覚だったのか、とその場にいた誰もが安堵したような息を吐いた。そうだ。「カグヤ」は盆栽好きのミスティアスなモデルであっても、蓬萊山輝夜は「世間知らずなお嬢様」、「子どもと仲良くしてくれる心優しいお姉さん」、「『難題』好きの変わり者」。そうに違いなかった。

「ねえ。私、早くカレーを作りたいわ。パーティーなんだから、たくさん作るのよね？」
「じゃあ、くじ引きで係を決めましょう！ じゃじゃん！ 出発前に皆さんに名前を書いてもらったあみだくじがあります！」

輝夜に言われて、光彦がズボンのポケットからメモ用紙を取り出す。くじの結果、灰原、元太、博士が野菜の皮むき係、歩美、マネージャー、園子が野菜を切る係、コナンと輝夜がカレーの調理、光彦、小五郎、蘭がご飯係となった。

「コナン、喧嘩すんなよ!」

「そうよ、コナン君。昨日は何怒ってたか知らないけど、助けてもらったお礼、まだ言っていないでしょ? ちゃんと言わなきゃだめなんだからね!」

「こういうことは、後になればなるほど言いにくくなるんですよ!」

「ここそと少年探偵団に耳打ちされたコナンは、すぐに察した。

(あみだくじ、改竄済みかよ……)

コナンとしては、昨日の騒動で、輝夜に対する怒りはとっくに忘れてしまっていた。輝夜自身も、失礼なことを言ったコナンに対して、気にした素振りもなくいつも通り振舞ってくれている。しかし、改めて言われると、子どもたちを止めるべき立場のコナンが輝夜への反発心から浅慮を起こし、結果的に全員を危険に巻き込んでしまった。怪我人は犯人たちだけだったものの、一歩間違えば、全員落盤事故の犠牲になっていた可能性だつてある。バタバタしてしまつて言いそびれていた謝罪と感謝を、きちんと伝えた方がいいだろう。

それぞれの係に分かれ、下処理が終わるまでは暇な輝夜とコナンはその場に取り残さ

れた。

「あのさ……輝夜さん。昨日は、助けてくれてありがとな。それに、オレ、失礼なこと言っちゃまって……ごめん。鍾乳洞に入ったのも、オレがガキだったからだ。本来ならオレがあいつらを止める立場なのに……。その結果、輝夜さんだけじゃなく、みんなを危険に巻き込んで、すげー反省した」

「もしかして、そんなこと気にしてたの?」

輝夜は、きよとんとした後、膝を曲げて、コナンと視線の高さを合わせた。

「すっかり忘れていたわ。それに、鍾乳洞のことだって、きつとあなたが入らなくても、あの子たちは入ったと思うもの。それに、止めるのはあなたの役割じゃなくて、あの場では年長者である私の役割だわ。そして私は止めなかった。結果として危険はあったかもしれないけれど、全員怪我もないし、今こうしてカレーパーティーができています。次のキャンプの予定も立てられた。それでいいじゃない」

コナンは「オレ……」と、少し顔を赤くしながら俯く。

「輝夜さんに、共感してほしかったんだ。オレの悩みを聞いて、自分だったらどうする、とか、もし輝夜さんが蘭の立場だったら、とか、そういうことが聞きたかった。輝夜さんは優しいから、そうしてくれるだろうって、勝手に思ってたんだ。それで、あんまりあつさりした対応だったもんだから、勝手に裏切られた気になって……」

輝夜はコナンの両脇に手を挿し入れ、小さな子に「高い高い」をするように、腕を伸ばした。突然の浮遊感に目を丸くしたコナンが、自分を見上げる美貌の少女を見て、「えっ？ えっ？」と言葉にならない声を上げる。

「よく分からないけど、やってみたくなったの。きつとこれが母性というものね」
優しくコナンを下ろした輝夜は、一人で納得したようにうんうんと頷いていた。

「コナン君。残念だけど、私は君の悩みに共感できないわ。私は、いつだつて自分のしたように動いているだけだから。その行動が他人にどう思われようと、ただ自分に正直にしているだけ。あなたは私を『優しい』と表現したけれど、私にあなたのような思いやりはないわ。だから、私からあなたの悩みに対して何か言えることといえば、『優しくない』言葉だけよ」

視線を奪われる。蓬莱山輝夜という女性は、いつだつて美しい。凜とした白、暗く深い紅。落ち着いた緑に、眩しいほどきらめく若葉。華やかながらも寂しい印象を与えた花束。以前一緒に買いに行ったそれが、今日の前にいる、決してぶれない唯一無二の美と重なって見えた。

「——自分が正しいと思う選択をしなさい。誰かのためとか、誰かにどう思われるとか、『誰か』を主語にして逃げることをやめなさい」

細く小さな肩に手を置いて、輝夜は微笑んだ。力強い言葉を、どこか淡々と、どこま

でも美しくやわらかな表情で口にする。

「輝夜さん。——ありがとう」

「お礼を言われるようなことではないわ。でも、受け取っておくわね」

謝罪と感謝が一段落つき、コナンは両腕を後ろに回して後頭部のあたりで指を組んだ。

「輝夜さんってば本当に世間知らずだよなあ。『高校生探偵の工藤新一』って言ったら、新聞にも載ってたし、テレビでも取り上げられたことがあるくらいなんだぜ。そりゃ、今の輝夜さんの知名度と比べたら、はるかに劣るけど……」

「聞かせてちょうだい。あなたのお話が聞きたいわ」

それから、他愛もない話をした。コナンがシャーロック・ホームズ好きであること。蘭とは幼稚園からの幼馴染であること。サツカーが得意なこと。今まで解決してきた事件の数々。宿敵の怪盗のこと。ミステリー作家の父と、元女優の母のこと。

領き、質問し、続きを促す輝夜があまりに聞き上手なおかげで、野菜を切り終えた灰原、元太、博士の三人に話し掛けられるまで、コナンの話は止まることがなかった。

複題：穢れを纏う隠者

蘭と園子に誘われた帝丹高校の学園祭に行くため、輝夜は毛利探偵事務所に向かっていた。帝丹高校の場所を知らないと言った彼女の言葉を聞いていた小五郎が、一緒に行くことを熱心に誘ったのだ。探偵事務所に着くと、マスクをしているコナンに、「オメーは家で寝てろー！」と小五郎が頭をぐりぐりと撫で（と表現するには、いささか力が強いかもしれないが）、説得している最中だった。

「あら、風邪でも引いてしまったの？」

「か、輝夜しゃん！」

事務所の扉を後ろ手に閉めながら輝夜が声を掛けると、小五郎が全身から喜びのオーラめいたものを放出して歓迎した。だらしない表情から一変、きりりとした表情になる。

「そうなんです。小僧のやつ、風邪を引いちまって……。うつしてはいけないので、ここは我々二人で向かいましょう」

「私なら心配いらないわ。それで……。コナン君は行くつもりなの？」

「うん。約束してるから」

普段の彼よりは、端的でばつさりした口調に、輝夜は少しだけ目を細めた。それは、喉が痛いから話すのが億劫で、というような感じではない。輝夜は月人であるため、普通の人間より身体能力はもちろん、五感も優れている。口調など「コナン」の様子だけでなく、その声を聞いてはつきりとした確信を抱いていた。

(なるほど。哀ちゃんが彼に変装しているのね。では、本物の彼はどこへ……?)

輝夜の耳には、しっかりと「変声機で変換された江戸川コナンの声」と「変換される前の灰原哀の声」が届いていた。加えて、輝夜は超常的な力を持つ者として、第六感ともいべきものも非常に発達している。表面は誤魔化せていても、声に始まり、におい、気配など、誤魔化せないことは多い。

とはいえ、小五郎もいるこの場で追及するようなことでもないだろう。輝夜は「じゃあ、行きましょう。つらくなったら言うのよ」とだけ言って、「コナン」の手を取った。小五郎が羨ましそうな視線を少年に向け、それから少しだけ困惑したような視線を輝夜へ向けた。輝夜は、その様子にくすりと笑う。

口ではなんだかんだ言っている、鬱陶しそうな素振りを見せてはいても、小五郎は「風邪を引いている子どもは家で休ませるべきで、無理をさせない方が良い」と考え、心配しているのだろう。一方、輝夜は体調を崩している子どもを心配する様子もさほどなく、外へ連れ出す始末だ。非常識と謗られても仕方のない行動だが、彼は眉を八の字に

したまま、事務所の戸締りをしてから、小走りで二人に追いついた。

「輝夜さん、本当にそいつを連れて行くつもりですか？」

「ええ。だって、行くって約束しているんでしょ？」

「うん」

「ほら——きつと、『大切な』約束なのだよ」

そう言われ、小五郎は反論の言葉が出なかつた。それは美人に弱いから、というよりは、輝夜の口調があまりにもきつぱりとしたもので、有無を言わせない雰囲気があつたからだ。

「ボク、劇だけ見たら帰るよ」

枯れた声で「コナン」がそう言うと、小五郎は頭をかいて「しゃーねえなあ」と呟く。それから、車道側に回つて、二人の隣に並んで歩き始めたのだつた。

帝丹高校に到着した三人は、生徒たちの手作りと思わしき門をくぐり、体育館へ向かう。学生たちの熱気がすごいな、と見慣れない「お祭り」をきよろきよろと眺めながら輝夜が歩いていると、「ねえ、あれってもしかして……」「絶対そうだよ！」と、周囲がざわつき始めた。

「あの！『カグヤ』さんですよね！まさか本物に会えるなんて……！サインもらつていいですか？写真も！」

勇気を出したらしい一人の女子生徒に話し掛けられると、それに便乗するように人だかりができてしまった。三人はどうにもこうにも動けなくなり、顔を見合わせる。三人を取り囲んだ者たちの多くは、許可など取らずそのまま写真を撮っており、他人への迷惑を顧みない態度に対して、小五郎は怒鳴りつけようと口を開いた。

しかし、彼の行動に待ったを掛けた人物がいた。他でもない、輝夜である。彼女は小五郎の唇に人差し指を押し当てると、身動きの取りにくい人混みの中で周囲を見渡したのち、口を開いた。

「残念ながら、サインは事務所に禁止されているの。それに、今日の主役は私ではなくあなたたちだわ。私は学園祭を楽しみたいから、ここを写真撮影の会場にするつもりはないの。ごめんなさいね。あなたたちも何かやるんでしょう？ 頑張つてね」

声を張り上げたわけでもなく、音量としては友人に話し掛ける程度のものであっただろう。しかし、彼女の言葉は滲み渡る水のように、静かに周囲へと届いたようだ。間近で彼女から激励の言葉と完璧な笑顔を向けてもらった学生は、男女問わず頬を赤らめた。ある者は熱に浮かされたようにぼうつとし、ある者はごくりと喉を鳴らし、ある者は自らの動悸の激しさを校内に大型バイクでも侵入したのではと勘違いして周囲を見回し、ある者は呼吸困難に陥っていた。

その反応を見てくすくす笑った輝夜は、ひらり、と手を振ってから「コナン」の手を

握った。それから、輝夜の指が唇に触れたことで思考停止していた小五郎へと、微笑む。「私、周囲が落ち着くまでコナン君と時間を潰しているわ。毛利さんは先に行つていてちようだいね」

ふ、と輝夜が屈んで混沌状態の人混みの中に自ら体を滑り込ませる。あまりの人口密度に「コナン」がぐらりとしたのもつかの間——「コナン」以外の誰にも、彼女を認識できなくなつてしまったかのように、あれだけ目立っていた人気モデルは、誰にも声を掛けられるどころか、視線すら向けられなくなつてしまった。

「どういうこと？ 輝夜姉ちゃん」

気付かれないように人混みを脱出して、人気の少ない校舎裏まで来ると、「コナン」が訝し気に輝夜を見上げた。

「何が起こつたの?」

「あなたこそ、無理にコナン君のふりをしなくてもいいわよ。ここなら誰にも『気付かれない』もの」

「……なんとなく、あなたには気付かれると思つたのよね。なぜ分かつたの?」

「私、耳が良いのよね。何かの機械で変えているんでしょ? それに、前に博士の伯父さんの別荘を見せてもらったときに、声を自由に変えられる発明品を紹介してもらつたわ」

くすくすと笑いながら言う輝夜に、灰原はため息を吐いた。

「ダイヤルの調整は完璧だと思つたんだけど。まあいいわ。それで？ どこにいようと目立たないわけがない『カグヤ』は、どうやってあれだけ大勢の人たちに気付かれないようにしたの？　まるで、誰も私たちのことが見えていないみたいだったわ」

「見えてないんじゃないわ。だって、私たちはあそこにおいて、移動をして、ここまで来たんだもの。誰も『気が付かなかつた』だけ。何かに気を取られていると、『一瞬』でいろいろなことを見逃してしまうものではないか？　私はその『一瞬』を移動するのが上手いだけよ」

「随分な理屈だわ」

灰原が肩をすくめると、輝夜はぱちりと片目を瞑った。何もかもが絵になる。そして、あらゆることを有耶無耶にできてしまう。それが蓬萊山輝夜という人物なのだ、灰原は世の不条理を感じた。

「でも、それじゃあこの雰囲気を楽しめないわよね。早く体育館へ行きましょう」

どこかうきうきとした様子で灰原の腕を掴んだ輝夜は、長い髪を弾ませながら軽やかに歩き出したのだった。

*

体育館のステージに着くと、蘭と園子は髪の毛をポニーテールに結った女の子と、その子に寄り添うように立つ色黒の男の子と話をしていた。輝夜と「コナン」に気が付いた園子の手を振ると、それにつられたように、輝夜にとつては見知らぬ二人が振り返る。「なんや、工藤。風邪引いてもうたんか?」

「工藤?」

輝夜が首を傾げると、色黒の男の子が慌てて両手をぶんぶんと振り始めた。

「ちや、ちやうねん! せやから……すぐ体調崩して、くどい風邪やなあつちゅーことや! なあ、コ……コナン君?」

少年のあまりに下手くそな弁明に、輝夜がくすくすと笑う。「コナン」はごほんとかを咳して、返事の代わりとした。輝夜としては、「あなたはコナン君の正体を知っているの?」という疑問から首を傾げてしまっただけなのだが、この少年はコナンと工藤新一のつながりを勘付かせないように必死なのだろう。それにしても随分迂闊であるが。

「コナン君、来てくれたのね。無理しなくてもよかったのに……」

「……約束だから」

「まあ、しんどくなったらすぐ保健室行くのよ、ガキンチョ。それよりちやんと輝夜さん連れてきて偉いじゃない!」

園子のうれしそうな言葉に、ポニーテールの少女と色黒の少年が同時に輝夜へと視線を向ける。現在輝夜は、「コナン」から分けてもらった使い捨てマスクをして、簡単に髪をまとめた状態だ。マスクを取った彼女は、につこりと笑って蘭の手を両手で包んだ。

「か、輝夜さん……?」

「ちよお待ちい。かぐやつて……『カグヤ』……?」

「アホかい平次。こんな絶世の美女、この世の中に『カグヤ』以外いてたまるかい。……つて、えつ、『カグヤ』? ……『カグヤ』あー!」

頬を赤らめて困惑顔の蘭に、思わず指を差して慄く色黒の少年。そんな少年の反応を笑ったのち、改めて輝夜本人に目を向けて、叫び出すポニーテールの少女。

園子と「コナン」は珍しく、顔を見合わせた。

「輝夜さん。蘭姉ちゃん、困ってるよ」

「はいはい、その二人も落ち着いて。気持ちには分かるけどね。今の声で周りがざわつき始めたから。一旦場所変えましょうか」

呆然とする蘭と、注目されているはずなのにそれに関しては全く意に介した様子のない輝夜の腕を掴んで、園子が歩き出す。それについて行こうとして、「コナン」が思い出したように振り返りながら「行かないの?」とパニック状態の二人組へと話し掛けた。

案内されたのは、蘭たちのクラスに割り当てられた控室だった。本番前なので他の生

徒は体育館で機材や大道具のチェックをしたり、着替えに行ったりして、利用者はいない。「時間がないから、手短に」と園子に前置きされ、輝夜はとりあえず、知らない二人を無視して蘭に要件だけを告げた。

「劇の間、蘭ちゃんは制服を着ないでしょう？ 私に貸してもらえないかしら。この恰好だと、とても目立ってしまって学園祭を楽しむどころではなくなってしまうような。だから、この学校の生徒に変装すれば、少しは目立たなくなるかと思って」

輝夜以外の全員が言葉に窮した。全員が理解していた。輝夜が目立っているのは恰好のせいではない。本日の彼女はクリーム色のブラウスに、赤いロングスカートを身にまとっており、それらのアイテムは特段奇抜なものではなく、むしろデザイン的にはシンプルな物なのである。

「……だめかしら？」

「好きに使ってください」

蘭は考えるよりも先に答えていた。口に出した後、「まあいいか」と思い直して、時間もないし、ということと一緒に更衣室へ向かう提案をする。

「ヤバっ！ 私もそろそろ行かなくちゃ！ それじゃ、みんな楽しみにしててねー！」

輝夜と蘭が去り、園子も去った後で、二人組は同時に口を開いた。

「なんで『カグヤ』が……におんねん」

それに対して「コナン」は「説明したいのは山々だけど、ボクは喉が痛いから小五郎のおじさんに聞いて」と説明を丸投げした。それから、クールな「少年」はすたすたと体育館へ向かう。あの人だかりの中置いてけぼりにされてしまった不幸な迷探偵は、観客席にいるだろうか。そんなことをちらりと考えながら、「コナン」はマスクの中であくびをかみ殺した。

*

蘭の制服を借りた輝夜は、更衣室の姿見で何度も自分の姿を確認していた。普段彼女がはいているロングスカートとは違い、撮影のときにしかはかないような短いスカートで行動すると思うと、少し恥ずかしい気もする。しかし、「女子高生」の間ではこれが普通なのだろう、と無理やり納得することとした。一応「カグヤ」とは印象を変えるために、普段髪の毛を自分で結うことがない輝夜は、時間がない蘭に頼み、手早く髪の毛を左右に分けて二本のおさげにしてもらった。それから、今回の劇では使用しないが、演劇部から厚意で貸し出された小道具セットの中にあつた眼鏡を掛け、マスクをすることで、顔をできる限り隠す。

「完璧な『女子高生』だわ！」

にっこり。マスクで隠れた口元を綻ばせた輝夜は更衣室を出て、ふとあやしい恰好をした人物と出くわす。口元のみを露出させた兜のような仮面を被り、体をマントで覆ったその人物を見て、輝夜はためらいなく声を掛けた。

「あなた、『工藤君』よね？」

「えっ」

あやしい人物改め、工藤新一は小さく声をあげた。露出された口元が、見事に引き攣つていて、大抵の感情を仮面で隠せるはずであるのに、全く隠せていない。

「そうでしょう？　そういう『雰囲気』がするもの」

周囲に人がいないことを分かっていた輝夜は、遠慮なく言葉を続ける。突然の質問に固まっていた新一は、輝夜の顔をまじまじと見たのち、安心したように息を吐いた。

「あー、びっくりした。輝夜さんか。一瞬誰か分からなかったぜ。ところで、オレが『黒衣の騎士』って言うのは、周りのやつらには内緒にしておいてくれよ」

「どうして？」

「今日は校外からも見に来てる人がいるから、どこでやつらに『工藤新一が生きてる』って漏れちまうか分からねーだろ？　蘭にだけ、オレと『コナン』が同じ場にいるって分かればいいんだ」

「ふうん。分かったわ。それより、あとでちゃんと説明してほしいところね。お芝居、楽

しみにしているわ。頑張つて」

人の気配が近づいてきたのを感じ取った輝夜は話を切り上げ、ひらりと手を振る。新
一は手を振り返して、なるべく怪しまれないように堂々と歩き出した。

既に人でいっぱいになっている体育館の観客席側に向かうと、輝夜の姿に気が付いた
「コナン」が手を上げて居場所を知らせてくれた。

「真ん中の席なのね」

「か、輝夜しゃんのミニスカート……！ おっほん！ この毛利小五郎、輝夜さんと娘の
蘭のため、一番良い席を確保しておきました」

「コナン」と小五郎の間に用意された空席に腰掛けた輝夜が呟くと、表情を引き締めよ
うとはしているものの、鼻の下がのびきつている小五郎が真面目ぶった態度でそう言っ
た。

「それはどうもありがとう。ところで、コナン君はこの場所で見える？」
「うん。前の席と間隔があいてるし、ちょうど隙間から見えるよ」

「それならよかつたわ」と微笑んだ輝夜に、会話に入り込む隙間を窺っていたらしい色
黒の少年とポニーテールの少女が、「コナン」の隣からひよっこりと顔を覗かせる。輝夜
は彼らに対して首を傾げて要件を促すと、彼らは周囲への配慮か、こそこそとした声で
話し掛けてきた。

「オレ、服部平次いいいます。工藤の親友で、まあ、そのボウズとも知り合いや」

「あたし、遠山和葉いいます！ 蘭ちゃんの友達で、平次とは幼馴染です。あの、握手してもらっていいですか!？」

「私は蓬莱山輝夜よ。よろしくね」

平次と「コナン」の二人が間にいるにも関わらず身を乗り出した和葉は、輝夜と握手した右手を感動したように眺めていた。

「アタシ……あの『カグヤ』と握手してもうた……」

「なにアホ面しとんねん、和葉。もう始まるで」

平次の軽口にムツとしたように頬をふくらませた和葉だったが、ちようど開始のアナウンスが流れ始めたため、仕方なく口をつぐんだ。

劇は滞りなく進んだ。輝夜は劇の内容というよりは、一生懸命練習したのだろうなと分かる、真剣な表情の蘭や、他の生徒たちの姿を観察することを楽しんでいたが、ちなみに、演劇に野次を飛ばす小五郎と和葉に「コナン」と平次は心底迷惑そうな顔をしていたが、輝夜としてはありがたい存在だった。というのも、彼らが目立ちに目立ってくれるおかげで、観客も演者も二人を見るか、逆に視界に入れないようにするか、という行動をとったため、その傍らにいる輝夜には全く視線を注がれないのだ。

(マスクも便利ね。今度マネージャーに買って置いてもらおうことしましょう)

輝夜がそんなことを考えていると、蘭と新一が互いの顔を近づけ始めて、キスシーンになろうとしていた。小五郎が悲鳴をあげながらステージへ向かおうとするのを、平次と和葉が止めている。そんな中、他人のふりを決め込む「コナン」は輝夜がぴくりと動いたのを感じ、彼女の方へ顔を向けた。輝夜はほんの短い間だけ不愉快そうに眉を寄せ、それから「コナン」の視線に気が付いたのか、にこりと微笑みを浮かべた。

直後、会場に悲鳴が響き渡る。小五郎の物とは比べ物にならない、尋常ならざるその悲鳴は、周囲の視線を集めただけでなく、ステージ上の演者の動きを止めるほどのものだった。不安そうな表情の蘭を庇うように立った新一は、悲鳴の上がった方向を見やる。そこには床に倒れ込む男性と、立ち上がって彼を心配そうに見つめる人々がいた。

すぐに動き出したのは平次と小五郎だった。倒れた男性の元へ駆け寄り、周囲に救急車の手配やAEDの用意など指示を飛ばし、二人で意識や呼吸の有無を確認する。

「こりや、救急車は必要ないわな」

「ああ……死んでる……」

ざわざわと騒がしかった会場に、沈黙が落ちた。平次と小五郎が顔を見合わせたのと同時に、近くにいた女性が「そんなっ……」と顔を伏せる。輝夜は以前見たテレビで、「死亡の判断は医師がするもの」という発言を聞いたことを思い出していたが、(まあ誰が見ても死んでいるものね)と、即座に警察を呼んだ二人に対し、特に疑問を抱かなかった。

教師たちが騒ぎを聞きつけ、生徒を教室へ戻そうと声を張り上げ始める。突然起こった悲劇を受け止められず、泣き出してしまった生徒もおり、体育館の中は混乱を極めた。「病気なのか他殺なのかも分からへん。近くにおったやつや、舞台の上から会場を観察できたやつらは残しといった方がええやろ」

そんな中、平次が冷静に教師へ意見すると、てんやわんやの状況にイライラした様子の教師が「なんだね、君は！」と眉を寄せ、怒鳴り声をあげた。

「オレは西の高校生探偵、服部平次や」

平次がそう名乗ると、教師は鼻白んだ様子を見せた。自分の学校にも高校生探偵がおり、数々の事件を解決してきたため、「探偵」という言葉には弱いのだ。

「私も同様の意見ですな」

そこに、名探偵として有名な毛利小五郎の鶴の一声である。教師は意見を聞き入れ、関係のないと思われる生徒を体育館の外へ誘導し、騒ぎを収めるために再び奔走を始めた。

輝夜は、冷やかな目で犯人を見つめる。輝夜には、犯人がなぜ被害者を殺害したのか、そんなことはどうでもよかったが、その舞台を学園祭——しかも、演劇の上演中にしたということには、少しばかり憤りを感じていた。

輝夜は学校に通ったことがない。当然である。彼女は月の民で、蓬萊人で、幻想郷の

住人だ。永遠亭の主である彼女には必要のないことだし、そもそも、外とのつながりを絶つて数百年を過ごししていたから、「学校」というものの自体をよく知らない。当然、学園祭なるものがあるということも、蘭と園子に聞いて初めて知った。

(時と場を考えなさいよね)

体育館から去る生徒たちや、不安そうに立っている生徒たちを横目に、輝夜はパイプ椅子に座ったまま、動こうともしない。ちらり、と彼女はステージ上に立つ新一へ視線を送った。「劇が台無しにされちゃったわね」という憤りへの同意を求め、普段の輝夜と比べると剣呑な表情である。輝夜の視線に気が付いたら新しい新一は、「任せろ」と口形のみを動かして返事をした。輝夜は、答えが噛み合っていないことに「絶対分かっていないでしょう」と、むくれた表情をしてステージを睨みつけた。

幼題：凍れる灼熱の鎖

人が少なくなつた——とは言つても、明らかに関係者ではなく、野次馬として残つた生徒も少なからずいる体育館の中で、警察が誘導される。小五郎と平次が現場の状況を説明し、検死官が近づいて、死亡の確認と原因の調査を始めた。

「……あなた、もしかして犯人が分かっているんじゃないの？」

現場から少し離れたパイプ椅子に座る輝夜に対して、こつそりと「コナン」が尋ねる。輝夜は「ええ」と、興味もなさそうに、両目を瞑りながら答えた。

「私、『勘』がいいもの。だけど、殺した方法は分からないわ。餅は餅屋。工藤君がいろいろと調べているみたいだから、任せましょう」

『事件』が起きて、彼が首を突つ込まないわけがないと分かっていたけど……くれぐれも目立つようなことはしないでいただきたいところね」

平次と小五郎、それから目暮警部があれやこれやと話していく中で、死亡の原因は青酸カリ、容疑者は四人というところまで絞ることができた。容疑者たちからそれぞれ話を聞いていく中で、青酸カリが混入していた可能性が最も高いと疑われていた飲み物のカップからは毒物の検出がされなかつたこと、被害者が先週、卒業したら結婚する予定

だった女子高生に婚約を解消されていたことなどが明らかになる。それらを踏まえ、他殺から自殺の捜査に切り替える、と目暮警部が宣言したその時だった。

「いいえ、これは殺人よ」

パイプ椅子に座ったままの輝夜がハッキリとそう告げたのだ。

「誰だね、君は？」

「あら、私の顔をお忘れかしら？　滅多に人に忘れられることがない顔だと思っていたのだけれど」

マスクと眼鏡を外し、悠然と微笑む輝夜。その様子を見て、目暮警部を始めとし、彼女が変装していたことを知らなかった者たちから、歓声のような、悲鳴のようななどよめきがあがった。

『カグヤ』君じゃないか！　どうしてここに？」

「蘭ちゃんと園子ちゃんに誘われて、劇を見に来たのよ。それで、もう一度言わせてもらうけれど——これは殺人よ」

断定的な口調の輝夜に、目暮警部は「ふむ、そこまで言うのなら何か証拠が？」と説明を促す。その目には、表向きには呑口議員暗殺未遂事件を解決したことになっている輝夜に対して、期待の色が濃く浮かんでいた。

しかし、輝夜は「証拠なんてないわ」とにつこり笑った。そういう答えは想定してい

なかつたのだらう。目が点になってしまった目暮警部は、それから口元を引きつらせて「そういう冗談は、やめてくれないかね」と怒りを押し殺すように言った。

「やはりこの件は自殺として——」

「いいえ。輝夜さんの言う通りです、目暮警部」

目暮警部の言葉を遮つたのは、蘭たちのクラスが上演していた「シヤツフル・ロマンス」において、ヒロインである蘭の相手役、「黒衣の騎士」だった。今までどこへ行つていたのか、体育館の入り口から現れた彼は、ゆっくりと歩を進めた。

仮面に隠れて表情の見えない「黒衣の騎士」は、この件は毒を用いた殺人であることを語りながら騒動の渦中、殺人現場へと近づいてゆく。輝夜は意味深に微笑みながら、「コナン」は睨むようにして、彼を見つめていた。

「ねえ。彼、黒衣の騎士になりきっているのかしら？」

「よくああいふ風に語っているわよ」

あまりに詩的な表現に、昔は和歌で違和感なくやりとりをしていたはずの輝夜も、さすがに気になったらしく、「コナン」へ尋ねていた。もちろん、和歌とはまた違った詩的表現であるというのも理由の一つだが、輝夜にとつての「普段の彼」はそういった話し方をするイメージがなかったため、困惑してしまつたのだ。何せ、普段の彼は小学生と一緒に遊んでいるので。

極めて冷静に返事をした「コナン」は、自身もまた詩的表現を多用するため、さほど気にした様子はない。それよりも「目立つべきではない人物が、自分から仮面をはぎ取って推理ショーを始めようとしている」ことに憤りを感じているようだった。

「工藤君!？」

「工藤!」

「新一……!?!」

仮面を取り、素顔をさらした「黒衣の騎士」改め工藤新一は、彼を知る人々から口々に名前を呼ばれ始めた。さらには「工藤が来たなら解決したも同然だな!」と「工藤コー」ル」を受けている。そして、盛り上がってきたところで「シツ」と口元に指を当て、本人は至って真面目な顔をして言葉が続けた。

「静かに……祭りの続きは、この血塗られた舞台に幕を下ろした後で……」

(それとも、これが和歌に代わる現代の詩的表現なのかしら?)

それにしても、あまり使っている人を見たことがないな、と輝夜は思った。

詩的表現についてはともかく、新一は事件について、一つ一つ説明をしていった。カップに反応を残さないように毒を盛る方法、それを実現させうる被害者の癖、犯人がどのように証拠を隠滅しようとしたかなど、犯人の逃げ道を潰すように。

やがて、逃れられないと悟った犯人が動機を語り始める。そして、新一が「雨」とい

う偶然を抜きにしても犯人は誰なのか分かっていた、と伝えると、犯人は全てを諦めたような、しかしどこかすつきりしたような表情になった。

「同じ高校のOGとして、あなたのこと誇りにさせてもらおうよ」

輝夜はOBとかOGとかいう言葉を知っていた。園子から学園祭に来てほしいと誘われたときに「毎年OBOGの先輩たちもたくさん来てくれて、すつごい盛り上がるんだから！」と言われていて、分からなかったその単語の意味を聞いたからだ。だからこそ、警察に連れられて犯人が出て行く前に、声を掛けた。

「——なぜ、『同じ高校のOGとして』後輩の頑張りに対して配慮できなかったのかしら？」

ぼつり。パイプ椅子から立ち上がった輝夜の呟きは、丸く収まったかのような雰囲気醸していた体育館を、冷え冷えとした空気へと変えた。その言葉は、相手に同情して語り掛けるようなものではない。殺人という罪を犯したことを後悔しなさい、と訴えかけるような説教臭いものでもない。

「蘭ちゃんや園子ちゃんは、一生懸命練習したと言っていたわ。自信作だから見に来てほしい、とも。医者風の風上にも置けないから殺した？ 勝手にすればいいわ。けれど、何も関係のない、学園祭を成功させようと頑張ってきた彼女たちの努力を、あなたが踏みにして良い理由にはならない。劇は中止、学園祭も中止。あなたは、多くの『高校

生』たちの思い出を、ひとつ台無しにしたのよ」

ふつつつと湧き上がる、マグマのような。あるいは、食べれば猛毒に冒される前に、触れたところを壊死させる絶対零度の氷のような。——そんな静かな怒りだった。

「人の一生は短い。努力が報われるとも限らない。与えられた『難題』を解けないことだって、数えきれないほどあるでしょう。それでも、だからこそ——乗り越える姿が、美しいのよ」

誰も動けない。「美しいから」だけではない理由で、誰も彼女から視線を外すことができなかつた。悠然と犯人のもとへと歩み寄り、輝夜は犯人の正面で立ち止まつた。

「あなた、『天誅を下した』と思っているのかもしれないけれど、ただの自己満足だつてこと自覚しておきなさいね。まあ、殺人なんて自己満足以外の何物でもないけれど」

輝夜は深く深い赤茶の目を、まっすぐに犯人へと向ける。「ひう」と、小さく、音のよな声のよなものが犯人の口から漏れた。

「私はただ、学園祭を、劇を見に来ただけだけど——台無しにしたあなたのこと、許さないわ」

射貫く。その視線はまさに人を死に至らしめるほどの圧を持ったものである。しかし、輝夜の許可なしには心臓すら動くことを禁じられているかのようなプレッシャーは、他でもない輝夜がにこりと微笑んだことで、消え去つた。

「まあ、だからと言って私はあなたを殺さないわよ。安心してね」

犯人は、警察に縋るようにして、体育館から出て行った。

（おっかねー！）

直接怒りをぶつけられた犯人とは違い、周囲の人間は「目で殺される」錯覚には陥っていない。ただし、その怒気は当然のように伝わっている。輝夜の怒りを近くで目の当たりにしてしまった新一は、輝夜だけは絶対に怒らせないようにしようと思心に誓ったのであった。

*

事件を解決してすぐに新一が胸を押さえて倒れてしまい、保健室に運ばれてしまった。今は険しい表情をしたまま眠っている彼を見届けた輝夜は、心配そうな顔で見舞っている蘭たちに声を掛ける。

「私は『工藤君』と面識はないし、さつき目立ってしまったから、先に帰るわね。『コナ君』も体調が悪いみたいだし、警察に同行した毛利さんも、彼に付き添う蘭ちゃんもしばらく帰らないだろうから、阿笠博士のところへ送っていくわ。学校から帰るときに、迎えに来てあげてちょうだい」

「あ、はい……。輝夜さん、ありがとうございます」

心ここにあらず、といった表情の蘭にひらりと手を振って、輝夜は更衣室に向かった。そこで制服から自分の洋服へと着替え、外で待たせていた「コナン」を連れ立って、帰路につく。

「さあ、博士の家に行きましようか。いろいろと聞きたいことがあるの」

「あなた、自分のことは話さないくせに、調子がいいわよね」

「話しているわよ。受け取り方の問題でしょう？」

輝夜が阿笠邸にお邪魔すると、博士がにこしながら二人へ話し掛けてきた。

「蘭君のところの学園祭はどうじゃった？ 楽しめたかのう？」

「楽しめるどころか……。殺人事件が起きたせいで、輝夜さんが怒っちゃって大変だったわ。あれだけ忠告したのに、工藤君は思いっきり目立ってたし。散々よ」

マスクと眼鏡を外し、変装を解きながら、灰原が盛大なため息を吐いた。そんな灰原の言葉に、博士は「はて」と首を傾げる。

「輝夜君が怒った？」

「怒りもするわ。学園祭が中止になったのよ。学園祭って、一年に一回しかないらしいじゃない。私、劇を見たあとは色々女子高生の恰好をしていろいろ見て回る予定だったのに！」

頬を膨らませた輝夜に灰原が「あら、似合ってたからこれからも着ればいいじゃない」と茶化すように笑う。

「私はただ制服が着たかったわけじゃないのよ」

つん、と顔を逸らした輝夜は、「月の軍服に似ているから、制服そのものに魅力は感じないし」という言葉を心の中で続けた。そしてその言葉を思い浮かべると同時に、少年探偵団に名前を酷評されてしまった玉兔のことを思い出す。そういえば、この世界の「女子高生」を見てずっと引つ掛かっていたのだ。輝夜はようやくそれがつながって、喉に引つかかっていた魚の小骨がすつきり取れたような感覚になった。もしかしたら、「女子高生」になろうと思わなかった理由の一つに、軍服に似た制服を着るのはちよつと……という無意識が働いたのかもしれないと今更ながらに思い至る。

「まあまあ。それは災難じゃったな。どれ、お茶でも用意しようかの」

「私、温かいお茶がいいわ」

「うむ。輝夜君もそれでいいかね？」

「ええ。どうもありがとう」

ソファに腰を掛けた輝夜は、「それで？」と灰原に問い掛けた。

「どうしてコナン君は工藤君になつていたの？ まあ、あなたがコナン君に変装していた理由は、『工藤新一と江戸川コナンが同時に存在している』と蘭ちゃんに確認し

てもらつて、彼らが同一人物だという疑いを晴らしたかった』つてとこでしようけど」
「……以前から、私と彼が縮んだ原因となつた薬の解毒薬の研究は進めていたの。今回は、工藤君のわがままに付き合つて、その試作品を提供しただけよ。もちろん、失敗すれば命はないと伝えてね。彼、今頃死んだり、あの人たちの目の前で縮んだりしていいかしら？」

灰原は、輝夜の隣に座りながら、その横顔を眺める。完璧な曲線。全てのパーツが黄金比で成り立ち、その配置も全て黄金比でなされている、現実味が薄く感じられるほどの美。

「少なくとも、死んではいけないと思うわよ」

「美」は微笑む。安易な慰めなどではない、確信を持った表情で。灰原は彼女のこういった表情に、心強さと、表現しがたい胸のざわつきを感じる。それは決して甘酸っぱいものではなく——計り知れないものへの恐怖と似た感情として、灰原に警戒心を抱かせるのだ。

(輝夜さんは、組織から私を守ってくれたのよ)

ふり、と胸に渡来した感情を振り払うように、頭を振る。しかし、振つたところで思考はまた同じところへ戻ってくるだけだった。

(だけど、それが演技でないと、どうして言い切れるの?)

そんな心の葛藤を、灰原は恥じる。もつと強い気持ちで、人を信じることができたら。もつと冷酷に、場に惑わされずに判断できたら。もつと単純に、己の気持ちに従えたら。もつと、もつと——。

「ほれ。温かいお茶じゃよ」

博士がテーブルにお茶とお茶請けを置いたことで、灰原は自分が思考の海に沈みかけていたことに気が付いた。ハツとして輝夜の方を見れば、彼女は博士に礼を述べたのち、今初めて灰原の視線に気が付いたかのように目を合わせてくる。そして、いつものように、どこかのんきな印象を与えるやわらかな微笑みを浮かべた。

「工藤君……私になんて言ったか、分かる？」

「いいえ。なんて言ったの？」

無邪気な子どものように、輝夜は首を傾げる。長い黒髪が、その動きに合わせてさらに揺れた。そこそこの時間みつあみにしていたはずの髪の毛は、そんな過去はありませんでしたと言わんばかりに、すんと真っ直ぐだ。灰原の話に興味があるのかわからないか、彼女は湯呑に手を伸ばし、緑茶の香りを楽しむように顔に近づける。灰原は、輝夜がまだ熱いお茶に口を付けるのをどこかぼんやりした気持ちで眺めながら、言葉が続けた。

「あの子を危険に巻き込みたくないけど、安心させたいからどうかしろって言ってき

たのよ。しかも、昨日電話で。私、解毒薬の試作品はあるけど、死ぬかもしれないこと
伝えたわ。そしたら彼……」

輝夜の白い首が、緑茶を飲み込んだのに合わせて動く。その当たり前の動きに、少女
は自分がほつとしてしていることに気が付いた。飲食とは生きるためになくはならない
行為である。彼女の体がその機能を有していることに、彼女も自分と同じ「生き物」で
あるのだと思うことができたのだ。

——「寶石のように美しいだけの無機物かもしれない」。他人に話したら鼻で笑われ
そうなことを、蓬萊山輝夜という女性を見ていると、本気で考えてしまうことがある。
もう何度も目撃しているはずの小さな「当たり前」を改めて目の当たりになることで、灰
原は自分の愚かしい考えを否定をすることができた。

『たとえ死んだとしても、オレが今、そうしたいんだ』って。それから『一緒にキャン
プに行く約束をしてるから、オレはまだ死なない』ともね」

キャンプへ行く前に、コナンが灰原と博士に相談しに来たときは全く違う口調だっ
た。自分の選択に絶対の自信をもっていることが、電話越しでもよく分かる明朗な喋り
方。それは、彼が自らの推理を周りに聞かせるときとよく似たものだった。きつと、彼
の「謎」に、彼女が「ヒント」を与えたのだろうと、灰原は確信している。その証拠に、
あのカレーパーティーの後、彼は憑き物がおちたかのようにすつきりとした表情をして

いた。

「そう。……ふふ、でも工藤君は勘違いをしているわね。私がキャンプに行く約束をしたのは、コナン君よ。たとえ彼が死ななくても、小学生の「江戸川コナン」に戻らなければその約束は果たされないわ。哀ちゃんも薬の効果はどう思っているの？」

湯呑を置いて、気負わない雰囲気で輝夜が尋ねる。灰原は一度お茶で唇を湿らせてから、己の作った薬のデータを脳内で照合し始めた。輝夜には、コナンに対してしたように、大袈裟な脅しは必要ない。

「アレはまだ試作品だから……完全な解毒に至るとは思っていないわ。長くて一週間、短くて一日つてところかしら。江戸川君の姿に戻ったときの副作用なんかは、まだ分からないけど」

そう答えると、輝夜は彼の身に起きているあらゆる問題を差し置いて、両手の平を顎の先で重ねて喜んだ。その子どものような仕草は、少し前に帝丹高校の体育館内で、その場に居合わせた人々の心を恐怖で底冷えさせた人物と同一であるとはとても思えない。

「それなら、キャンプの約束は大丈夫そうね。よかったわ」

「あら、意外ね。あなたは彼が工藤新一に戻ることを応援しているのかと思っていたのに」

ただ、そういった印象を呑み込んで、灰原は努めて冷静に聞こえるように会話を続けた。つかみどころのない輝夜との会話は、相手は何も考えていないとしても、灰原にとつては神経を使う。

ふと、灰原は輝夜のお茶がなくなったことに気が付いた。そこで、おかわりを淹れに行こうかと視線を台所の方へ向けると、博士が灰原に隠れるように高級そうな缶に入ったクッキーを食べているのを発見してしまう。

「もちろん、応援はしているわよ。ただ、私は『友達』との『思い出』を大切にしたいだけ……ふふっ」

灰原と目が合ってしまったことで、明らかに焦り出した博士に輝夜も気が付いたようだ。その証拠に、灰原の問いに対する答えの後半は声が震えていたし、何より言葉の切れ目で笑い出してしまっている。

「博士……？」

「ち、ちがうんじや哀君。わしは別に、哀君が輝夜君との会話を夢中だからチャンスだと思つたわけではなくっ……輝夜君の口に合いそうなものか、確認してから出した方がいいかと思つただけなんじや！」

「いいからそこに座りなさいっ！ 今週はもうお菓子抜きよ！」

阿笠邸には「そんなあ……」という、初老の男性のもの悲しい呟きがとけて消えた。

*

マネージャーと鈴木財閥が園子を経由してつながってしまったおかげで、輝夜は柄にもなく忙しい日々を送っていた。カレーパーティーのときの話が膨らみ、本当にCM出演をすることが決まったところまではよかったのだが、鈴木財閥側が妙に張り切ってしまっているのだ。既存の製品や企業のPRではなく、輝夜のプロデュースのためにCMを作っていると行って過言ではない程度に、あらゆる企画について話し合いの場が設けられ、それに参加しなくてはならない輝夜は、だんだんと会議疲れを感じていた。

「……それ、私がいなくちゃ進められない会議なのかしら？」

「輝夜さんが出演するCMの企画会議なんですよ？」

「鈴木財閥側がやりたいっていうCMの種類が増えていくだけだから、そろそろ遠慮したいわ。私、CM出演をするとは言ったけど、たくさんやるとは言っていないもの」

うんざりしたように言う輝夜を、マネージャーが「まあまあ」と宥める。

「これなんかどうです？ 化粧水のCMで、キャッチコピーは『永遠の美を、あなたに。』ですって。輝夜さんにぴったりにゃないですか！」

「あの鈴木相談役が関わっていない企画ならなんでもいいわ。あの人が顔を出して以

来、話がどんどん大きくなっていったる気がするのよ。だったら、さっさとCMを撮ってしまつて、あなたの『願い』はそれで終わり。もともとしりどりの罰ゲームなんだから、一本が妥当でしょう?」

「ええ……もつたいない……。輝夜さんが気乗りしないというなら無理にはすすめられません……。そういえば、蘭さんと園子さんの高校の文化祭に顔を出したこと、かなり大きな話題になってたじゃないですか。あれのおかげでまたファンが増えちゃつて……ファンクラブを開設してほしいって要望が多く届いてるそうです」

「文化祭じゃなくて、学園祭よ。でも、よくあれだけ一つの出来事を膨らませられるものね」

その話に、輝夜は苦い顔をした。学園祭を訪れた際に無断で撮られた写真が流出し、今なお大騒ぎの状態が続いているのだ。『カグヤ』は帝丹高校の生徒だった!?!』という誤解は、通っている人々の証言ですぐに解けたようだが、高校生だけでなく、学園祭に来ていた人々が誇らしげにその時のエピソードを語るものだから、尾ひれ背びれ胸びれ、ヒレというヒレがしつこいくらいについてしまい、ニュース、ワイドショー、流行を扱うバラエティー番組等々、そこかしこで輝夜の意図しない話が流れている。

これが輝夜の容姿を褒めたたえるだけの「大騒ぎ」であるのなら、彼女とてさほど気にしなかつただろう。しかし、『カグヤ』は学園祭を台無しにした殺人犯に怒つてく

れた人格者」やら「美人だから怒ると迫力がありすぎてヤバイ」やら「探偵もののドラマやってほしい」やら、あの殺人事件と絡めて好き勝手に言われているのを耳に入れてしまうと、「なんだかなあ」とうんざりした気持ちになってしまうのだ。

「まあ、収穫はあったから、いいけどね」

「工藤新一」と「江戸川コナン」。灰原からの連絡により、既に彼が小学生の姿に戻ったということは知っている。そして、学園祭のときに感じていた「難題」の手掛かりから、輝夜はひとつの仮説を立てていた。

「え？ すみません、今何か言いましたか？ 聞き取れなくて……」

「なんでもないわ。ファンクラブは作らない。『カグヤ』は永遠の存在ではないもの」

——この歪な「永遠」の世界においては。

輝夜は残念そうな顔をするマネージャーの肩をぽんとたたき、「帰るわよ」と笑い掛けた。

「化粧水のCM、だったかしら。その話、進めておいてちょうだい。さっさと終わらせてあの相談役の提案から逃げ切りたいから、撮影のスケジュールは早めがうれしいわ」

この「歪な永遠の世界」に来て、「江戸川コナン」という少年と「灰原哀」という少女を目にしたとき、輝夜は彼らこそが「難題の鍵」なのだと感じた。しかし、それは間違っていたと今では考えている。

もしもこの世界に、運命を操る吸血鬼がいたとしたら、たとえばほんの少しの時間だとしても「工藤新一」に戻った「江戸川コナン」を見て、何と言っただろうか。

輝夜は自信を持って言える。あの永遠に紅い幼き月ならば、こう言うだろう。――
「運命が動いた」と。

しかし、もし輝夜の仮説が正しいとしたら、彼女にとつてはほんの少し厄介なことになってしまった。慌てて携帯電話を取り出し、歩きながら会社に連絡を入れているマネージャーを横目に、輝夜はそつと息を吐いた。

まあ、「運命」というべき「難題」がどうであれ、それは次のキャンプの日が来るまでに考えよう。輝夜としては、キャンプの約束を果たすまでは、「彼」をどうにかしうる「難題」には手を出さないでおく予定だった。

虚題：神鳴る前の澱み

波の音に耳を傾けながら、輝夜は長い黒髪を潮風に遊ばせていた。快晴の空の下、きらきらと太陽の光を反射する水面に目を向ける。本土から離島に向かう船の上、「連絡船では他の利用客が混乱するから」と、輝夜たちは船を借りて、悠々と船旅を楽しんでいた。

楽しみたくても船酔いでダウンしてしまつて船旅を全く楽しめていないマネージャーによると、今回のCMで使用されるキャッチコピーは以前伝えられていたものから変更はないまま、「永遠の美を、あなたに」。

そこで、美國島という別名「人魚の棲む島」として有名な島が撮影場所選ばれたらしい。CMのパターンは三つあり、朝昼晩と見せる顔を変える海をテーマにしているそうだ。「時間にとらわれず、潤い輝き続ける肌」というのを表現したいらしい。加えて、PRする化粧水には海洋深層水が使用されているようで、「不老不死の人魚」と「美しい海」という二点がイメージにぴったり、とのことだった。芸能界というものはげんを担ぎたがるものらしく、『カグヤ』の初CMは絶対に成功させたい」という当人を除いた関係者の気概が感じられる。

(不老不死の人魚、ねえ……)

輝夜にとつて、その話の真偽はどうでもよかった。どちらにせよ、一目見れば分かることだ。それに、分かったところで、輝夜には関係がない。

美しい海を見る気も失せ、輝夜は踵を返して船室に戻った。

「嵐がきそうね」

扉を閉めながらそう呟くと、室内で休んでいたマネージャーが顔を上げる。

「……外は快晴ですよ？」

顔を青白くしながら、椅子にもたれるような恰好のマネージャーは窓の外を確認して、眉をひそめた。輝夜はそんな彼にコップに水を入れて差し出してやりながら、「いいえ、来るわ」と意味深な視線を空へと向ける。

「今日とは言わないけど、そんな予感がするの」

「お水、ありがとうございます。天気予報じゃ、ただの雨っぽかったですけどねえ……」
くすり。輝夜は魔性の笑みを浮かべた。ただでさえ体調を崩しているのに、そんな笑みを真正面から見てしまったマネージャーは、手を滑らせ、せつかくもらった水を床にぶちまけてしまった。

「あらあら、何をやっているのよ。本当に大丈夫なの？」

「あ……今のはちよつと、全身の力が抜けただけで。船酔いとは全く関係ありません。

御迷惑お掛けしてすみません」

「気にしなくていいわ。もうすぐ到着するみたいだけど、陸に上がってもつらいようなら、無理はしないでちょうだいね」

恥じるように顔を赤くしたマネージャーへ、今度はペットボトルのまま水を渡す。今度は彼も取り落とすことはなく、ゆっくりと嚙下していた。

島に到着した輝夜たちは、宿に荷物を預けてさっそく撮影に向かう。明日には天気が崩れるだろうから、と海で行われる「昼」のパターンと「夜」のパターンを今日中にやっでしまおう、とのことだった。ちなみに、「朝」のパターンは明日早朝に行われる予定だそうで、朝陽が撮れそうになかったら別の脚本を用意するらしい。

「夏だったらぜひカグヤさんには人魚に扮してもらいたかったんですけどねえ」
「寒い中無理させるわけにもいきませんから」

スタッフの雑談に、輝夜は微笑みを返すことで返事とした。

その日の撮影は滞りなく終わり、輝夜は島の名物だという海鮮丼をいただいて、夜はゆっくりと休んだ。結局、「夕日に照らされる横顔が美しい」だとか「オレンジと紫に混ざって、藍色になりかけている混沌とした空模様と相まって最高にミステリアス」だとか「想像通り月明りの下にたたずむだけで神秘的」だとか、いろいろと好き勝手に褒め

たたえられながら三つどころか何パターンも撮られて気疲れしたため、宿に戻ってからは「一人にしてほしい」と言つて部屋に引きこもることにしたのだ。明日は天気が良いれば早朝の撮影。良くなければ、撮れ高は十分だからとゆつくり休めることになつてい

る。
朝の撮影があるにしろないにしろ、輝夜はこの島にもう数日滞在する予定だった。というのも、海が荒れるかもしれないことを考えて余分に日程を取つていたことと、明日の夜「儒艮祭」というお祭りが開かれることから、「せつかくならば観光も楽しんではいかがですか」とスタツフに氣遣われたためだ。

（観光を楽しむと言つても、人魚にはそれほど興味が無いのよね）

ふう、と宿のベランダで月を眺めながらため息を吐く。本物に会いたければ、幻想郷に戻つてから顔の広い博麗の巫女にでも紹介してもらえば良いのだ。その人魚が、輝夜のような不老不死であるとは思つていないが。

*

次の日、輝夜は早朝の撮影も終えて、だんだんと暗さを増す空と荒れ始めた海を見つめていた。観光と言つても、人魚にさほど興味が無い輝夜はどこへ行くわけでもなく、

海沿いをぶらぶらと歩いている。この島ときたら、どこもかしこも人魚人魚人魚、ジュゴンジュゴンで、聞いてもいないのに「命様」という不死の老婆の話をしてくるのだ。話し掛けている方としては、『カグヤ』となんとか会話を続けたい、「この島に興味を持つてほしい」と必死ののだが、その話題を出されれば出されるほど、輝夜としては会話を終了させたくなり、のらりくらりと周りの人物から逃げてきたところだった。

一応、マネージャーには「散歩をしてくるわ」と声を掛けてあるし、その「散歩」が「輝夜にしか存在しない歴史」だとしても問題はないだろう。

天気は良くないが、港は賑わっていた。それというのも、美國島の「儒艮祭」というお祭りはかなり有名なものらしく、観光客たちが一気に押し寄せていたのだ。「儒艮祭」では「命様」の念を込めた不老長寿のお守りである「儒艮の矢」を授けてもらえるそうで、たった三本しか用意されないらしいそのお守りを求めて、遠方からも人が訪れてくるのだという。

「お祭りは『ハレ』であるはずなのに、島には穢れが漂っているわね……って、あら？」ふと、輝夜は連絡船から降りてくる人混みの中から、見知った顔を発見した。

「コナン君！ それと、蘭ちゃんに毛利さん。あと……服部君に、和葉ちゃんだったかしらっ」

突然目の前に現れた輝夜に対し、声を掛けられた少年たちは目を見開いていたが、

各々ニュアンスは違うながらも、すぐにうれしそうな顔になった。

「輝夜さん！ どうしてここに？」

「ちょうど撮影があつたのよ。撮影自体はもう終わっているんだけど、天気も崩れるよ
うだし、今夜はせっかく『儒艮祭』があるからつてことで、もう数日滞在することになっ
ているの。あなたたちは？」

輝夜が微笑み掛けながらそう尋ねると、ぐいぐいと少年たちを押しつけた小五郎が
「事件の依頼がありました！ しかしこんなところで会うとは、もはや偶然とは思えま
せん。そう、これは運命……！」と胸を張りながら話し始めたが、輝夜は「事件？」と
前半のみ拾つて、首を傾げた。

「せや。オレが受け取つた手紙に物騒なことが書かれとつてな。ま、ここじゃ人も多い
さかい、場所移ししましょか」

「あら、それなら私が泊まつている宿に案内するわ。お祭りで浮足立っている人たちに、
あんまり物騒な話を聞かせるのも気が引けるものね」

輝夜は非常に目立つが、それでも学園祭のように取り囲まれることはなかった。学園
祭で彼女がはつきりと「サインは事務所で禁止されている」という旨の発言をしたこと
が広まっていることと、あくまで撮影で島を訪れていることが知れ渡っているため「邪
魔をしてはならない」という意識が島民にあるようだ。観光客も多いため、声を掛けら

れること自体は避けられないが、「ごめんなさいね、急いでいるの」と微笑むだけで、周囲の人の時を一瞬止めることができるため、さほど苦勞はせずに宿まで辿りつくことができた。

「輝夜さんの笑顔は特殊能力とちやいますか、ホンマ」

感心しているのか呆れているのか、そのどちらもなのか、平次がそう言つて息を吐く。輝夜に割り当てられているのは広い部屋で、一人で寝泊まりしているのにも関わらず、宿で一番いい部屋を融通してもらつたのだらうな、ということとは簡単に想像がつく。

「あら、そんなことないわよ。効かない人もいるもの。それで、事件つて言つてたわね。ちやうど暇を持て余していたの。差支えなければ、詳しく聞かせてもらえないかしら？」

「ああ——オレんとこに、一通の手紙が届いてな。それが気になって、わざわざ福井まで来たつちゅーわけです。『このままじゃ人魚に殺される 助けて』……そんな手紙が」
「たしかに、穏やかではないわね。差出人は分かっているのよね？」

「もちろんや。ただ、二回目以降は何度掛けてもつながらへんのです。一回目は、つながりはしたんやけど……女のうめき声と波の音が聞こえただけで、すぐに切れてまいましたわ」

輝夜は顎に手を当てて、考えるように少し俯いた。

「それなら、こんなところで時間を使わせてしまつて悪かつたわね。役に立つかは分からないけれど、これ、この島の地図よ。宿の人にもらつたの。私は使わないから、あげるわ」

「おおきこ」

平次は輝夜から地図を受け取り、ズボンの尻ポケットにしまう。

「輝夜さんは行かはらんのですか？」

和葉が期待を込めたように小さく挙手をしながら尋ねると、輝夜がにこりと微笑んだ。

「私は少々目立つてしまふけれど……そうね。ご一緒させてもらおうかしら。蘭ちゃん、また髪の毛を結うのを頼んでもいいかしら？」

スタッフに頼むと、やたらと小洒落た感じにされてしまうため、逆に目立つてしまうのだ。変装用に頼んでいるのに、それでは意味がない。

今日の輝夜は低い位置でのシニヨンで髪をすつきりとまとめ、マスク着用、普段はあまり身に着けないジーンズとスニーカー、マウンテンパーカーというカジュアルな服装に身を包んで、印象をがらりと変えた。蘭としては低い位置のシニヨンではなく、高い位置のお団子にまとめたかつたらしいのだが、輝夜の髪の毛がとても長いことやさらさらすぎることから、まとめるのが難しい、ということと妥協した結果らしい。

「オレらはまず、役所で門脇沙織さんについて聞いてくるさかい、そこらへんで人魚について聞いていてくれ。あ、輝夜さんも頼んます」

前半は和葉に向かって、後半は輝夜に向かって声を掛けた平次に対して、「なんやねん、平次のやつ！」と返事も聞かずに役所に入って行ってしまった男性陣の背中——というよりは、某色黒の少年を睨みながら、和葉がむくれた表情になる。

「いつくら輝夜さんが美人やから言うて、デレデレしすぎとちやう!? ホンマ、学園祭のときの工藤君を見習ってほしいわ!」

「まあまあ、和葉ちゃん。服部君だつて人類だからしかたないよ……」

「初めて聞く言い回しだわ。私にデレデレしない人類だつているわよ」

「そんな人存在するとは思えません!」

「せやで! 輝夜さんは自分のことやさかい、毎日見る顔で新鮮味がないとか思つてはるかもしれへんけど、とんでもない美人なんやで! そんな人いるわけないですよん!」

軽い気持ちで否定しただけなのに、女子高生二人からものすごい剣幕で否定に否定を重ねられ、輝夜は困つたように頬をかいた。

(そんなこと言われても、幻想郷では私の顔を見たつて特別な反応をしない人間なんて珍しくなかつたけど……)

こうも容姿を褒めたたえられると、随分と昔、輝夜がまだ「外の世界」で老夫婦と暮らしていたころのことを思い出す。あの頃も周囲の盛り上がり方がすごかった。それも、この世界のようにメディアが発達しているわけでもないのに、輝夜の話は遠い地まで広まってしまい、各地から求婚者が後を絶たなかったことをよく覚えている。まあ、そのほとんどが、輝夜が難題を突き付けると、試しもせずにごすごと諦めていったわけだけだ。

「まあ、ともかく、人魚のことを調べましょう？」

少女たちはきやあきやあと盛り上がりながら、島の人たちへと人魚について聞いて回り始めた。その内容のほとんどは輝夜が事前に島の人々から聞かされていたものと重複していたが、土産物店の店員である黒髪でショートヘアの女性は、特に「命様」の不死の力を信じているようで、クールな見た目に反して熱のこもった口調で語っていた。

女子高生たちは素直に反応しつつ、熱心に聞いていたので、「そんなに気になるなら、美國神社に行ってみるといい」と提案されている。黒江奈緒子と名乗ったその女性は、自分は美國神社の巫女と幼馴染で、自分の名前を出せばいろいろと教えてくれるだろう、とも言っていた。あまり興味のない輝夜は一步引いてその様子を眺めていただけだった。

神社に行くなら男性陣を待つて一緒に行こう、ということになり、三人は雑談に花を

咲かせ始めた。

「輝夜さんは、不老不死になってみたいって思わないんですか？」

蘭が興味深そうに輝夜の顔を覗き込むと、問われた方は特に悩みもせず、頭を振る。

「昔は思っていたけれど、今は思っていないわね」

「なんでですか？」

輝夜の答えに被せるように発言したのは和葉だ。蘭と和葉、二人揃うと遠慮のなさが増すことを輝夜は痛感していた。蘭と園子の組み合わせなら、園子の挙動不審な行動を蘭があたたく見守りつつ、失礼な発言をときに諫めるなど、ストッパー役になっているイメージが輝夜にはある。少年探偵団といるときの蘭は「お姉さん」然としており、グイグイと輝夜に質問するというよりは、探偵団の無邪気な質問に乗っかってくることが多い。

しかし、蘭と和葉という組み合わせは、急に——なんとというか「きやびきやび」し始めるのだ。なぜかは分からないが、そのノリに慣れていない輝夜は、少しだけたじろいでしまう。とはいえ、「なんで」と聞かれても、その質問に対して輝夜は答えをひとつしか持ち合わせていないので困りはしないが。

「必要がなくなつたからよ。それに——不老不死を手に入れたとして、幸せになれるかどうかは人によるでしょう。すべての人がそうだとは言わないけれど、人間は異物を排

除したがるものよ」

そう答えたところで、男性陣が役所から出てくる。手紙の差出人である門脇沙織さんが行方不明であること、一週間前から「儒艮の矢をなくした。このままでは人魚に祟られる」と怯えていたことが分かったそう。女性陣の提案で、一行は地図を見ながらお祭りの会場でもある美國神社に向かうこととなった。

「二百歳なんてとんでもない！　うちの大大おばあちゃんは、今年でちょうど百三十歳。戸籍を調べればすぐ分かります！」

美國神社に到着し、行方不明になった門脇沙織さんと、「人魚」のことを尋ねて回ると、それなら——と、沙織さんの幼馴染であり、美國神社の巫女である島袋君恵という女性を紹介された。「命様」の曾孫だという彼女に話を聞くと、少し呆れたような様子でそう答える。

「ちよつと長生きしてるからって、みんな大騒ぎしちゃって……」

「ちよ、ちよつとって……」

君恵の言葉に、蘭が困惑したような言葉を漏らす。百三十歳は、人間にしてはかなり長命だろう。少なくとも、輝夜が幻想郷の外の世界で暮らしていたとき、その年まで生きていた「人間」は目にしたことがなかった。

「ほんで、その大大おばあちゃんはどこにおんねん」

平次の言葉に、君恵が「今部屋で、祭りで授ける矢に念を込めているところですよ」と答えると、小五郎が「じゃあ……大おぼあさんは、本当に人魚の肉を」と真剣な顔で言う。その発言に、君恵は目を丸くした後、大笑いし始めた。

「この世に人魚なんているわけないじゃないですか。あんなの嘘っぱちですよ」

小五郎が顔を赤くして己の発言を恥じている中、「そうかしら？」と口を開いたのは輝夜だった。

「この島の伝説とかあなたの大おぼあさんについてどうこう言うつもりはないけれど、『人魚なんているわけない』と言い切るのはどうなのかしらね。あなたの見えている物、信じているものだけが世界の全てではないと思うわよ」

「アハハ……それを言われたら、確かにそうなんですけど。あなたも不老不死を信じているんですか？」

輝夜は微笑んだ。それは「サンタさんって本当にいるの？」と小さな子に聞かれた親のような、寛大な笑みだった。

「さあ、どうかしらね。まあ、たとえ不老不死になったとして、その先に待ち受けているのが幸せか不幸せかは、人によるとは思うけれど」

そう言葉を切って、「ところで」と話題を変える。

「人魚はいないと言い切るなら、『儒艮の矢』のことはどう思っているの？ 島内外の人

「ありがたいがつている物だし……現に、あなたの幼馴染だという沙織さんは、矢を失くしたことに怯えて、行方不明になってしまったと聞いているわ」

「あ、そ、そうですよね……」

マスクで隠れているとはいえ、輝夜の美貌はそれだけで曇るものではない。細められた赤茶のその奥、吸い込まれるような光を持つ目に、それを縁取る長い睫毛。見る者を狂わせるその視線を真正面から受けた君恵は、多少たじろいだように、言葉を詰まらせた。

「もともとは『呪禁の矢』という魔除けの意味が込められた矢だったそうなんですけど、人魚の伝説にあやかかって、『儒艮の矢』と呼ばれるようになったって、死んだ母が言っていました」

「亡くなられたんですか、お母さん……」

蘭が眉を下げて痛ましそうに呟くと、君恵は落ち着いた様子で、五年前に両親が海で亡くなり、祖父母も彼女が生まれる前に海で行方知れずになったらしいという話をした。

「家族がみんな海で亡くなるなんて、やっぱりなんかあるんちゃうん？」

心配するような、怖がつているような顔で尋ねる和葉に、君恵は安心させるように微笑んだ。

「何にもないわよ。この前も沙織と船で本土に行ったけど、何にもなかったし」

その言葉に食いついたのは男性陣である。彼らは行方不明の沙織さんの調査をしに来たのだから、当然だ。君恵の話によると、沙織は四日前に君恵の歯の治療に付き合い、本土の歯医者に行つたのだという。矢を失くして怯える沙織に君恵が「そんなことない」といくら伝えても聞かなかつたと、彼女は眉を寄せて困つたように言つた。

「お馬鹿さんね。それは君恵が、命様のパワーを信じてないからでしょう？」

突然声を掛けてきた長い黒髪の女性に、君恵が「寿美……」と顔を向ける。

「彼女はマジ本物。本当に人魚の肉を食べちゃつたのよ」

薄紫色のワンピースを着て、白いパンプスを履いた彼女は、口元に手を当てながら薄く微笑んでいた。

「ふうん。家族である君恵さんが信じていないのに、あなたは『命様』のことを信じているのね。何か理由があるのかしら？ ——例えば、『命様』が死んで生き返つたところを見たとか」

輝夜の発言に顔色を変えたのは、突然そんなことを聞かれた寿美だけでなく、君恵も同様だった。ただし、君恵はすぐに困惑したような顔に変わつていたが。

「い、いえ……あなた、知らないの？ 三年前にマジで人魚の遺体が出てきたの、ニュースにもなつていたと思うんだけど」

「悪いけど、知らないわ」

汗をかくような気温でもないのに、うつすらと額に汗を滲ませた寿美は「世間知らずね!」と八つ当たりのように声を荒げて、それから息を吐くと、冷静さを取り戻したようにあやしく微笑んだ。

「骨が異様な形に砕けていた、グロテスクな遺体……」

「よせ、寿美!」

彼女の言葉を遮ったのは、浅黒い色に日焼けした短髪の男性である。肩に手を置かれた寿美は「祿郎」と男性の名前を呼んだ。男性は「島以外のモンにそれ以上話すことはない」と厳しい表情をしており、輝夜たちを睨みつけ、「沙織を探してるなら、さつさと沙織の家に行ったらどうだ」と言葉が続けた。

「随分な言い方ね。私は知らなかったけれど、ニュースになったというなら、それなりに広く知られていることだと思うのに。それに、『家に行け』なんて簡単に言っているけれど、私たちは『島以外のモン』よ。当然、沙織さんの家がどこにあるのかなんて知らないわ。そんな風に言うのなら、あなたが案内してちょうだい」

不快そうに眉をひそめた男性は「なんで無関係のオレがそんなことをしなくちゃならないんだ」と輝夜を睨む。

「それなら、私たちが沙織さんや人魚のことを調べていたところで、無関係のあなたに止

められなくちゃならない理由はないわね。あなたがどこのどなたかは知らないけれど、失礼な言動は自分にかえってくるものよ」

「禄郎、彼女の言う通りだわ。ごめんなさいね。彼は私と沙織の幼馴染で、福山禄郎というの。この島で漁師をやっているわ。その隣が、海老原寿美といって、同じく私たちの幼馴染で、禄郎の許嫁でもあるのよ」

剣呑な雰囲気醸す禄郎と、まるで気にしていないようにその視線と雰囲気を受け流す輝夜の間、君恵が割って入るように口を開いた。

「二人とも、紹介もせずに悪かったわね。こちらは名探偵の毛利小五郎さん」

小五郎が紹介されたのを皮切りに、蘭やコナン、平次と和葉も簡単な自己紹介を始める。輝夜もそれに倣い、マスクを外してにこりと微笑んだ。

「私は蓬莱山輝夜。『カグヤ』という名前でモデルをやっているわ。御存知かもしれないけれど、この島へは撮影で来ていて、たまたまお友達のコナン君がいたから、一緒に行動していたの」

「マジ!? 本物!? 超感動なんですけど! 『カグヤ』が島に撮影に来てるのは知ってたけど、マジで会えるなんて!」

興奮した様子の寿美に、禄郎は呆れたような視線を送っている。握手に応じる輝夜は、寿美にその絶世の美貌をまじまじと見つめられ、「何か?」と首を傾げた。

「あなたみたい顔に生まれたら、人生思い通りなんだろうなーって思つて。マジで羨ましいー!」

輝夜は握られていた手を離し「顔は関係ないわ」とやわらかく言う。他の人々よりも、少しだけ輝夜との付き合いが長いコナンは、先ほどもでの「フアンの握手に応じるモデルの『カグヤ』」から、彼女の雰囲気が変わつたように思えた。

(ま、いくら輝夜さんが美人でお嬢様だからって、思い通りの人生なんてあるわけないしなあ)

寿美の浅慮な発言に思うところがあつたのだろう、と納得して、コナンは空いた彼女の手を引く。

「輝夜姉ちゃん、疲れてない? もう宿に戻る?」

「気を遣わせてしまつて、悪いわね。大丈夫よ。それで、結局今から沙織さんの家へ行くのかしら?」

いつもの、どこかのんきでほんわかとした空気を纏う輝夜へと戻り、少年は内心でホツとする。学園祭でのがちよつとしたトラウマになつていようだ。

「祭りが終わった後で良ければ、私が案内しますけど……」

「そういえば、お祭りってどんなことをするんですか?」

蘭の疑問に、慣れた様子の君恵が簡潔に説明を始める。碌郎は自分から話題が離れた

と思つたのか、「じゃ、オレはこれで」とさつきと背を向けて去つて行つてしまつた。寿美は名残惜しそうに輝夜の方をちらちら見ながらも、許嫁を追い掛ける。

そんな二人へ困つたような笑みを向けた後、君恵は気を取り直すように明るく笑つた。

「そうだ！ 今朝急にキャンセルした老夫婦がいて、番号札が余っているんだけど、あなたたちも加わつてみる？ 二枚しかないから、誰が参加するかは仲良く決めてね」

木でできた札を二枚取り出し、女性三人に視線を送る。輝夜はすかさず、「私には必要ないから、あなたたち、もらつたら？」と提案した。

「輝夜さんは不老不死に興味ないねんもんな。ほんなら、ありがたくいただきます」

「まあ、当たるも八卦、当たらぬも八卦。もしかしたら、みんなが言うように、永遠の若さと美貌が手に入つちやうかもしれないわよ。……まあ、輝夜さんレベルの美貌になるのはいくら『人魚の力』が手に入つたとしても無理だとは思うけど……」

番号札をそれぞれ受け取つた蘭と和葉は「そんなご利益はさすがに期待してませんよ！」と笑う。話がひと段落つき、輝夜は宿に戻ることにして携帯電話を取り出した。今から戻るといふことと、儒艮祭には興味がないと言つていたが、気が変わつて見学に行くことにした旨をマネージャーに伝えておくためだ。

電話が終わり、輝夜はふと小さな少年へと視線をやつた。

「どうかしたの、輝夜さん」

輝夜は彼の頭にぼんと手を置き、いつものようにその美貌に笑みを浮かべる。

「私——前に言ったことがあったわね。『あなたたちといると事件に巻き込まれる』つて。それで、あなた、私にこう答えたわ。『輝夜さんといると怪奇現象に巻き込まれる』つて。ねえ、今回はどちらかしら？」

コナンは言葉に詰まった。輝夜が浮かべているのはいつもの、のんきでやわらかな笑みだ。けれど、纏う雰囲気はその表情とは一致しない。見上げた先の絶世の美貌と、その背後にある曇天が、コナンに背筋の凍るような「何か」を感じさせた。それは単に悪寒ではなく、恐怖でもなく、畏れでもなく、——たとえば、武者震いのような。

「……それって、普通の質問？ それとも——『難題』？」

輝夜は答えない。ただ微笑みだけを浮かべるだけだ。そしてコナンは、それを答えと受け取り、牙をむくように不敵な笑みを返した。

騙題：輝き流れ落つもの

儒艮祭が始まり、輝夜はコナンたちと共に最前列で、「命様」が障子に火を灯すのを見守る。「ただの厚化粧の婆さんやんか」「小せえな」などと好き勝手な感想を言い合う平次と小五郎を他所に、番号札を手にした者たちは浮かび上がった数字を見て様々な反応を見せていた。昼間、輝夜たちに話し掛けてきた寿美は、数少ない当選者の一人であったのか、「ラッキー！」とうれしそうに笑っている。

「ら、蘭ちゃん……どないしよう！ アタシ、当たつてもうたー！」

そしてもう一人、当選した人物がいた。信じられない、と目を見開きながら番号札を震える手で握る和葉である。当選者は一時間後に「人魚の滝」へ来るように、と君恵が告げ、その場はお開きとなった。島の者に輝夜が聞いた話によると、この後「人魚の滝」で「儒艮の矢」が当選者へ授けられ、花火が打ち上げられるのだと言う。高齢の「命様」は「人魚の滝」へ行かず、矢を授けるのは曾孫である君恵の仕事なのだが、たとえ当選しなくても、荘厳な雰囲気を感じられることや花火を間近で見られることから、「見にく価値はありますよ！」とのことだった。

輝夜は同じところに長時間留まっていると目立つだけじゃなく、疲れてしまうことを

理由に、一度コナンたちと離れ、再び「人魚の滝」で合流することとした。
「人気者は大変やなあ……」

輝夜の背を見つめながら、平次が呟く。いつの間にか、絶対に紛れるわけがないと思える美貌の持ち主でも、木を隠すなら森の中というわけか、人混みに紛れて姿が見えなくなってしまうた。

「今や日本で一番有名なモデルだからな……御実家もさぞ安心しておられるだろうよ」

「なんや。輝夜さん、一人暮らしなんか？ 金持ちの箱入り娘って感じがしたんやけど」
なぜか誇らしげに語る小五郎へ、平次が意外そうな顔をしながら反応する。確かに、そういう印象は誰もが持つだろう。特に本人が隠しもしないため、コナンはさらりと彼女の事情を説明した。

「輝夜姉ちゃん、家出してるんだよ。だから、お金持ちの箱入り娘だけど、一人暮らしなんだ」

「い、家出え!? そんなん、あない有名になってもうたらすぐ迎えが来てまうんとちがうん?」

当選していたことに浮かれていた和葉が、ぎよつとしたように会話に加わってくる。コナンは頭の後ろで手を組みながら「よく分かんないけど、実家の人と勝負してるみたいだよ」と補足した。

「勝負？ そら、『そない言うなら自分の力で有名になってみい！』『やったるわ！』みたいなもんかいな？」

「……平次兄ちゃん、輝夜さんがそういうタイプに見えるの？ そうじゃなくて、謎解き勝負？ みたいな感じらしいよ。詳しいことは話してくれないんだけど、家の人たちに『難題』を残してきたから、それを解かないと輝夜さんのことは迎えに来れないんだって」

コナンの発言に、全員が首をひねる。それもそうだろう。輝夜から直接聞いたコナンでさえも、よく分かっていない。かと言って、追究しようとすればするほど、彼女はのらりくらりと嘘のような本当のような、曖昧なことを言ってはぐらかしてしまふのだ。

そんな話をしながら歩いてみると、少し早いが「人魚の滝」に辿り着く。一行と同じく、当選が終わってすぐに移動した者たちも多いらしく、まだ時間があるにも関わらず、滝の周囲は賑わっていた。観光客も島の住人も、すっかり暗くなった空の下、設置された松明のちらちらしたほの灯りに照らされながら、日常とはまた違った雰囲気を楽しんでいるようだ。

「輝夜さん、遅いね……」

雑談をしながら時間をつぶしていた彼らだったが、ふいに蘭がきよろきよろと周囲を見回し始める。時間まであと五分程度になっても姿を現さない輝夜を心配している様

子の彼女につられて、他の者たちも輝夜の姿を探そうと、各々首を横に向けようとしたその時だった。

「あら、心配させてしまったかしら？　少しのんびりしすぎてしまつてね。今来たわ」

輝夜はくすくす笑いながら、その美貌に呆然とする周囲の人をかき分けて、一行に手を振りながら登場した。

「マスク、もうしていいいんですね」

「ええ。こう暗ければ必要ないかと思つて。それに、みんなそれどころじゃないでしょうから」

「当たつたアタシはめっちゃドキドキしてますけど、当選してない人らはお祭りより輝夜さんの方が気になつてまうんどちやいますか？」

輝夜はきよとんとした顔をした後、からかうように和葉を見る。見つめられた和葉は、鼓動が耳の横で打ち鳴らされているのではないかと錯覚するほど、急激に心臓が脈打ち始めていた。

「あら、和葉ちゃんはこのことが気にならないの？　つれないことを言うのね」

くい、と白く細い指を顎に掛けられ、そのまま口付けるのではないかという至近距離で見つめる輝夜に、急激に血液が送られて茹でダコのように顔を赤く染める和葉。

「あ……アカーン！　何やつとんねん！　もう君恵さん出て来とんねんぞ！　始まんぞ

！」

二人の雰囲気に危機感を抱いたらしい平次が、スパーン、と和葉の頭を引っぱたく。彼はそのまま幼馴染の少女の両肩を掴んで、無理やりに滝の方へ体ごと向けさせた。

「怖いわね。緊張を和らげるための、ほんの冗談だったのに」

「輝夜さんがやると洒落になんねーよ……」

ぼそりと呟いたコナンの言葉は、輝夜の優れた耳には届いているはずだが、聞こえないふりを決め込むことにしたようだった。

時間になったのか、どこか張り詰めたような表情をしながら、君恵が松明と松明の間に立つ。ざわざわと騒がしかった人々も次第に口を閉ざし、聞こえるのは滝の音のみとなった。そこで、君恵が表情と同じく、緊張感を含ませた声をあげる。

「では、幸運を手に入れられたお三方、前へ」

その言葉に、正気を取り戻した和葉は手を上げて、うれしそうに———少しだけ輝夜の方を振り返ってポツと頬を染めたのち、ロープをくぐって前へと進み出た。

「アカン……和葉のやつ、完全に輝夜さんに惚れてもうてるやん……」

平次が複雑そうな表情で呟いたのを聞いて、輝夜はくすくすと笑う。それに対してさらに複雑そうな顔をしていた平次も、当選者三名が前へ出揃うと、その表情を引き締め

和葉の他には、黒髪でショートカットの女性と酔っぱらった中年男性が札を持って君恵の前に立っていたのだ。平次たちは知らないが、ショートカットの女性は、輝夜、蘭、和葉の三人が人魚について聞き込みをしていたときに、熱心に「命様」の不死の力について語っていた黒江奈緒子という女性である。

「変やな……てつきり、あの姉ちゃんが当たったんかと……」

寿美の反応から、てつきり当選したものと思っていた平次は、当選者の中に彼女の姿がなかったことを不審に思った。そしてそれは、コナンも同様だったようである。

「ああ……姿も見えねえし……」

そうこうしている間に、矢の授与が行われていた。和葉は一番最初に矢を授けられており、にこにこしながら胸に抱いている。

「お三方に、至福の光を！」

君恵の言葉と共に、火花が打ちあがった。見事な火花が何発か打ちあがった後、誰かが滝を指差した。

「おい、あそこに何か……!?!」

大きな音を立てて、滝から何かが落ちる。滝つぼに、水以外の何かが落下した音が響いた。いち早く反応したのは小五郎、コナン、平次の三人である。ロープを飛び越え、矢の授与が終わってこちらへ戻って来ようとしていた三人を過ぎ去り、滝つぼへ近づくと。

「人やー」

叫んだ平次の言葉を待たず、小五郎がコートと上着を脱ぎ捨て、滝つぼへと飛び込んだ。平次が和葉へ指示を飛ばす。小五郎に抱えられて陸に上げられたのは、ぐったりとした海老原寿美その人であった。彼女の足には古くなつた綱が絡まり、足首にはあざができていた。

「ツチ、息してねえー！」

小五郎が胸骨圧迫と人工呼吸を施すと、水を吐き出した寿美が息を吹き返す。ただし、ぐったりとしたまま、意識は戻らない。

「とつ、寿美!? 私の娘だ!! 寿美、寿美い!!」

騒然となつた人混みをかき分ける男性がいた。寿美の父親である。わあわああと泣きじゃくりながら、島唯一の医者 of 腕を引きながら娘のもとへ駆け寄つた彼は、「先生、寿美は……」と縋るような目をした。

「毛利探偵の処置が早く、適切だったんでしよう。無事に息は吹き返しています。ともかく、まずは診療所へ。毛利さんも、何かあるといけないので、一緒に来てください」

医者の指示を受けて、島の住民がそれぞれ動き出す。平次に指示されて福井県警へと連絡を取っていた和葉が、「来られへんって……」と困つたように、険しい顔をしている男性陣へと声を掛けた。

「何やと!？」

「海が荒れとつて、船が来れるようになるまでは、当分無理やつて……」

「まあ、寿美さんもとりあえずは生きている。目が覚めたら話を聞けるだろうし、意識が回復することを祈ろうじゃねえか」

「ずぶ濡れの小五郎がそう言うのと、蘭が近隣住民に借りていたタオルを差し出す。小五郎はタオルで申し訳程度に水けをぬぐいながら、「あとのことは任せたぞ」と言い、簡易担架で運ばれる寿美の後を付いていった。

「お祭りを続ける雰囲気ではなくなってしまうたわね」

「ぼつり。相変わらず騒然としたままの「人魚の滝」の前で、輝夜の眩きは妙に響いて聞こえた。本来、この儒艮の矢の授与が終われば町をあげた宴会が行われるはずだったが、祭りと関係あるなしに関わらず、事故があったとなれば、自粛する他ないだろう。

結局、寿美が意識を取り戻すか、「命に別状はない」と医師に判断されるか、そうなるから網本である彼女の父親の意見を聞いて宴会を行うかどうかの判断をしよう、ということになった。

「あら？ コナン君つたら、どこ行つたのかしら？」

「平次もおらへんし……まさか上に調べ行つてもうたん!？」

「止めた方がよかつたかしら？」

騒ぎの中で、居候の少年がいけないことに気が付いた蘭が心配そうに周囲を見回すと、同じように和葉もきよろきよろと幼馴染の姿を探し始めた。そんな二人に声を掛けた輝夜は、この場にそぐわずにこりと微笑む。

「え？ 輝夜さん、気が付いていたんですか？」

「ええ。コナン君と服部君、二人して崖の上を見つめたかと思うと、走り出していたわ。あなたたちはざわつく周囲に気を取られて気が付いていないみたいだったけど」

「こない暗い中、危ないやろ！ なんて止めてくれへんかったんですか！」

「止めたところで止まるとは思えなかったから……それに、すぐ戻ってくるわよ」

のんきにそう言い放った輝夜は、「大変なことになっちゃいましたね……」と呆然としているマネージャーへと向き直り「宿へ戻りましょうか」と声を掛けた。

「あなたたちも、よくお休みなさいね。これじゃあ沙織さんの家に案内してもらおうどころではないでしょうし、私は失礼するわ。また明日」

マネージャーを伴って歩き出した輝夜の背中へ、和葉がどこか失望したような視線を向ける。

「輝夜さんって、きれいやけど、冷たいねんな。学園祭のとき倒れた工藤君のことも、あんまり心配してへんかったみたいやし……」

「輝夜さんは新一の知り合いってわけじゃないし、あのときはコナン君の体調を気遣っ

てくれたのよ。いつもは子どもたちと遊んでくれて、人気モデルなのにそれを鼻にかけない優しい人なんだけど……」

「ほんなら『子どもにだけ』優しいとちゃうん？」

怒っているような、悲しそうなの、どこか悔しそうにも見える視線を輝夜たちが去って行った方へと向けて、和葉はトレードマークであるポニーテールをぶんぶんと揺らしながら、頭を振った。

「そないなことより、平次とコナン君や！ やっぱ、危ないんちゃう？ 追いかけた方がええかな？」

「夜の森は危険ですから、お二人はこちらで待っていてください。せめて地理に明るい私が……」

和葉の言葉に答えたのは、君恵だった。心配そうに眉を寄せる彼女の肩に、緑郎が手を置く。

「いや、オレが行く」

「緑郎……寿美について行ってあげなかつたの？ 許嫁じゃない」

「あんなの、親同士が決めただけだ。その両親も今はいない。関係ねえよ」

そう言い残して、緑郎は不機嫌そうな雰囲気のまま、夜の森へ消えていった。

ほどなくして、コナンと平次を伴った緑郎が滝つぼの方へと戻ってくる。その姿を見

て、和葉と蘭はほっとしたように彼らの名前を呼んだ。

「行くなら行くって言うてってや!」

「おお、すまん。しっかし、分かんのお……単なる事故にしては不審な点が多すぎるんや」

「かと言つて、祿郎さんが言つてたように、寿美さんが『人魚の墓』を探していて足を滑らせたのかもしれないって話も、なくはない……だよな? 平次兄ちゃん!」

ああでもないこうでもないという四人に加えて、祿郎と君恵を交えて話していると、「そうだ!」と突然コナンがひらめいたように声を上げる。

「君恵さん、お願いなんだけど……『命様』とお話しがしてみたいんだ。だめかな?」

「ええ、いいけど……今日はお祭りがあつて疲れているだろうから、あんまり期待はしないだね」

「うん! ありがとう! じゃあ、小五郎のおじさんには神社に来てもらうよう連絡しておくね!」

神社へと向かう道すがら、森で祿郎に話された内容を確認しがてら、探偵たちは「人魚の墓」や「人魚の遺体」について君恵に詳しい内容を聞いていた。

「人魚の遺体」には下半身の骨がなかったこと。倉が焼けてしまった火事は「儒艮の矢」が当たらなかつた観光客が腹いせに蔵へ押し入り、そのろうそくが出火原因だった

のではないかと言われていること。そのとき発見した「人魚の遺体」は無縁仏として、美
國神社で埋葬したこと。しかし、墓荒らしを懸念して「命様」が「信用のおける者」に
墓をこっそり移したため、寿美をはじめ、奈緒子や沙織など、人魚の存在を信じる者た
ちは探し回っていたようだということ。

「じゃあ、おばあちゃんを呼んでくるわね。私はお風呂の用意をしてくるから、みんなは
ここでくつろいでいてちょうだい」

神社に着いたころには、しとしとと雨が降り始めていた。軒先で君恵から傘を借りた
祿郎が自宅へと帰ると、君恵はコナンたちを住居へと案内した。こたつに入って温まり
ながら「命様」改め、島袋弥琴が来るのを待つ。中々姿を見せない弥琴にしびれを切ら
した様子の子平次が、「しっかし、古い家やのう。とても『儒艮の矢』で儲けてるとは思え
へんなあ」と家の中を観察し始めた。

「何言うてんの？ あのお札、一枚五円やで」

和菓の言葉に驚く平次に、蘭が説明を付け足す。彼女たちが島の人たちに聞いた話によ
ると、大きな箱に入った百八枚の番号札を並んで一枚ずつ引き、その中から三人の当
選番号を選ぶという形式は、五円という値段と共に昔から変わっていないらしい。

そんな話をしてしていると、コツン、コツン、と音が廊下の方から聞こえた。す、と開い
た障子の間、覗いた顔に誰かが——あるいは誰もが息を呑んだ。

「わしに用とは、うぬらのことか」

小さな老婆である。むろん、他の誰でもなく、化粧を落とした弥琴なのだが、しとしと雨の降る夜、古く薄暗い建物であることや、彼女が障子を顔の幅程度にしかなかったことが、より若者たちを驚かせた。平次に至っては、内心で（化粧落したら妖怪やん!）と失礼なことを考えている。しわがれた声で尋ねた弥琴にいち早く反応したのは、コナンだった。

「あ……あのさあ、矢がもらえる当選番号つて、どうやって選んでるのかなって思つて」
衝撃を隠し切れないままそう尋ねると、弥琴は「適当じゃ」と答え、「競馬の当たり番号じゃつたときもあつたかのう」と笑い出す。ほどなくして、君恵の「お風呂の準備ができたわよー」という声を聞き、弥琴は「大した用がないなら、わしは風呂に入つて床につく」と言つて、再び奥へと消えてしまった。

*

翌日「私の娘のことで昨晚はお騒がせして、申し訳ない」と、寿美の命に別状はないと判断され、目を真っ赤に腫らした寿美の父親の提案で、ささやかながら宴会が開かれることとなった。本来ならば網本である海老原家を中心として行われるはずだったが、

いろいろと大変であろうということで、美國神社が会場となり、君恵は忙しそうに動き回っている。巫女服ではなく、ベージュのニットにチノパンという動きやすそうな格好だ。

「あの……何かお手伝いしましょうか？」

見かねた蘭が声を掛けると、君恵は困ったように笑いながら「それなら、ちよつとこつちに来てくれる？」と、手招きした。

「観光客の人たちからお金を徴収してほしいの。お酒を飲む人は一人三千円、飲まない人は千五百円よ。お金を受け取った人には、このバッジをつけてあげて。島の人たちは自治会費から払っているから、みんな名札かワツペンを付けてるはずだよ」

集金のための袋と、青と黄色のバッジを渡され、蘭と和葉はしつかりと頷く。君恵はそんな二人の姿を見て、「頼んだわよ」と肩をたたき、神社の台所を借りて料理をしている島の女衆やら、酒を運んでいる男衆やらに指示を飛ばしに戻った。

「観光客はあんまおらんねんな」

「昨日でお祭りは終わるはずだったし、今日の船で帰っちゃった人も多いものね。本当なら夜店が開かれたり、多少催し物があったりするって聞いてたけど、今日はちよつとした宴会だけだし」

昨晩は荒れていた海だが、朝になると落ち着いたこともあり、観光客は早々に朝と昼

の連絡船で帰って行った。ちなみに、寿美の件を捜査してほしいと言われていた福井県警の面々も、既に到着している。

「まあ、残念やけどしやあないかあ。事故は気の毒やけど、寿美さんの命が助かってほんまよかつたわ」

二人が集金を続けていると、「お手伝いかい？」と、輝夜のマネージャーが声を掛けてきた。撮影スタッフと思われる人々も一緒に、ちよつとした人数である。誰もかれも人当たりのよさそうな人物であるため、蘭も和葉も特に緊張はしなかつたが。

「はい。君恵さん、大変そうだったので」

「平次たち、みいんな事故のこと調べる言うて、どつか行つてもうたから。アタシらだけでも言うて、声掛けたんです」

「えらいなあ。お金、君たちに払えばいいんだよね？　これ、輝夜さんの分も」
「まいど」

マネージャーからまとめてお金を受け取った和葉は、その「輝夜さん」がいないことに首を傾げる。

「輝夜さんはどないしたんです？」

『『気になることがある』って出掛けちゃったから、今頃は毛利探偵たちと合流しているかもね』

人当たりのよい笑みを浮かべるマネージャーに、女子高生たちの好奇心がむくむくと膨らんでいった。「カグヤ」ファンなら、このマネージャーが輝夜を芸能界に引き入れたことは誰もが知っている。

というのも、公的な場での発言は一切していない「カグヤ」であるが、プライベートな場や、所属事務所内では「彼がいなければ芸能人になろうとも思わなかった」と断言しているのだ。そのため、芸能関係者が週刊誌などの取材で、『カグヤ』の芸能界入りは敏腕マネージャーのおかげ」と答えており、広く知られていたのである。

蘭たちは、マネージャーとは直接の知り合いではなく、輝夜といるときに一緒に会う機会しかなかった。しかし、今は輝夜はおらず、そのマネージャーおよび撮影スタッフのみ。輝夜がいるとのらりくらりとはぐらかされてしまいそうなことも、マネージャーだけであれば聞き出せるかもしれないと思うのは自然なことだろう。

「聞きたいんやけど、輝夜さんって、普段どんな人なん？　きれいな人やけど、冷たい人なんかなーって、アタシは昨日思うてしまったんですけど」

「え？　輝夜さんは優しい人だと思うけど……」

眉を寄せたマネージャーに、周囲のスタッフも同意する。

「なんで冷たいって思ったの？」

「アタシ、学園祭のときも輝夜さんとおったんですけど、そんなとき、蘭ちゃんの恋人が倒

れてしまうたんです」

「ちよつと、和葉ちゃん！ 新一はただの幼馴染だから！」

「でも、なんも心配せんと帰つてもうたし……今回も、事故に遭うた寿美さんと、アタシら顔見知りやつてん。なのに、やつぱり心配した様子もないやんか。おまけに、平次とコナン君が夜の森に入るの見てただけで、止めてくれへんかったんです」

蘭の抗議を無視して、輝夜への不満を伝えた和葉に、マネージャーは困つたように笑つた。

「輝夜さんはさつぱりした性格の人だし、判断力もあるから、自分が出した答えに自信を持つてるんだろうね。だから、昨日も学園祭のときも『心配するほどじゃない』って、輝夜さんの中で何か判断する材料があつたんじゃないかな」

「いやあ……この人の言うことが全部だとは思わないけどね」

スタッフの一人がにやりとしながら、和葉の言葉に答えたマネージャーを肘でつつく。

「傍から見てても、カグヤさんはこの人にだけ甘いつていうのが丸分かりだからね。鼻舐されてる身からすればそうかもしれないけど……そうでない立場からすれば、カグヤさんは他人と自分の線引きがかなりしつかりしてるんだと思うな」

その言葉に、スタッフたちがわいわいと盛り上がる。「カグヤさんの優しさは『平等な

優しさ』だよな」「美人なのを全然鼻にかけないけど、そういうところも含めて淡々としてるというか」「あの美しさでしかも優しいってだけで奇跡の存在だけどね」等々、口々に「カグヤ」に対する己の印象を語り始めた。

「あの、気になったんですけど……マネージャーさんだけに甘いつてどういいうところですか？」

「他のやつらが船酔いになつてもお見舞いには行かないけどこの人のところにはお見舞いに行くし、噂では社長のお願いは聞かなくても、この人からのお願いなら聞くらしいし」

「いやいや……そんなことないですよ。お願いしたところで、断られることだってありますし。輝夜さんは『頑張ってる人が好き』だから、僕の頑張りを評価してくれてるのかも」

蘭の質問に対し、スタッフたちから茶化すような視線を向けられたマネージャーは、眉をハの字にして頬をかく。

「えー！ 俺らだつて頑張ってるっつーの！」

「いや、そうなんですけど……何というか、輝夜さんって『できないだろうと思つてたのに、できた』とか、そういうのが好きなんだと思うんですよ。こういう言い方すると誤解を与えるかもしれないですけど、『人を試すのが好き』というか……。僕の場合、輝夜

さんをスカウトしたときに、多分絶対できないって思われてたことが、運よくできちゃったので……」

困り顔のマネージャーは、ついに「じゃあ、僕は輝夜さん探してこのバッジ渡してきます！」とその場を離脱してしまった。ぽかんと口を開けて、マネージャーの逃げ足が意外と速いことに驚いていた蘭と和葉だったが、それからはスタッフに撮影の裏話や、輝夜とマネージャーについてなどの話を聞いて盛り上がっていた。

さて、そんな噂になっていることはつゆとも知らない輝夜は、宴会が始まる時間に合わせて美國神社まで来た。偶然マネージャーが宿へ戻ったときに輝夜も戻ってきたらしく、バッジはすぐに受け取れたそうだ。モックネックのピンク色のニットに、黒のスキニーパンツ、昨日と同じスニーカーを履いて、今日もカジュアルな装いである。髪の毛はニットと同じ色のリボンを使ってローポニーでまとめめてあり、いつかのように伊達眼鏡を掛けていた。

「輝夜さん、今まで事故の調査をしていたんですか？」

「いいえ。どうして？」

にこやかに話し掛けてきた蘭に、輝夜もにこりと微笑みながら問い返す。

「てつきり、お父さんたちと一緒にいたのかと……」

「『命様』について話を聞いていたのよ。あまりに熱心に信じている人がいるみたいだから」

「何か分かりました？」

「——まあ、話を聞いていても、私は『命様は不老不死ではない』って結論に至ってるから。新たに分かったことと言えば、特にないわね」

馬鹿にするでもなく、嘲るでもなく、落胆するでもなく。輝夜は淡々と、いつもの笑みを浮かべてそう告げた。

宴会が始まると、調査に出掛けていた男三人も神社へとやってきて、食事を楽しんだ。小五郎は輝夜と酒を飲めることがよほどうれしいらしく、だらしなく表情を緩めながら、あれやこれやと過去の事件を誇らしげに語っている。

「お父さんったら……」

「まあまあ、しゃあないって。それにしても、君恵さんは宴会が始まってもずっと忙しうやな。蘭ちゃん、アタシらもうたくさん食べたし、また手伝いに行こか？ 平次、あんたも手伝わんかい！」

「うるっさいのう……寿美さんもまだ目え覚まさへんし、一日中調べてたんやで？ ゆっくりさせろや」

「アタシらから、一日君恵さんの手伝いしてたつちゅーねん。ええから、こつち！」

ぐい、と和葉に腕を引かれ、平次が面倒くさそうな顔をしながら立ち上がる。コナンは良い子の笑顔をはりつけ「それならボクも！」と自ら手伝いを志願した。

四人が君恵のもとへ向かうと、それに気が付いた彼女はうれしそうに微笑んだ。

「あら、みんな！ 楽しんでくれてる？」

「もちろんです。でも、君恵さんは忙しくて楽しむ暇もないんじゃないですか？ 私たち

ちに行けること、ありますか？」

蘭が声を掛けると、君恵は申し訳なさそうな顔になる。今日は巫女服姿ではないため、私服でいると、四人にとつてはより「人のよいお姉さん」という感じが顕著だった。「あれ？ 君恵さん、さつきと服装ちやうけど、どないしたんですか？」

午前中はベージュのニットを着ていた君恵が、薄い青色のニットに白いハイネックを合わせているのを見て、和葉が首を傾げる。

「ああ、これ……さつき、酔っぱらったおじさんにお酒をひっくり返されちゃって。着替えに行ったら、沙織がうちに泊まっていくときの置き着替えがあったから、着てみたの。沙織だったら、お祭りでも姿を見せないし……宴会だったら、多少は顔を見せやすいかと思つて。私が沙織の服を着ていれば、こつそり声を掛けてくれるかもしれないしね」

「そういうえば、奈緒子さんも見てないね。『儒艮の矢』が当たったのに、こういう宴会には顔を見せないタイプなの？」

コナンがそう尋ねると、「そういえば……」と君恵は口元に手を当てた。

「バタバタしててそれどころじゃなかったけど、私も見てないわね。禄郎ならお酒の運搬とかを手伝ってくれたんだけど。矢を失くしたって怯えてた沙織はともかく、奈緒子だったらどこへ行っちゃったのかしら？」

君恵は「奈緒子を見掛けたら、ちよつとは手伝いなさいよって言っておいてくれる？」と四人に笑い掛け、それから「そうそう、手伝いをしてくれるんだったわね」と手を打ち、話題を元に戻した。

「そろそろお天気もくずれそうだし、もともと簡単な宴会にする予定だったから、今あるお料理とお酒で終わりってことをみんなに伝えてほしいのと、ついでにごみの回収も頼めるかしら？」

君恵の言う通り、蘭たちがごみを回収し始めてほどなくして、遠くから雷の音が聞こえてきた。事故のことも忘れて宴会を楽しんでいた者たちは、せかせかと片付けと帰り支度を始める。

「おーい、蘭ちゅわーん！ 帰るぞお！」

「もう、お父さんっ！ 恥ずかしいからやめてよ！」

酔っぱらって肩を組んでくる父親に対し、迷惑そうな顔をしている蘭は、隣にいる輝夜がいつもの笑みを消して、雷の鳴る方角へと目を向けていることに気が付く。

「雷、ちよつと怖いですよね……酷くなる前に、早く帰らないと」
「ええ、そうね」

蘭の方へと顔を向けた輝夜は、いつもの笑みを湛えていた。まるで先ほどの表情が何かの見間違いだと思えるほど、その笑みは「いつも通り」である。

「輝夜さん、お酒強いんですね。うちのお父さんなんて、ご覧の通りなのに……」
「うふふ。楽しく飲めるなら、それに越したことはないと思うわ」

輝夜は酒を飲んでいたことなど微塵も思わせない「いつも通り」の様子のまま、マネージャーに声を掛けられて宿へと戻っていった。一方、雷がひどくなってきたこともあり、べろんべろんに酔っぱらってしまったている小五郎を神社で少し休ませてもらうことから宿に戻ろう、ということになった一行は、君恵の片付けを手伝い終えた後、こたつに入つて雑談をしていた。

「えつ、誰が何番の札を持っていたか分かるの？」

「ええ、名簿があるのよ」

「ほんなら、和葉以外の二人が『ほんまに当選してたか』が分かるんちゃうか？」

「こつちが去年までのものよ。ふふ、『儒艮祭』にはけつこう有名人もたくさん参加してくれてるの。……おかしいわね、今年の物がないわ」

君恵は話題に食いついてきたコナンと平次に、しゃがんだ姿勢のまま数冊の名簿を手

渡しながら、眉を寄せて今年の名簿を探し回る。

「あのばあさんが、持ってたんとちやうか？」

「そんなはずはないわ」

平次の言葉に、君恵は穏やかな顔に戻ってそう答えた。雷は相変わらず轟いているが、それよりも小五郎ののんきないびきのおかげで、おどろおどろしい雰囲気は特にな

い。
「そこに置いてたの、他に知ってる人は？」

「島の人なら、ほとんど知ってるわ。今日は神社にたくさんの人が出入りしたから、誰かが話の種に持ち出してしまったのかも」

立ち上がりながら、君恵はさほど困っていない様子で言う。

「念のために、他の部屋も探してくるから、あなたたちはここでゆっくりしていつてね」

「それなら、手伝います」

「アタシも」

「あら、いいわよ。今日はずっと手伝ってもらってばかりだし……家の中をぐるっと見たら戻るから」

さらにと断られてしまった女子高生たちは、君恵を見送ると、手持ち無沙汰な様子でこたつに戻った。

「おーおー、おるでおるで！ 二元外務大臣に官房長官に日銀総裁！ みんな長生きしたいんやなあ」

平次が過去の名簿を見ながらそんな感想を漏らすと、興味を持ったように和葉がこたつから出て、平次の持つ名簿を覗き込んだ。

「ほんまや！ アタシでも知ってる名前がぎよーさんあるで！」

わいわいと盛り上がる関西組を他所に、蘭はコナンの持つ名簿を覗き込む。

「すごいね……毎年こんなたくさんの人が『儒艮の矢』を求めるんだね。一から百八まで、全部売れちゃうんだもん」

「そうだね」

相槌を打ちながら、コナンは名簿に見覚えのある名前を発見した。

（宮野志保？ 確か、あいつの本名もそんな名前だったような……）

頭の中に、特徴のある赤茶の髪をもつ友人を思い浮かべる。しかし、彼女の性格からして不老不死を求めようなタイプではないと考え、人違いだと判断した。

わいわいと名簿を見ながら盛り上がっていた四人だったが、君恵が戻ってきたため、それまでの話題を打ち切って「どうでした？」とそれぞれ声を掛ける。同じタイミングで口を開いてしまった若者たちは、少し照れくさそうに顔を見合わせていた。

「それが、どこにもないの。やっぱり、誰かが持つて行ってしまったのかしら？」

首を傾げた君恵は、自分の携帯電話が震えていることに気が付き「ごめんね」と声を掛けて電話に出た。

「うん。……いいわよ。仕方がないわね。じゃあ、今から行くから」

ピ、と電話を切った君恵は、寝ている小五郎を除いた四人に「奈緒子から呼び出されちゃったから、私、もう少し席を外すわね」と申し訳なさそうな顔を向ける。

「奈緒子さんから？」

「ええ……沙織を見たって言うんだけど」

「沙織さんを!？」

「ほんまかいな!？」

コナンと平次が名簿を取り落としながら立ち上がると、君恵は神妙な顔で頷いた。

「ええ。お祭りが終わって、神社の周りをうろついてたら見つけたって……」

「なんのために？」

鋭い視線のコナンに、君恵は「それは私も分からないわ」と答えながら、障子に手を掛けた。

「私、行ってくる。あなたたちは……」

「オレらも行くで！　なあ、くど……やのうてコナン！」

「そんならアタシらも！」

「アホ、外は雷や！　じつとしとけ！」

「じつとしてられるわけあらへん！　一緒に行く！」

口論になりかけた二人を、君恵が「それなら」と普段よりは少し大きな声を出して制する。

「あなたたちは二人で境内の方をお願い。蘭ちゃんたちは……そうね、もしも毛利さんが一緒に来れそうなら、一緒に来てもらつて。さすがに敷地内とはいええ、こんな天気で、しかも夜に保護者なしで小学生を出歩かせるわけにはいかないから」

「は、はい……お父さん、起きて！　沙織さんを探さないで！」

部屋を出て行った君恵と、わいわい言い合いながらそれに続く平次と和葉へもどかしそうな視線を向けたコナンは、一人のんきに眠る小五郎の耳元で「おじさん！」と大声をあげた。

「起きてよ！　奈緒子さんが沙織さんを見つけたつて！　ねえ、起きてつてば!!」

「うるせえなあ……」

もにもよもによと動き出そうとしない小五郎に対し、蘭がこたつの天板を軽く殴りつける。天板が破損しないように、ほんの軽く。

「お父さん……？　一大事なのよ、こっちは！」

「ひゃ、ひゃい！　すみません！」

しかし小五郎に対して効果は絶大だったようで、飛び起きた彼は「トイレだけ寄ったら！」とバタバタしながら廊下を走っていった。

君恵と平次、和葉の三人に遅れて、コナン、蘭、小五郎の三人も雷の鳴り響く美國神社を走り回った。そんな中、まるで全ての生き物をひれ伏させんとばかりの一際大きな雷が轟く。

「ね、ねえ、お父さん……空、明るくない？」

雷の鳴った方を振り返った蘭は、発見してしまった。

「蔵の方だー！」

消防隊はすぐに神社へ集った。宴会に参加していた島の消防隊員たちの酔いはすっかり醒めきり、誰もが必死な表情で、燃え続ける蔵の消火活動を行っていた。

「奈緒子さん!？」

蘭が悲鳴のような声をあげる。蔵の中から出てきたのは、ひどいやけどを負った黒江奈緒子その人だった。

「ヤ……沙織……沙織、が……」

呻くように、行方不明中であるはずの幼馴染の名前を呟いた奈緒子は、すぐに診療所へ救急搬送された。

夜空を照らす炎が、降り注ぐ稲妻が、異様な雰囲気醸していた。静けさとは程遠い

夜、月も星も見えない明るい夜。

——人魚を追い求めた者たちは何を見て、何を掴み、何を失うのか。
夜。焼け焦げた蔵の残骸に、また一つ、光の筋が落ちた。

新難題：ミステリウム

奇跡的に一命を取り留めた奈緒子は、意識の戻らない寿美と共に本土の病院に搬送されることとなった。同時に、寿美の件でも通報を受けていた警察が、本格的に捜査を始めた。捜査の中で、一晩中燃え続け、全焼した蔵の中からは一体の焼死体が発見される。青い服を着ていたらしいことが分かったため、コナンや平次の提案によって、本土の歯医者に連絡し、遺体の歯の治療痕を確認してもらったところ——焼死体は君恵であることが発覚した。

「嘘だ……嘘だ！　嘘だあ!!」

膝を付き、痛々しいほどの叫び声をあげた碌郎に、コナンや平次たちも表情を険しくする。犯人を絶対に許さない、そう胸に誓った。

それから、神社に掛かってきた奇妙な電話を蘭が取ったことにより、沙織の父親である弁蔵の不審な点が浮き彫りになり、平次とコナンは二手に分かれて捜査し始めた。平次は宴会を取り仕切っていた代表者や、参加していた島の人々のもとへ聞き込みへ、コナンは沙織の家へそれぞれ向かい、互いの携帯電話へと、逐一連絡を入れる。

「……服部、今からオレの推理を話す。聞いてくれ」

電話口の平次が思わずたじろいでしまうほどの、真剣な声だった。小五郎や蘭、それから沙織の家の鍵の場所を教えてくれた碌郎の目を掻い潜り、コナンが電話の向こうの平次へと導きだした「真実」を語る。

「アホオ！ そんなわけあるかい！ オレは絶対信じひんぞー！」

「服部、不可能なものを除外していつて、残ったものがたとえどんなに信じられなくても……それが真相なんだ」

たしなめるような口調のコナンに、平次は「なんやとお！」と噛み付くように声をあげた。家から家へと、弁蔵さんの行動について聞き込みをしていた平次は、その道中、悔しそうに空いていた拳を握る。

「あら、喧嘩かしら？」

砂浜近くで電話をしていた平次のもとに、鈴の鳴るような美しい声が掛かった。

「輝夜さん……」

振り向いた平次と和葉が同時に彼女の名前を呟く。美しい微笑みに憂いを少しだけ滲ませた輝夜は、「君恵さん、亡くなったと聞いたわ」と静かに言った。

「せやねん。君恵さん……奈緒子さんに『沙織さんを見た』って呼ばれて、探しに行つてもうたんです。アタシらが一緒について行つてれば、こんなこと……」

和葉が目には涙を滲ませながらそう言うと、輝夜はぼん、とその頭に手を置いた。

「一緒に来たあなたたちに何かあった方が、彼女は心を痛めるんじゃないかしら」
「輝夜さん……アタシ……」

ぼろぼろと涙を流し始める和葉の両肩に手を置いた輝夜は、やわらかな笑みを浮かべる。

「和葉ちゃん。生きることは苦しいかしら？ それとも、よろこびに満ちているかしら？」

「へ？」

「死ぬことは恐ろしいかしら？ それとも、解放なのかしら？」

言葉を重ねる輝夜は、和葉をじっと見つめた後、平次の方を向く。

「あなたは？」

「……そんなもん、自分次第とちやいますか」

輝夜は目を伏せ、それからもう一度、平次の顔をじっと見た。

「私、君恵さんとも同じ話をしたわ」

「なっ!?!」

「人の命とは儚いものね。それだけでなく……大抵の人の心は、とても脆いわ」

和葉の肩から手を離れた輝夜は、海の近くへとゆったりと歩きながら、どこか遠くを見ている。ザザン、と大きな音を立てて波が押し立ては引く中、輝夜は潮風に黒髪を遊ば

せながら、ふつと笑みをこぼした。

「服部君。迷いがあるなら行動することをおすすめするわ」

そう言つて、彼女は海沿いをゆつたりと歩いていつてしまった。呆然とした表情の平次は、やがて覚悟を決めたように口を引き結ぶ。

「!? 平次、どこ行くん!?!」

「こーなつたら、納得いくまで調査や、調査!」

「ちよお待つて! 平次!」

ポニーテールを弾ませながら、和葉はずんずんと歩く幼馴染を追い掛けた。

*

君恵の通夜や葬式は開かず、家族——たった一人の肉親である自分だけで彼女を弔う、と弥琴は自分の意向を蘭や祿郎など、周囲にいた人々に伝えた。そういう理由もあつて、小五郎に神社まで呼び出された島の人々は、せめて弔意を示したい、ということとで全員が喪服を着用していた。

島の人々と同じく呼び出された輝夜は、急遽用意した喪服に身を包みながら、眠つているように見える小五郎の正面に座つた。その直後、大きな音を立てて障子が開かれ、

警察が相も変わらず酔っている様子の弁蔵を連れてくる。

「おや……大阪弁の少年はどうしました？」

小五郎の声と共に、コナンの声も聞こえた輝夜は、そのからくりのすぐ近くに気が付いた。学園祭のときに、灰原がコナンに変装したのと同じことを、この少年もやっているのだらう。ただし、こちらの場合には小五郎が本物なので、彼が眠っている隙に、コナンが「名探偵毛利小五郎の口から伝えるべきこと」を伝えているようだが。

「大阪弁の少年？　少し話をしたが、それ以降は見えていないが……」

「そうですね……」

返事をした「小五郎」はしばらく待つように、と座っている者たちに告げた。ちなみに、輝夜はコナンに島以外の者で一人だけ呼ばれたのだが、「眠りの小五郎の推理ショーが見れるかも！」と人が亡くなったにも拘らずのんきなことを言っていたスタッツたちは何人かついてきている。

警察がしびれを切らしたところに、蘭が弥琴を伴って部屋に入ってきた。弥琴は輝夜の隣に座り、蘭はそんな弥琴の隣へと腰を下ろす。島の人々はどよめきながら「なぜ『命様』が……！」と口々に発言していたが、それに反応することなく、「小五郎」は「では、役者も揃いましたので」と語り始めた。

ひとつひとつ、「小五郎」は今回の事件について丁寧に説明していく。

寿美は事故ではなく、「誰か」に滝つぼへ落とされた。本土の病院で詳しく検査を受けた結果、彼女の体からは睡眠薬の成分が検出されたことが分かっている。さらに、彼女の衣服からは水で流れ落ちなかったわずかな土の汚れがあり、現場には「何かを引きずったような跡」も残っていた。事故で足が危険防止の綱に絡まって落ち、身動きの取れないまま綱が切れて滝つぼへと落ちたのなら付着するはずのない場所についてたその汚れと、地面に残された跡は、彼女が森の中で眠らされた後に古い綱で足を縛られて杭で固定され、ひもの着いた浮き輪を使って滝の手前に流された証であるとのことだった。

浮き輪が寿美を川の中腹に運ぶと、犯人はすぐに浮き輪についたひもを引つ張って回収し、森の中に捨てた。事件後すぐのタイミングでは、暗かったことと、平次とコナンを祿郎がすぐに迎えに来たことで、地面に残された跡だけが「事故ではないかもしれない」と手掛かりであったが、その後の調査で現場近くに、割れて空気の抜けた浮き輪が捨てられているのを発見し、「小五郎」たちは事故ではなく事件であるという認識を持った。そうだ。寿美への犯行は、溺死か、綱が切れたときに滝つぼへの落下したときの怪我を狙ったものだろうと説明された。

また、第二の事件である蔵の全焼についても言及した。寿美同様、死には至らなかった奈緒子の頭には殴打された跡と、腕や胴体には縛り上げられたような跡、顔には猿ぐ

つわを嘯まされた跡があった。これは焼ける蔵から逃げられないようにするためであり、凶器は燃えて残らなかつたことから木の棒か何かであろうということも付け加えられる。そうして、昏倒させた後に腕や胴体を縛り上げて放置した。おそらく犯行時刻は神社に人が集まる、宴会の前であると推測される。急遽決まった宴会でバタバタしている中、誰も用事もなく、施錠もされていて境内からは少し離れた場所にある蔵などには立ち寄らない。「儒艮祭」そのものであるならともかく、ただの宴会に必要な物は蔵になどなく、島の人たちで持ち寄つたり、君恵と弥琴が居住スペースから貸し出したりしていたからだ。

「も、もしかして、犯人は……!」

声を上げたのは、輝夜の撮影スタッフの一人だった。

「か、カグヤさんなんじゃ……!? おかしいと思つてたんだ、島の人でもないのに、一人だけ呼び出されるなんて!」

「カグヤさんがそんなこと、するわけないだろ!」

「でも、こんなに目立つ人なのに、たまにふらつといなくなつてただろ! まるで人目を避けるように……!」

「いい加減にしろよ! カグヤさんが何のためにそんなことするんだよ!」

「そうですよ、カグヤさんはそんな人じゃありません!」

スタッフだけでなく、島の人たちも、ついでに警察も巻き込んで騒ぎ始めた周囲を見て、輝夜は深いため息を吐いた。その挙動ひとつで、しん、と静寂が落ちる。

「それで、『毛利さん』の見解はどうなのかしら」

「当然、犯人は輝夜さんではありません」

「小五郎」が落ち着いた声でそう答えると、安堵したようにほつと息を吐く音が聞こえた。最初に騒ぎ立てたスタッフは、土下座をする勢いで、輝夜に向かって「失礼なこと言つてすみません！」と頭を下げている。輝夜は「気にしていないわ」と、さらりと返事をしていた。殺人犯に仕立て上げられそうになったというのに、淡々とした寛大な態度を取ったことで、謝ったスタッフは彼女のことを拝み始める。そんな彼らに注目が集まる中、隣にいた蘭は、安堵の息が弥琴からも同様にこぼれていたことに気が付いたが、特に不自然なことではないと感じ、視線を「小五郎」へと戻した。

「犯人には迷いがあつたんでしよう。だから、殺したところを見届けずにその場を去った。犯行の手口から、周到さが見える犯人が、三件中二件も殺人未遂で終わらせたのは『ミス』ではなく、あえてだと私は判断しました」

「それなら、やつぱり沙織が、幼馴染を殺すのを躊躇して……!?!」

「いいえ、沙織さんでもありません。なぜなら沙織さんは、既に亡くなっているからです」

「祿郎の言葉に、「小五郎」は極めて冷静に返答した。それから、蔵で見つかった遺体は君恵のものではなく、沙織のものであることを補足する。本土へ齒の治療に行ったのは、本当は君恵ではなく沙織であったこと、自分の保険証を使わせるために、君恵が沙織の保険証を隠したこと、君恵の保険証を使用するために、沙織は君恵の名で治療を受けたこと。そして沙織を殺害し、蔵ごと焼くことで、死んだのは君恵自身であると錯覚させたこと。

「そしてその蔵には、宴会で忙しくなる前に呼び出し、捕えておいた奈緒子さんもいた」
つらつらと、探偵は犯行現場の不審な点、怪しいと思われていた弁蔵や祿郎——ついでに輝夜などが犯人から除外される理由を述べていく。弁蔵は宴会に乗じて神社から名簿を盗み去ったが、それは偶然拾った寿美の番号札を自分が手に入れたことで疑いを掛けられるのを避けようとしたためであった。ついでに、手に入れた矢は沙織が失くしたと思っていた矢と同様、誰かに高額で売りつけるつもりだったようだ。

「小五郎」の推理が進むと、人々は「この場にいる」と探偵が宣言する君恵を探し始めた。輝夜はすつと目を細める。それは笑みではなく、何かをよく見ようとするとする人がそうするのと同様で——しかし、彼女がやるとぴりりと緊張感が走るような、そんな仕事だった。

「そう、犯人は——『命様』、あなたです！」

宣言と共に、部屋にいた全員が老婆を見る。しかし、誰の目にもそれは老婆としか映らない。「そんな馬鹿な」と震える声で言う禄郎に、「小五郎」は映画で金賞を取るほどの君恵の特殊メイクの腕前や、「命様」が素顔で人前に出ないことを挙げて、実在する人物に成り代わるよりも格段に難易度が下がることを説明した。

「思い出してください……三年前の火事で燃えた蔵から発見された、奇妙な遺体。本来、足があるべきところにその骨がなく、島の人々から『人魚の亡骸』と呼ばれたあの焼死体……あれはおそらく、足を折り曲げ、ひもか何かで固定したまま焼け死んだ女性……あたしの推理が正しければそれは君恵さんの……」

「母さんよ」

可憐な声だった。老婆から発されたとは思われぬほどの、透き通り、張り詰めた声。ぱちん、ぱちん、と衣服をめくったその中にある、足を固定していた金具を、慣れた手つきで外していく。

『命様』の役をおばあちゃんから引き継いで、島の人のために一生懸命演じ続けた……」立ち上がった老婆は、息を呑む人々を意に介さず、まっすぐに「小五郎」を見て、あらゆる感情が湧き出ようとするのを堪えるように、力強く言った。

「憐れな女の……成れの果てよ！」

それから、ゆつくりとそのしわくちやに見える手を、己の顔へともっていく。ペリ。

そんな音は、ゆっくりと、連続して、彼女の正体を露わにしていた。

「よく分かったわね、探偵さん……。このメイク、けっこう自信あったのに」

はがした面の皮をかつらごと脱ぎ捨てた君恵は、まとめた髪を解き、首や手のメイクもはがしてゆく。その表情は、どこか晴れやかにも見えた。彼女は蘭の質問に答える形で、「命様」に化けながらも、君恵と同一人物だと思わせないからくりを語った。

「でも……なぜだ、君恵！ あの三人は仲の良い幼馴染だったじゃないか！」

禄郎が、「命様」から君恵に変装を解いた姿を目の当たりにして、それでも「信じられない」といった表情のまま問うと、目を伏せた君恵はゆるやかに頭を振った。

「母さんの敵討ち……幼馴染なんて関係ないわ」

君恵は、三年前の真相について語り始める。祭りで矢が外れた腹いせに、「命様」に扮した君恵の母親が蔵に入って行くのを見て、「本当に不死の体かどうか試してやる」と言つて三人が放火したこと。一週間前、矢を失くしてパニックになった沙織が言うまで、知らなかったこと。君恵の母は、「命様」に徹した方がやりやすいからと、五年前に海で行方不明になったことにしていたこと。

「炎の中……母さんはこう言ったのよ。『君恵……あとは頼んだよ。母さん、この島が好きだから……命様を、命様を殺さないで』って……！」

しかし、放火をした三人——少なくとも、沙織に反省の色は見られなかったという。

矢を失くして怯えた沙織は、君恵に「代わりの矢をくれないなら、人魚の墓の場所を教えてください！」と詰め寄り、自分も『命様』のように、炎に包まれても平然と生きている、不死の体になりたい」と言ったそうだ。

「許せなかったのよ……寿美も奈緒子も……！ 呼び出すのは、簡単だったわ……『祭り』で矢が当たったら、墓の場所を教える』って言ったら、二人とも目の色を変えていたから……あれは母さんの……私と二人つきりで頑張っていた、母さんのお墓なのに……！」

目に涙を浮かべながらそう言った君恵の言葉の後、障子が開く音が聞こえる。

「二人つきりやないで」

平次だった。なぜか体をぼろぼろにして、手からは血を流した姿で、障子にもたれかかる。

「この『命様』のからくりを知ったやつは、他にもおったんとちゃうか？」

「えっ」と君恵が声を漏らすと、平次は「君恵さんが死んだら祭りは終わりや言うてた、そこのじいさんとか！」と、気まずそうに目を逸らす老人たちへ視線を向けた。

観念したように、島の人々は「若い者たち以外はみんな知っていた」と告げ、君恵に向かつて次々に頭を下げ始める。

「う、嘘……！」

立ち尽くす君恵に、島の人々は三年前に火事で亡くなったのが君恵の母親だということも分かつており、「祭りはもう終わりにしよう」と言おうと思っていたが、神社を訪ねたら「命様」の姿で出てきた君恵を見て、言えなくなってしまうた、と語った。それから再度頭を下げ、島のためとはいえ黙っていたことを、口々に謝罪した。

「そ、そんな……それなら、どうして……」

ふらついた君恵を、輝夜は立ち上がり、抱きとめるようにして支える。

「……輝夜さん、ありがとうございます。私のせいで誤解されそうになって、すみません。あなたは——私に、殺人を思いとどまらせてくれたのに」

「そう、そこが不思議だったんです」

静観していた「小五郎」が声をあげた。頭を下げていた人たちも、ゆるやかに顔をあげ、再び注目の的となった輝夜を見つめている。

「君恵さん、あなたは『幼馴染なんて関係ない』と言いました。それならなぜ……寿美さんと奈緒子さんの二人を、殺さなかったんです？」

「殺すつもりでした。三人とも、絶対に許さないと、そう思っていましたから」

君恵は輝夜へと視線をやり、それからそつと手で彼女の体を押し、一人で立つ。輝夜は口を出す気はないらしく、黙って優雅に腰を下ろした。

「祭りの前に、輝夜さん、私に声を掛けてくれたんです。私があまりに思い詰めた表情を

していたから……」

ぼろり、と溜まっていた涙をぼろぼろとこぼしながら、君恵は嗚咽交じりに言葉を紡ぐ。

「全てを見透かすような目で……こう言つたんです……『人はなぜ不老不死を求めのかしら』って……」

鼻をすすりながら、涙をぬぐいながら、君恵は隣に座る人の、この世のものとは思えない絶世の美貌を見つめた。見つめ返してきた深い赤茶色の目は、一見優しげに見えるのに、決して底の見えない深淵のようである。

「生きることは苦しみか、よろこびか。死ぬことは、恐怖か、解放か。そんなことは、死んで生き返りでもしない限り、誰にも分からない。『生きて死ぬ』ことが人間の定めであるなら、苦しみの果てで『死ぬ』ことと苦しみを抱え続けて『生きる』こと、どちらがより恐ろしいことなのかしらね、って」

輝夜は笑わなかった。周囲の人々は、彼女が少しだけ目を伏せたことで、作り物めいていて現実離れた美貌の人が「生き物であることは知っているはずなのに」、今初めてそのことに気が付いたようにハツとした表情を向けた。

「だから、私、『運命』に委ねることにしたんです。私は憎い人たちを『殺した』——あえて、生き残る余地を残して。死んでいなくても、『殺した』つもりになって、それであ

の人たちが助かったなら、それでもいいって、そう思うようにしたんです。輝夜さんは、私が人を殺そうなんて思っていないかったと思いますけど……」

輝夜が口を開きかけたその時、碌郎の携帯電話が鳴った。電源を落とし忘れていたことを思い出した彼は、着信画面を見て、寿美の父親からであることに気が付く。

「どうぞぞ」

まるでこの神社の家主——あるいは祀られる神のように、誰よりも堂々とした輝夜がそう言ったことで、彼は電話を取った。

「な、なんだって!？」

それから、悲鳴のような叫び声をあげて、しばらく電話口で語られる事柄に耳を傾ける。やがて通話を終了した彼は、耳をそばだてていた周囲の人へ向けて、力ない声で言った。

「寿美も奈緒子も、目を覚ましたそうだ……」

喜んでいいのか複雑な空気が流れる。喜ばしいことであるはずなのに、その二人が人を殺めたことで君恵を追い詰め、殺人未遂をさせてしまったという真実が、誰の心にも重くのしかかっていた。

「二人とも、正気を失っているらしい」

ぼつり。碌郎がさらに、眩くように言った。

「それ、どういふ……？」

そう言ったのは、誰だったのか。緑郎は携帯電話が壊れそうなほど力強く握りしめる。

「二人ともうわ言で『人魚が来る。もう生きたくない。殺してくれ。どうして殺してくれなかったんだ』と……そう言っているそうさ。医者が言うには、生死をさ迷っている間、恐ろしい夢でも見たんだらう、と……時間が解決するだらう、とのことらしいが……」

「こんな形になる前に、もっと早う醒めるべきやったんや」

平次が厳しい表情のまま、部屋にいる人々を睨みつけるように見た。

「不老不死なんちゆう悪い夢からな。命つちゆうんは限りがあるから大事なんや。限りがあるから頑張れるんやで。……お二人さんが、早う『恐ろしい夢』から目え覚ますことを祈っとるわ」

彼の言葉に、本日何度目かの沈黙が落ちる。誰も言葉を発することができない雰囲気の中で、輝夜だけは、いつも通りの笑みを浮かべた。

「さ、用が済んだなら私は帰るわ。見事だったわよ、『探偵さん』」

平次と小五郎——心なしか、小五郎についてはその奥を見つめてから、輝夜は部屋を出るため歩き出した。慌てて立ち上がったスタッフたちは、中にはしびれた足を引きず

る者もいたが、その後が続こうとする。

「輝夜さん……私……」

小さく、か細い声だった。それは朗らかに微笑む「お姉さん」としての姿とも、凜と気丈に振舞う巫女の姿とも違う。疑いもしていなかった者たちに裏切られ、自分の信じていたことは虚構で、己を己たらしめていた軸が失われ、寄る辺がなくなった人間の声だった。

「何かしら」

平次の立つ障子の手前。輝夜は振り返りながら、ゆるりと微笑む。

「どうしたら、よかったんでしようか」

継るような目だった。立ち尽くしたままの君恵に、輝夜は寄り添わない。手を差し伸べることはしない。

「知らないわ。私はあなたじゃないもの」

明確な拒絕。しかし、輝夜の表情はやわらかい。そのギャップに戸惑った人々は、やはり何も言えないまま、二人の様子を見守ることしかできなかつた。

「だから、自分で立ちなさい。あなたの感情はあなただけのもの。あなたが迷って出した答えは、あなただけのもの。だったら、あなたは立って、導き出した答えのその先を見に行かなくては。考えるべきは、『どうしたらよかったか』ではなく、『これからどう

するか』よ。あなたは不老不死ではないのだから、時間は有限なのよ」

突き放すような言葉に、君恵はたまらず破顔する。笑いながら、泣きながら、「はい！」と、よく透る可憐な声で、返事をしたのだった。輝夜は頷き、平次の横を通り抜ける。それから障子にもたれかかって浅く息を吐く、彼と同じく傷だらけのポニーテールの少女に目を向けて微笑んだ。

「大変だったみたいね。『納得できるまで調査』はできたかしら？」

「ああ。ほんで、事件に關しては工藤……やのうて、おつちやんと同じ結論に至ってまいましたわ。ついでに、同時に大事なことに気付かされたつちゅー感じですよ」

輝夜は再び歩き出し、「それは素敵ね」と笑った。

翌朝、君恵は沙織の殺人と、寿美と奈緒子への殺人未遂で島を離れることとなった。海は荒れ、彼女が島から出ることを拒むように、船は中々出航できなかつた。見送る島の人々も、涙を流しながら彼女との別れを惜しんでいる。

「ねえ、輝夜さん。ちよつといいかな？」

ようやく出航した船へと視線を向けたまま、コナンは隣に立つ輝夜へと声を掛けた。輝夜は二つ返事です承し、人混みをそつと離れ、人魚の墓——と思われていた、君恵の母親の墓の前まで歩く。

「随分とみんなから離れたわね」

「ああ。輝夜さんに、ちゃんと聞きたかったし……それなら、他の人に聞かれない方がいいだろうって思つて。蘭や服部にも」

島の人々からのお供え物や献花であふれかえつた、森の中の賑やかな墓を見つめながら、輝夜は微笑んだ。

「輝夜さん、被害者の二人に何をしたんだ？」

コナンの表情は厳しい。君恵が犯人だと見抜き、服部に電話で告げたときよりは、戸惑いの表情が色濃かつたが。

「あのあと、島の人たちがいなくなつて、服部たちが怪我の手当てをしに行つて、蘭たちもそれについて行つて……君恵さんは気持ちを整理したいからと、警察の監視のもと、神社に一人でいたんだ。だからオレ、一人で君恵さんに気になつたことを聞いた。君恵さんは何も知らなかつたみたいだけど……」

強い風が二人の間を吹き抜ける。

「オレの推理では、輝夜さん——あなたは、君恵さんが二人を殺そうとする前に、寿美さんと奈緒子さん、それぞれに会つていたんじゃないか？」

「なぜそう思うの？」

輝夜の表情は変わらない。吹き抜けた風がたかれた線香の煙を散らし、香りを運ん

だ。

「君恵さん、奇妙なことを言っていたんだ。寿美さんも奈緒子さんも、呼び出しには簡単に応じたわりに、君恵さんが手を掛ける前に『人魚の墓はもう教えてもらわなくていい』って笑っていたって。『何かあったの？』って聞いたたら、二人とも、『もう死なないから』って言ってたって。君恵さんは『儒艮の矢』が当たって、気が大きくなっていたらどうって言うていたけど……オレはそうは思わない」

「人魚の墓」の話をする際に「お茶でも飲みながら」と、事前に遅効性の睡眠薬を飲ませていた寿美は、森へ呼び出して少し話をすると、うずくまって眠気に抗いながら君恵を見たそうだ。それでも、その顔には疑いこそあれど、恐怖には歪んでいなかったという。それから、完全に眠りに落ちる直前に、呂律の回らない口で「本当よ」と言い残したらしい。

宴会の準備が始まる前に蔵に呼び出した奈緒子も、「人魚の墓の話だけ」と切り出すと、にやりと笑って「別にいいわ」と断ったそうだ。「私は永遠を手にしたのよ」と語る奈緒子が沙織の遺体を発見してしまい、「あなた、まさか……」と動揺している間に、力の限り奈緒子を殴り、昏倒させた後に、体を縛り、目が覚めても助けを呼べないように猿ぐつわを噛ませた。

二人には、『気が大きくなるようなこと』が起きたんだ。だけど、それは『儒艮の矢』じゃ

ない。奈緒子さんはともかく、寿美さんは、当選したとはいえ、まだ矢を手にしていない。かっただからな」

ふるり。コナンは決意を固めるために、小さく頭を振った。

「不老不死を求める二人が、『儒艮の矢』や『人魚の墓』に縋らず、『もう死なない』と言いつつ理由……輝夜さんが、何かをしたんだ。輝夜さん、オレに前言ったよな。『怪我ができない体質』って」

「ええ。言ったわね」

輝夜は頷き、にこりと微笑んだ。美國島で、人目を避けるためにされていた印象操作は今も行われていない。彼女の長い黒髪は下ろされたままだし、上品なブラウスにロングスカート、つくりの良い物だと分かる革のブーツは、青の古城で突然声を掛けてきたときの「蓬莱山輝夜」そのままの姿のように、コナンの目には映った。

「輝夜さんって、常識知らずだし、のらりくらりこっちの言葉を受け流すし、曖昧な言葉とか表現でお茶を濁してくるけど——たぶん、オレに嘘をついたこと、ないでしょ？」

「ええ。必要がないもの」

「だったら……」

コナンは眉を寄せて、泣きそうな表情になりながら、しかし涙を流すことはせず、まっすぐに輝夜を見つめる。

「言葉通り、輝夜さんは『怪我ができない』んだ。比喻でもなんでもなくて、輝夜さんは『怪我をしない』んだ。だから、拳銃を突き付けられても顔色を変えないし、『キケン』つて看板のある鍾乳洞にも『大丈夫』と断言する。輝夜さんの性格なら、本当に怪我をしちやいけないような体質だとすれば、『怪我をしちやいけないと家の者に言われてる』とか、別の言い方をするような気がするんだ。それに、物件を探すときに病院を『必要ない』つて言つてたのも、そういうことでしょう？」

「ういふ」

輝夜は心底楽しそうに笑つた。それは「いつもの」輝夜ではない。おだやかでのんきなお嬢様でも、子どもをウノで陥れ続ける大人げない大人でもない。たとえば、そう、それは——「謎」を前にした探偵のような。

「何の証拠もないのに、私の今までの言動だけでよくそんな答えを導きだしたわね。いわ、ご褒美に見せてあげましょう」

輝夜は、落ちていた木の枝を拾つた。そんな何気ない動作でさえ洗練されたもののように入る至上の美貌は、とろけるような視線をコナンに向けた。しかしコナンは、その視線に心を奪われることはなかった。なぜなら——直後、輝夜が己の腕に、折れて鋭利になっているその枝を、思い切り突き刺したからである。

「っ……っ……」

漏れたのは、輝夜の苦悶の声か。叫びそうになったのを堪えたコナンの声か。

覚悟はしていたものの、コナンは枝を抜いた輝夜の腕に起こった現象を信じられなかった。

「そうよ。あなたの言う通り、私は『怪我ができない』。でも、さっきあなたの言った『怪我をしない』は間違いね。私は怪我をするわ。だけどご覧の通り、すぐに元に戻る。だから、正確に言えば『怪我をしている状態が続かない』ってところかしら。それで？ 私のこの体質が、『死ななかつた二人』に関係あると言いたいよね？」

傷など元からなかつたかのように、輝夜の腕は血の一滴も流さず、白くなめらかな表面をさらしていた。しかし、目の錯覚ではなかつたことを裏付けるように、枝には彼女の皮膚を突き破り、肉を抉った証拠として、赤黒い血が滴っている。

「輝夜さんは、二人が君恵さんと会う前に、話し掛けたんだ。その体質を見せて、『不老不死』を渴望する二人に、『不老不死はある』と言った。そこで——二人に、『不老不死になったと信じこませた。なんの目的があつてそんなことをしたのかは知らないけど』「ふふ。私はあの二人が『不老不死になりたい』と言うから、『魔法』を掛けてあげただけよ。とっても喜んでいたわ。ただ——まあ、『魔法』は解けてしまったようだけど。ああ、服部君の言っていた『夢』という表現もいいわね。『恐ろしい夢』を見て、『不老不死を夢見た女性』は『解放のための死』を求めようになった。おぞましい話だわ」

「輝夜さんっ!」

人の不幸を、くすくすと笑った輝夜に対し、コナンは責めるように名前を呼ぶ。

「教えてくれ……! なんの目的があつて、そんなこと……! 二人の心を壊したのは、

輝夜さんなのか!」

輝夜はしやがみ、コナンと目線を合わせた。

「私は『不老不死』の『夢』を見せてあげただけ。何かを犠牲にしてまでも掴みたかつた『夢』ならば、少しくらいは見てみたらいいと思つた、それだけよ。彼女たちの心が壊れたんだとしたら、それは私のせいではなく、彼女たちが『夢』に耐えきれない脆い存在であつたということじゃないかしら」

同じ高さから見る輝夜の目、その奥が、あまりに得体の知れないもののように思えて、コナンは肌が粟立つのを感じる。まぎれもない恐怖。未知に対して好奇心を抱く性質である探偵という生き物をもつてしても、「蓬莱山輝夜」は触れてはならないと本能が警鐘を鳴らす「未知」だつた。

(だけど、輝夜さんは……「友達」じゃねえか……!)

足が震える。腰が引ける。今すぐ彼女の視界から消え去りたい。けれどそれを許さないのが、江戸川コナン——工藤新一という少年の、探偵としての、「人間」としての誇りであつた。

「輝夜さん、オレ……」

口の中が渴く。酸素が上手く脳へ行き渡っていない気がする。

「悔しいんだ。オレはまだ、輝夜さんの『難題』を解けない」

それでも、少年は手を伸ばす。

「だからさ。もう一回、握手してよ。輝夜さんはオレの友達で、解くべき『難題』で、オレ、どっちからも逃げ出したくないから」

白魚のような手が、少年の小さな手を取った。

「うれしいわ。心の底から」

いつの間にか、輝夜から感じていた恐怖が和らぐ。あたたかいその手は、彼女が確かに「生きている」ことを伝えてきて、「未知」でありながら「既知」の存在でもある安心感をコナンに与えていた。

「あなたの『強さ』は美しい。この世界で、あなたと出会えたことは私のこれまでの中でも、一際すばらしいよろこびよ」

輝夜がコナンの手を離すと、空気が少し変わった気がする。ふと視界に入った線香の灰が、ぼろりと落ちた。

「戻りましょうか。あの二人が『夢』の果てに見たものから、立ち直れることを祈るわ。転んでも立ち上がり、挫けてもなお遅くなる。たとえ今は弱く、脆い存在でも……や

がてはあなたのように『強い』人間になれたら、それはとても素敵なことだもの」

「輝夜さんは、オレを過大評価しすぎだよ。ただ、オレは探偵として、謎を解き明かしたいだけなんだ。そこから導き出された、たったひとつの真実をつかみたい。それだけさ」

満足げにコナンの言葉を聞いた輝夜は、どこかのんびりとした雰囲気を漂わせながら、曇天の森の中をにこにこしながら歩いていく。

「あら、コナン君。見て、雲間から太陽が見えてきたわ」

天を指差した彼女につられて、コナンは空を見た。確かに、曇天を晴らす陽の光が二人をあたたかく照らしている。

「帰りの船は、きつと穏やかに海を渡るわね」

「ああ、きつとそうだな」

美國島は、「人魚の棲む島」ではなくなつた。「人魚」は幻想として消え去り、幻想の郷のないこの世界では行きつく場所もない。けれど、たぶん、それでよかつた。

露題：ほころびに宿るまぼろし

CMが当たりすぎて「この他にもぜび！」と熱心な誘いが日に日に増えていく。それを周囲が断っているのを眺めながら、輝夜は適度な忙しさの中、のんびりと日々を送っていた。

マネージャーの話によると、輝夜がCM出演した化粧品は、少し高めの価格帯であるにも関わらず、女性のみならず男性からも買い求められているらしい。それはひとえに『カグヤ』がやってたから」という理由に過ぎないのだが、「買ったはいいもの、もつたいいので」と使用してみる人も出てきたとかで、「カグヤ」の男性ファンの肌はすべすべもちもちしているらしいと専らの噂だ。

さらに、殺人および殺人未遂事件によって「人魚伝説」が霧散した美國島も、CMの撮影地ということで注目されている。中には事件解決に「カグヤ」が貢献しているという、「どこの誰に取材したんだ」と関係者に呆れられるような記事を載せている週刊誌まであるため、「カグヤ」ファンや、不謹慎ながらに事件に好奇心を抱いた人々が集っているそうだ。もちろん、美國島のもともとの魅力である海産物や美しい海も再注目され、

祭りの時期に関係なく、観光客で賑わっているらしい。

「あら、見事な富士の山ね」

そんな現象を世の中に巻き起こしている輝夜はというと、博士の運転するレンタカーの助手席に座りながら、上機嫌に景色を眺めていた。

「きれいですねえ」「やっぱ日本一の山だぜ！」と口々に感想を述べる後部座席の子どもたちのテンションは高く、きゃあきゃあと可愛らしくはしゃいでいる。

「ん？ あれ何だろう？」

そんな中、歩美が一際目立つ高層ビルを指差した。他の探偵団や輝夜もつられてそこらを見る。運転中の博士は、一拍遅れてその建物を見やり、それから「ああ」とビルの説明を始めた。

「あれは西多摩市に新しくできたツインタワービルじゃ。高さ三百十九メートルと二百九十四メートルの、日本一のつぼな双子じゃよ」

「行ってみてえなあ」

元太が目を輝かせながら言うと、同じく目を輝かせた光彦が「博士、明日キャンプの帰りに寄ってみましょうよ！」と提案する。

「少し回り道になるが、まあいいじゃろう。輝夜さんの予定は大丈夫かね？」

「もちろん大丈夫よ。今日明日は一切仕事を入れていないもの」

マネージャーおよび事務所の人々は悲鳴を上げていたが、何せ契約内容の中にしつかりと「輝夜がやりたくない仕事はやらない」「輝夜が希望した日時は空ける」というものが明記されているので、無理強いもできない。彼らは数多のオフアールから、輝夜が興味を持ちそうなものを厳選し、「どうにか雑誌の撮影以外も受けてもらえないか」と試行錯誤しているようである。

「さあ、着いたぞ。みんなでテントの準備をしようかのう」

オートキャンプ場に到着し、博士と輝夜を中心に、子どもたちが手伝いながらせつせと荷物を下ろす中で、彼らの周りに、オートキャンプの利用客がわらわらと集まり始めた。

「あ、あの……もしかして『カグヤ』さんじゃありませんか？」

「ええ、そうよ」

「やっぱり！ テントを張るんですよね？ 手伝いますよ！」

その中の一人、若い男性から声を掛けられた輝夜は、ちらりと少年探偵団の方を見て、それから男性に笑顔を向けた。

「ありがたいけど、遠慮するわ。自分たちでやるから楽しい『苦勞』もあるものね」

ほん、と近くにいた元太の頭に手を置いてそう言った彼女は、周りにいる野次馬を気にもせず、博士に「次はどうするんだったかしら？」と声を掛ける。

以前のキャンプでも、泊まるのは叶わなかったものの、テントだけは張ったことがある。輝夜は指示に従いながらてきぱきと動いていた。コツが必要なところは探偵団の子どもたちに聞いたり、博士と一緒にやってもらったりしながら行うことで、準備はあっという間に完了である。

「さて、わしと哀君は米を炊くから、君たちはその川で魚を釣ってきてくれんかのう？」

輝夜君はどつちがいいかね？」

「私、みんなと一緒に釣りがしたいわ」

二つ返事をした輝夜に、本人以外の全員がその答えを予想していたのか「やっぱり」という顔をした。彼女は単純作業的なことよりは変化のある活動を好むことを、「友達」である彼らは理解しているためだ。博士は下ろした荷物の中から釣り道具一式を出してやり、にっこり笑った。

「それなら、ほれ。わしの釣り道具を貸そう。一匹も釣れなければおにぎり野菜だけじゃからな。頑張るんじゃぞ」

「頼んだわね」

「任せてください！ 輝夜さん、釣りはしたことありますか？」

博士と灰原の言葉に対し、どん、と胸を胸をたたいた光彦が、輝夜へと振り返る。輝夜は「ええ、少しなら」と返事をして、「でも、こういう道具は使ったことがないわね……」

と博士や子どもたちが家から持ってきた釣り道具を珍しそうに眺めていた。

「ええっ？ 逆に、どんな道具で釣りを？」

「その辺の枝に糸と針をつけてたのよ。暇つぶしにはなったわ」

「そんなんで釣れるのかよ？ まあいいけどよ、エサ買いに行こうぜ。あつちで売ってるって」

輝夜がキャンプ初心者ということと、前回のような落盤事故などによつてまた中止になつてしまわないように、と今回選ばれたのは、それなりに施設の整ったキャンプ場である。テントを張る場所だけでなく、コテージなども貸し出しており、宿泊しない客に向けてのバーベキュー場や釣り堀の解放、釣り具のレンタルも行つていた。元太の先導について行きながら、周囲の人々の注目を集め続ける輝夜は、「マスクをしてきた方がよかつたかしら？」と首を傾げた。

「輝夜さんが気にならないならいいんじゃない？ ただ、テントの場所がバレちゃつてるから、危ない人とかが寄つて来ちゃうようなら、泊まらず避難した方がいいかも」

「……そうね。危ない人が私に『寄つて来たら』、そうするわ」

「……………輝夜さん、お願いだから人を殺せそうな眼力で睨むのだけはやめてよ。睨まれてない人も怖いんだから」

「あら。じゃあ、コナン君が守つてくれるのかしら？ 今日怪我をしないように厚着

しろってうるさいんだもの」

クスクスと笑った輝夜に、探偵団の子どもたちが「コナン君の言う通りですよ!」と会話に加わった。

「輝夜さん、人気者なのに『危機感』ってやつがないんですから! 釣りをするだけでも、誰かの針が引つかかって怪我をすることがあるんですよ!」

「そうだよお。ばい菌とか入っちゃったら大変だもん! コナン君が言うみたいに、ちゃんと怪我しないように気を付けてなきやだめなんだからね?」

「輝夜の姉ちゃんのはのんびりしてるからなあ。まあ、いざとなったらオレたちが守ってやるからいいけど」

「頼もしいわね」

上機嫌な輝夜は、出発前に灰原に一つに結ってもらった髪を揺らしながら、小さな友人たちへやわらかな視線を向ける。ちなみに、彼らの様子から目が離せない周囲の利用客は、ついにその光景を見て拝み始めた。

「……す、すごいですねえ、輝夜さんの笑顔って。神々しいというか」

「オレ、何にもしてねえのに拜まれる人初めて見たぞ」

「輝夜さん、本当にきれいだもんねえ。歩美だつてどきどきしちゃうもん!」

「あ、すみません。釣りエサ五人分ください」

人気者の「友人」にきやあきやあとはしゃぐ子どもたちの中、慣れた様子のコナンは代表して釣りエサを買っていた。店主が「写真を撮らせてくれたら無料で良い」という言葉に、「どうせ本人に許可も取らずにみんな撮っていることだし」と輝夜は考え、子どもたちも巻き込んでみんなで写真撮影をしてから、ありがたくエサを受け取る。

「うう……歩美、釣りは好きだけど、エサを付けるのはちよつと苦手……」

「まあ、気持ち悪いもんな。歩美ちゃん、貸して。オレが付けるよ」

さりとて歩美の手を取って針が誤って刺さらないように自分のもとへと引き寄せ、早くエサを付けたコナンに、ぽつと顔を赤くする歩美。そんな様子におもしろくなさそうな顔をしていた元太と光彦だったが、輝夜が「それなら、二人は私にエサの付け方を教えてちょうだい」と頼まれ、機嫌を直していた。

「か、輝夜さん……百発百中ですね……」

「うふふ。タイミングを合わせるの、得意なの」

五人分の夕飯の量には多すぎる戦果に、輝夜は得意そうに笑った。周囲の人々は、彼女たちが全然釣れないようなら魚を分けてやり、あわよくば夕飯を共にしたいと目論んでいたため、その光景に残念そうな顔をしている。食べない分はリリースし、彼らは博士と灰原の待つテントへと戻ることとした。

ちなみに、釣りをしている間に輝夜に話し掛けようとしていた人々もいたが、全ての

らりくらりとかわされた挙句、顔は穏やかだし口調も決してきつくはないのに、輝夜に妙な迫力を出されたことよって最終的に皆すごすごと去って行った。そんなこんなで、釣りが終わるころには周囲の利用客も「プライベートで楽しんでるんだから、遠くから愛でるだけにしよう」と近づきすぎること控えるようになったのだった。

「おおー！ こりやすごいのう。焼くだけじゃなくて、潮汗なんかも良さそうじゃな。よーし、わしが魚をさばくから、みんなは野菜を焼く準備をしてくれんか」

「はーいー！」

子どもたちの元気な返事を聞いて、博士はうんうんとうれしそうに頷いた。

空がオレンジ色に染まり、もうすぐ夜になろうかという頃に「ごちそうさま！」と光彦が器をテーブルに置いた。その様子を見ていた元太が「なんだよ、ご飯粒残ってるじゃねえか」と顔をしかめる。ちなみに、おかわりを何杯もしている元太と、灰原に睨まれながらよく噛んで食べている博士以外、これで全員が食べ終わった状態だ。

「米粒一粒でも残すと罰が当たるって母ちゃんが言ってたぞ」

「その通りじゃ！ 米は農家の人八十八回、手間を掛けて作るんじゃからなあ」

元太の言葉に、博士が補足すると「八十八回？」と歩美が首を傾げる。

「ああ。米という字を分解すると八十八になるじゃろ？」

そこからは、「米」という字から発展して、米寿、喜寿、白寿の話になり、わいわいと

盛り上がる子どもたちを、輝夜はにこにこしながら見ていた。途中、物知りなコナンと灰原に対し、元太が「オメーらほんとは年誤魔化してんじやねえか？」と笑う。乾いた笑いを浮かべたコナンと、コップに口を付けることで表情を隠した灰原の様子を見て、輝夜はくすくす笑った。

「そういえば、輝夜お姉さんはいくつなの？」

歩美に水を向けられて、輝夜は「公称二十二歳よ」と答えた。

「公称って、何？」

「表向きに言われていることと違ってことですよ。輝夜さんの場合は、きっと事務所で二十二歳って答えなさいって言われているんじゃないですか？ 年齢は非公開みたいですけど……」

「じゃあ、本当は何歳なんだよ！」

「あら、ちゃんと戸籍も二十二歳よ」

「なーんだ！　なんでややこしい言い方するんだよ。それなら、『二十二歳』って素直に答えりゃいいじやねえか」

輝夜はその言葉には答えなかったが、会話が途切れる前に博士が口を開いた。

「米寿は八十八歳。それなら、二十二歳は何と分か分かるかね？ 『寿』は付けない

「ぞう」

「あ！ 歩美分かった！ それって、『一たす一は』と同じ答えでしょ！」

「それなら、答えは『田んぼの田』ですね！」

「楽勝だな！」

得意げに『二十二』を『田』の文字に組み替えながら指で文字を書く小学生たちに、博士は「ふっふっふ」と笑う。コナンと灰原は会話に参加する気がないのか、頬杖をついて博士と子どもたちのやり取りを眺めていた。

「今のは準備運動みたいなもんじゃ。本命のクイズはこつち！ 米寿は八十八歳、田は二十二歳。それでは、四十四歳は何というか分かるかな？」

「四十四歳……ですか？」

とびきりの笑顔で、子どもたちに「ヒントは漢字一文字に、片仮名三文字じゃ」と言う博士に、子どもたちは「うーん」と一生懸命考えている。

「まさか……」

コナンが「分かったけど、すっげーくだらねーぞ？」と博士に半目を向けると、「そうかのう？」と博士はピンときていない様子で答えた。

「それに、多分輝夜さんには分かんねーよ。輝夜さん、ラーメン屋とか行ったことある？」

「ないわ。ラーメン自体は食べたことがあるけれど」

「ラーメンが関係あんのか？ 四十四歳に？ うな重じゃなくて？」

コナン以外答えが分かっていない子どもたちの様子を見て、博士は得意げに笑う。

「八十八は米。米は英語でライス。その半分だから半ライスじゃ」

その答えに、輝夜を除く全員がため息を吐き、俯く。そんな子どもたちの様子と「あれえ？ どうしたのかなあ？」と言いながら余ったご飯を紙の器によそいながら歌を歌う博士を見比べて、輝夜は飽きもせず、またくすくすと笑った。

「博士はクイズが好きなのね」

「くだらねーダジャレなぞなぞばっかだよ……」

「いいじゃない。楽しかったわよ。『半ライス』っていう言葉も知れたし、今度はラーメン屋さんに行きましょうね」

「輝夜さんがラーメン屋になんか行ったらパニックになっちゃうんじゃないか？ 前に鰻食べに行ったときも、個室の高そうな店だっただろ」

コナンの指摘通り、輝夜は外食に行くときは大抵相手が社長や仕事の関係者なので、基本的には個室である。そうでない場合は、店自体を貸し切ってしまうこともあるため、ラーメン屋のような店には行ったことがないし、多少は面倒だろうなという予想もついたので、この小さなお友達と一緒になければ行こうとも思わなかっただろう。

「それでもいいのよ。それもまた『思い出』だもの。それとも、私と一緒に行くのは嫌か

しらっ？」

見つめられたコナンは顔を赤くして「その言い方、卑怯だよなあ……」と呟きながら俯いてしまった。そんな様子を探偵団にからかわれ、「うるせー！ さっさと片付けすつぞー！」とぷりぷり怒りながら、ゴミの回収を始める。

「年端も行かない少年をたぶらかして、いい趣味ね」

コナンに続いて、洗い物を手に立ち上がった灰原が輝夜へ向かってちくりと言う。同じく洗い物を手にした輝夜は少女の後ろについて歩き始めた。他の子たちはコナンを手伝ってゴミの回収に精を出しているようだった。

「焼きもちかしら？」

「そんなんじゃないわー！」

「キツ、と振り返った灰原の小さな鼻を、輝夜はすらりとした指でつんとつつく。子ども扱いされたように感じた灰原は、鋭い視線のまま輝夜を正面から睨みつけた。

「ふふ、それなら——あなたが、私にたぶらかされてみる？」

笑み。普段から、彼女は笑みを浮かべている。真顔が笑顔なのだと言われても、そうかもしれないと納得してしまうくらい、美しく口角が上がっているのだ。けれど、同じように目が細められていても、口角が上がっていても、その雰囲気はその都度違う。大抵はのんびりとした、のんきで好奇心旺盛な彼女の性格を表すような、平和なものであ

る。

しかし。

「つ——！」

黄昏時。「誰そ」など尋ねることすら許さない、圧倒的な存在感。彼女の艶やかな黒髪を照らす陽の光は、昼間のそれと違ってどこか昏い。細められた赤茶の目のその先、感情の読めない瞳は夜を招く今の時間の妖しさと妙に重なって見える。それ縁取る、けぶるほど長い睫毛に、光に照らされて輪郭のぼけた白い肌が、夢と現の境界までも曖昧にしているように錯覚させる。笑みの形を作る口元、華やかに色付いた唇のその先、整然と並ぶ真白の歯にあらゆるものが砕かれ、喉の奥まで吸い込まれそうだ。

言われた言葉、その通りにならなければならぬという、どこか強制的な、しかし自主的にそうなってしまうという感情を呼び起こさせる、途方もない——『狂喜』であり、まさしく『狂気』を孕む、彼女のすべて。

人心狂わす魔性に逢った灰原は、口をばくばくさせながら、己が上手く呼吸できないことに混乱していた。ただ、顔が妙に熱い。

「あら、可愛い顔ね。何かに悩んだり怯えたりするより、そっちの方がずっといいわ」

洗い場に着き、輝夜はしゃがみこみんで、タワシを使って飯盒や網を洗い始めた。あまりに平然とした様子に、ようやく呼吸を整えた灰原は、行き場もなく、とらえどころ

もない感情を発散させるように、吠えるようにして文句を言った。

「あ、あなたねえ！ からかい方があまりに性悪なのよ！」

手を動かしながら、輝夜はにこりと微笑む。

「せっかくのキャンプなのに、あなた、どこか表情が暗かったわ。空気が重いとも言うのかしらね。何か心配事があるのかと思ったのよ。自分から話したくないのなら、せめて気を紛らわせてあげようかと思って」

「……気を遣わせてしまったようだけど、心配はいらないわ。それと、もう二度とこういうこと、しないでちょうだい」

「つれないのね。別に取って食いやしないわよ」

「いいからっ、絶対につ!!」

輝夜はくすりと笑って、蛇口をひねった。きゅ、という音と共に止まった水、その一滴がぴちやりと洗い場のコンクリートに落ちる。

「さあ、汚れが落ちたわ。みんなのところへ戻りましょうか」

「え……ちよつと、今まで気が付かなかったけど、その網、なんか形がおかしくない？」
水に浸けもせず力任せに洗った飯盒と網は、心なしか形が歪んでいた。一度大きく形が変わった物を無理やり元に戻そうとしたようにも見える。

「気のせいだわ。差支えがあるようなら、博士には新しいものを買って返すから心配し

ないでちょうだい」

「あの、網はともかく、飯盒ってそんなに簡単に形が変わるようなものなのかしら……？」

「形が変わったと思う人には変わって見えるし、そう思わない人にはそうは見えないものよ。つまり、これは受け取り手の問題だわ。私は形が変わっているように思えない。ちゃんと曲がったところは戻したもの」

「変わってるじゃないの」

すたすたと歩き始めた輝夜の背中を見て、灰原は大きく長く息を吐いた。

(輝夜さんには、きつと裏も表もないのね)

そして、仮面もない。だからこそ、灰原にとつては心底恐ろしい存在だった。

裏も表もなく、仮面もないのに、姿かたちを捉えることが叶わない。幻のようであるのに、確かにそこにいる。死者のごとく手が届かないように思えるのに、触れれば温かく、言葉を交わせる。そんな彼女は、本人は全く意図せずとも、灰原の胸をずきりと痛め、重く冷たいしこりを残すのだ。

(輝夜さんは、お姉ちゃんとまるで逆の存在だわ)

そこにいたのに、幻と消えてしまった人。とても大切だった家族。今でもそこにいるような気がするのに、触れることは叶わず、言葉は届かない。

——お姉ちゃん。

言葉も、声も、届きはしないと分かっているのに。

*

夜。輝夜はこそこそと周囲を歩き回る人間たちを誘い出すように、子どもたちが心配する中、「少し夜空を見たいから」とテントから外へと出た。昼とは違う、ひやりと冷たい空気が流れていたが、彼女はそれに身を震わせることはない。

「困るのよね」

硬質な響きをもった声で、輝夜がそつと呟く。それから、物陰に隠れていた人々を見透かすように、ひとりひとり目の見つめ、甘やかに微笑んだ。

「良い子は寝る時間よ。自分たちのテントでおやすみなさいな。良い夢を」

翌日、輝夜たちのテントの周りでは、幸せそうな顔をしながら心臓を押さえて蹲り、体が冷え切つて少々危険な健康状態の者たちが何人も発見された。しかし、灰原やコナンから疑惑の目を向けられた輝夜本人は一切興味を示しておらず、「睨みもしていないし、自分のせいではない」と断言していた。

さて、すつきりと快晴の中で、輝夜たちは朝食の準備をしていた。早起きの博士と光

彦、灰原の三人が飯盒でご飯を炊き、輝夜とコナン、歩美がクーラーボックスから食材を取り出して調理、寝坊助の元太はテーブルを拭いたり飲み物を用意したりを雑務を行っている。

「飯はまだ炊けねえのか？ オレもうお腹空いちまったよお」

「つたく、一番遅く起きたやつが何言ってるんだ！ 三人はわざわざ早起きしてくれて、先に準備してくれてたんだぞ！」

「だってよお」

分厚いベーコンブロックを切り分けながら呆れ顔をするコナンに叱責されると、元太はしゅんとしたように腹をさすった。

「お味噌汁ならできたわよ。元太君、これ、テーブルに並べてちょうだい」

「お野菜も茹でたよ！ あとはコナン君が切ってくれたベーコンを焼いて、目玉焼きも作って……。えへへ、美味しそう！」

歩美の言葉につられるように、よだれを垂らした元太が慌てて袖口でそれを拭う。結局元太は朝食のご飯を五杯もおかわりし、「多めに炊いというて正解でしたね……」とこそこそ言った光彦に、全員が同意していた。

片付けを済ませ、帰りの間に「せめて少しでも言葉を交わしたい」と群がろうとする人々にきららかな笑顔を向けて故意に彼らの時間と思考を停止させた輝夜は、

「今のうちに行くわよ」と、さっさとオートキャンプ場を出発することとした。

「輝夜さん……慣れてきたね……」

「そうさせているのは周りよ。私が悪いみたいな目をしないでくれるかしら?」

後部座席から助手席をじつとり見てくるコナンに対し、輝夜は振り返りながら抗議の言葉を掛ける。

「輝夜君は人気者じゃからのう。そういう処世術みたいなものも必要じゃろうて」

笑いながら車を発進させた博士に、輝夜はうんうんと頷いている。ちなみに、今日の輝夜は歩美の手により髪を耳の下で二つに結っている。髪型にこだわりはないらしく、普段からヘアスタイルを変えることのない歩美が、灰原に手伝ってもらいながら自分の髪を一生懸命いじるのを容認していた。

ツインタワービルに向かう途中、二列になっている後部座席の真ん中、歩美、コナン、元太たちのいる座席では個人の手荷物がまとめて置いてあることもあり、元太が「狭い」と文句を言い始めた。

「朝飯五杯も食うからだろ? それに、後ろはキャンプの道具も置いてあつて狭そうだからってわざわざこっち来たのオメーなんだから、文句言うなっつーの」

「腹減つてたんだよ。いいからコナン、もうちよつとそっち詰める」

「つたく……ごめん、詰めるよ、歩美ちゃん」

詰められた歩美は照れたように頬を赤く染めていたが、頬を染めさせた本人は全く気が付いていない。うれしそうにちらりとコナンを見つめる歩美に気付かないまま、少年たちは「ゲームやろうぜ」と盛り上がり、ストツプウオッチを取り出した光彦が提案した「三十秒当てゲーム」をやることになった。遠慮した輝夜と、運転中の博士を除き、子どもたちは全員試してみたが、最後にやった歩美は三十秒ぴつたりでストツプウオッチを止めることができ、少年たちから称賛されていた。

そのまま、しりとりや連想ゲームなどみんなで楽しめるゲームをやりながら暇つぶしに興じる。車内が盛り上がる中、いつの間にか目的地まで来ていたらしい。「到着したぞい」と、博士が車を停めた。駐車場から正面玄関まで移動すると、「早く早く」とゆつくり歩いていた博士や灰原を急かしていた子どもたちも、自然と足を止める。

「たっけー!」

「てっぺんが見えませんかよ!」

「雲の上まで伸びてるみたい!」

きらきらとした目で子どもたちがビルを見上げていると、一台のタクシーが目の前に停まった。降りてきた人物が、「あっ」と声をあげ、輝夜と目が合う。建物に夢中の子どもたちも、視線を地上へ戻した。

「か、輝夜しゃん!」

「コナンくんもー！」

「あらまあ、勢ぞろいじゃないの」

小五郎に呼び掛けられた輝夜はにこりと微笑み、蘭に呼び掛けられたコナンは軽い足取りで駆け寄った。園子は目を丸くしながらそんな光景を見て眩いている。

「え、えーと……輝夜さんはどうしてここに？ 小僧とキャンプに出掛けていると聞いていましたが」

「ええ。キャンプはとても楽しかったわ。ここへは帰りがてら、見学したいと子どもたちが言ったから立ち寄ったの。毛利さんはスーツ姿だけれど、蘭ちゃんや園子ちゃんを連れてお仕事かしら？」

「い、いやあ……それが……」

頭をかきながら照れ笑いをした小五郎に、蘭が鋭い視線を向ける。向けられた小五郎はちらちらと娘の顔と輝夜の顔を交互に見ていた。

「このツインタワービルのオーナーさんが、父の大学の後輩だそうで、来週のオープンを前に特別に招待していただいたそうなんです。娘にも知らせてなくって、様子がおかしいと思って問い詰めたら白状したんです」

「は、白状って、お前なあ……！」

「知らなかったあ。おじさんの行動を監視するために、蘭姉ちゃんたちが一緒にいるん

だね！」

もごもごと反論しようとする小五郎を悪戯小僧そのものの笑みを浮かべながら迎撃したコナンに、同じく少し嗜虐的な笑みを浮かべた園子がさらに追撃する。

「常盤美緒さんと言えば、常盤財閥の令嬢で、まだ独身だからね。両親が別居中の蘭としては、心配なわけよ」

「オレア別に、そんなつもりは……」

しどろもどろしている小五郎の背後から、カツカツとヒールの音を響かせながら女性が近づいてきた。輝夜たちがそちらへ視線を向けると、たおやかな笑みを浮かべたスーツ姿の女性に「失礼ですが、毛利小五郎様でしょうか？」に声を掛けられる。

「ああ、はい」

小五郎にとつては、地獄に仏だったのだろう。きりりとした顔にようやく切り替えることができた彼は、「あなたは？」と女性に自己紹介を求めた。スーツ姿の女性は沢口ちなみと名乗り、「社長は現在立て込んでおりまして」と、代わりに迎えに来たことを伝える。

小五郎たちがビルを案内してもらおうと歩き出した、その時。輝夜の携帯電話が震えた。「オフの日は基本的には仕事の話はしない」ことになっているはずのマネージャーからの着信を訝しみながら取った輝夜は、彼の発した言葉に、わずかに眉を動かす。

「ごめんなさい。急用ができてしまったから、私はこれで失礼するわ」

「えっ。輝夜さん、行かないの？ 今日仕事はないって……」

子どもたちが残念そうな顔を見ると、輝夜は微笑みながら「仕事ではないけど、急用よ」と言つて、先ほど小五郎たちが乗ってきたタクシーに乗り込んだ。

「キャンプ、楽しかったわ。また遊びましようね」

呆然とする一同を置いて、輝夜は事務所の住所を告げて、タクシーの後部座席に座りながら思案した。

マネージャーから受けたのは、「カグヤ」のファンというか崇拜者の域に達している？ 口議員が亡くなった、との連絡だった。自殺との見解がされているそうだが、不審な点がいくつかあり、事件と自殺どちらの線でも捜査している最中だという。以前暗殺を未然に防ぎ、さらには被害者本人が依存と言つてもいいほど心酔していた輝夜には知らせておきたい、ということと彼の親しい者たちが、公になる前に連絡をしてほしいと事務所に頼み込んだらしい。

事務所到着した輝夜は、「顔を見てやってください……」と彼の家族なのか友人なのか、ともかく知らない男の車に乗つて移動した。案内された場所で、検視が済み、安置されているという？ 口議員の遺体の傍へ寄る。

(……穢れが濃い。他殺だわ)

口には出さず、輝夜は眉を寄せた。

「今まで、『カグヤ』さんのことを話すとき以外、とても怯えていたんです。だから、保釈金を払うこともなく、『誰かに見られていた方が安心だ』なんて言って……実は、『カグヤ』さんに宛てた遺書があるんです。お読みいただけますか」

手紙を受け取り、中身は開けないまま、輝夜は？口議員の顔をじつと見つめる。それから、ぽつりと零れるような、小さな声を出した。

「……やっぱり」

「ん？ 何か？」

「何でもないわ。それより、私はもう失礼するわね」

「お忙しい中来ていただき、ありがとうございます。それと……警察から、『カグヤ』さんと連絡が取りたいと言われています」

「ええ。事務所に寄ったとき、マネージャーから聞いたわ。どうもありがとうございます。彼の安らかな眠りを祈るわ」

輝夜は「頭の中を整理したいから」と警察に伝え、会うのは今度の仕事終わりということになった。「これが自殺でなかった場合、以前彼の命を救った『カグヤ』さんにも危険があるかもしれない」という忠告をしてきた警察に対し、輝夜は淡白に礼を述べ、電話を切る。

自室に戻って一人になった輝夜は、？口議員からの遺書を開封した。内容としては、長々とした感謝の言葉ばかりだったが、輝夜は察しが悪い方ではない。その遺書の言葉に隠れたメッセージを読み解いて、彼女は目を瞑った。

（組織。薬。暗殺。二人の歪な子ども。歪な永遠。時計の針。めぐりゆく季節。高さの変わらない階段。先へ進むための条件）

ぐるぐると、彼女の頭の中に単語が浮かんでは消える。それから、これまでの経験、己が直感として受け取ったこと、耳に入れた発言、様々なことをピースとして、パズルのようにかちかちと当てはめた。もちろん、ピースはまだ足りない。しかしその輪郭が捕えられた今、ピースの数は問題ではない。絡まり、固く結ばれた紐を慎重に解くのと同じだ。

ピースがなくても、輝夜はその常人とは異なる能力によって、その穴を埋めることができる。固く結ばれた紐も、力任せに解くことができる。しかし、それゆえパズルの額を破壊してしまう。常人ではちぎることなど心配しなくてもよいはずの紐を、簡単に引きちぎってしまう。額を壊せば、パズルは未完成のまま、輪郭すら保てず瓦解する。紐を引きちぎれば、「その先」はなくなる。

彼女の覆水を盆に返す能力をもってしても、瓦解したパズルは戻らず、ちぎられた紐

はつながらないだろう。

ゆるり。輝夜は緩慢に目を開けた。

「なるほど、紛うことなき『難題』だわ」

——「謎」は解けた。

歪な永遠の示すところ、この世界のからくり、そして——「彼ら」のこと。

くしやり。遺書を見つめて、輝夜は笑った。それは第三者が見ていけば、「困ったように」とも、「何かを耐えるように」とも、「挑戦的に」とも、十人十色の枕詞を付けただろう。

輝夜は笑った。

あるいは、「かなしそうに」。

山題：ひとかすみ

輝夜の身边を警護したいという警察の要望を断ると、彼らは「一応遺書に何か手掛かりがないかだけ確認したい」と言うので、輝夜は「どうぞ」と、事前に持つてくるよう指示されていたそれを差し出した。

「？」議員はあの事件以来、弁護士を通じて『カグヤ』さんに宛てた遺書を作成していたと聞いています。日付も先々週のもの、内容は『カグヤ』さんに命を救ってもらったことのお礼や、自分が後ろ暗いことをしてきたことに対する懺悔ばかり……死因に関連するようなことは見受けられませんね。まあ、懺悔の部分に焦点を当てれば自殺と考えられなくもないですが……」

「そうかしら」

輝夜は警察が読み終えた遺書を受け取り、その感想に言葉を挟む。

「私の聞いた話では、彼は『定期的に』遺書を作成していたそうよ。それも、内容のほとんど変わらないものを、わざわざ。しかも、保釈金を支払う能力はあるのに、支払わず懲役を受け入れていた。『誰かに見られていた方が安心だ』——その言葉って、『自分の自殺を止めてほしい』なのか『他人に殺されたくない』なのか、どちらの意味なのかし

らね？」

警察の顔つきが変わる。

「また、何かあればご連絡させてください。それに、やはり『カグヤ』さんにも身辺警護を付けた方が……」

「必要ないわ。お気持ちだけありがたく受け取っておくわね」

心配そうな視線を向けてくる警察へ、輝夜は背を向けてひらりと手を振った。命を狙うなら、狙えばいい。どこの誰であつても、輝夜を死に至らしめることなどできやしない。輝夜は事務所の会議室から出て、部屋の前に控えていたらしいマネージャーに視線を向ける。

「帰るわ。車を出してちょうだい」

そう言いながらすたと歩く輝夜の後を慌てて歩き出したマネージャーは、きよろきよろと周囲を窺いながら小声で話し掛けてきた。

「あの……輝夜さんって、先日ツインタワービルを見学しに行つたつて言つてましたよね？」

「ええ。外観は見れたわよ」

鞆から高級感溢れる封筒を取り出したマネージャーが、セキュリティチェックのためか、既に開封された痕跡があるそれを輝夜へと差し出す。

「実はツインタワービルのオーナーの常盤美緒という方から、せっかく見学に来てくれたのの中を見てもらえなかったのは残念だから、ぜひオープンパーティーに招待したい、という旨の連絡がありました……招待状はこちらです」

招待状を受け取り、輝夜は「園子ちゃんに連絡してみるわ」とだけ答えた。常盤美緒はIT企業である「TOKIWA」の社長であり、常盤財閥の令嬢である。招待状に書かれている情報と園子の話していたことを総合すると、輝夜を招待したいのは何も善意からだけではないだろう。「カグヤ」がパーティーに来たとなれば、当然話題になる。で、あれば大人の事情というものもあらゆるところに絡んでくるわけだ。

だが、珍しくそんな気遣いをしたにも関わらず、園子に連絡した輝夜はすぐに拍子抜けしたような表情になった。園子からの返事は「私も行きまーす！ 輝夜さんも来るならすつごいうれしいです！」という、全く邪気のないものだったためである。

「……パーティーには行くわ。ただ、『カグヤ』としてではなく、鈴木財閥令嬢の友人『蓬萊山輝夜』としてで良ければっていう注釈付きだね。そうね、同じ友人として、少年探偵団のみんなとも一緒に行きたいわ。そう伝えておいてちょうだい」

どうせ、来場者からはそんなことは分からない。ゆえに、快諾されるはずだと輝夜は踏んでいた。

それから、ツイントワービルのオープンパーティーに輝夜が呼ばれたという話をどこからか聞きつけた事務所員たちに、輝夜はああでもないこうでもない仕事のある日は連日ドレスを見繕われていた。

「なんであなたたちの方がはりきっているのよ……」

「カグヤさんのドレス姿なんて、見たいに決まってるじゃないですか!」

「ヘアメイクもここでやるんで、わざわざ美容院とか予約しなくていいですよ! ご希望の雰囲気とかあれば教えてくださいね! あ、このドレスなんてどうですか?」

がやがや騒ぐ所員たちの一人が、カタログを指差す。上品なデザインの淡いパールピンのドレスだ。ハイネックになっているノースリーブのロングドレスは、くるぶしまでふわりと広がるスカートシルエツトが美しい。

「いやあ、僕はこつちを推しますよ! 黒と金! やっぱ『かぐや姫』と言えば、夜空に浮かぶ月でしょう!」

「あら、それなら竹林のイメージで、こつちはどう? 色も素敵だし、デザインもさわやかよ」

「普段全然露出しないから、ここはあえてのセクシー路線でどうでしょう!」

張り合うように次々と好き勝手意見する所員を見て、輝夜は嘆息した。さほど詳しくないが、一応モデルという職業をしているので、彼らが見ているカタログがハイブラン

ドの物ばかりだということは輝夜にも分かる。

「ドレスやメイクはともかく、髪の毛はいじらなくていいわ。何もしないで行きたいの」「そうなんですか？　頭のとっぺんからつま先まで、思いつきりいじりたかったのに……」

「それならこつちのドレスの型の方が映えるんじゃない？」

「えっ、絶対こつちの方がいいでしょ」

「カグヤさん、このパーティーに、なにかこだわりでもあるんですか？」

わいわいと話している所員たちの中には首を傾げる者もいた。輝夜は普段、仕事の際には洋服やメイク、もちろん髪型にも注文をつけてきたことがないのだ。ゆえに、わざわざそう宣言する姿は新鮮に映ったことだろう。

「——そうね。できるだけシンプルな方がいいと思ったの。『間違え』られないように」
微笑み。慣れているはずの所員たちでも、思わず息を呑む美貌。その美貌があれば、どこにいようなが目立つ。けれどそれゆえに、飾り立てる必要はないのだ、と誰もが理解した。

「カグヤさんを間違えるほど目が節穴の人はいないと思いますけど、たしかにシンプル・イズ・ベストですよね！」

「これぞ『カグヤ』、これぞ美の頂点つてところを見せてやりましょう！」

「……まあ、あなたたちが楽しそうだから、私はそれでいいわ」

輝夜は遠い目をした。オープンパーティーにはコナンたちも招待されているという話を園子から聞いている。それなら、「相手」が絶対に輝夜を見つけられるようにしてやらなくてはならない。

（人違いで命を狙われる人がいたら、気の毒なものね）

このパーティーでは、おそらく人が死ぬ。輝夜もおそらく命を狙われる。それは別にどうだつていいが、彼女にとって重要なのは、それに付随する「変化」だった。すなわち——この歪な永遠を歪たらしめる、貴重な「刻」が訪れる。輝夜には分かっていた。だから「蓬莱山輝夜はここにいる」と宣言してやらねばならないのだ。

*

少年探偵団がツインタワービルの見学をして数日後。オープン前であるはずのツインタワービルの一室で西多摩市の市議会議員である大木岩松という男性が殺害されたらしい。そのことで、大木市議と面識があった小五郎をはじめとして、あの日ツインタワービルに行った者たちは目暮警部に招集され、意見を求められたそうだ。

ただし、見学をする前に帰ってしまった輝夜は大木市議とは面識がないため、当然呼

ばれていない。事件の話は、少年探偵団から電話が掛かってきて知ったのだ。雑誌の撮影が早々に終わった輝夜は、その後の予定もなかったため、「一緒に捜査しよう」という彼らの提案を快諾した。というのも、単にこの小さな友人たちに協力してあげようというわけではなく、輝夜には確信があったからだ。

（間違いない、「鍵」があるわ）

輝夜には永遠と須臾を操る程度の能力がある。ゆえに、人間が気が付かない「世界の動き」にも気が付く。表現するのであれば、それは強固な結界に、ふいにできた綻びのようだった。固く固く縛られた結び目の、ほんのわずかな緩み。輝夜でなければ気付かない。あるいは、気付いたとして、どうしようもないことだった。

しかし、気付いたのが蓬萊山輝夜であるならば、話は別だ。

——この事件は「刻」を進める。

その「異変」を脅威と感じているのは、外の世界から来た輝夜だけかもしれない。ちょうど、輝夜が月を隠したときに、それに気が付き、脅威と感じた者がごくわずかにしかいなかったように。

多くの者はそのときのことを「永夜異変」と呼び、「偽りの月」ではなく、「偽りの永遠」に目を向けた。この世界の住民も同じ。「歪な永遠」には誰も目を向けない。彼らが夢中になっているのは連日連夜報道される、取るに足らないけれど己が身を脅かすかも

しれない「事件」についてだった。

タクシーが毛利探偵事務所の前に停車して、輝夜は集まっていた少年探偵団たちへ、朗らかな笑みを向けた。

(気が付かないなら、気が付かないままでいいことだわ)

「輝夜お姉さん！ よかったあ。博士も灰原さんも来ないって言うんだもん」

「まあまあ。博士は探偵団じゃありませんし、珍しくお客さんが来るからって言ってたから、仕方がないですよ。灰原さんはいつも来てくれるわけじゃありませんし……」

「輝夜の姉ちゃんはずいぶんタワールの見学一緒に来れなかったからよお、捜査まで仲間外れにしたら可哀想かと思って」

元太の得意げな顔を見て、輝夜はわずかな間目を丸くし、それからすぐにくすくすと笑う。探偵団の中でも一番背の高い少年の頭に手を乗せ「そうね。仲間外れは、さみしいわ」と言った後、赤面させて何も言えない少年少女ひとりひとりの顔を見て、「誘ってくれて、どうもありがとう」お礼を言った。

「……輝夜さんが喜んでくれて、よかったよ。さてと。まずは、ピルの設計者の風間さんのところだな」

いち早く回復したコナンが咳ばらいをして話題を元に戻す。

かの名探偵は、(この笑顔に慣れることは一生ねえんだろうなあ)と悟っていた。全人類を惹きつけると言っても過言ではない絶世の美貌を有する「お嬢様」は、周りの人々の心を乱しておきながら、本人はそんなことを気にも留めず、いつものほほんとしている。罪作りなことだ、と己の鼓動を鎮める意味でも、コナンは意図してそっけなく言い放ち、歩き出した。

「やあ、君たちか。そつちの方は……え!？」

一行はあさひ野にある、ツインタワービルの設計者である風間英彦という男性の仕事場を訪れた。インターフォンを鳴らした探偵団を快く迎え入れようとした風間は、彼らの後ろに控えている絶世の美少女に気が付いて、思わず声を上げた。

「初めまして。この子たちのお友達の、蓬萊山輝夜よ」

「あなたの顔を知らない日本人なんてどこにもいませんよ! 『カグヤ』さん、蓬萊山っていう苗字なのかあ。なんだか、本名がそのまま芸名になりそうな感じですね。いやあ、こんなところでお会いできるなんて、感激です。今日はどういったご用件ですか?」
興奮気味にまくしたてた風間に、輝夜は特段表情を変えないことなく、「実はあの日、私もツインタワービルを訪れていたんだけど、急用があつて見学ができなかったものだから、彼らに誘われてお話を聞きにきたのよ」と答えた。

「ははあ、ツインタワービルのことですね! そう言えば、噂で聞きましたよ。『カグヤ』

さんがオープンパーティーに来るって。いいですよ。裏話でも何でも、お話ししましょう。さあ、上がってください」

「お邪魔しまーす！」

どたどたと中に入る子どもたちが続いて、輝夜は優雅に微笑んだ。

「失礼するわ」

質の良さそうなソファに腰掛けながら、飲み物をもらって探偵団は熱心に風間への聞き取り調査をしている。輝夜はその様子をにこにこ見守っていた。「何でも」と言っただけ、風間はともすると無礼だと受け取られかねない質問であっても、気を悪くすることなく答えてくれ、子どもたちは「探偵」と言うにはいささかりラックスした様子である。

「ありがとうございます！」

「いやいや、こちらこそ。こんな他愛のない話をするだけで『カグヤ』さんと写真が撮れるなら、『調査協力』なんて安いもんだよ」

元氣よく挨拶をして家を出て行く一行を見て、風間は眩しげに目を細めた。ビルのオープンまで仕事場に留まっているという風間は、単身赴任中らしく、一人息子が恋しくて寝ていると分かっているも電話を掛けてしまう親馬鹿だ。はつらつとしたこの少年たちを忙しさにかまけて会うことができている息子と重ね合わせてしまう部分が

あつたのだろう。

「次は如月峰水先生ですね！」

道を歩きながらそう言う光彦へ、輝夜は首を傾げた。

「先生？」

「如月峰水さんっていうおじいちゃん、日本画家で、ツインタワービルのオーナーの常盤美緒さんの日本画の先生なんだって！」

歩美の説明に納得した輝夜は、地図を見ながら先導するコナンに続き、小高い丘へ続く道を歩く。輝夜はまるでハイキングにでも来たかのように、きよろきよろと丘から見える景色を楽しんでいた。一方、輝夜ほどの体力がない子どもたちは、肩で息をしながら「なんでこんなところにわざわざ家なんか……」と文句を言っている。

「よ、よし。押すぞ」

一番最後に息を整えた元太がそう言い、インターフォンを押す。中から出てきた老人は、少年探偵団の説明に対し、「子どもが警察の真似事をするんじゃない！」と一喝していたが、「手ぶらで帰すのは忍びない」として、自宅にあげてくれた。

輝夜はその穢れの濃さから、彼が殺人を犯したことがあると察した。ただし、それを子どもたちに伝えることはしない。彼らは「探偵」を名乗っており、「謎」を解き明かすのが好きなのだろう。しかも、輝夜自身、殺人を「悪いこと」だとは、別に思っていない

い。意見を求められれば答えるが、そうでないのなら、この小さな探偵たちが好きなのに動き、考えるのを「邪魔」するつもりはなかった。

部屋の一面がカーテンで覆われている、彼の仕事部屋について、子どもたちが口々に何かを言っている。その様子を眺めながら、輝夜はこの穢れを纏う老人へと近づいた。

「富士の山を愛しているのね。あなたの絵、見事だわ」

褒め言葉を紡ぎながら、輝夜は心底残念そうに、見る人によつては同情したような視線を日本画の巨匠である如月へと向けている。如月が何かを言う前に、彼女は子どもたちには聞こえない程度の音量で、言葉を続けた。

「まるで、山に魅入られた者の心を表すよう。衝撃、憧憬、敬愛——憤怒、憎悪、悲哀」
「むろん、絵には描く者の心が表れる」

輝夜が感じたままの、感情を表す言葉を連ねるのを遮るように、如月は強引に、けれど淡々と告げた。

「たとえ人物画を描こうとも、描かれた人物の浮かべる表情だけでなく、それを描いた者の心を通して『表情』となるのだ」

まっすぐに「如月峰水」の心にある富士山を見やる大人二人に、子どもらしくわいわいとおしゃべりに興じていた探偵団も気が付いたようで、しんとした沈黙が、季節外れの初雪のごとく不意に訪れる。

「……どれ、手土産でも用意してやろう」

幻の雪をとかして夏に戻したのは、——夏の終わりのようにほの寂しさを感じさせる、しわがれた老人の声だった。探偵団を怒鳴りつけた時とは違い、やわらかなまなざしを向けた如月は、筆をとって彼ら一人一人の似顔絵を描き始める。

にこり。いつもの美しい笑みを浮かべて、輝夜は老人のまなざしのその奥、もの悲しさを浮かべる瞳をじっと見つめた。

「まこと、人を狂わす魔性の美じゃな」

「そう言うわりに、あなたは平気そうだね」

言葉少なに、彼ら是对話をしていた。隠すつもりもない深淵を、隠し通したかった激情を、お互い覗き覗かれながら。逃げるように目を伏せた如月は、視線を己が手に移してその名を記した。

筆で描かれた、美しい女性。

もちろんそれは蓬萊山輝夜であったけれど、輝夜にとつては自分でありながら自分には見えなかった。もちろん、モデルの「カグヤ」でもない。

「すごいすごい」とはしゃぎながらも、大した情報を得ることはできなかつたことに不完全燃焼気味の子どもたちは、原佳明というプログラマーの家へ行こうと提案していたが、如月邸の立地のこともあり、予想以上に時間が掛かってしまったため、今日は家に

帰ろうということになった。

「輝夜さん、さつき何話してたの？ 富士山の絵を見ていたとき……」

帰り道、子どもたちを送って、最後に探偵事務所へ行く道をコナンと二人で歩いてきた時のことである。純粹な疑問なのか、探偵として何かしら感じたのか、少年は首を傾げて、上目遣いに輝夜をじつと見た。

「見事な富士の山ね、とそう言ったのよ。描き手の心を映しているって」

「あ、輝夜さんは美術館とか行くの好きなんだっけ。輝夜さんとしては、峰水さんの絵ってどう映ったの？」

「そうね」

輝夜は微笑まなかった。米花町からは見えやしないが、如月邸のあった方角をぼんやりと見ながら、やわらかそうな唇に白い指を当てる。

『決別』かしら」

長い足で、珍しくコナンより一步前を歩いた輝夜の顔は、背の低い少年からは見えなかった。高校生の自分なら、黒髪をなびかせる彼女の隣に立ち、先へゆこうとするその人の表情も見れたのだろうか、と益もないことを夢想する。輝夜は優しいけれど、慰めはくれない。いつだって、自分のしたいことをすると言っていたのを、少年はよく覚えていた。

多分、輝夜は優しいけれど、自分が先へ行きたいときには、誰も待つことなく、気が付けば追いつくこともできないほど遠くへ行ってしまう人なのだろう。だからコナンは、自分たちを友人と呼んでくれる、ともすれば孤独に見えるほどの隔絶した美貌の持ち主の隣を、歩きたいと思った。

たつ、と小走りで追いつくと、もう探偵事務所の目と鼻の先で、立ち止まった輝夜は隣に並び立ったコナンを見て、にこりと微笑んだ。

「ラーメン屋」

「え？」

「約束でしょう。ラーメン屋、今度行くって。おいしいお店を、探しておいてね」

ぽかんとするコナンにひらりと手を振って、彼女は去ってしまった。

*

ツインタワービルの建設に関わる人物、西多摩市の市議会議員である大木岩松氏と「TOKIWA」の専務でプログラマーの原佳明氏が亡くなった事件に関して、「組織」が絡んでいるかもしれないと睨んだコナンは、厳しい表情をしながら探偵事務所の前にいた。小五郎の運転によるレンタカーで、「みんなと一緒にパーティーへ行こう」と蘭が提

案したことにより、「直接行くから」と断った輝夜以外の面子は、事務所前に集合することになっていったのだ。

園子の中々現れないのをいいことに、博士と灰原を交えた三人で、連続殺人と思われる今回の事件についての意見をぼそぼそと話し合っていた、その時。

「ハアイ、お待ちどうさまー！」

「そ、園子ー！」

時間ギリギリになって、園子が現れた。蘭の驚いた声に顔を上げたコナンは、己の目を疑った。彼女はトレードマークのヘアバンドとオールバックではなく、ウェーブをかいた髪型になっていたのである。もちろん、印象は普段と全く違った。

さらに、コナンが園子をまじまじと見つめてしまったのには理由がある。というのも、その髪型を形容するとしたら、「灰原のような」と言うのが、一番想像しやすいだろう。

衝撃のあまりコナンが園子を見つめている様子を見た光彦の「園子さんに見とれていてんですね！」という言葉によって、コナンは車の中で周りからかわれる羽目になってしまった。

そんなわけで、コナンにとってはあまりおもしろくない道中だったが、長い渋滞に引つかかることもなく、一行はツインタワービルに到着した。係に案内されて車を停め

た一行は、受付へと向かう。

「輝夜さん！　う、美しいという言葉ではもはや足りない……！」

「こんばんは。私の方が少し先に着いたみたいだったから、受付で待たせてもらっていいわ」

一度見れば間違えるはずもない美貌の人は、周りの視線を奪いながら、受付の隣で立っていた。一行は輝夜を発見して、それぞれの感嘆を以ってして彼女の名を呼ぶ。特に感激して大きな声を上げた小五郎にもさらっと視線を向け、輝夜は全員にこりと笑みを返した。

輝夜が身にまとっていたのは、薄紅のドレスである。足元の隠れる丈のノースリーブドレスは上品なクルーネックで、体のラインは美しく見せるのに、まったくいやらしくない。いつそ飾り気がないとすら思えるほどシンプルなデザインだったけれど、生地の上質さにより見る者に質素であるとは微塵も思わせなかった。装飾品らしい装飾品もなく、ほっそりとした腕を覆う二の腕まである白い手袋をしているくらいで、髪型も普段の彼女のストレートヘアである。

「輝夜お姉さん、きれい……」

「飾り立てる必要のない美というものをこの目で見たわ」

歩美と園子が、頬を染めながらそう呟く。

某芸能事務所のスタイリストは、「衣服は額縁に過ぎない」と彼女のドレス姿を見て、そう述べたそうだ。そしてその後、満足げな顔をして燃え尽きたように机に突っ伏したらしい。手に持ったスマートフォンには、輝夜のドレス姿が撮影されていた。

閑話休題。

輝夜と合流した一行は、他愛のない話をしながら、パーティー会場へと案内された。次々に話し掛けられる輝夜だったが「今日は『カグヤ』として来ているわけではなく、友人の付き添いとして招待されただけだから」という内容を伝えて回避し続けている。

幸いだったのが、パーティーと呼ばれるような人間というのは輝夜を取り囲んだり質問攻めにしたたりすることがなく、「スマートさ」に重きを置いている者が多くいたということだろう。それゆえ、「今日はそういう感じじゃないから」と輝夜が雰囲気で伝えれば、それを察して深入りはしない。写真撮影だつて、きちんと断りを入れる者ばかりだ。乾杯が済み、歓談の時間もしばらくしてから、ビルのオーナーである常盤美緒から、余興が提案される。三十秒を当てるゲーム、と言われて、光彦と元太はいろいろめきたった。「僕らには歩美ちゃんがいるんですから!」「景品はいただきましたぞ!」とうれしそうな少年たちに反して、当の歩美は不安そうに周囲をきよるきよると見回している。

輝夜、コナン、灰原は辞退したが、ゲームには多くの人が参加した。その中で三十秒をぴたりと当ててみせた人物がいる。歩美は三十秒を外したようで、残念そうな顔をし

ていた。

ピタリと当て、ステージ上へと呼ばれた小五郎を視線で追っていたコナンは、「そういえば」と、先程までは自分たちの近くにいたはずの輝夜が、いつの間にか会場から姿を消しているところに気が付いた。

「灰原、輝夜さん知らねーか？」

「……見た感じ、ここにはいないようね。話し掛けられるのに疲れて、外の空気でも吸いに行つたんじゃないかしら？ 彼女、『気付かれないようにするのは得意』って散々言っていたから、みんながゲームに集中している間に抜け出したんでしよう」

「それならいいんだけどよ……」

コナンは言葉とは裏腹に、納得していなさそうな顔をしながら、視線をステージの上で笑っている小五郎へと戻す。しかし、嫌な胸騒ぎがして「やつぱりオレ、輝夜さんを探してくる」と灰原へ声を掛けた。

「そんなに心配なら、電話でもメールでもすればいいじゃない」

「すぐ戻る！」

灰原の言葉を無視して会場を飛び出したコナンは、すぐに輝夜と会うことができた。

人目につかない、非常階段の隅。洞窟の落盤事故の際、子ども四人を抱えて脱出したときでさえ息を乱さなかつた彼女は、疲れたような表情をして、うずくまっていたのだ。

——血のにおいをまといながら。

結界：光と闇の網目

三十秒当てゲームが始まる前、輝夜は羽休めにパーティー会場から出た。妙な気配を感じたというのものもある。「妙な気配」の正体はすぐに分かった。不自然に誰もいないホワイエには、美しいのにどこか胡散臭さを感じさせる笑みを浮かべる女性がぼつんと立っていたのだ。

「あなたが来るとは思っていなかったわ。てつきり、私のところへ来るのは永遠亭の誰かだと思っていたのに」

大方、彼女の能力で何かしらの「境界」を曖昧にしているのだろう。それゆえ、輝夜にとつては知った仲である相手であるのに、はつきりと気配が感じられなかった。

声を掛けられた女性は、やはり胡散臭い笑みのままだ。その笑顔という仮面は、輝夜との再会に対して喜怒哀楽のどれも抱いていないのを隠すためにも見えるし、すべてを抱えていることを悟らせないようにするためにも見える。

「仕方ありませんわ。月の民では力が強大すぎてこの『狭いスキマ』を通れない。永遠と須臾を操る程度の能力を持つ、あなたでもなければね」

扇子で口元を隠し、紫水晶のような目を三日月のように細めて、女性は穏やかな口調で答えた。それから、どこか芝居がかったようにもみえる動作で、輝夜へと手を差し伸べる。

「そういうわけで、幻想郷に戻りましょう」

「どういうわけかしら」

「あなたのお家の人に頼まれちゃったのよ」

「あら、弾幕ごっこに負けでもしたの？」

「寝起きに襲われましたの。月の民は争いを忌避して月へ移動したというのは与太話だと確信しましたわ」

会話のテンポを崩さず、女性は大袈裟に肩をすくめてため息を吐いた。「やれやれ」と「よよよ」の中間の、これまた本心の分からない、ともすれば相手を馬鹿にしているようにも見える表情である。

「弾幕ごっこは遊びでしように」

そんな彼女の、おそらくは意図的に神経を逆なでしてくる言動を意に介さず、輝夜は呆れた目を向けた。

何せ、輝夜はこの大妖怪は常に胡散臭く、真意を見せないことをよく知っていた。どうせ今の会話も戯れに過ぎないのだろう。輝夜にとってもそうであるように。

「ええ、もちろん。けれど、あなたもご存知のように、遊びであってもルールはルールなのよ」

「そうね。私もそのすばらしい遊びをやりたい気分になってきたわ」

輝夜は不敵に微笑む。それは月の姫ではなく、蓬萊菓を飲んだ罪人でもなく、永遠亭の主でもなく、——謎を前にした探偵の笑みのような笑みだった。

「外へ行きましょう。思いつきりやりたい気分なの」

「ふう。こうなるような気がしていたのよね」

輝夜の子どものように無邪気な言葉を受け取った女性は、子どものわがままに困る大人のような表情を作って、パチンと扇子を閉じた。

そして二人は、夜空中で再び対峙する。剣呑な雰囲気はどこにもなく、むしろ気安ささえ漂わせる。しかし気安さはイコール信頼ではないし、馴れ合いでもないことは、間違いないかった。

輝夜は両手を広げて、来訪者へと視線を向ける。余裕を崩さない表情で輝夜を見つめ返した濃紺の目は、灯りのない夜闇よりもなお暗い。それは輝夜の赤茶色の目も同様だった。互いに永きを生きる身。

都会の夜。新設されたビルの真上。当然、人工の灯りは昼のようにまばゆく地上を照

らす。けれど二人を照らしうるのは、わずかな月明かりと星のきらめきだけだった。二人がいるのは、紛うことなく「月夜」であったのだ。

「私がこの『永遠』に違和感を覚えるときは、必ず『彼』が関わっているのよ」

輝夜は、小さな友人に敬意を表して、己の「推理」を妖怪の賢者へと聞かせた。妖怪の賢者——八雲紫であるならば、あるいは事の真相を知っているかもしれない。答え合わせというやつだ。

この世界の時は、何ら違和感なく進んでいる。けれどこの世界の「年月」は進まない。季節は巡るのに、人は年を取らない。誰もそれに気が付かない。長く幻想郷の者たちから永遠亭を隠した輝夜の扱う「永遠の魔法」ととてもよく似た現象だった。けれど、例外もある。

たとえば、酒巻監督を偲ぶ会で彼らと敵対する『組織』の一員を逮捕したとき。彼らが自ら『組織』の話をしたとき。学園祭で彼が元の姿に戻ったとき。

「『彼』は『鍵』であり、『世界』そのものだった。『彼』がいることでこの世界は成り立ち、進んでゆく」

そういつた時には必ず、「永遠」は解けるのだ。そしてまた、いつの間にか「永遠」に戻る。この歪な「永遠」は、変化を嫌い、繰り返す「永遠」という性質を持ちながらも、時間が進むときがあるのだ。

それはまるで、重要な「事件」と「彼」が関わったときだけに「年月」が経過するともいうように。空回りを続けていた秒針に、ようやく分針が反応したとでもいうように。永い永い回廊を走り抜け、ようやく小さな一段をのぼれるように。輝夜はこの「難題」を「進みながら繰り返す永遠」と名付けた。

そして、その答えはおそらく――。

(分かってしまえば、さみしいものね)

黒髪が夜風になびく。

そう。この「難題」に、「蓬莱山輝夜」は必要ない。「進みながら繰り返す永遠」を解くのは、輝夜であってはならないのだ。鍵を手にして、その扉を開くのは「彼」でなくてはならない。

そして、輝夜の目的もまた、「難題」を解くことそのものではない。「幻想郷に帰る」、そのために「難題」を解く必要があると思っただけだ。蓋を開ければ、「難題」を解くべき人物は初めから決まっただけで、輝夜が手出しをすることは、すなわち「世界を壊すこと」。

言い換えれば、この世界は「彼」のために創られた、「彼」を主役とした「物語」なのだ。

むろん、輝夜は友人のいるこの世界を壊すつもりは毛頭なく、そもそも、当の友人が

「難題」を解きたがっているのだから、それに対して力尽くで水を挿すようなこともしたくない。

——もとから、難題ではなかったのだ。

輝夜にとつての「進みながら繰り返す永遠」はただの謎。小さな友人にとつての諸事件のようなもの。「難題」足りえるのは、その小さな友人が「進みながら繰り返す永遠」から世界を解き放ち、時の流れを正常に戻すからなのである。他の誰であつても、たとえ解き明かしたとして、解き放つことなんてできやしない。

「今は『永遠』の力が緩んでいるようね。だからあなた、『こちらの世界』との境界をつなげたのではなくて？」

「ご明察。さすがは永遠亭の主ですわ」

紫の笑みはまるで変わらなかつた。退屈そうにも、楽しんでるようにも見える。見る者に己の感情を委ねる、都合の良い液状の強固な仮面のようだ。

「さすがのあなたも『神』のほどこした『永遠』のからくりをどうこうして『境界』を操るつていうのは骨が折れるでしょうから」

輝夜は妖怪ゆえの紫の仮面を否定するつもりはない。妖怪とは、「畏れ」で成り立つ存在だからだ。境界を操る程度の能力を有するこの大妖怪を不気味で気味が悪いと感じない人間はそういないだろう。たとえどんなに友好的な笑みを浮かべていようと、妖怪

とはそういうものなのだ。

「……それで？　人間のお友達でもできたから、彼らが死ぬまで待つとでも言うつもりなのかしら。まあ、私はそれでもかまいませんけれど。いくら人間の一生が短いとは言え、戻る時間を決めていけば、一時帰宅したくらいでは死なないわよ」

紫は大妖怪らしく、あつさりと揶揄するように笑った。

「……まあ、私も戻るつもりはあるのよ」

輝夜は、顎に人差し指を当てて、眉を寄せる。夜空の下、見ていたのが人間であれば、表情のひとつひとつがいちいち絵になる彼女に魅入られていたところであろうが、あいにくこの場で彼女と対峙しているのは人間ではない。紫は胡散臭さはそのままに、ここにこと輝夜の言葉を待った。

「だけど……ラーメン屋に行く約束を、しているのよね」

ぼつりと呟いた輝夜の言葉は、沈黙を生んだ。それが下手な言い訳でも本音を遠回しに表現したものではなく、彼女が本気で心残りに感じていることの一つであったから、余計に。

「はっ」

ぼかんと、紫はらしくなく、常の胡散臭い表情を崩した。すぐに、おどけたように肩をすくめた彼女は「私、あなたの怖あい従者に言われているのよ？」と呆れたように言

う。

「ええ。だから、言ったでしょう。遊びましようって」

にこり。輝夜は誰も魅了する絶世の笑みを浮かべた。しかし、「スキマ」と呼ばれる空間の裂け目に腰掛けた妖怪の賢者は、顔色ひとつ変えることはない。その反応に懐かしさを覚えた輝夜は愉快そうにふわりを空へ浮かんだ。

「私が勝てば、あなたは『永遠亭の者に私が息災であること、そのうち帰ることを伝える』。あなたが勝てば、私は『あなたと共に、幻想郷へ帰る』。謎は解けた。それなら、こうしてまた『永遠』の力が緩むとき、いつでも帰れるわ」

「……………」

紫はあらゆる境界を操ることができているが、それはただの便利な力ではなく、彼女の演算処理能力の高さによるところが大きい。この世界から抜け出すだけなら、輝夜にも力技でどうにかできるだろう。しかし、元の世界線の幻想郷に正しく帰るとなると、力技だけではどうにもならない。

「永琳は私に会いたくなったら、何度でもあなたに『勝負』を仕掛けるでしょう。それに、あなた自身この世界に興味を抱くと思うわ。永く生きる者にとっては、飽きない世界よ。何せ大なり小なり、毎日事件が起きているから」

輝夜が自分の能力をはじめから当てにしていたと気付いて閉口していた紫はため息

を吐いた。それから、へらへらと胡散臭い表情を一度ひっこめ、悠然と微笑む。

「異界での弾幕ごっこ、楽しませてもらうこととさせてもらいますわ。私にとつては、勝とうが負けようがどちらでもかまわないことだし」

輝夜は、誰も認知できない須臾の世界へと紫を招く。そして、美しく刺激的な——ナンセンスの塊である遊びを、始めた。

*

呆然と輝夜を見るコナンに、彼女はにこりと笑みを向けた。笑顔自体は作ったものではなく、自然と浮かんだもののようにも思えたが、顔色は悪く、無理をしているようにも見える。

「輝夜さん、どうしたの!？」

彼女からのアクションがあつて、コナンはようやく弾かれたように輝夜へと駆け寄つた。ゆるゆると立ち上がった彼女に怪我はないが、コナンは蓬萊山輝夜という女性の特殊な体質のを知っている。ドレスに目立った汚れや損傷はなさそうだが、「彼女であれば誤魔化せるのではないか」と感じていたため、体温を確かめるためにも、彼女の手を取る。白い手袋で覆われていても分かる冷たさだった。

「知人と話をしていたら、疲れてしまったのよ。久しぶりだったから、……白熱してしまつて。大丈夫、この通り、怪我もないわ」

「輝夜さんは『怪我をしない』んじやなくて、『怪我をしてる状態が続かない』んだろ。オレには、『今は』怪我もないつて言つてるように聞こえるよ」

輝夜が目を細める。この成長を喜ぶ親のような、困つた弟を見る姉のような、それでいて新しいおもちゃを見つけた子どものような、複雑な笑みだつた。

「どうしてそう思うの？」

「根拠なんてない。怪我が治つても、怪我をしたときにできた衣類の汚れや破れとかが直るわけじゃないだろうし。だけど、そう聞こえたんだ。『今は怪我してないから大丈夫』なんて、そんなわけない。輝夜さんは怪我をするし、そうなれば痛いんだ。だって、あのとき顔を歪めてたじゃないか！」

ぎゅ、とコナンは小さな両手で彼女の手を握つた。

「コナン君は、心配性ねえ」

くすくすと笑つた輝夜は、するりと手を離して、少年の脇に差し込み、抱き上げた。軽々とした動作には、確かに体調不良は感じられない。

「ほら、この通りよ。心配してくれて、ありがとう」

常なら頬を染めるくらいはしていただろうに、少年は真面目な顔をして、輝夜を見つ

めた。「探偵」としての勘か、それとも、実のところ自分でも気付いていないだけで何かしらの手掛かりを掴んでいるのか。違和感がある。それでも、何に違和感を覚えているのかは分からない。

(輝夜さんは何かを隠してる)

いつものことと言われれば、そうなのかもしれないなかった。彼女は「蓬萊山輝夜」という人物の輪郭も核心も、常に捉えさせてはくれない。

「さあ、会場に戻りましょう」

輝夜はコナンを下ろして、手を繋いだ。あれほど濃密に感じた血のにおいは、もう感じられなかった。

さて、事態が動いたのはそれからだった。二人が会場に戻ると、ちようどツイインタワビルのオーナーで、パーティーの主催者の常盤美緒、それから設計者の風間英彦、ビルのオープンに際してお祝いにと富士山の絵を送った日本画家の如月峰水が壇上に上がり、挨拶をするところだった。

閉まっていた幕が開くと——常盤美緒が、富士山の絵を真つ二つに割るように、首を吊っていた。即座に小五郎が幕を閉じ、美緒を下ろすようにと怒号交じりに指示を飛ばす。時は既に遅く、美緒は亡くなっていた。

会場には警察が呼ばれ、捜査が開始される。輝夜はステージ下ですつと目を細め、騒然とする人々を観察するように見ていた。一方、コナンは捜査にしれつと加わり、ステージ上でトリックと犯人の動機に思い至っていた。さて、どのような手順でいつものように推理ショーをするか考えようとした、その時である。

大きな音と揺れがパーティー会場を襲ったかと思うと、ビルの電気室とコンピューター室が爆破されたとの報告がされたのだ。

会場にいる人々は、さらに騒然となった。声を張り上げる警察とビルの関係者たちの指示に従いながら、一同は煙と炎から逃れるための避難を開始する。

コナンと輝夜は、先に少年探偵団をエレベーターに乗せ、重量オーバーになってしまったからと次のエレベーターに乗ることになった。

下りる途中、輝夜はエレベーターの外を見やり、にこりと微笑む。それから、何かに気が付いたコナンの唇に、「しいー……」と指を押し当て、園子の手を軽く引いた。

パリン、と乾いた音がエレベーター内に響く。それからもう一度、パリン、とエレベーターのガラスが打ち破られた。誰にも当たりはしていないが、ビルの爆発により、ただでさえ混乱し、不安を煽られている人々は、悲鳴を上げて、恐慌状態に陥ってしまう。

「そんなに慌てないで。扉を開ければいいのよね？」

マイペースにエレベーターの扉に手を掛けようとした輝夜に、コナンが待ったを掛け

る。周囲の人々の中には、彼女なりの気遣いゆえの天然発言だと思つたらしく、くすつと笑っている人もいた。

「輝夜さん、いくらなんでも止まった状態のエレベーターのドアを開けるのは無理があるだろうし、ボクが天井の上ってみるよ」

輝夜に肩車されたコナンは天井を外し、彼の的確な誘導でエレベーター内にいた人々は全員脱出することができた。ツインタワービルは、その名の通り、A棟とB棟の二棟から成るビルである。パーティーが開かれていたのはA棟の七十階、A棟とB棟の連絡橋があるのは六十階と四十五階のみだ。爆破が起きているのは、会場があつたA棟であり、警察の指示で、女子どもはVIP用の直通エレベーターを使って一階まで避難、男性陣は非常階段を使って連絡橋のある六十階まで下り、そこからB棟に移って避難するという指示が飛ばされていた。

当然、直通で下りられるはずのエレベーターが故障してしまったのだから、爆破されていないB棟へと移動する流れとなる。幸いにも、四十五階の連絡橋が近いこともあり、美緒の秘書であつた沢口が案内して連絡橋を渡ることとなつた。

しかし、不幸は重なるものである。六十階の連絡橋が爆破されたことにより、上から連絡橋だつた物が落下してきたのだ。

「コナン君っ！」

避難する人々の安全を確認するように最後尾を走っていたコナンに向かって、蘭が声を張り上げた。このままでは分断されてしまう。

「コナン君！ 必ず、助けに行くわ」

前を走っていた輝夜は、切迫した空気など感じさせない笑みを浮かべて、A棟になんとか逃れたコナンへとひらりと手を振った。コナンを守るために落下物から逃れるためA棟へと一緒に飛びのいた蘭は、心配した園子の呼び掛けに応えて、大きく手を振っている。

「私たちは避難を続けましょう」

輝夜に促された沢口の先導で、恐怖と驚きで泣き出していた人々も、ぐすぐすと鼻をすすりながらB棟内を歩き始めた。到着していた消防隊や救急隊員に全員を引き渡し、避難も無事に完了。

園子はべそべそと泣きながら祈るように両手を組んでA棟を見上げている。コナンと蘭の二名がA棟に残っていることを報告しながら、輝夜は探偵団の子どもたちがいないことに気が付いた。園子と同じように、彼女も上を仰ぎ見る。ただし、その目に映っているのは轟々と光る炎にかき消されて星の見えない夜空だ。

「……お仕置きをしなくてはね」

輝夜はその日、二度に亘って空を駆けた。

*

少年探偵団は恐怖を押し殺して座り込んでいた。コナンや輝夜たちより一足先にエレベーターで避難を開始していた彼らだが、途中、エレベーターを降りたのだ。というのも、泣き出した赤ん坊を宥めるために下の階で休憩していた女性が詳しい事情を知らずにエレベーターに乗ろうとしてきたからである。コナン一人分の体重が加わっただけでブザーが鳴ってしまうような満員の中、女性と赤子が乗る余裕はどこにもない。

だから、探偵団の子どもたちはみんなエレベーターを降りた。自分たちなら六十階の連絡橋を渡るから大丈夫と言って、灰原の持つていた時計型ライトを頼りに連絡橋へと向かっていたところだった。

しかし、頼みの綱の連絡橋も爆破されてしまい、灰原のライトも電池が切れてしまう。めそめそと弱音を吐き出そうとしたときに、探偵バッジを通じてコナンから連絡があった。

ちなみに、連絡橋のある四十五階に取り残されていたコナンは、そこで爆発による火災が発生したため、蘭と二人で消火用のホースを使い、窓ガラスを割って下の階に侵入。そこから階段を使って地上に避難をしていた。そこで、探偵団の面々がいないことに気

が付いたのだ。

連絡橋を渡っていないという話をする、コナンは「待つてろ！」と言つて通話を切つた。それから数十分か、どれくらいの時間が経つたのか。

コナンは現れた。ヒーローのように、B棟の連絡橋から、博士の作ったスケボーで勢いを付け、命懸けで探偵団のもとへ訪れたのである。

「屋上に行くぞ。救命へりを呼んでもらうよう、博士に頼んでおいたから」

頼もしい少年の言葉に勇気付けられた探偵団は、恐怖と不安に染まっていた心が、奮い立つのを感じた。彼がいれば大丈夫、と誰もがそう思い、先導してくれるコナンの後続く。

「悪い、オレ、ちよつと寄るところがあるから。みんなで先に行つててくれ！」

「ええっ?」

しかし、信頼する少年の言葉である。歩美、光彦、元太の三人は、言う通りに屋上へ向かった。灰原だけはコナンへと付き従つた。三人はそれに不満を抱きつつも、彼らが自分たちに何かを隠しているだろうとは思いつつも、けれど彼らを信頼していたから、まっすぐに屋上を目指した。

「ね、ねえ……アレ……救命へり……?」

息を切らして屋上に辿り着いた子どもたちが見たものは、ヘリポート上で轟々と火を

噴き上げるヘリコプターと、ギリギリ炎に巻き込まれない場所で悠然と微笑む輝夜の姿だった。

「輝夜さん！」

「危ないわ。私がそっちへ行くから、あなたたちはそこから動かないでちょうだい」

子どもたちでさえ熱波を感じる中、輝夜は熱さなど感じないとも言おうように、炎に照らされ、この世の者とは思われないほどに——浮世離れした、おそろしく美しい笑みを浮かべて、歩いていった。

「け、怪我はない？」

「そうだぜ！ 火傷してんじゃねえか!？」

「輝夜さんは、どうして屋上に……？ それに、あのヘリは……？」

涙目になりながら、口々に言葉をまくしたてる子どもたちを、輝夜は細い両腕でまとめて抱きしめた。

「あのヘリコプターは、爆発に巻き込まれてしまったわ。私はコナン君と蘭ちゃんと四十五階の連絡橋で別れた後、避難先の地上であなたたちがいないことに気が付いたの。連絡を取る方法もなかったから、先に屋上で待っていたというわけよ」

「ああ」と、彼女はのんびりとした口調で付け足す。

「ヘリの中にいた人は、爆破する前に『避難』したわ。どこへ行ったのか、もう分からな

くなってしまうたけれど」

腕の中で、子どもたちはそれぞれ泣き出してしまった。安心か、それともまだ続く恐怖からか、縋るように輝夜に抱き着いている。

「ここにいるても、この状況ではヘリコプターは救助に来られないでしょう。下へ向かうわ」

「あのね、コナン君が、七十階で用があるって言って……今、パーティー会場だと思うの」「灰原さんも一緒ですから、とりあえず二人と合流しましょう！」

「みんな揃ったら、怖いモンなんてねえな！ よっしゃあ、行くぞー！」

強引に涙をぬぐった元太が声を張り上げたのに合わせて、輝夜は子どもたちを抱きしめていた腕をそっと離し、ほんのわずかに、火の海に沈むヘリコプターへ視線をやった。

勇ましく、七十階へ向かおうとしていた子どもたちには気付く余地もなかった。輝夜の視線が、仄暗く冷たいものであることに。

ヘリコプターから視線を外した輝夜は、子どもたちの後を追い掛けた。

七十階のパーティー会場に着くと、コナンと灰原は目をむいた。二人とも、輝夜が思うとは思っていなかったのである。子どもたちが輝夜が屋上にいた理由と、屋上では爆発に巻き込まれたらしいヘリが墜落していて火の海になっていたこと、ヘリポートを

使った救助は見込めなさそうであることを説明した。一通りの説明が終わると、ここからどうやって脱出しよう、という話になる。

「私が全員抱えて、空でも飛びましようか？」

「もう、輝夜お姉さんったら！ 真剣に考えてよ！ 歩美たち、そんな言葉で誤魔化されるほど、子どもじゃないんだからっ！」

「オレたち六人に加えて、眠っている峰水さん……全員が助かる方法は……」

此度の事件の犯人である如月峰水は、七十階で、ひとり己の描いた富士山の絵を見ていた。その横顔は、激情のままに人を殺めた殺人犯というよりは、墓参りをしながら空虚を伝える老人そのものであった。

その人に、コナンは事件の真相を伝えた。真実が暴かれたことを知った峰水は自殺しようとして服毒しようとしたが、その前にコナンが時計型麻醉銃で眠らせてしまったのである。

「無駄よ。会場のテーブル全てに爆弾が仕掛けられてるみたいだもの」

「爆弾が仕掛けられてるのがテーブルだけなら、全部投げ捨てましようか？」

「輝夜さん！ 冗談を言っている場合じゃないですよ！」

輝夜が光彦に怒られてしゅんとしている間に、コナンは小五郎がゲームの景品で当てたマスタングに目をやり、探偵団に作戦を話し始めた。初めは「そんなことできるのか」

と驚いていた子どもたちも、真剣な表情のコナンを見て、覚悟を決める。

この作戦において、要となるのが「時間」だ。マスターグに乗ってしまえば、爆弾のタイマーは見えない。電池の残っている時計を持っている者もない。ゆえに、誰かがぎりぎりまで時間を読み上げて、残りを爆発のタイミングに合うように正確にカウントダウンしなければならぬのだ。コナンと灰原がそう説明すると、「私、コナン君が隣にいてくれたらできると思うの！」と頬を染めながらも、きりりとした表情の歩美が言った。

「それなら、歩美ちゃんが当てられる三十秒前まで、私がタイマーの見える場所からカウントダウンをするわ」

「いいえ。私がやる」

輝夜の提案を蹴って、当然のように灰原が爆弾のタイマーへ近寄ろうとする。輝夜はその首根っこを掴んで、にこりと微笑んだ。

「私は車の運転をしたことがないし、やり方が分からないわ。だったら、子どもが走るよりも速い私とその役目につくべきじゃない？ ほら、二人とも。しっかり捕まえていてちょうだいね」

ひよい、と輝夜は灰原を元太と光彦に向かって投げる。二人はあたふたとそれをキャッチして、「もうちよつと丁寧にやってくれませんかねえ！」「こんなところで怪我

したらどうすんだ！」と輝夜に向かって非難を浴びせている。それをくすくすと笑う輝夜に、目暮警部へB棟屋上のドームを開けるよう連絡していたコナンが呆れた目を向けた。

「さあ、シートベルトをしっかりと閉めるのよ」

残りタイマーが一分になると、輝夜は明朗にカウントダウンを始めた。

「三十三……三十二……三十一……」

「三十……」

歩美が両目を瞑ったまま、輝夜のカウントダウン引き継いで、祈るように数え始める。輝夜も皆の待つマスタングへと駆け寄ろうとして——何も無いはずの空間から、手を伸ばされた。

「輝夜さん!? 何を立ち止まっているのよ!」

どうやら、角度的に子どもたちからは輝夜を引き留める手は見えないらしい。灰原が車から飛び出そうとして、光彦と元太の二人に押しとどめられている。

「思っていたよりも早かったわね。言伝はきちんと伝わってなかったのかしら?」

「姫様。私は姫様の口から聞きたいのです。必要とあらば——」

両端をリボンで結ばれた、小さなスキマ。そこから白い腕が伸びている。当然、輝夜には見覚えのある腕だ。

輝夜は笑った。きつと紫はぶつくさ文句を言っていることだろう。なにせ、そう間もない中、二度も弾幕ごっこに興じて負け、さらには便利に使われているのだ。もちろん輝夜のことでも永遠亭の面々のことについてもどうでもいいであろう紫は手を抜いてたに違いないが、それでも多少は体力を消耗する。

「これは命令だわ、永琳。邪魔することは許さない。ラーメンを食べたら一度帰るわ」
「承知しました。またすぐに、御連絡します」

それはちよつと紫が可哀想だな、と思つて笑つてしまった輝夜に、しびれを切らした子どもたちが三人、飛びついてくる。どん、と彼らの体が触れた瞬間、輝夜をとらえていた腕と、この世界を繋げていたスキマは跡形もなく消え去つていた。

「何やつてんだよ！ ボーッとしてんじゃねえよ!!」

「行きますよ、輝夜さん！」

「あなたまで……あなたまで、幻になるなんて、許さないんだからッ!!」

元太、光彦、灰原の三人を抱いて、輝夜は「ごめんなさいね」と言つて、跳躍した。

それは須臾の時間。誰も気付くことのできない、輝夜だけの時間に、危険を顧みず輝夜を「救おうと」した友人たちを招き入れる。そして、輝夜はびつたり残り十秒を残して、子どもたちを抱きしめながら車に乗り込んだ。物言いたげなコナンにウインクをひとつ送ると、彼は頬を赤く染めた。しかしそれは常の可愛らしいものではなく、明らか

に怒気を孕んだ表情であつたが。

「ゼロ!!」

集中していて、周りで何が起こつていたのか気付きもしない歩美のカウントダウンに合わせて、コナンがマスタングを発車させる。輝夜が調整するまでもなく、ぴつたりのタイミングだった。

「……大丈夫。絶対に離さないわ」

恐怖で身を縮める子どもたちを抱きしめたまま、輝夜は優しく語り掛ける。

爆風に煽られて窓を突き破り、放物線を描いた車は、開いたドームのその先、プールに吸い込まれるように着水した。

永夜返し―世明け―

輝夜たちが無事にツインタワービルから避難して、警察や救助隊に保護されていた頃。

満身創痍の様子で、ひゅうひゅうと危うげな呼吸をする男たちがいた。肩を支え合い歩くその様子は、誰かに見られれば救急車を呼ばれていたかもしれない。

しかし、すぐ近くでツインタワービルで大規模な爆弾事件があったのだ。闇夜に溶ける黒ずくめの恰好をした男たちに気付く者など誰もいない。

「くそッ……化け物め……！ 絶対ぶっ殺してやる……ゲホッ」

「あ、兄貴、喋んねえ方がいいですぜ。ひどい怪我だ……。さっき、下のモンを呼びつけました。怪我の手当てをしてもらいましょう」

ジンとウオツカというコードネームを持つ、黒ずくめの組織の一員であった。彼らの計画は順調なはずだった。

組織を裏切ったプログラマーの原佳明を殺害し、さらには裏切り者のシェリーがツインタワービルのオープンパーティーに出席することを突き止め、原の遺したデータと共に、シェリーと――ついでに、おそらく何も知らずに組織に楯突いた「カグヤ」を同時

に始末できるはずだったのだ。

原の遺したデータは、ツインタワービルを爆破することで始末することができた。先に避難していた中にシェリーはいないと、見張りをやらせていた下っ端が報告していたし、無茶な脱出をしたのは子どもと老人、それから「カグヤ」だけで、そこにもシェリーはいなかったそうだから、少なくとも目的は三つ達成できた。シェリーがパーティーに参加していなかった場合も含め、それでも二つは達成していることになる。

だが、達成感はない。

次は必ず殺す、と心に決めるのと同時、ジンの頭には「カグヤ」の言葉が焼き付いて離れなかった。

「殺さないわ。だって、あなたはきつと『必要な人』だもの。その命、大事にしなさいね」
——このオレが。あんな小娘に！

はらわたは煮えくり返り、怒髪天を衝く思いだった。

ツインタワービルのエレベーター内で狙撃した「カグヤ」は、こちらに気付いているとしか思えなかった。銃弾が当たらないようにシェリーに似た女の手を引いただけでなく、自らも避けてみせた。偶然の成せる動きではない。ジンがそのことに内心驚きながら、へりに乗り込み、撤退を開始しようとしたときだった。ビルにいたはずの女は、い

つの間にかジンの背後にいたのだ。

離陸を始めたヘリの中で、にこにここと微笑みながら「こんばんは」とのんきな挨拶をかましてきたのだ。

「てめえ、何者だ。どんなトリックを使いやがった」

「それも分からないまま、私は命を狙われたのかしら？　でも、教えてあげるわ。私は蓬

萊山輝夜。あなたは？」

「名前なんぞ聞いちゃいねえ。選べ。オレに殺されるか、ここから飛び降りて自分で死ぬか」

チャキ、とジンは輝夜のこめかみに銃を突きつけた。ヘリを操縦しているウオツカは着陸すべきかこのまま撤退すべきか悩んでいるようで、ちらちらとジンの方を見ている。

「私は殺されるつもりはないわ。私が怪我をすると心配する子がいるもの」

緊迫した雰囲気似合わない、やわらかな雰囲気だった。

「お仕置きに来たのよ。私のお友達を危険な目に遭わせるなんて、痛い目でもみてもらわないと割りに合わないわ」

「丸腰のくせに随分余裕じゃねえか」

カチャリ。ジンが引き金に掛けた指へ力を籠める。パン、と乾いた音がした。

だが——そこに輝夜はいなかった。

「余裕だわ。あなたの方こそ、随分余裕があるみたい」

輝夜は、閉じているヘリコプターの扉に手を掛けた。「あんまり遠くへは行かないでね」とのんきに言いながら、めりめりと、あり得ない音を立てて、ジンの眼前でありえない光景が広がっている。

女の細腕で、力任せに扉を外したその化け物は、ぽいつと軽々しい動作でその「鉄クズ」をツイインタワービルの屋上目掛けてぶん投げた。

「我ながらいいコントロールだわ。下には人がいっぱいいるから、危ないものね」
「て、てめえ……」

「あら、何かしら？ 命乞いでもする？ まあ、命乞いされてもされなくても、ぼこぼこにはなつてもらうけど」

目で追えない動きで、ジンは輝夜に胸倉を掴まれた。焦ったウオツカが操縦桿を片手で支え、片手で銃を突きつける。

「安全運転した方がいいんじゃない？ それか、どこかへ不時着させることね。ツイインタワービルのヘリポートなんかおすすすめよ。ほらほら、そんな不安定な狙いじゃ、お仲間当たつちゃうわ」

分からなかった。自分の体が動かされているというのに、衝撃が来てから、ジンは顔

面を壁に打ち付けられたのだということに気が付いた。ジンにとって幸いだったのは、これが輝夜の拳による殴打でなかったことであろう。人間との——それも、暴力的な関わりなんて久しくしていない輝夜だ。力加減は期待できない。それに比べて、壁に「軽く」当てたくらいなら頭は吹っ飛ばないので安全と言えた。

「あ、兄貴イ！ この女ア!! ぶっ殺してやる!」

「元氣なのはいいことよ。でも、あなたも怪我の一つくらいは負わなくちやね」

意識が飛びかけているジンを片手に、輝夜はウオツカに近寄った。にこやかな笑み。暴力なんて今までの人生で関わりもしてきませんでしたという、お花畑を歩く能天気な少女の足取り。

それなのに、女は血に濡れた大男を片手で持ち上げ、目には生き物を本能で屈服させる狂気と力を宿らせていた。

「あ……」

息をするのを忘れていた。息をしていることがバレてしまえば、そのまま永遠に息の根を止められると本能が警鐘を鳴らしていた。無駄なのに。姿をとらえられているのに。死んだふりでもすれば助かるかもしれないという、本能が見出した淡い希望は、辛くも打ち碎かれる。

衝撃。

すぐに意識を飛ばしたウオツカは、己の頭部に衝撃を与えたのが鈍器代わりにされたジンの頭部であることに気付かなかった。

「ちようどよかった。ツインタワービルの真上ね。これならこのまま墜とせば下の人たちに被害はないわ」

ぽい、とヘリの中にジンを捨て、輝夜は踵落としをヘリコプターに食らわせた。ずどん。音と動作が合っていないようにも見える一撃で、文字通り力尽くでヘリコプターを屋上に墜落させることに成功。

「あら、困ったわね」

しかし、そのときの衝撃でジンの隠し持っていた起爆装置が押されてしまった。最後の起爆装置はまさに屋上のヘリポートからシェリーが逃げるのを防ぐためのもので、爆破に巻き込まれたヘリコプターはみるみる内に炎に囲まれていく。

「がはっ……これで……てめえも終わりだ……」

気合か根性か、わずかに意識が戻ったらしいジンが血の混ざった唾を吐き出すと、輝夜はにこりと笑った。

「私は終わらないわ。それに——あなたたちも」

よっこらせ、とウオツカと暴れる力もないジンも抱き上げた輝夜は、彼の長い髪で隠れた耳にそつと口を寄せる。

「殺さないわ。だって、あなたはきつと『必要な人』だもの。その命、大事にしなさいね」
ぽい。

ジンとウオツカには、そこからの記憶がないため、なぜ自分たちが死んでいないのかは分からない。けれど、事実として分かっているのは——おそらく自分たちはツインタワービルの屋上から投げ捨てられたにも関わらず、何かしらのことをされて、生きていくということだった。ジンが気に入らないのは、単純に自分たちが情けを掛けられたことではない。

生殺与奪全てを握られていたのだ。

あの何の力もなさそうな小娘に。己の生も死も、好きなように弄ばれた。あんなに軽々しく。こちらの攻撃は無意味で、あちらの攻撃には抵抗ができないままに。

「化け物め……」

吐き捨てるように呟いたジンは、間もなくして現れた組織の者の車に乗り込んだ。

*

一応検査を受けた方がいい、と救助隊と子どもたちに引き留められた輝夜は、渋々そ

れを承諾した。医者の間診を受けて、特に異常なしと判断されたので機械による精密検査は丁重にお断りし、博士や小五郎たちと一緒に子どもたちを一人ずつ送り届ける。

疲れ切っていた子どもたちは車の中で寝てしまい、大人たちは彼らの保護者に事件の概要と、一応医師の診断で軽い怪我以外はなさそうなこと、万が一体に異常が見つければ、すぐに病院に行つてほしいことを伝えた。探偵事務所小五郎、蘭、コナンと別れた輝夜は、「灰原の「……今夜はうちに泊まっていたら？」という誘いを受け、阿笠邸で寝ることにした。」

コンビニで下着を買い、風呂と博士の服を借りて髪を乾かし終え、ひとつあくびをしたときだった。博士が客用の布団を用意している間に風呂から出てきた灰原が、まだ髪の毛を濡らしたまま、輝夜を見つめている。

「……どうして、あのとき、立ち止まったりしたの。何を考えていたの?」

「あのとき?」

「とぼけないでツ! パーティー会場で、私には死に場所を与えもしなかつたくせに!

なんであんな……自分を危険に晒すようなことしたのよツ!!」

「誰か」と重ねているのだろうか。そう思つて、けれど口には出さず、輝夜はくすりと笑つた。

「私は死なないわ。立ち止まつたのは——『声』が聞こえたのよ。永琳と言つてね。我が

家の大黒柱の音が」

危険が身を襲ったときに、家族の音が聞こえる。それは自然なことのよう思えた。だから灰原は、それ以上、あのときのことについて責められなくなつてしまった。

「家には——帰らないの？ 家族が、いるんでしよう」

「帰るわよ。けれど、まだ帰らない。言つたでしよう？ 私は人が難題を解く姿を見るのが好きなの」

ごくり。灰原の喉が鳴る。それは、こみ上げてきた涙を呑み込む動作にも見えた。薄暗い灯が灯る部屋で、輝夜は湯上りで温まった少女のやわらかな頬に手を添えた。

「それに何より、ラーメンを食べに行く約束を果たしていかないもの。さあ、いらつしやい。髪を乾かしてあげる。このままでは風邪を引いてしまうものね」

ドライヤーを片手に、輝夜は灰原を椅子に座らせる。温風の吹く中、しばらくの間無言で俯いていた灰原は、聞こえるか聞こえないかの小さな声で呟いた。

「……私、お姉ちゃんがいたの。組織の一員だった私を助けようとして、死んでしまった——」

膝の上に置いた拳を握り、ぶるぶると身を震わせた灰原は、目に涙を浮かべている。「工藤君に聞いたわ。輝夜さん……狙撃されかけたつて。私、私、やつぱりあそこで死んでおくべきだったッ！ 私がいなければ……!!」

ドライヤーの電源を切り、輝夜は灰原のふわふわとしたくせ毛を撫でた。

「はい、乾いたわ」

やわらかな声だった。聞いているだけで、激情が鎮まるような感じがする。

「何度も言うけど、私は死なない。心配はいらないわ。それに、私にはなぜ、あなたの姉が守ったものを、あなた自身が放棄したがるのかが分からない。ねえ、哀ちゃん」

輝夜は幼子をあやすように、灰原を抱きかかえた。

「優しいのはたぶん、いいことよ。でも、自分のしたいようにすればいいんじゃないかしら。あなたが本当に死にたいなら、私、止めないわ」

見つめ合う。仄暗い灯では、瞳の赤茶色は不明瞭で、底の見えない沼のような、先が見えない洞窟のような深さとおそろしさを抱かせる。そこに映る涙にぬれた自分のあまりの小ささに、「灰原は途方もない孤独とさみしさを感じた。

「だけど、誰かのために『そうしなければならぬ』って考えているのなら、あなたがどれほど嫌がっても、あなたの『死』を阻止する。理由は簡単よ。私がそうしたいから」
やはり。やはり、蓬莱山輝夜は姉ではない。灰原は、当たり前すぎる事実が、すんと胸に落ちた。

姉を想起させる、姉とは正反対な人。けれど、姉と同じく、灰原という一個人を何よりも尊重してくれる人。

その日、灰原は姉が昔使っていた番号に電話を掛けることしなかった。ほんの数秒の間だけ録音された姉の声を聞く必要は、その日からなくなつた。姉が死んでしまったことではなく、姉が生きていたことを想いたかつた。

だから、幼子のように泣いて縋るのはやめようと、そう思った。

*

輝夜の仕事の予定が空いたから、ラーメンを食べに行きたいと提案してきたのを、どういうわけか灰原は断りたかつた。けれど、自分が断つたところで彼らは行くだろうし、それは嫌だつた。

断りたかつたのは——輝夜とラーメンを食べに行くことなのだ。ラーメンが食べたくないわけでもないし、輝夜と食事をしたくないわけでもない。

「輝夜さん——帰っちゃうの？」

灰原の言葉に、少年探偵団と博士は足を止めた。ラーメン店に向かつていたうれしそうな表情は途端に曇り、「そうなの？」と歩美が首を傾げる。

「ええ。もちろん、最初から帰るつもりはあつたもの」

「謎解き勝負には勝つたのかよ？ それとも、負けちゃつたのか？」

元太の言葉に、輝夜は「どっちかしらね……」と腕を組んだ。

「私も家の者も、謎は解いたわ。答え合わせはしていないけれど、多分同じ結論に至っていると思うの。だけど、勝敗ははっきりしないわね……。もともと、私が一方的にそう思ってただけだし。向こうには勝負なんてつもり、なかつたんじゃないかしら」

「結局、どんな謎だつたんですか?」

光彦の質問には、輝夜は自信たつぷりの笑顔でこう答えた。

「私はこう呼んでいるわ——『進みながら繰り返し返す永遠』と」

しかし、探偵団と博士の反応は芳しくない。全員が首を傾げ、「よく分からない」というのを分かりやすく顔に出している。負けん気の強いコナンだけは「なんの比喩だ? いや、暗号か?」とぶつぶつ呟いていたが。

「ま、まあ……いいじゃないの。私はラーメン屋さんで半ライスを頼むのよ」

「輝夜さん、いつ帰っちゃうの? 歩美たち、また会えるよね?」

「帰るのは、家の者から迎えに来たらということにしているわ。もちろん、私はまた会いにくるつもりよ」

その言葉でしゅんとした子どもたちはうれしそうに輝夜の手を引き、ラーメン屋への案内を再開した。

呆然とする店員と客を置いてけぼりにして、子どもたちはわいわいとメニュー表を見

ながら輝夜にあれこれと教えている。

「おすすめは塩ラーメンだけ！ チャーシュー倍盛りにもできるぞー！」

「ラーメンも美味しいですが、ここは餃子も美味しいですよ！」

「どれも美味しそうね。私は塩ラーメンと餃子、半ライスにビールでもつけようかしら」「ええー、まだ昼だよ？ それなのにお酒飲むの？」

「まあまあ、輝夜君は運転するわけでもこのあと仕事があるわけでもないからのう……あ、わしはラーメンとチャーハンセット」

「だめよ。炭水化物はどちらかにしなさい」

「うう……哀君が手厳しい……」

「博士、言う事聞いとけ」

店長に頼まれたサインを断り、写真のみ快諾した輝夜は、酒を飲みながらあっさりとお腹いっぱいラーメンを食べ、探偵団とのお喋りに興じながらまた酒を飲み、餃子とご飯ももりもりと食べた。

「お腹いっぱい！」

「オレもさすがにもう食えねえ……」

「元太君は食べすぎなんですよ！ 輝夜さんの奢りだからって調子に乗りすぎです！でも……楽しかったですなぁ」

昼下がりに、そのまま博士の家でゲームでもやろうと帰路についていた一行は、輝夜が足を止めたのに合わせて、足を止める。そして、その視線の先を辿った。

「あら、そういう恰好も似合うわね」

「お待ちしておりました」

きれいな礼をしたのは長身の女性だった。白銀の髪に、灰色がかつた目は、外国人のようにも見える。ただし、彼女が発した言葉は間違いなく流暢な日本語で、しかも輝夜ほどではないにしろ、普遍的な美しさを有していてどこの国の人とは判断しにくい。紺色のシャツワンピースに、黒いタイツ、ブーツを合わせている。

「もしかして、見張ってたつてことはないわよね？」

「私ではなく、八雲の式が」

二人のやりとりを見ていた博士と子どもたちだったが、いち早く好奇心を瞳に宿らせたコナンが小さく挙手をして「その人つて、輝夜さんのお家の人？」と尋ねた。二人同時に視線を向けられたコナンはたじろいだ。が、ふわりと輝夜がいつもの笑みを向けてくれたので、ほっとした表情を浮かべた。

「ごめんなさいね、先に紹介すればよかつたわ。彼女は八意永琳。我が家の薬剤師であり、医者でもあるわ。永琳、この人たちは私のお友達よ」

「私は八意永琳と申しますわ。姫様がお世話になつております」

「姫様だって！ 輝夜お姉さん、本当にお姫様みたいな暮らしをしてたのね！」

（そりや、こっただけ美人で、名前が「かぐや」だったら、姫ってあだ名がつくよなあ……）
はしゃいでいる歩美をよそに、コナンは改めて輝夜の美貌をまじまじと見ていた。

「あ……で、でも……お家の人が迎えに来たってことは、輝夜さん、帰っちゃうんですよね……？」

「バーロオ、また来るって言ってたじゃねーか。輝夜さんはマンションも借りてるし、今生の別れってわけじゃねーんだ。家の都合もあるだろうし、あんま引き留めても迷惑だろ」

頭の後ろで手を組みながら、コナンは寂しがりの「同級生」に呆れた視線を向ける。今の世の中、どこにいてもわりとすぐに会えるものだ。海を渡った先でさえ、船なり飛行機なり、移動する方法がある。

「そうね。今は別れではないわ」

ひとりひとりの頭を撫で、博士とは握手をして、蓬莱山輝夜は笑みを浮かべた。

「ね、いいでしょう？」

「姫様がお望みならば」

ひらり。輝夜は手を振った。まるで、また明日、と疑いなく帰路につく小学生みたい

——そして、輝夜が姿を消し、世界は「蓬萊山輝夜」の存在を忘れた。

「カグヤ」というモデルは引退会見も開かず家庭と本人の体調の都合という理由で表舞台に出なくなり。いつの間にか彼女の間にか彼女の過ごしていたマンシヨンは引き払われ。

あれだけ強烈に、視線を、心を奪っていた一人の女性は、あつけなく、どこか強制的に、忘れ去られていったのだった。

そして世界はまた、歪な永遠の中で繰り返してゆく。

彼女がいようがいまいが、初めからそう決まっているとでもいうように。

本物の月を取り戻すために偽物の永遠の夜を生み出した妖怪と人間の努力むなしく、強大な力によってあつけなく夜が明けたときのように。

謎題：永遠と須臾の狭間

帰る前に寄るところがある、と輝夜は自宅マンションへと寄った。永遠亭に顔を出したらすぐに戻るつもりではあるが、もとより「カグヤ」は幻想郷へ戻ることがあれば、やめるつもりだった。だから、事務所に言われて契約したマンションはもういらぬし、事務所にもそう伝えなければならぬ。

「もしもし、今大丈夫かしら？」

電話に出たマネージャーは、輝夜が事務所を——「カグヤ」をやめると話せば、長い沈黙のあと、「そういう契約でしたからねえ」と諦めたように、ため息のような弱々しきで呟いた。

芸能活動をするにあたって、輝夜は譲れない条件をいくつか提示していた。その一つが「やめたいと言った時にやめる」というものである。不動産の解約と事務所の解約、どちらも済ませてしまえば、輝夜にはもう「友達」との約束しかこの世界には残らない。けれど、それを「惜しい」とは思わなかった。

事務所を訪れると、社長室へ通された。社長も、マネージャーも、「実家から迎えが来た」と言えば、輝夜ではなく永琳に対して、必死の説得を試みている。永琳は穏やかな

顔で、「今まで姫様がお世話になりました」と、一歩も退かぬ様子で輝夜を連れ帰る姿勢を示していた。

「悪いわね、突然。もう決まっている仕事はどれくらいかしら？」

マネージャーにスケジュール帳を見せられた輝夜は、自身の性格を理解していたらしいこのマネージャーが、あまり先の予定まで埋めていなかったことに、改めて感心した。いくらスケジュールを空けておいても、「カグヤ」であるならば、取りたいときに仕事が取れるという自信と信頼もあるのだろう。

「じゃあ、全部消化しちゃいましょう。先方への連絡は永琳がするわ」

従者へと丸投げて、一日で全ての仕事をこなすと断言した。そんな輝夜に、マネージャーは泣きそうな顔で、無理やりに作ったくしゃくしゃの笑顔を浮かべた。

「一日じゃ無理ですよ……せめて、二日とか、三日とかに分けることはできないんですか？」

「悪いわね。こつちも『期限付き』なのよ。何せ移動を人に頼んでいるから。先方の都合で今日にずらせない場合に発生する損害賠償は、当然私が負担するわ。まあ、でも……すぐに終わらせられるけれど」

その日、輝夜と仕事をした人々は「信じられないことが起こった」と話す。普通、一時間は掛かる撮影が——それも、自身もそれくらいの時間撮影していたと体感している

のに、たったの五分で終わっていたのだ。そんなことはありえない。ありえないはずなのに、どこの時計も間違つてはいない。どういうことなんだと誰もが疑問を浮かべたけれど、そういうわけで輝夜の分刻みのスケジュールは見事にこなされていった。

「これほど濃密な一日は初めてですよ！　いつから一日は二十四時間じゃなくなつたんですか？」

へとへとの様子で椅子に座り込んだマネージャーがそう言うと、輝夜と永琳は顔を見合わせて笑つた。

「何を言っているの？　一日は二十四時間よ。一分一秒、一瞬でさえ、どのように使うかはその人次第だわ」

輝夜は笑いながら、マネージャーに手を差し伸べた。

「そう、全部あなた次第なのよ。あなたさえ良ければ、私と一緒に永遠亭へ来ない？　歓迎するわ」

「永遠亭つて——輝夜さんの御実家が、そう呼ばれてるんですたっけ？」

マネージャーは、指先まで美しい輝夜の手をじつと見る。それから輝夜の顔を見た。笑みだ。自信と挑発と、それからいくばくかの寛大さを孕む、絶対的な支配者の笑みだった。

「ええ。だけど、来るならあなたは今の仕事はもちろん、家族とも離れ離れになる。永遠亭は、遠いところにあるの」

「……本当に、『かぐや姫』のような人ですよ。輝夜さんって」

輝夜の手を取る。ぎゅ、と力を込めて、彼はその手を取った。

「ありがたいお誘いですが、お断りします。輝夜さんのおかげで気付けたんです。自分とはとても平凡な人間で、だから、『月』には行けません。輝夜さんと出会って、本当に忙しかつたけれど、すごく楽しかった。今まで本当にありがとうございました」

けれどそれは導いてもらいたくてそうしたわけではない。誰よりも敬愛し、憧憬を抱く人へ、ちがう道を歩む覚悟を示す、別れの握手。そのまま深く深く頭を下げた男に、輝夜は小さく笑った。

「そう。じゃあ、『蓬莱の薬』も、あなたには必要ないわね」

手を離して、男はまっすぐに輝夜を見た。美の極致。その言葉が全く過言ではない、至上の美女。本当に、この世の者ではないのかもしれないと錯覚させる、現実離れた美しさ。

「こちらこそ、あなたのおかげで楽しかったわ。また遊びに来るつもりだから、もしも心変わりをしたのなら教えてちょうだいね。永遠亭はいつでもあなたを受け入れるわ」

「……………はい。お達者で」

お互い、涙は出なかった。笑顔で手を振って、また頭を下げて。

そして、なぜか——ほどなくして「カグヤ」という自分がマネジメントしていたはずのモデルの本名を思い出せなくなった。

その時、彼の目には大粒の涙が浮かんだ。わけも分からぬまま、己の意思に反して溢れるその雫は、ぽたり、ぽたりと散敷くように染みを作る。けれど、それもまた、いつの間にかまぼろしのように消えていた。

*

江戸川コナンは困惑していた。それというのも、ある日を境に、ぱったりと誰もが蓬萊山輝夜という女性のことを忘れてしまったからだ。

「カグヤ」というモデルがいた事実は残っている。けれど、淡白に「引退した」という報道だけが出て、それ以来不気味なほどに、急速に人々の記憶から薄れていつてしまっているのだ。

あんなにファンを公言していた小五郎も。一緒にカレーパーティーをした園子と蘭も。いろいろな場所へ一緒に出掛けた少年探偵団と阿笠博士も。彼女のマネージャーだった人でさえ。

それなのに、コナンだけは覚えている。世界中でただひとり、コナンだけが「蓬莱山輝夜」という女性と関わり、握手を、笑顔を交わしたことを覚えている。

「……また会いに来るって、言ってたじゃねえかよ」

小学校から帰宅して、乱暴にランドセルを下ろす。事務所では小五郎が競馬の中継に夢中になっているし、蘭は部活があつて、まだ帰ってきていない。その「日常」が、彼にとつてはあまりにかなしい。

まだ、コナンは「蓬莱山輝夜」という謎を解けていない。彼女にまつわる謎は増え続けるばかりなのだ。

誰に言つても、訝しがられるか、心配されるか、笑われた。そんな人物は知らないと思定された。けれど、コナンは確かに覚えている。一緒に撮った写真だつて残っている。けれども、周りはみんな、『カグヤ』と一緒に写真撮ってもらえたなんてラッキーだったよね」とその程度の認識しかない。

その「カグヤ」に対しても「もともと家庭の事情とか体調とかあつて、あんまり長く続ける気なかつたらしいよ。残念だね」というあつさりした噂話ばかりが広がつて、数日もすれば、まるで遠い昔に引退した伝説の人みたいな扱いになつていた。

（輝夜さんはここにいたのに……どうしてみんな覚えてねえんだよ!! 確かに、ここに

いたんだ!!)

コナンは悔しかった。どれほど語っても、写真を見せても、誰も関心を示さない。

「輝夜さん、どこに行っちゃったんだよ……!」

「うふふ、コナン君は本当に可愛いわね」

「……………へ?」

ちよん、と鼻を指でつつかれる。

そこには忘れることなどできるはずもない、絶世の美女がのんきに微笑んでいた。

「え、い、いつの間に? ていうか、なんでオレの部屋……!?!」

「『また会いに来る』って約束したでしょう?」

コナンには言葉が紡げなかった。自分だけが覚えている、忘れられるはずのない人。それが今、実体を伴って目の前にいる。

「さ、行くわよ」

固まってしまったコナンを抱き上げた輝夜は、そのまま窓に足を掛けた。よく見れば、彼女は土足だ。

「まつ……なつ……!? 何する気だよ、輝夜さん!」

「何って、みんなに会いに行くのよ。そういう約束じゃない」

「だ、だけど……その、」

輝夜の腕の中で、コナンは言いにくそうにもごもごと口を動かした。上手く説明ができないし、事実を事実のまま言えば、彼女が傷付くかもしれない。そんな彼の気遣いが透けて見えて、輝夜は心優しい少年に笑い掛けた。

「私がみんなに忘れられていることを心配してくれているのね。だけど、大丈夫よ。予想できなかったわけじゃないもの。それに……たった一人でも覚えてくれている人がいるなら、僥倖だわ」

凜とした笑みだ。しなやかな強さがある。それは、美貌より先に心に訴えかけてくる、蓬萊山輝夜という人のひととなりを表すようだった。

そして、窓枠を蹴って、彼女は羽根もなしに空を飛んだ。

「えっえっ、えっ!?!」

「面会時間にうるさい人がいるのよ。移動時間は短縮させてもらおうわ」

まだ夕方というには早い時間。空はまだ青く、空気も心なしかやわらかい。

ありえないと脳は否定するのに、それでも心は納得していた。

蓬萊山輝夜は空を飛べる。少年にはそれが、なんだかとても自然なことのように思えたのだ。

「でも、みんな輝夜さんのこと忘れちゃってるんだぜ? 約束だつて——」

「いいのよ、別に。約束を果たしたいのは私の勝手だし、私は自分が友達だと思っ

人に、会いたいから会いに行くだけだもの。みんなに忘れられていようが、私は覚えて
いる。それでいいのよ」

輝夜はあつと言う間に、阿笠邸の前に降り立った。抱き上げられていたコナンも、やさしく地面に下ろされる。

「輝夜さんって……何者?」

「そうねえ。あなたが解き明かすのを待つつもりだったけど……江戸川コナン君。あなたに『難題』を与えましょう」

輝夜はしやがんで、コナンと視線を合わせた。

「『進みながら繰り返し返す永遠』。この『謎』を解けとは言わないわ。けれど——解決してごらんなさい。それが私からの『難題』よ」

まるでかぐや姫だ。コナンはもう何度目かも分からない感想を彼女に抱く。輝夜の言っていることはよく分からない。蓬莱山輝夜という人は、いつものんきで、のらりくらりとほぐらかしてきて、曖昧な表現とか独特な言い回しばかりする。

けれど、輝夜はコナンに嘘を吐かない。それを知っているからこそ、この「難題」が「解決できるもの」と分かる。

「じゃあ、『約束』しようぜ。オレは輝夜さんからの『難題』を絶対に解決してみせる。オレが『難題』を解決したら、輝夜さんはオレに正体を教える。あつ、もちろん、教えら

れるまでもなくオレが分かったら、そのときは答え合わせになるけど」

言いながら、コナンは阿笠邸のインターフォンを押した。

「博士ー、オレだよ。ちよつとお客さん連れてきたんだ。中入れてくれ」

『なんじゃ、新一か。先に連絡くらいせい！』

ばたばたと博士の足音が家の中から忙しく聞こえる。コナンははにかんで、輝夜の方を見た。律義にしゃがんだままだった輝夜は、つられたようにはに cand。 「だから輝夜さん、いつでも遊びに来てよ。みんなが何度忘れても、オレだけは忘れないから。今度は海でもスキーでも旅行でも、もちろんまたキャンプでも、輝夜さんがやってみたいことをやろうぜ。サッカー観戦もいいな。どうせ輝夜さん、やったことない遊び、まだまだいっぱいあるんだろ？」

がちやり。ドアが開いて、博士が門まで駆け寄ってきた。

「待たせたのう。……って、誰じゃ？ そのとんでもない美人は」

「こんにちは、阿笠博士。私はコナン君のお友達の、蓬萊山輝夜よ。あなたに会いに来たの」

立ち上がり、にこりと微笑む輝夜に感傷はない。彼女は何度忘れられても、こうやって言葉を交わすのだろう。「はじめまして」だなんて、絶対に言わずに。

「なあ、輝夜さん。さっきの話、ホントに『約束』だからな！」

「ええ、もちろんよ。楽しみだわ」

かくして、かぐや姫は昔話のごとく、少年に難題を与えた。探偵は難題に立ち向かう。それは今更特筆すべきでもないあたりまえのことだった。

輝夜が、ふいにちらりと遠くを見る。その視線の先には何もなかったけれど、誰かがため息を吐いたような気がして、コナンは自分でもよく分からず、笑ってしまった。

「えーと、会いに来たなら、わしも話に入れてくれんかのう？」

ぼりぼりと頬をかく博士に、輝夜はにこにここと笑みを向けた。

「もちろんよ。さて、それじゃあ中に案内してちょうだい」

ふわり。輝夜の長い黒髪がなびく。彼女の横顔は、一挙一動は、あまりに可憐で幻想的だった。

蓬莱山輝夜は、江戸川コナンの友達だ。そして、解くべき謎であり、「難題」を与えた出題者でもある。浮世離れしていて、世間知らずで、優しく、自分勝手に、空を飛べ、嘘は吐かない。

それにすぐく、安心する。

輝夜は約束を守ってくれる。だから、輝夜がたとえ何者であろうと、コナンにとって輝夜は友達のままで。そうありたいと輝夜が思ってくれていて、コナンもまた、そう願っていたら。

たとえ、江戸川コナンという少年がいなくなったとしても、いつかみんなと同じように、蓬萊山輝夜という人を忘れてしまったとしても。

これは、蓬萊山輝夜お嬢様がコナンの世界入りした話。

ただそれだけの話。二人は友達になって、きつとこれからも友達で、少年は謎を追い、少女は思い出を抱いて、月ではなく幻想郷へ帰る。ただ、それだけの話。

波符「赤眼催眠」前編（番外）

幻想郷の正月行事がひと段落した輝夜はさっそく暇を持て余していた。大きな欠伸を一つしてから、新年早々も薬作りに精を出す永琳へと話し掛ける。

「ちよつと出掛けてくるわ」

「それは——『御友人』に会いに、ですか」

「あら、よく分かったわね」

視線だけ輝夜の方へと向けた永琳に対し、輝夜は常人であれば思考停止してしまう、花のほころぶような笑みを向けた。しかし永琳は常人ではないので、困った子どもを見るような視線を向けて「それなら」と薬作りの手を止めて立ち上がる。

「ウドンゲをお連れください。私の作った転移術は、まだ試作段階ですので」

「あら、別にいいのよ。『足』はあるもの。完成まで待つわ」

「『足』は冬眠中ですよ。さすがに本気で姿を隠されれば、探し出すのは骨でしょう」

「それはそれで面白そうだけど……まあ、たまにはお供を連れて遊びに行くのもいいかもね。術も試せて完成に近づくのなら、今後にもつながるでしょうし」

輝夜が納得したのを見て、永琳が手を叩く。すると、事情を知らない兎が軽快な足音

を立ててこちらに向かってきて、部屋の前で足を止めた。

「お呼びでしょうか、師匠」

「姫様が御友人のところへ遊びに出掛けるそうよ。おまえも共に向かいなさい」

「御友人って……外の世界の？ どうして私が？」

首を傾げた動きと一緒に、よれよれの耳が重力に従って傾く。永琳の弟子であり、輝夜のペットである玉兔、鈴仙・優曇華院・イナバは、常日頃と変わらず穏やかな己の主と師匠を交互に見た。ぞくり、臆病な兔は、なぜか嫌な予感を覚え、後ずさる。

「わ、私なんかでいいんでしょうかねえ……そういうえば、里へ届ける薬がまだ残ってるんです！ 失礼しますッ！」

「それくらい永琳がやってくれるわよ。まさか、嫌だとは言わないわよね？」
にこり。

踵を返そうとして、返せなかった。常日頃と変わらない、穏やかな笑みを向けられた鈴仙は顔を青ざめさせ、ふるふると震え——ついでに、もともとよれよれの耳をしておにさせながら「お、お供させていただきます……」と力なく返事をしたのだった。

*

「兎の耳も、色素の薄い髪や目の色も目立つから」と主に忠告されたので、鈴仙は己の能力を使うことにした。狂気を操る程度の能力と言われる彼女の能力は、物事の波長を乱したり、事物への認識を揺らがせて相手の知覚を操作したりすることができる。そのため、今の彼女は周りの人間たちには黒髪黒目の、人間の女の子にしか見えないうらう。

それなのに、鈴仙は注目を集めていた。問題は、彼女の見た目ではなく。

「うっうっ……ごごご……お……輝夜様あ……」

見知らぬ土地で一人になってしまった鈴仙は、人目もはばからずえぐえぐと泣いていた。能力を使つて波長を探つてみても、輝夜と思しき人物は探査に引っかからない。見知らぬ土地どころか、師匠と主の話によると、ここは見知らぬ世界である。むろん知合いの一人もいるはずがない。

べそべそしている憐れな少女に声を掛けたのは、買い物帰りの女性だった。

「あの……何かお困りごとですか？」

黒髪の優しそうな女性は、買い物袋を片手に、空いている方の手でハンカチを差し出す。鈴仙はそれを受け取って涙と鼻水を拭いながら「これはご親切にどうも」と言葉を返した。

「蓬莱山輝夜という女性を探しているんです。えっと、お友達のこと……なんて言ったかな、

コナン君？ に会いに来たらしくて。私、はぐれてしまつて」

主の話を思い出しながら、自信なさげにそう告げた鈴仙に対し、女性はにっこりと微笑む。

「それなら、毛利探偵事務所に行けば会えると思いますよ。私、探偵事務所の下の階にある喫茶『ポアロ』で働いているんです。もしよろしければ、案内しますよ」

泣いていたのが嘘のように、輝かんばかりにうれしそうな表情になつた鈴仙へ、女性——榎本梓は、「かわいい人だな」と感想を抱いていた。

「鈴仙さんというんですね。コナン君とはお知り合いですか？」

「えー……。私自身は知り合ひではないんですけど。うちの姫の御友人らしくって」

自己紹介を済ませた二人は、毛利探偵事務所へ向かう道を歩きながらそんな話題に花を咲かせていた。コナンが小学生ということもあり、その友人も同じくらいの年頃の女の子だろうと思ひ込んでいた梓は、鈴仙の「姫」という言い回しにも違和感を覚え、「妹さんか姪っ子さんかな？」と、鈴仙が振り回されながら溺愛している様子を想像して、くすくすと笑っている。

「さあ、（ハハ）よ。『お姫様』と、今度はぜひ、うちにもいらしてくださいね」

「ありがとうございます」

探偵事務所に案内した梓は、鈴仙のお礼の言葉を聞いて、「いえいえ」と人の好きが分かる気安さでひらひら手を振った。そして、その階下にあるポアロへと入っていつてしまった。

一人残った鈴仙は、どきどきしながら探偵事務所の扉を開ける。

「ごめんくださいーい。こちらに、『江戸川コナン』君という小学生がいらつしやるとうかがったんですが……」

「あー？ 悪いが、小僧は友達と杯戸ショッピングモールに行くつつつて、出掛けちまつたよ」

そこにいたのは、新聞から顔を上げようとしてもしない中年男性であった。「師匠の転移術が失敗するなんて」というショックを整理しきれしていない鈴仙は、再び涙が出そうになるのを堪えながら「失礼しました……」と、静かに事務所の扉を閉めた。

「杯戸ショッピングモールってどこなのよお」

この情報を聞いたのが輝夜であれば、この世界で暮らしたことのある経験から、すぐにその場所を特定し、向かうことができただろう。しかし、鈴仙は月生まれ月育ち、幻想郷在住である。人に頼るといふアナログな方法しかできず、彼女は結局、別れて間もない梓のいるポアロに入店した。

「それなら、バスでも電車でも行けますよ！ タイミングが悪かったわねえ」

「……………」

梓は親切に行き方を教えてくれたけれど、生憎鈴仙にバスも電車も馴染みはないし、そもそも無一文の状態では運賃の発生するものは使えない。財布は輝夜が握っていた。能力を使えばその場所へ行くのは簡単だろうが、問題はその「杯戸シヨツピングモール」とやらが全く想像できないことなのである。

「え、えーと。それなら、間違えないように目印とか、教えてもらえますか？」

「遊園地が併設されてるから、大きな観覧車が目印ね。きつとすぐに分かるわ」

「可愛らしく、頼りなさげな少女に対して、梓は店員としてではなく「親切なお姉さん」として事細かに杯戸シヨツピングモールについて伝えていた。鈴仙はふんふんと頷きながら、行き方ではなくその外見情報を脳内に叩き込んでいく。

「御親切に、ありがとうございます。ともかく、探してみます」

ぺこりと頭を下げて、鈴仙は人目につかぬようにしたのち、空を飛んだ。

*

「成功したようね」と呟こうとして、輝夜は傍らに鈴仙がないことに気が付き、首を傾げた。試作の術とはいえ、あの永琳が失敗するとは。

「か……輝夜さん？」

「ええ、私は蓬莱山輝夜で間違いないわよ。新年明けましておめでどう、コナン君。本年もよろしくね」

「あ、こちらこそ。明けましておめでどうございます。今年もよろしく……つてちげーよ！ 振り返ったら突然いるのやめてくれよ！ びつくりするだろ！」

時を遡り、鈴仙がえぐえぐ泣いているときのこと。輝夜は探偵事務所から出てきたコナンの背後に出現していた。少年の後姿に成功を確信して声を掛けようとしたものの、一緒に術を受けたはずの玉兔がいないので声を掛けそこなったところ、先に少年が背後を振り返ったというわけである。

「驚かせるつもりはなかったのよ。それより、どこかへお出掛け？」

「それより……今日は探偵団のやつらと杯戸ショッピングモールに行くんだ。冬休みが終わっちゃう前に遊ぼうってことになってよ」

「それは楽しそうね。私も一緒に行つていいかしら？」

「そりゃもちろん」

輝夜はうれしそうに微笑み、コナンの隣を歩きながら杯戸ショッピングモールについて聞いていた。遊園地が併設されたそこは、買い物目当ての客から思いつきり遊びたい家族連れやカップルなど、様々な年齢層の人たちが楽しめる場所であるとのことだ。

ちらり、と脳裏にペットの兎のことが過ぎった輝夜だったが「まあ、後で探せばいいか」と気にしないことにした。そもそも、術の失敗が「鈴仙だけ転移されていない」とか「鈴仙だけ別世界に行ってしまった」とかであったら、探しようもないのだ。あの永琳のことである。試作であることもふまえて、失敗したときのために予防策を講じていることだろう。

「今日は蘭ちゃんと一緒にじゃないのね」

「蘭は明日全国模試だからって、園子と一緒に勉強してるよ」

「あら、あなたは受けなくていいの？」

「受けたくてもこんな姿じゃ受けられねーよ……」

コナンは半目になりながら、相変わらずのほほんとしている絶世の美女を睨んだ。

博士の家に着くと、誰もが驚いた目で輝夜を見つめていた。当然、コナンが「輝夜」を連れてきたことに対してではなく、「謎の美女」を連れてきたことに対してである。

「私は蓬莱山輝夜よ」

「輝夜さんはオレの友達で、新年の挨拶に来てくれたらしいんだ。せっかくだから一緒に遊ぶことになったけど、いいよな？」

きやあきやあとはしやぐ子どもたちに混じって、灰原は複雑そうな視線を輝夜へ向けている。にこり、とそんな彼女へ輝夜が微笑み掛けると、ぽつと頬を赤くした。

「……ちよつと、江戸川君」

袖を引かれたコナンは「なんだよ」と、らしくなく眉を下げる灰原に返事をする。

「あの人が、少し前に流行った『カグヤ』じゃない？ 私たち——会ったことある？」

「バーロオ。会ったことあるに決まってるんだろ。写真まであるんだぞ。気になるなら本人に聞いてみるよ」

その言葉で寂しげな顔になったのは、言われた灰原ではなく、言ったコナンの方だった。輝夜は気にしない。誰も覚えてなからうと、自分にとっては大切な友達だからと、いつも通りの朗らかな笑みのままそう言っていた。けれど、コナンは気にする。輝夜は大切な友達だし、それは探偵団にとっても同じだったはずだ。

「えっ！ 輝夜お姉さん、遊園地行ったことないの？」

「ええ。だからすごく楽しみだわ」

にこにこ子どもたちと会話している輝夜の心が、コナンには分からない。

(いや……人の心なんて、誰にも分からねーよな)

ふると頭を振って、思考を切り替える。杯戸ショッピングモールに向かいたいのが、博士の車では子どもたち全員と輝夜は定員オーバード。そういうわけで、当初の予定とは変わって、バスを使って行くことになった。杯戸町ならさほど遠くもないし、目的が買い物ではなくアトラクションなので、荷物が増える心配もないだろうから、という満

場一致の変更である。

道中、子どもたちは好奇心旺盛に輝夜へときまざまな質問をぶつけた。それは今までも聞いたことがあるものだったり、そうでないものだったりいろいろだったが、輝夜は迷惑そうな素振りもなく、ひとつひとつ、のらりくらりと答えていた。

「輝夜さんって……不思議な人よね」

ぼつり。隣に座る灰原に突然そう言われて、コナンは「まあな」と、頭の後ろで手を組んだ。不思議で済ませていいのか分からないことが多いが、そこを全て追究しようとする、黒の組織を相手取るよりよっぽど大変そうなので、手掛かりが手に入ったときをチャンスとして、その都度丁寧に読み解いていく方がいいだろう。常日頃から輝夜の不思議について考えると、探偵にあるまじき非科学的な発想ばかり出てきてしまうのだ。

「なんだか……安心するもの。あんなに質問をはぐらかそうとする不審な人なのに、どうしてかしら？」

「輝夜さんは嘘は吐かかえから、それでじゃねーの。独特な表現とかはするけど」

「あら、随分信用しているのね。そう言えば、あんな美人とどこで知り合ったの？」

ため息を吐きたくなるのを堪えて、コナンは和気あいあいと話す探偵団と輝夜、博士の方を見た。そういうえば、「初対面」のときも彼らは打ち解けるのが早かったな、と思い

出す。それに比べて、警戒心しかなかった灰原が今は輝夜に対して「安心する」と言っているのは、記憶がなくなっても、心が覚えているということなのかもしれない。

「山の中の城の前だよ。家出中で迷子の輝夜さんが、声を掛けてきたんだ」

コナンはそう言って、窓の外に見えた観覧車に目を向ける。

「約束、いっぱい用意しとかねーとなあ……」

灰原は、ひとりぶつぶつ言うコナンへ「理解しがたい」というのを如実に表した視線を向けていた。

杯戸シヨツピングモールは、冬休み中ということもあって、かなりの賑わいを見せていた。大勢人がいる中でも、輝夜の存在は一際目立つ。彼女が歩く度に人混みが割れたが、その分困う人々は増えていった。

「輝夜さん、すごいですね……芸能人みたいです。あれ？　芸能人だったんですっけ？」

「モデルをしていたわ」

「なんで辞めちまったんだ？」

「家庭の事情よ」

のほほんと答えながら輝夜は一番目立つ観覧車へとまっすぐに歩いて行く。全員で

乗るには定員オーバーだから、と博士が地上で待つことになり、子どもたち五人と輝夜の六人で観覧車に乗り込んだ。ゆっくりと上昇していく観覧車の窓の外を、輝夜は子どものように興味深そうにのぞき込む。

「あら」

そして、何を見つけたのか、にこりと微笑んでたおやかに手を振る。

「知り合いでもいたの？」

歩美が首を傾げると、輝夜は「ええ」と頷き、それから堪えきれずに噴出した。

「下にいる人ですか？ 輝夜さんには気付きました？」

「気付いたわね」

「どの人？ うわっ。下にいる人たち、すっごいこっち見てる。みんなきつと輝夜お姉さんのこと見てるのよ！」

肩を震わせて笑う輝夜に、コナンは「珍しいな」という感想を抱きながら、同時に疑問も抱く。輝夜が手を振っていたのは、地上へというよりはむしろ――。

（そんなわけねえか）

どういいうわけか、輝夜は空を飛べる。しかし、コナンが気付けなかっただけで、何かしらのトリックがあるはずだ。とはいえ、コナンだって「まあ輝夜さんだし」と、自分の中の探偵が怒りだしそうな納得の仕方をしそうになっているが。

ともかく、どこかの怪盗のようにハングライダーを使っているわけでもない人間が、トリックもなしに空を飛べるはずがない。事実、輝夜が手を振った先を観察してみても、そこには何の変哲もない風景が広がるばかりで、間違っても空を飛ぶ人などいるはずもなかった。

観覧車が地上に到着するなり、輝夜に突進してくる人物がいた。休みだというのにブレザー姿の、長い黒髪の少女である。涙目であることも相まって、小動物のような印象を受ける。

「私ツ……！ 必死に探してたのにツ……！ 自分は御友人と楽しく遊んでるなんてひどいですう!!」

「それは悪かったわね」

「全然悪いと思つてないじゃないですか！ めちゃくちゃ笑ってるじゃないですか!!」

笑いを堪えようとして肩を揺らし、結果的に口元も緩んでいて全く笑いを堪えられない輝夜は、ブレザー姿の少女の背中を「よしよし」と撫でていた。ただし、迷子になった娘に母親がする仕草と表現するには、「安堵」や「慈しみ」が少々足りていない。「紹介するわね。この子は鈴仙・優曇華院・イナバよ」

「あ、申し遅れました。私、鈴仙といいます」

ぺこりと頭を下げた少女に、コナンは内心戦慄していた。何せ、その独特な名前にコ

ナンだけは聞き覚えがあったので。

（実在の人物の名前をペットにそのまんま付けてたのか……!?!）

それは勘違いでしかないのだが、まさかコナンとしても目の前の人物が、「ペットの兎」そのものだとは思うまい。

「変な名前……」

「姉ちゃん、いじめられてねえか？」

「日本の方ではないんですか？」

子どもたちに散々な言われ方をした鈴仙だったが、この失礼な子どもたちこそが主の「御友人」であることは一緒に遊んでいたことから理解できる。そのため、口元を引きつらせながらも、言い返すことはしなかった。

「御友人」にそれぞれ自己紹介をされながらも、鈴仙は内心ですつと（帰りたい）と思っていた。主である輝夜はにこにこ上機嫌だが、鈴仙としては知らない土地、知らない人々である。鈴仙の役割というのはつまり、「試作である転移術に『もしも』があるといけないし、姫様だけに使うのはちよつと」という永琳の心配からくる見届け要員である。輝夜と鈴仙の転移場所がバラバラだったことから完全な成功とは言えないが、それでも失敗はしていない。つまり鈴仙は己の役割を既に果たしているはずだ。

しかし、帰るためにはもう一度転移術を作動させる必要がある。そしてそのために

は、輝夜の力が不可欠であった。なぜなら、輝夜の友人がいるこの世界は「歪な永遠」で覆われ、外の世界との行き来が非常に困難な場所なのである。その「永遠」をどうにかできるのは、永遠と須臾を操る程度の能力を有した輝夜のみというわけだ。

(でも、私だけゆつくりしてるわけにはいかないだろうなあ……)

輝夜が遊びたいというのなら、それに付き合うのが鈴仙の「仕事」だろう。遊びがひと段落したときにすぐに帰宅を提案するためにも、変に時間を決めてどこかで落ち合うよりは、一緒に行動した方がいろいろな意味で安心だった。

「ほら、行くわよ」

主に手を引かれ、鈴仙は複雑な気持ちで歩き出した。しかし、転移術を受ける前と同様、嫌な予感がなぜかつきまとったままであった。

なんだかんだ鈴仙も遊園地というものを気に入り、子どもに混じってきやあきやあとアトラクションを一通り楽しんでた。もともと陽気で調子に乗りやすい性格もあり、短い時間でもかなり子どもたちに馴染んでいる。さて、子どもたちが乗りたいと言っていたアトラクションに通り乗りえた後、歩美が何かに気付いたように走り出した。その視線の先を追って、元太と光彦も走り始める。きよとんとした鈴仙は、思わず主の方を見た。輝夜は相変わらずのほほんとして微笑むのみである。

「佐藤刑事！」

「どうやら、知り合いらしい。思い掛けない人物と会ったことにはしゃぐ子どもたちへ、声を掛けられた女性もにこやかに受け答えている。それから、輝夜と鈴仙に気が付いた女性は「お友達？」と子どもたちにも尋ねた。

「うん！ コナン君のお友達のお輝夜お姉さんと、鈴仙お姉さんだよ！」

歩美の紹介に、二人は「蓬萊山輝夜よ」「鈴仙・優曇華院・イナバです」と簡潔に名乗る。

「佐藤美和子よ。そうだ、みんなにはこの前のお礼も兼ねて、お菓子でも御馳走したいと思っていたの。あなたたちもどうかしら？」

「この前」とは、以前探偵団がある事件の解決に協力した件についてである。輝夜も鈴仙も全く関係ないのだが、代金は自分で払えばよからう、と輝夜が領いたことによつて鈴仙もついていくことになった。

「杯戸シヨツピングモールには十分満足できたから」と子どもたちがモール内にあるカフェ等ではなく、帰り道にある場所がいいと言うと、佐藤刑事は快く領いて「それなら、この前由美が『ケーキが美味しい』っておすすめてくれたところがあるのよ」と案内を始める。佐藤刑事自身は車で来ていたため、カフェの名前と住所を伝えて、近くで再度落ち合うこととなった。

「ウドンのねーちゃんは、ケーキあんま好きじゃねーのか？」

移動をしながら、唐突に元太がそんなことを言い始める。きよとんとした鈴仙は「いえ、別に……」と首を振った。彼女が好きじゃないのは「なんだか分からないけど嫌な予感」である。先ほどの会話からすると「ケーキ」は「お菓子」であるから、鈴仙もそこに苦手意識を抱いているわけではなかった。

「じゃあ、鈴仙さんは人見知りなんですね！　大丈夫ですよ。佐藤刑事は優しい人ですからー！」

「それは……しんどいですね……」

ぼそり。鈴仙は誰に聞かせるつもりもなく、呟いた。輝夜にはもちろん届いていた言葉であるが、子どもたちは聞き取れず、首を傾げている。

「いえ、何でもありません」

——こんな穢れに満ちた世界で「優しい」なんて。

輝夜だけは、鈴仙の呟いた言葉の真意に気が付いていた。

*

冬休みの終わりごろということもあって、道路が混んでいたのか、佐藤刑事は一行よ

りも少し遅れて集合場所に到着した。なぜかそのカフェに向かう途中のレストランの前には、同僚で後輩の高木刑事や、上司の白鳥警部もいる。何やらいろいろと盛り上がっているようだったが、コナンの友達だという蓬萊山輝夜という美女がいち早く彼女の存在に気が付き、にこりと微笑み掛けて、彼らの話は中断された。

「二人とも、どうしたの？　こんなところで」

「実は……」

高木刑事が、「妙なタレコミがあつて、二人がレストラン内を捜査したところ、不審物は見当たらなかった」と簡潔に説明すると、それに続けて白鳥警部も「ガセネタですよ」と言葉を加える。

佐藤刑事は顔をしかめたが、それも当然のことだった。

一月六日という、今日この日は佐藤刑事にとって特別な日なのである。——悪い意味で、だが。

三年前の今日、爆弾犯によって大切な人を失くしている佐藤刑事は、そのことを無理やり忘れるかのように「だったら、このあとカラオケに行かない？」と努めて明るく、二人へ声を掛けた。うれしそうな顔をした高木刑事と違って、白鳥警部は「そういう気分ではないので……」と断りつつ、車へ向かう。

それに待ったを掛けたのが、鈴仙だった。

「あなた、それに乗るつもりですか？」

「え？ あ、ああ。僕の手だからね」

「やめておいた方がいいと思いますよ」

じい、と鈴仙に見つめられて、白鳥警部はたじろいだ。輝夜ほどではないが、鈴仙も整った顔立ちをしている。しかし、彼がたじろいだのは、鈴仙が美少女だからではなかった。

（見つめ続けてはいけない目だ）

そう、本能が忌避した。すぐに視線をそらした白鳥警部は、「なぜだい？」と、冷や汗を流しながらも、鈴仙に尋ねる。

「説明は難しいんですが……『嫌な予感』がするんです」

この場合、鈴仙の「嫌な予感」は「予感」ではなかった。しかし「外の人間」たる彼らに、それを詳細に教える必要もない。

「彼女がそう言うなら、車を調べた方がいいわね。それに——『タレコミ』って、爆弾予告なんでしょう？ 警戒はしておいた方がいいと思うわよ」

輝夜の言葉に、まず目の色を変えたのはコナンだった。佐藤刑事が来る前に彼らが聞いていたのは、タレコミの内容、三年前の事件についてと、その事件で佐藤刑事と組んでいた刑事が亡くなったという話である。

「白鳥警部、そうだよ。もしガセネタを掴ませて油断しているところを狙ってくるような犯人だとしたら、すごく危ないよ」

コナンの一言で、白鳥警部は鈴仙に見つめられたときとは違う意味で、硬い表情になった。

「高木君。周辺の人たちへ避難指示をしてくれ。僕は車の様子を見てくる。佐藤さんも、子どもたちと一緒に避難をお願いします」

一気に緊張が走った周辺に、高木刑事が慌てて指示を出し始める。車を外から確認していた白鳥警部は、怪しげな紙を発見し、「念のため」と言っつて、すぐに応援を呼んだ。「ねえ、輝夜さん。鈴仙さんつて、よくああいうこと言うの？」

本当は自分も一緒に捜査したかったけれど、避難するようにと強く言われて、野次馬と同じところまで下がっているコナンは、輝夜に話し掛けた。

「まあ——いろいろなことによく気が付くわね。人の性格なんかも大まかに分かるらしいわよ」

これには鈴仙の能力が関係している。鈴仙の能力は「狂気を操る程度の能力」を呼ばれるが、それは「波長を操る程度の能力」によって、結果的に人を狂気に落とすためである。この能力を使って、音、光、電磁波、物質の波動、精神の波動などあらゆる波について操ることができるのだ。つまり、白鳥警部の車に、他の「車」と明らかに違う物

が積んであることくらい、簡単に分かってしまうのである。

警察の爆弾処理を見つめながら、少年探偵団の子どもたちは互いに目を見合わせながら、「うん」と頷いていた。コナンは輝夜との会話を止めて「おめーら……『自分たちが爆弾犯を捕まえよう』なんて思ってたねーよな？」と呆れた声を出す。

「白鳥警部が危ない目に遭うところだったんだよ？ 許せないよー！」

「コナン君だって、同じ気持ちでしょう？」

「一人だけ抜け駆けしようなんて、思うんじゃないぞー！」

「だ、そうよ」

灰原が肩をすくめると、コナンはちらりと輝夜を見た。その輝夜は鈴仙を見る。

「面白そうね。そういうことなら、私たちもぜひ協力したいわ。ね、鈴仙。一日くらい延びたって、永琳も察してくれるだろうし問題ないでしょう」

「……………は、い」

波長を狂わせているおかげで常人には見ることができない彼女の耳は、よれよれのしおしおになっていた。鈴仙は滞在日程の延長と共に、「協力」の名のもとに自分がこき使われることを、正しく理解していたからである。

さて、子どもたちの家へと連絡に追われている博士を置いて、探偵団の捜査は二手に

分かれることとなった。輝夜とコナンは、こつそり佐藤刑事の車に乗り込み、その他の子どもたちは高木刑事の車に乗せてもらうことに決定する。鈴仙はというと、博士と共に行動することになった。

「コレで永琳に連絡しておいてちょうだい」

「えっ、連絡手段あったんですか!? ていうか、滞在延長を私からお師匠に連絡するんですか!」

「頼んだわよ。あと、何かあればコナン君の携帯電話に連絡をちょうだいね。こちらからも必要があれば連絡するわ」

輝夜に手渡されたのは、転移術が完成する前に永琳が作った「距離も空間も関係なく、同じ時間軸にさえいれば連絡が取れる道具」である。見た目はこちらの世界で言う携帯電話によく似ており、術が込められた機器同士のみ連絡が取れるようになっていた。ただ、輝夜は渡されてから一度も使ったことがない。

鈴仙は子どもたちと輝夜を見送った後、（いや……お師匠だって分かってるはずよ。そもそも私に姫様を止められるはずがないだし、怒られないわ）と内心恐々としながら通話ボタンを押した。隣では、深いため息を合間に挟みながら、博士が子どもたちの家へ連絡をしている。

『姫様、どうされました?』

「あ……お師匠、すみません。姫様ではなく、私なんです。その、姫様から伝言がありました……」

『はあ……どうせ、しばらくそちらに留まることにした、とかそういうことでしょう』
さすが、と鈴仙は舌を巻いた。

「その通りなんです。御友人と一緒に事件の捜査をしたいからって」

『分かりました。そういえば、術が成功したようでした。安心しました。姫様にはそちらに着いたら連絡してほしいと伝えてあったんですが……』

鈴仙には知る余地もないが、輝夜はこの世界に来てすぐに友人と会うことができただめ、会話が弾み、（まあ永琳にはあとで連絡すればいいか）と、鈴仙とはぐれて「成功」とは言えない状況の中、連絡を後回しにしていたのである。

「こちらに来るには来れたんですけど、はぐれてしまったんです。聞いてくださいいよお、それなのに姫様ったら、自分だけ御友人と楽しく遊んでたんですよ!? 私は必死になつて探してたのに!」

『それは大変だったわね。それにしても、転移自体は成功したのに、はぐれた……? 座標は“歪み”……いえ、姫様の御友人に設定したはずなのだけれど。まあいいわ。報告ご苦労様。事情は分かったから、一応帰る前にもう一度連絡してちょうだい』

電話を握りしめながら、博士と鈴仙は全く同じタイミングのため息を吐いた。それか

ら互いに握手を交わす。

「鈴仙さんも大変じゃのう。どうせ何かあれば連絡がくるんじゃないから、わしの家でお茶でもどうかね？ 地図も用意しておかないとな。どうせすぐに、暗号の候補地についてあれこれ言われるんじゃない」

「お氣遣い、ありがとうございます」

「あ、それなら送りますよ。あなたのおかげで助かりました。あのまま車に乗っていたら怪我じゃすまなかつたでしょうし、それくらいさせてください」

爆弾の撤去が終わり、警察や周辺の人々への指示をしていた白鳥警部が声を掛けてきて、二人は顔を見合わせた。それから「お願いします」と頭を下げる。

「鈴仙さん……でいいんですよ。そういえば、名前も聞いていなかった。今度ぜひ、お礼をさせていただきます」

そういえば、コナンがさらつと輝夜と鈴仙の名前だけを伝えて、それからは「タレコミ」の話になったから、きちんと名乗っていなかったな、と鈴仙は差し出された手に己の手を重ねながら「鈴仙・優曇華院・イナバです」と簡単に伝えた。

「日本の方かと思っていました。が、違うんですか？ 御両親が外国の方とか？」

「ええ、まあ、そんな感じ。と、ここで、お礼ならぜひ『ケーキ』をお願いしますね。

明日には帰るはずなので、夕方までに用意してもらえると助かります！」

にここにこと、食べ損ねたケーキを自分だけねだる鈴仙を見て、博士も白鳥警部も「ちやつかりしてるな」と思ったのだった。

波符「赤眼催眠」後編（番外）

なんの気配もなく、いつの間にか車に乗り込んでいた少年と少女に、佐藤刑事はぎよつとしながらも律義に質問に答えていた。七年前にも爆弾事件があつたこと。その際の犯人は二人おり、そのうち一人は警察から逃走中に運悪くトラックにはねられて亡くなり、もう一人は「警察が自分たちを罠に掛けた」と思っているらしいこと。

「それが勘違いだということは置いておくとして、そもそも、自分が『罠』を仕掛けておいて、どうしてやり返されないと思っているのかしら？」

心底不思議そうに、そこにいるだけで目を離せなくなるような美女が言う。それに対して、隣に座る眼鏡の少年はいつも持ち歩いている手帳に目を落としながらさらりと答えた。

「警察は正義の味方だから、そんなことしないだろうって思ってたんじゃない？」

「それじゃ、パトカーは速度超過して逃走する車を取り締まれないわね」

そう言つて、輝夜はくすくすと笑つた。佐藤刑事は、その様子をみて苛立ったように「あなたたち、危ないから降りなさい」と、普段の彼女よりはいささか強い語調で言う。

それを聞いて、コナンはたしなめるように輝夜を見たが、本人は全く気にした様子もなく「いいの？」と首を傾げた。

「あなたが他の警察の人といろいろやり取りをしている間に、私たち、暗号についてひとつの仮説を立てたわ。それに、危ないのはあなたたち警察よ。私はコナン君を危ない目に遭わせないし、一緒にいる限りはあなたのことも守ってあげるわ」

「一体、あなたに何ができるって言うのよ」

佐藤刑事の苛立ちを隠し切れていない言葉に、輝夜はただ笑った。既に陽が落ちて、空には月がのぞく時分である。ぞくり、絶世の美女の笑みに対して、佐藤刑事は得体の知れない恐怖を感じた。本人たちには知りようもないが、それはちようど、白鳥警部が鈴仙の視線にさらされたときと非常によく似た感情だった。

「それを確かめたいのなら、やっぱり一緒にいなくてはね。さあ、今から暗号についての仮説を話すわ」

「もう、輝夜さんつてば。それで、佐藤刑事。ボクたちの考えなんだけど……」

暗号に書かれた内容から、南杯戸駅から発車する、赤い上り電車に爆弾が仕掛けられていると読み解いたコナンに、佐藤刑事が「高木君にも連絡しないと！」と反応する。しかし、既にそちらでは同じことを灰原が説明していたらしく、白鳥警部を始め、他の関係者にも連絡がいつているようだった。

けれど、そう上手くいくことばかりではない。暗号を読み解いた先、南杯戸駅では、偽物の爆弾が次々に発見されるばかりで、本物の爆弾はついぞ発見されなかったのである。

「今日はもう遅いから、おうちに帰りなさい」

「あつ、ボクたち今日は博士の家に泊まる約束してるんだ！」

本当は「このままついてく！」と言いたかったコナンであるが、ピリピリしている佐藤刑事に、いつも通りのほほんとしている輝夜の組み合わせはよろしくないことを痛感したのでだろう。あつさりとその提案を受け入れ、阿笠邸で他の探偵団の子どもたちと合流していた。

「あ、輝夜様。おかえりなさい。夕飯、私と博士だけで食べちゃいましたよ。みんなは何か食べました？」

出迎えた鈴仙はにこにここと上機嫌である。爆弾についての推理は全て警察に話していたため、輝夜から鈴仙への連絡は「これから博士の家へ帰るわ」のみであった。鈴仙はただ、博士とご飯を食べながら苦労話をしていただけであり、予想していたような呼び出しは一切受けていない。コナンの無茶ぶりに苦労する博士と、いたずら兔と師匠の間で板挟みになる鈴仙は、具体的な話をせずとも妙に話が合い、楽しい時間となった。お互い根が陽気でお人よしなこともあるだろう。

「高木刑事が帰る前にコンビニに寄って買ってくれたよ！」

「おお、そりやよかつたわい。風呂を沸かしてあるが、誰から入るかね？」

「それなら姫様からどうぞ！」

「なんであなたが決めるのよ」

ため息を吐いた輝夜は、子どもたちが爆弾の隠し場所について話し合いたそうなのを見て、「お先にいただくわね」と提案を受け入れた。博士たちが覚えていなくとも、彼女はこの家に泊まったことがある。勝手は分かっていたし、着替えはいつも博士に貸してもらっているの、迷いなく浴室へ向かっていく。

「哀君、悪いがタオルや着替えなんかを用意してやってくれんか。さて、みんなにはお茶を入れてやろう」

全員順番に風呂に入り、子どもたちがうとうとし始めたときだった。相変わらず暗号に頭を悩ませているのはコナンと灰原、それから輝夜くらいである。鈴仙は大きな欠伸を手で隠しながら「一回寝て、すつきりしてから考えましようよお」と間延びした様子で眠そうに言っていた。

「鈴仙。赤い物といえば、何？」

「ええ……兎の目、とか？　んー、後は、姫様を探しているときに、赤い塔って目立つなあと思いましたがね」

「赤い……塔？ それって……」

何気なく言った鈴仙へ視線を向けたコナンに、彼女は胸を張って「知りませんか？ 大きな赤い塔！」と得意げに言い放った。

「東都タワー！ 鋼のバツターボックス……エレベーターのことだ！ こうしちやいらねえ、佐藤刑事と高木刑事に連絡しなきゃ！」

大きな声を出して立ち上がったコナンは、灰原には高木刑事へ連絡するように伝え、自分は佐藤刑事へと電話を掛けるべく、携帯電話のボタンを押し始める。

「姫様。これ、私、役に立った感じですか？」

「ええ、とてもね。偉いわ、鈴仙」

「えへへ。もつと褒めてくれてもいいんですよ？」

これでれと主にだらしない顔を見せた鈴仙は、その主にかしりと肩を掴まれた。

「今後の活躍も、期待しているわ」

「も、もちろんです……」

コナンが警察に話をした結果、明日東都タワーを入場禁止にすること、その周辺も関係者以外近寄れないよう封鎖すると、朝の点検の際にエレベーター内を念入りに確認すること、発見したらすぐに爆弾物処理班を誘導することなどで方針がまとまったようだ。ただし、少年探偵団にとって予定外だったのは、「もう大丈夫だからあとは警察に任

せるように」と釘を刺されてしまったことである。

「ちつくしよ……先に東都タワーに行つてから教えればよかつたぜ」

がしがしと頭をかきむしつた後、コナンは自棄になつたように寝転がった。既に眠気に抗えていなくなつた子どもたちも、それを皮切りに本格的に寝始める。

「まあ——警察の気が変わることもあるかもしれないわ。ねえ、鈴仙」

「姫さまつたら……本当に御友人を大切にされているんですねえ」

にこり。何年経とうと変わるはずもない美しい笑顔を向けられて、鈴仙はほりほりと頬をかいた。輝夜は月人の中でも、情に厚い方である。それは、月から逃亡してきた鈴仙を匿つてくれたことから、随分昔に輝夜を拾つて育てた老夫婦への感謝を忘れていないことから、間違いないだろう。

この子どもたちは、普通の「人間の子ども」であるように、鈴仙には映つた。けれど、輝夜がここまで力を貸すということは、何かしら特別な事情があるのかもしれない。そう思つて、鈴仙はとりあえず明日に備えて自分も寝よう、と横になつたのだつた。

*

朝。輝夜たちはまた二手に分かれた。高木刑事を泣き落とす係の子どもたちと、こつ

そり東都タワーに侵入できないか探るコナン、輝夜、鈴仙の三人である。初めは組み分けに不満を漏らしていた子どもたちだが、鈴仙がじつと目を見つめながら説得すると、素直に言うことを聞いていた。

「じゃあ、博士。東都タワーの近くまで行ってくれ。そこからは何とかするから」

「まあ、危ないまねはするなど言っても意味はなからうが……気を付けるんじやぞ」

車の助手席に乗って、後部座席に座る女性二人を、コナンはちらりと見る。コナンが気になるのは、友人である輝夜のことを「姫」と呼ぶ、鈴仙だった。

コナンは彼女の着る制服を見たことがない。探偵であるから、近隣の学校の制服は大體記憶している。もちろん、「制服風」の洋服も世の中には出回っているし、輝夜の「家の者」であれば、そもそも女子高生ではないのかもしれないといことは予想の範囲内だ。

杯戸シヨッピングモールや、博士の家での言動から、悪い人ではないような感じはする。けれど、彼女に見つめられた白鳥警部はどこか怯えたように視線をそらしていたし、私の強い探偵団が——まるで催眠にでも掛かったかのように大人しく言うことを聞いた様子は、輝夜がときどき見せる「得体の知れない感じ」を彷彿とさせた。

「あの……私が何か？」

見つめすぎたのか、鈴仙が怪訝な顔をした。早朝の車通りが少ない時間帯はとても静かで、表情だけでなく声色からも、彼女が不思議がつているのがよく伝わってくる。

「あ……ご、ごめんなさい。鈴仙さんって、輝夜さんの『おうちの人』なんだよね？ 普段は何をしてるの？」

「私はお師匠に学びながら薬を作ったり、売りに行ったりしていますよ。それがどうかしたんですか？」

「高校生なのかなって思ってた。違ったんだね」

「ええ。私は『コーコーセイ』ではありません」

「制服を着てるから、ボク、勘違いしちゃってたよ。輝夜さんのうちには、居候してるの？」

「はい。住み込みで働いていますよ」

「それなら——」

話してみて、コナンは鈴仙はのりくらりとかわそうとする輝夜と違って、かなり素直に質問に答えてくれるという印象を持った。そのため、今のうちに気になることは聞いておこう、と質問を重ねようとしたところ、車が停まった。どうにも規制区域手前まで着いてしまったらしい。

「コナン君、鈴仙。着いたみたいよ。博士、どうもありがとう」

「おお。また何かあったら連絡するんじゃないよ」

博士の車を見送って、輝夜たちはふらふらと様子を見ながら歩いた。そこかしこにマ

スコミ関係者がおり、東都タワーに仕掛けられたらしい爆弾についてあれこれと言っている。

「君たち、ここから先は危ないから——」

人混みをすり抜けたところで、三人は警察官に声を掛けられた。コナンが何かを言う前に、鈴仙が一步前に出て、口を開く。

「私たち、佐藤刑事の協力者なんですよ。——通してくれますよね？」

コナンには、警察の目を覗き込む鈴仙の目が、紅に光ったように見えた。ただ、それは朝陽のせいかもしれない。瞬きすれば、彼女の目はもう黒い色に戻っていた。

「そういうことなら……」

す、と道を空けた警察に、誰も何も言わない。そんな「異常」に誰も気が付かない。小さな探偵は、そのことに爆弾犯よりも空恐ろしいものを感じたが、何も言えなかった。

（鈴仙さんは、オレたちのわがままに付き合ってくれてるだけだしな）

身近に、微笑みだけで人の思考停止を誘発する絶世の美女もいる。だったら、催眠してみたことが得意な人だっているのかもしれない。コナンが納得できないままもやもやと考えていると、鈴仙がそんな少年を見て、にこりと微笑んだ。

「緊張しているんですか？ 大丈夫です、爆弾くらいすぐに見つかりますから」

人の好い笑み。その表情は、蘭がコナンを安心させようとするときと何ら変わらない

表情だ。

(そうだ。別に何も、変なことはねえよ)

コナンは気が付かなかった。彼に隠れて、こっそりと輝夜が鈴仙の背中をつねっていたことに。

「痛いですよお、輝夜様」

「あなたの力は便利だけど、考えものね。今後私の『お友達』には使わないでちょうだい。あなた、うっかりしてるし。間違つて狂つてしまつたら大変なもの」

「話がこじれなくて楽じゃないですかあ。姫様が言うならそうしますけど……」

その会話も、コナンには聞こえていなかった。けれどここに、鈴仙・優曇華院・イナバという女の子が何をしたのか分かる人間は一人もいない。

*

東都タワーに到着すると、三人は白鳥警部に発見され、ぎよつとした顔をされた。しかし、彼は今までの経験から何かを察したのか、深い深いため息を吐いて、「捜査協力者だ」と誰かに何かを言われる前に、周囲へそう宣言した。

「困るよ、コナン君。佐藤さんには来るなど言われていたんだろう?」

「だけど、ボク、どうしても気になっちゃって！ 犯人が三年前と同じなら、東都タワーの爆弾が見つかってても、まだどこかに爆弾を仕掛けてるかもしれないでしょ？」

三年前の事件というのは、七年前相棒を事故で亡くした犯人が警察に逆恨みして、杯戸シヨツピンググモールの観覧車内に爆弾を仕掛けた事件のことである。爆弾の解体をしようとしたとき、第二の爆弾があることが発覚して、爆弾を処理しようにもできなくなってしまう。しかも、その場所は爆破の直前に爆弾の場所が分かるような底意地の悪い仕掛けとなっており、爆弾の解体処理に当たっていた警察官は、自分の命と大勢の命を選択するよう迫られたのである。結果として、その警察官——佐藤刑事の大切な人である松田刑事は、自分の命を犠牲にして第二の爆弾の場所を佐藤刑事にメールで送り、殉職したとのことだった。

ちなみに、これは高木刑事を口説きに掛かろうとした探偵団が、彼らと仲の良い「交通課の由美さん」から聞いた、語るも涙、聞くも涙の話である。東都タワーに移動する間にコナンに伝えてきた。高木刑事自身はとくに東都タワーにおいて、それならば犯人逮捕のために情報収集をしようと子どもたちは周りにいろいろと聞いて回っているらしい。

「犯人って、子どもっぽい性格の人なんでしょ？ だったらボク、役に立てるんじゃないかと思って。勘のいい輝夜さんや、鈴仙さんも！」

「……まあ、君には助けられているし、鈴仙さんにはそれこそ昨日助けてもらったばかりだが……」

その時、爆発音があたりに響いた。東都タワー上層階での爆発のようで、白鳥警部は「怪我人は!？」と慌てて確認をしている。

「近くにいた者が何人か怪我をしたようですが、死者はでていないようです！　しかし、今の爆発でエレベーターが停まってしまい……まだ確認できていなエレベーターがあつて、中に入れなくなつてしまつたと、高木刑事から報告がありました!」

「子ども一人分なら入れる隙間があるようですが、大人ではどうしても難しいとのことです」

次々聞こえてくる報告の声を聞いて、コナンは白鳥警部の手をしっかりと握つて、にっこりと笑つた。

「ボクが行くよ。『捜査協力者』だしね」

これには白鳥警部は顔を引きつらせるしかない。しかし、様々な事件を通して関わる中で、彼はこの少年の頑固さを理解していた。それから、やがて覚悟を決めたように「頼むよ」と頭を下げる。

「それなら、私も行くわ。何かあつたときに、一緒なら安心でしょう?」

ずいっと前に出た輝夜に、白鳥警部は弱り切つた顔で「いや、心配が増えるだけなん

ですが……」眩いたが、聞こえなかったことにされたようだ。輝夜はそのまま、鈴仙へと周囲には聞こえないように指示を出した。

「犯人を探し出さない。爆弾を携帯電話で操っているのなら『電磁波』で簡単に見つかるわね？ ただし、確保とかはしなくていいわ。必要な時には連絡するから、あなたは監視をするように」

「はい。心配はしてませんが、姫様もお気を付けて」

「行ってくるわね。鈴仙、頼むわよ」

誰も聞こえる声でそう言った後、輝夜はコナンと共に東都タワーの中に入っていつてしまった。残された鈴仙は、主の命通りに、爆弾から感じる電磁波を辿って、犯人を捜すことにした。

中に入ってきた二人に、白鳥警部の手回しのおかげか警察官たちは何も言っていなかった。高木刑事を発見したコナンは、小走りになって駆け寄る。高木刑事もこちらに気が付いて、眉を下げて「コナン君」と声を掛けてきた。

「君は本当に、現場に潜り込むのが上手いなあ。とはいえ、困っていたのは確かだからね。よろしく頼むよ」

「（ちらちら）そ、よろしくね」

エレベーター内に侵入したコナンは、予想通り爆弾を発見する。タワー内にいた爆弾物処理班から機材を受け取り、解体を開始した。時間はたっぷりある。ただし、コナンの頭には「第二の爆弾」の存在が脳裏をちらついていた。

爆弾物処理班の指示通りに解体していたコナンだったが、おそらく爆弾には盗聴器が仕掛けられていることや、自分の推理通りなら今回も第二の爆弾がどこか——それも、人が大勢集まる場所に隠されているであろうことから、警察との連絡役の高木刑事以外、周囲にいる人を下がらせてくれと頼んだ。第二の爆弾が存在するなら、この場所に大勢人がいたら危ないから、と言って。

大人たちは「子どもが危険な目に遭っているのに」と食い下がったが、三年前の事件のことを思い出したのか、それとも少年の話があまりに筋道が立っていて納得せざるを得ないものだったからか、タワー内から出て行つた。高木刑事から連絡を受けた白鳥警部の指示で、その他の関係者も非難を始めたようだった。

ちなみに、佐藤刑事は「絶対に無茶をするから」という白鳥警部の気遣いにより、警察本部で犯人捜査を続けている。コナンたちから初めに報告を受けたのは彼女であるため、「自分も東都タワーに行く!」と食い下がっていたが、「今の自分が冷静だと言えますか?」という白鳥警部の一言により、引き下がった。

「じゃあ、コナン君。私も行くわね。高木刑事——私のお友達を、よろしくね!」

にこり。微笑み掛けられて、高木刑事はその絶世の美貌に頬を赤らめた。

*

これが推理物の小説だったら白けさせてしまうほど、鈴仙はあっさり犯人を見つけた。ただし、彼女に与えられた役割は探偵でも刑事でもなく、ただの監視である。耳の良い彼女には、犯人が東都タワーの爆弾に仕掛けた盗聴器で警察やコナンの会話を盗み聞きしているのがよく聞こえていた。

（あーあ、こんなおじさんずつと監視してるなんて、退屈だわ……）

こんなことになった元凶が目の前にいると思うと、さつきとぶん殴って片を付けてやりたい気持ちだが、それをしたらあの温厚な主でもさすがに怒るだろう。鈴仙にはどうも、輝夜がこの「事件」を面白がっているように見えた。——いや、「事件を」と言うよりは、「事件に立ち向かっている人間たち」を、の方が正しいような気もするが。

監視と言ってもやることがないので、鈴仙は己の姿を見えないようにしながら、時を待った。退屈な時間ほど長く感じられるもので、どれほど待ったのか、犯人を監視している最中に輝夜から連絡があった。連絡が取れないのは不便だから、と博士が輝夜と鈴仙に予備の探偵バッジを貸してくれたのである。

『鈴仙、犯人が逃げないようにきちんと見ていてちようだいね。私はもうちよつと「見学」していくから』

「はあーい」

間延びした返事を返して、それからまたしばらく待ち、太陽が真上に上ったころ。犯人の「波長」が明らかに浮ついたように乱れたが、すぐに混乱したように乱れの種類が変わった。

（そりゃあ、輝夜様が人間相手に「失敗」するわけないよ）

実際は爆弾を処理したのも推理の結果を警察に伝えて第二の爆弾の位置を突き止めたのもコナンであり、輝夜は姿を隠して友人の雄姿を観察していただけなので、鈴仙の感想は的外れなものであった。しかし、「答え合わせ」をしていない月の兎にはそんなことは分からない。鈴仙はそのまま退屈そうに、取り乱す犯人の監視を続けていた。

警察に囲まれ、犯人は歩道橋からバスの屋根へと飛び移って逃走を図った。当然、鈴仙も追い掛ける。やがて佐藤刑事に追い詰められて、犯人が袋小路に入って行くのが見えた。犯人はつらつらと「俺じやないんだ！」と見苦しくも言い訳をしている。

「こんなやつに……！……！……！……！……！」

犯人と対峙した佐藤刑事は、鈴仙が波長を読み取らなくても明らかに取り乱してい

る。しかも発砲しようと銃を構えたので、能力を使って和らげてあげようかな、とお人よしの兎が思ったときだった。その場に高木刑事がやってきたのだ。

「佐藤さん！」

大切な人を奪われた憎しみに心を支配されていた佐藤刑事は、引き金を引いてしまった。しかし、高木刑事に体当たりを食らったことで弾道がそれたため、弾は犯人の顔のすぐそばを掠めただけだった。犯人はというと、腰を抜かしてその場に座り込んでしまっている。

「何するの！ 邪魔しないで！」

佐藤刑事は銃を片手に犯人にとどめを刺そうと立ち上がるが、高木刑事がそれを許さない。「離して！」と暴れる彼女の頬を、彼は真剣な顔で打った。動揺する佐藤刑事に向けられる視線は、常の柔和な高木刑事のものとは思えないくらい、厳しいものである。

「何やってるんですか、佐藤さん！」

むろん、厳しいだけの眼差しではない。そこには正義感、使命感、責任感、そういった「警察官」としてのものと、「好きな人に後悔させたくない」という一人の男の強さと優しさとが、あたたかく心を照らし、滾るように熱い炎のように揺らめいていた。

そんな二人のやり取りを他所に、鈴仙は姿を見せないまま犯人へと近づいた。放心状

態の犯人でも、「意識はある」。それは彼女にとって、とても重要なことであった。

「私、ムカついているの」

声。降つてわいたような、風に運ばれてきたような、耳元でささやかれたような、少女の声。その主を探して、犯人はふと顔を上げた。上げてしまった。

『確保はしなくていい』。私、それだけしか言われてないのよ。つまり、確保以外のことはしてもいい。そうに決まつてるわ」

そこには、赤い二つの眼があつた。白い兔のような目。鮮血のように朱く、人々を不安に駆り立てる月のように紅く、見ているだけで、心がざわめき立つ。

「監視はとつてもつまらなかつたし。あんたがいなきや姫様にも怒られなかつただろうし。そもそも、事件なんかなければ、私ただ遊んで帰れたはずだし」

少女の声が遠くなる。女子生徒が教師の愚痴を言うような、ありふれた口調の、ありふれた言葉だ。けれど、その眼が、ただ、ただ、恐ろしい。

「ヒイ……… た、助けてくれえ!!」

闇に誘われる。紅に吞まれる。精神がさざ波立つ。底のない沼に落ちてしまったかのように、どこまでも、どこまでも、終わりのない恐怖が男を支配する。

警察は、男が恐慌状態に陥つたことを、至近距離で発砲されたことによるショックだ

ろうと判断した。

男は飽くことなく「助けてくれ」と光を映さない虚ろな目をして呟き続けていたが、それもまた「人を殺めた罪の意識に苛まれているのだろう」と、誰もが彼の「異常」を正しく受け止めなかった。

*

「えー！ じゃあ、コナン君が第二の爆弾の場所を推理して、警察に伝えたんですか？
さすが姫様の御友人です！」

少年探偵団や輝夜と合流した鈴仙は、きやあきやあと子どものようなにはしやぎながら、主の友人であるコナンの活躍を聞いていた。

「警察の人が、ボクの言うことを信じてくれたからだよ。ボク一人じゃ、何にもできなかったもん」

「いえいえ！ それでもすごいですよ！」

大袈裟に褒められてまんざらでもなさそうなコナンに、少年探偵団の子どもたちは心なしかしらーつとした視線を向けて「コナン君、また可愛い子ぶってますよ……」「あいつああいうガキっぽいところあるんだよな」「コナン君たら、やっぱり年上が好きなの？」

「……はあ」とそれぞれ違った反応を示していたが、輝夜だけはいつも通りの微笑みを向けていた。

「君たち、協力感謝するよ。特にコナン君には、危ないことをさせてしまったね。昨日鈴仙さんにも約束していたし、時間があるようなら僕からキーキでも御馳走させてもらえないだろうか。とはいえ、まだ買ってきてはいないんだが……」

事件の報告をまとめた白鳥警部が、晴れやかな表情で一行に近寄ってきた。当初は爆弾予告の担当だったが、白鳥警部が行ったのは東都タワーの爆弾処理の現場指揮のみであり、犯人の推理はコナンという協力者がいた高木刑事、犯人確保は佐藤刑事が行ったため、自分の仕事はさっさと片付けて、あとは目暮警部の指揮する班に引き継いできたため、一足早く解放されたのだ。

「あ！ それなら！」

晴れやかな表情につられるように、鈴仙がうれしそうな笑みを浮かべた。

「鈴仙ちゃん、さっそくのご利用ありがとうございます！」

喫茶ポアロでは、梓がにこにここと微笑みながら、せつせとキーキを用意している。事前にコナンが電話を入れてくれたため、急な大人数の来訪にもぼつちり応えてくれた。

「えへへ！ 梓さんにはお世話になりましたからあ」

「そんなそんな。それより、もしかして『姫』って……そっちのものすごい美人さんのことですか？」

「そうです！　うちの姫様です！」

「ふわあ……いろんな人の理想詰め込んだみたいな美人さんですねえ！　私、榎本梓っていいいます」

どことなくゆるい空気を発する二人に、輝夜はくすくすと笑う。

「蓬莱山輝夜よ。鈴仙がお世話になったみたいね。私からも、お礼を言わせてちょうだい」

「いえいえ！　杯戸シヨツピングモールの行き方について教えてあげただけですから！　それより、ケーキの味はどうですか？　今日はマスターがいないので、私の手作りなんです。あつ、もちろんレシピ通りに作ってますよ！」

「美味しいですー！」

間髪入れずに感想を述べた鈴仙に、大人だけでなく子どもたちまでくすくす笑った。「鈴仙さんって、小動物みたいですね」

片目を瞑って、気障に言った白鳥警部に輝夜が「兎だもの」と答える。輝夜の「当然」と言いたげな断言に、みんなが楽しそうに笑った。

「はー、美味しかった！　梓さん、本当にありがとうございました！」

みんなが食べ終わってお茶やコーヒーを飲んだのんびりした後、店を出て行く際に、鈴仙は改めて頭を下げた。それを見て、梓は照れたような、はにかむような笑みを向ける。

「いいのよ。困ったときはお互い様じゃない。またのご利用をお待ちしますね！」

そうして、まず少年探偵団が家に帰り、博士と灰原が帰り。家まで送ると言った白鳥警部に、丁重にお断りをして、コナンと輝夜と鈴仙は、空をオレンジ色に染める太陽をぼんやり見ながら歩いていった。

「コナン君の家って、ポアロの上の階なんでしょう？　最後までお付き合いいただいて、ありがとうございます」

「いいんだ。ボク、輝夜さんと鈴仙さんと、もっとお話したかったし」

コナンは不意に立ち止まって、輝夜の手を引いた。

「輝夜さん、今度は何して遊ぶ？」

「そうね、何がいいかしら……」

顎に手を当てて考え始めた輝夜に、「なあに言ってるんですか！」と鈴仙が口をはさむ。「梓さんが、『またのご利用お待ちしております』って言ってるじゃないですか。またケーキ食べに行きましょうよお」

甘えたような声を出す「ペットの兔」に、輝夜は「そうね」と頷いた。

「鈴仙を連れてきたときには、ポアロでケーキを食べましょうね」

やさしく、輝夜はコナンに握られていた手を離す。それから夕焼けに照らされながら美しく微笑むのだ。まるで、この世のものとは思えない美貌で。

「コナン君、『約束』よ。また会いに来るわ」

そうして、おかしな二人は歩いて行き、道の角で曲がって行った。どうせ追い掛けても、どこかへ消えてしまっているのだろう。だから、コナンは追わない。

そこにいたはずなのに、誰からも忘れられて、けれどコナンだけがその人の「歴史」を蓄積させていく、幻想のような人たちだ。追っても無駄だろうから。

追わずとも、また会いに来ると言ったのだから必ずまた来る。

コナンはさみしさと次への楽しみを抱えながら、「ポアロのケーキは当分『お楽しみ』に取っておこう」と決めたのだった。